原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第28集

原の辻遺跡

はる　つじ

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

2004

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第28集

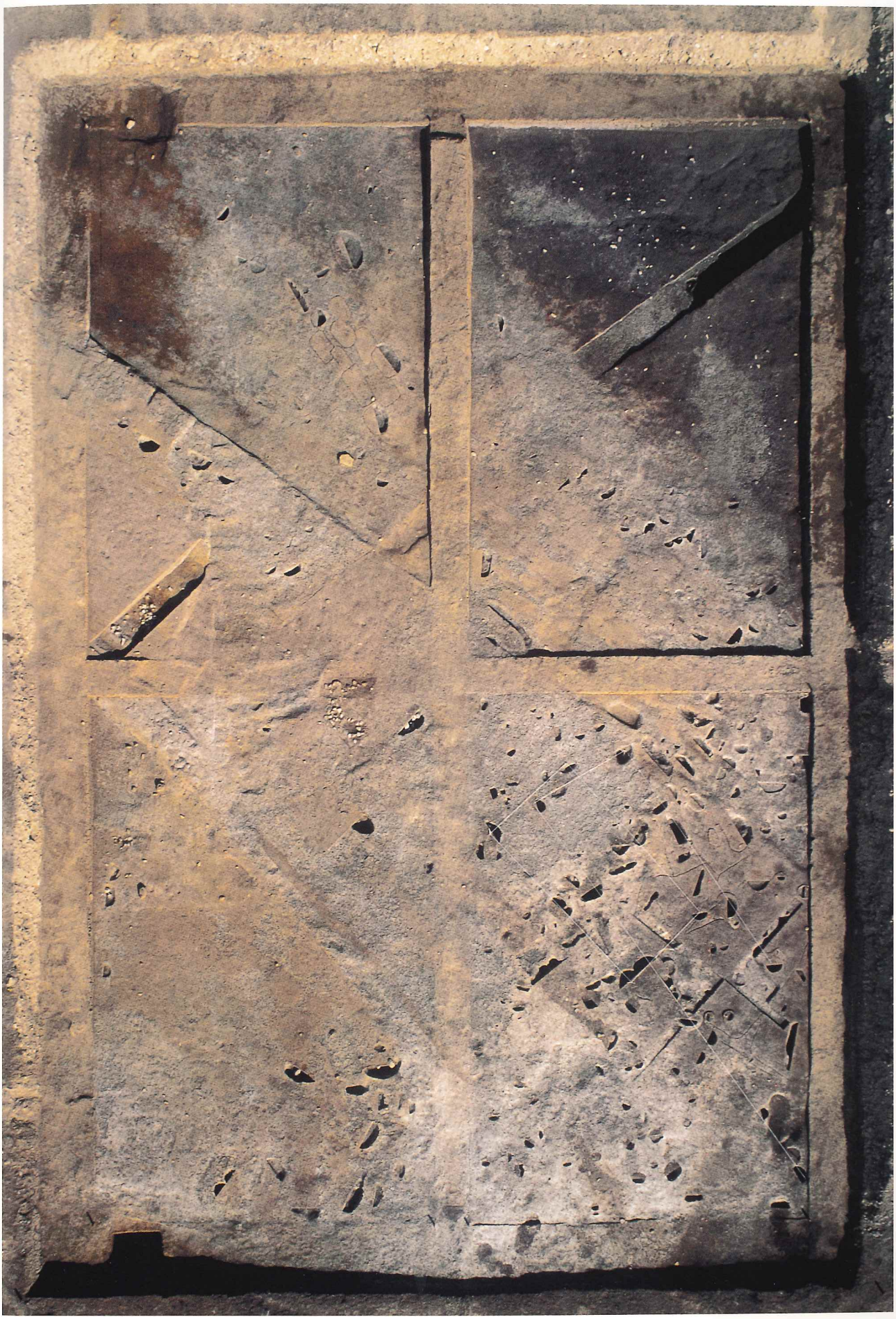
原の辻遺跡

（はる　つじ）

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

原の辻遺跡全景（南西より）

原調査区全景



石田高原調査区全景

高元調査区全景

発刊にあたって

本書は，国庫補助を受けて実施した，平成15年度原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は，約100haの広がりを持つ大規模環濠集落で，北部九州系の遺物のほか，韓半島や中国大陸の遺物も出土しております。遺跡の規模や出土遺物の質・量ともに，壱岐島内の弥生時代遺跡の中でも群を抜いており，このことから，『魏志倭人伝』に記された「一支国」の王都に特定されました。『魏志倭人伝』に記された国々のうち，中心域が特定されたのは原の辻遺跡のみであり，このことを重視して，平成９年９月に国史跡，平成12年11月には国特別史跡の指定を受けています。

本年度の調査は，台地上の原地区・高元地区と，台地南東低地部の石田高原地区で実施しました。原地区では祭儀場周辺の調査を行い，弥生時代の旧地形や遺構群の在り方について新たな問題を提起することとなりました。高元地区では，台地北側先端部付近の遺構群を確認し，弥生時代中期の土坑群から古墳時代初頭の竪穴住居群への変遷を明らかにできました。石田高原地区では，環濠に囲まれた弥生時代中期の掘立柱建物群を検出しました。低地部において建物群が密集して見つかったのは原の辻遺跡では初めてで，低地部においても環濠だけでなく多様な遺構が構築されていることがわかってきました。

このように，調査の進展とともに，原の辻遺跡の姿も次第に明らかになりつつあります。今後の調査によって，より鮮明な姿が復元できるものと考えておりますが，これらの成果を地域のみなさんに還元することも，私たちの重要な任務であると考えております。本書が学術資料として活用されるとともに，文化財の愛護や活用などに幅広く役立てていただければ幸いです。

平成16年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　木　村　道　夫

例　　言

1．本書は，原の辻遺跡調査研究事業にともなって実施した，平成15年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。

2．本書に収録した調査区の所在地は，長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触字原・字高元，石田町石田西触字高原である。

3．調査は長崎県教育委員会が主体となり，原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織

調査指導委員会　委員長　西　谷　　正（九州大学名誉教授）

委　員　工　楽　善　通（大阪府立狭山池博物館館長）

小　田　富士雄（福岡大学人文学部教授）

宮　本　長二郎（東北芸術工科大学芸術学部教授）

日　野　尚　志（佐賀大学名誉教授）

沢　田　正　昭（筑波大学芸術学系教授）

松　井　　章（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室長）

原の辻遺跡調査事務所　所　　長　高野　晋司

課　　長（兼）野中　滋生（壱岐教育事務所）

係　　長（兼）冨永　宏美（壱岐教育事務所）

主任文化財保護主事　福田　一志

文化財保護主事　小玉　友裕（現場担当）

文化財保護主事　林　隆広

文化財保護主事　中尾　篤志（現場担当）

調査協力　芦辺町教育委員会・石田町教育委員会・長岡　信治（長崎大学教育学部）

辻　誠一郎（国立歴史民俗博物館）

4．本書で使用した遺構と遺物の実測および製図は，原の辻遺跡調査事務所が行った。

5．本書に収録した遺物・図面・写真類は，原の辻遺跡調査事務所に保管している。

6．本書の遺構写真は現場担当者が撮影した。

7．本書の執筆担当者は本文目次に（　）で示した。

8．本書で用いた座標は日本測地系を使用した。

9．本書では，環濠を含む溝状遺構にＳＤ，土坑にＳＫ，竪穴住居址にＳＣ，掘立柱建物にＳＢの略字を使用した。

10．本書の総編集は中尾が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地と環境　（小玉）
1．地理的環境……1
2．歴史的環境……2

Ⅱ　調査にいたる経緯……5（中尾）

Ⅲ　調査
1．原地区の調査　（中尾）
(1)　調査概要……7
(2)　各調査区における成果……7
(3)　小結……33
2．石田高原地区の調査　（中尾）
(1)　調査概要……41
(2)　基本土層……41
(3)　遺構と遺物……47
(4)　小結……61
3．高元地区の調査　（中尾）
(1)　調査概要……71
(2)　遺構と遺物……71
(3)　小結……123

図 版 目 次

図版１　調査区近景・土層断面・ピット土層断面・集石遺構
図版２　ＳＤ４検出状況・ＳＤ４遺物出土状況・ＳＤ３・ＳＤ４土層・杭検出状況・杭近景
図版３　調査区近景・ＳＤ１検出状況・ＳＤ１遺物出土状況
図版４　ＳＤ１土層断面・竪穴状遺構及びピット群検出状況・ＳＢ１検出状況
図版５　ＳＣ８遺物出土状況・ＳＣ５完掘状況・ＳＫ３完掘状況・ＳＫ３遺物出土状況・ＳＫ３土層断面・ＳＫ４遺物出土状況
図版６　ＳＫ10遺物出土状況・１号甕棺検出状況・ⅡＡ区４層アワビオコシ出土状況・ⅡＡ区４層石錘出土状況・ⅡＣ区調査風景・ＳＣ11遺物出土状況

挿 図 目 次

第１図　壱岐島の位置図……1
第２図　壱岐島内主要遺跡・史跡位置図……3
第３図　平成15年度調査研究事業調査区位置図……6
第４図　原地区調査区位置図……8
第５図　原地区遺構配置図……9～10
第６図　原Ａ区遺構配置図……11
第７図　原Ａ区検出ピット実測図およびＡ区出土遺物……12
第８図　原Ｂ・Ｃ区遺構配置図・土層図……13
第９図　原Ｄ・Ｆ区遺構配置図・土層図……14
第10図　原Ｅ区遺構配置図……17
第11図　原Ｅ区検出ピット実測図……18
第12図　原Ｅ区ＳＤ３・ＳＤ４遺物出土状況……19
第13図　原Ｅ区ＳＤ４遺物出土状況……20
第14図　原Ｅ区ＳＤ４出土遺物①……21
第15図　原Ｅ区ＳＤ４出土遺物②……22
第16図　原Ｆ区検出ピット実測図およびＦ区出土遺物……23
第17図　原Ｇ・Ｈ区遺構配置図・土層図……24
第18図　原Ｇ区検出遺構実測図および出土遺物……25
第19図　原Ｉ・Ｊ区遺構配置図・土層図……26
第20図　原Ｊ区検出ピット実測図およびＪ区出土遺物……27
第21図　原Ｋ・Ｌ区遺構配置図・土層図……28
第22図　祭儀場周辺における遺構検出面の傾斜およびピットの深さ……31～32
第23図　これまでの祭儀場北半部遺構群の捉え方……33
第24図　祭儀場北半部におけるピットの色調……34
第25図　祭儀場北半部におけるピットの深さ……35
第26図　平成７年度調査ピット内出土土器……36
第27図　祭儀場南半部の遺構群……38
第28図　石田高原地区調査区位置図……42
第29図　石田高原地区遺構配置図……43～44
第30図　ＳＤ１遺物出土状況……45～46
第31図　石田高原Ａ区ＳＤ１出土土器①……48
第32図　石田高原Ａ区ＳＤ１出土土器②……49

第33図　石田高原Ａ区ＳＤ１出土石器①……50
第34図　石田高原Ａ区ＳＤ１出土石器②……51
第35図　１号竪穴住居状遺構（ＳＣＸ１）実測図……53
第36図　竪穴住居状遺構周辺出土土器……54
第37図　石田高原Ｂ区ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３検出状況……55
第38図　ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３ピット実測図……56
第39図　ピットおよび周辺遺構出土土器……57
第40図　石田高原地区の周辺地形と遺構群のつながり……62
第41図　石田高原地区の遺構群（弥生時代中期中葉）……64
第42図　石田高原地区の遺構群（弥生時代中期後葉）……65
第43図　石田高原地区の遺構群（弥生時代後期以降）……66
第44図　高元地区調査区位置図……72
第45図　高元Ｉ区遺構配置図・土層図……73～74
第46図　ＳＣ１実測図および出土遺物……76
第47図　ＳＣ２実測図……76
第48図　ＳＣ５実測図……77
第49図　ＳＣ５出土遺物……78
第50図　ＳＣ８・ＳＫ15実測図……78
第51図　ＳＣ８・ＳＫ15出土遺物①……79
第52図　ＳＣ８出土遺物②……80
第53図　ＳＫ２実測図および出土遺物……81
第54図　ＳＫ３実測図……82
第55図　ＳＫ３出土遺物①……83
第56図　ＳＫ３出土遺物②……84
第57図　ＳＫ４実測図および出土遺物……85
第58図　ＳＫ５実測図……58
第59図　ＳＫ６・ＳＫ17実測図およびＳＫ６出土遺物……87
第60図　ＳＫ８実測図……88
第61図　ＳＫ９実測図……89
第62図　ＳＫ９出土遺物①……90
第63図　ＳＫ９出土遺物②……91
第64図　ＳＫ16実測図および出土遺物……92
第65図　ＳＫ10実測図および出土遺物……93
第66図　１号甕棺検出状況……93

第67図　１号甕棺実測図……94
第68図　高元Ⅱ区遺構配置図……97
第69図　高元ⅡＡ区土層図……98
第70図　高元ⅡＣ区土層図……99
第71図　高元ⅡＡ区４層遺物出土状況……100
第72図　高元ⅡＡ区４層出土遺物①……101
第73図　高元ⅡＡ区４層出土遺物②……102
第74図　高元ⅡＡ区４層出土遺物③……103
第75図　高元ⅡＣ区３ｂ層遺物出土状況……104
第76図　高元ⅡＣ区３ｂ層出土遺物①……105
第77図　高元ⅡＣ区３ｂ層出土遺物②……106
第78図　ＳＣ11・ＳＫ25実測図およびＳＣ11出土遺物……108
第79図　ＳＣ12～ＳＣ14実測図……109
第80図　ＳＣ15・ＳＣ16実測図……110
第81図　ＳＣ12～ＳＣ16出土遺物①……111
第82図　ＳＣ12～ＳＣ16出土遺物②……112
第83図　ＳＣ17実測図および出土遺物……113
第84図　ＳＣ18実測図および出土遺物……114
第85図　02ＳＢ５実測図および出土遺物……115
第86図　ＳＫ21実測図および出土遺物……116
第87図　ＳＫ24実測図および出土遺物……117
第88図　ＳＫ25実測図および出土遺物……118
第89図　ＳＫ26実測図および出土遺物……119
第90図　その他の出土遺物……120
第91図　02ＳＫ２・02ＳＫ３とＳＫ４・ＳＫ５との関係……124
第92図　高元地区における遺構群の変遷……125

表　目　次

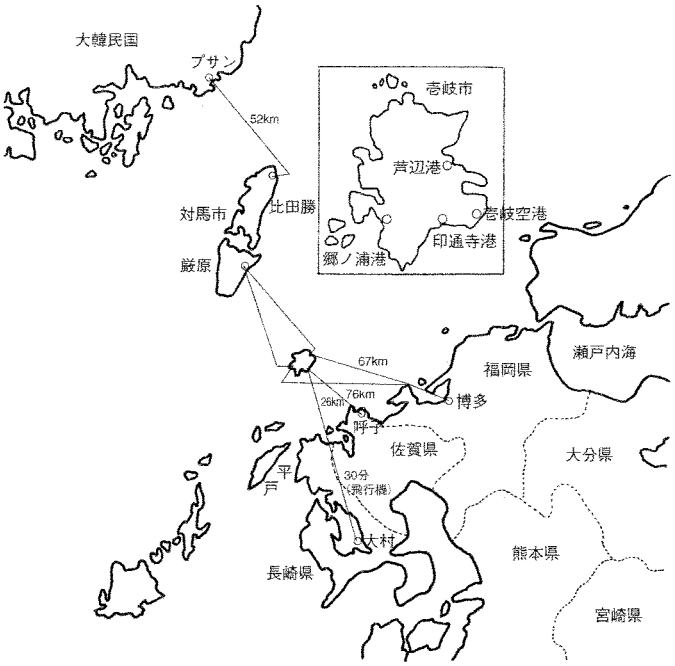
第１表　原地区出土遺物観察表……29
第２表　石田高原地区出土遺物観察表……59
第３表　石田高原地区検出ピット属性表……60
第４表　高元地区出土遺物観察表①……121
第５表　高元地区出土遺物観察表②……122

Ⅰ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

九州の北西海上の玄界灘に位置する壱岐は，対馬及び福岡県博多まで約68km，壱岐から佐賀県呼子までは約26kmの距離に位置する。晴れた日には遥か朝鮮半島を遠望できるこの島は，対馬と並び国境の島と呼ぶに相応しい。平成16年３月をもって四つの町が合併し「壱岐市」となったこの島は，南北約17km，東西約15kmのやや南北に長い本島の他，多くの小島から成る総面積約138.8km²，人口約３万４千人の島である。本土との交通手段としては海上交通が主で，博多港まではフェリーで約２時間半，ジェットフォイルで約１時間，佐賀県呼子港までは約１時間で結ばれている。長崎県には直通の交通手段が壱岐－大村間の空路以外にはないため，行政区分としては長崎県に属しているものの，経済的・文化的には福岡県との関係が深い（第１図）。

島の地形は全体的になだらかな溶岩台地で，高度100mを越す山地が占める面積は極めて小さく，壱岐での最高峰岳の辻でも標高213mで，険しい山々からなる対馬の風景と比較すると対照的である。島の基盤は古第三紀層で，玄武岩がその表面を覆い，弥生時代以降箱式石棺や古墳の石材としてよく利用されている。島の西から東にかけて島内最大の河川である幡鉾川（全長8,834m）が流れ，その下流には沖積平野としては県下最大の平野である深江田原が広がる。海岸線は入りくんでおり天然の良港を形成している。西海岸は出入りが激しいが，東海岸は比較的緩やかで砂浜も多く海水浴場が点在する。『魏志』倭人伝の中で３世紀頃の壱岐の様子を「…やや田地があり，田を耕してなお食べるには足らず…」という記述があるが，この深江田原は県内有数の穀倉地帯で，原の辻遺跡はこの平野に位置している。



第１図　壱岐島の位置図

2．歴史的環境

朝鮮半島・九州本土を行き来する際に中継地としての性格を持つ壱岐は，対馬と並んで古来より交通・交流の要衝であり，また防衛の拠点としての役割も担っていた。

壱岐についての文献上の初見は３世紀の歴史書『三国志』の魏書東夷伝倭人の条，つまり「魏志倭人伝」に邪馬台国などの諸国とともに登場するが，壱岐島における人類の足跡は，旧石器時代にまで遡ることができる。ここでは弥生時代を中心に，旧石器時代以降の壱岐島でどのような活動が行われていたのか，また朝鮮半島・大陸とどのような交流が行われていたかを述べてみたい（第２図）。

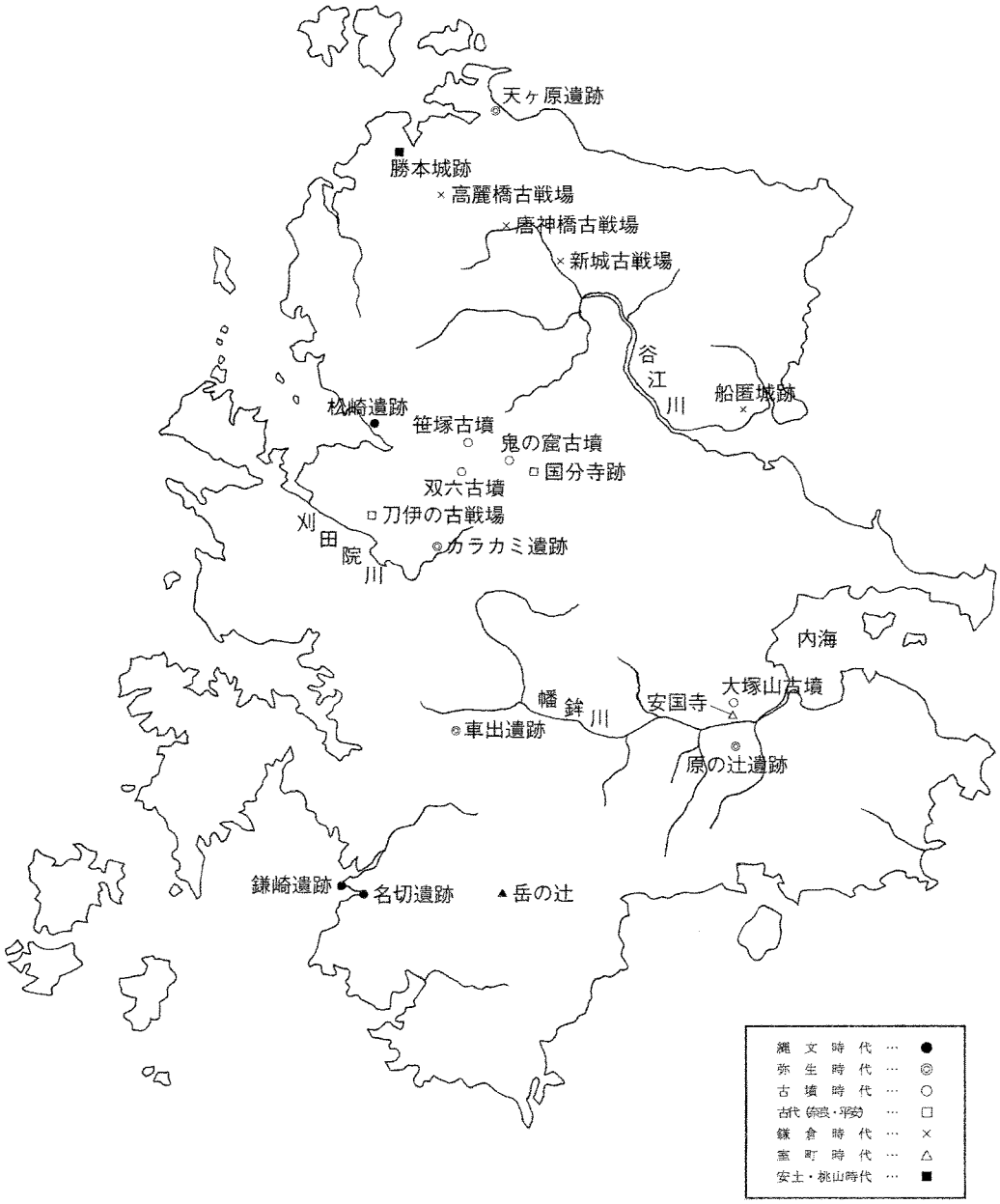
壱岐島における旧石器時代の遺跡は，原の辻遺跡をはじめ，カラカミ遺跡・興触遺跡など島内の数ヶ所において見られる。出土遺物としては，ナイフ形石器・台形石器・細石器を中心としている。この他ナウマンゾウの臼歯なども出土している。

縄文時代の遺跡は沿岸部に集中的に立地しており，これは漁労や採集を中心とした生活を送っていたことを裏付けるものと考えられる。代表的なものとしては，松崎遺跡・鎌崎遺跡・名切遺跡などで，これらの遺跡は大潮前後の干潮時にだけ姿を現す潮間帯遺跡である。大半の遺跡は島の西側に分布する傾向にあったが，近年では石田町の大久保遺跡など東側でも縄文時代の遺跡が発見・調査されている。

弥生時代の遺跡は島内で66カ所確認されており，遺跡の分布は稲作など農耕社会へ移行したことを裏付けるかのように島の全域にわたり分布しており，漁労・採集に依存していた縄文時代の遺跡の多くが沿岸部に分布しているのと対照的である。『魏志倭人伝』の中では，壱岐は「田畑もなくはないが，農耕だけでは食糧の自給ができず，そこの人々も南や北に海を渡って穀物を買い入れている」と紹介されている。代表的な遺跡としては，原の辻遺跡・車出遺跡・カラカミ遺跡などがあげられる。

原の辻遺跡の発見・報告は古く，大正時代から昭和初期にまで遡る。平成５年以降本格的な調査が始まり，多くの遺構や遺物が発見されている。原の辻遺跡の出土遺物の特徴としては，無文土器や三韓系瓦質土器・楽浪系土器など朝鮮半島系の土器が多く見られることがあげられる。また貨泉・五銖銭・大泉五十などの中国の貨幣や中国製の鏡など各種の金属製品が多く出土することは，『魏志倭人伝』が伝える「南北市糴（なんぼくしてき）」という言葉のとおり海を越えての活発な交流が行われていたことを物語っている。

車出遺跡は壱岐島のやや南西，幡鉾川上流の穀倉地帯に位置し，付近には『延喜式神名帳』に記載された旧式内社の天手長男（あまのたながお）神社のある鉢形山がそびえ，その頂上部からは延久三年（1071年）銘の国重文に指定されている滑石製の如来像が出土している。多くの土器類や石器類が出土しているが，丹塗磨研土器の壺や小型供献土器などの出土や，後漢鏡片が火にあたった状態で出土していることなどから，祭祀的な性格も考えられる。また，土器溜まり状の窪地から小型倣製鏡が一面出土し，周囲からはガラス小玉や瑪瑙（めのう）玉，管玉などが出土いる。ここには大型の甕がつぶれるようになっていたことから墓地が存在していた可能性もる。一支国の拠点集落の一つとしてこの辺りにも有力者が存在し，北から南に湾入した半城湾からの外敵の侵入に備える役割を果たすと共に，対外交流にも一役買って



第2図　壱岐島内主要遺跡・史跡位置図

いたのではないかと推測される。

カラカミ遺跡は，島の中央部やや西側，標高80メートル程の丘陵に位置し，面積は約5ヘクタールである。地形的には遺跡の東側と南側は刈田院川により浸食された急な崖になっており天然の要害となっているが，北側と西側は比較的緩やかな地形のため，防御のために環濠が巡っていることが確認されている。時期は原の辻遺跡同様に弥生時代前期（紀元前2世紀）から後期（紀元3世紀）にかけて最盛期を迎えていたようである。出土遺物としては，土器・石器・鉄器・骨角器など各種遺物が大量に出土しているが，特徴的なものとしては鯨の骨で作ったアワビオコシや釣針・銛・石錘など漁労的な性格を持つ遺物があげられる。また朝鮮半島製の土器や，占いをする際に用いられたのではない

かと考えられる卜骨などが出土している。このことからカラカミ遺跡は，規模としては原の辻遺跡には及ばないものの，漁労を中心とした生活をし，大陸との交流を活発に行っていた集落であったのではないかと推測される。

壱岐島の弥生時代の遺跡として前述した３つの遺跡は，いずれも内陸部に位置する遺跡であるが，海岸部にも多く見られる。中でも壱岐島の北部，勝本町に位置する天ヶ原遺跡が注目される。ここでは海岸線の護岸工事中に銅矛が３本同時に出土した。対馬では120本を越す銅矛が発見されているが，壱岐で銅矛が出土することは珍しい。天ヶ原遺跡がある勝本町は壱岐島の最北端で，古代より海外交流に際しての最重要寄港地と位置づけられていることから，大陸に向かって出立する船の航海安全を祈願するために一括して埋納されたのではないかと考えられる。

古墳時代になると壱岐には多くの古墳が築造され，現在でも長崎県全体の約半分の250基以上確認されている。最も古いのが５世紀後半に築造されたものと考えられる大塚山古墳で，深江田原の北側の標高74メートルの山頂部に位置している。その後約１世紀の空白を経て，６世紀の後半には分布の中心は国分地域に移り，多くの古墳が築造されるようになる。金銅製の飾り金具をつけた馬具が出土した笹塚古墳や，隋の二彩・新羅土器が出土した双六古墳などから判断すると，弥生時代と同様に朝鮮半島との結びつきが強かったようである。また，石室内部に船や捕鯨の線刻絵画を持つ古墳もあり，海との結びつきが深かったことを示している。

律令制度下において壱岐は対馬とともに下国とはいえ一つの国としての扱いをうけている。そのため国分寺が設置されることになったが，経済的な理由のためか在地豪族である壱岐直の氏寺を国分寺に転用した旨が『延喜式』に書かれている。ここで用いられていた瓦が平城京の瓦と同笵であることから，壱岐直は中央との結びつきが強かったことがうかがえる。この時代は対外的な動きも活発で，遣新羅使が始まり，９世紀まで派遣された。

壱岐島は国境に近いため，対馬とともに文化交流の窓口としての役割を担うが，一旦大陸との関係が緊張状態になると状況は一変する。663年の白村江の戦後，唐・新羅の侵入に備えて防人が派遣され，烽火を置いた。その後律令体制の崩壊とともに中央政府の外敵に対する防衛意識が希薄になるにつれ，９世紀の後半から壱岐島はたびたび襲撃を受けている。特に1019年には中国東北部に拠点を持つ女真族刀伊の襲撃を受け，国司藤原理忠までが戦死するという甚大な被害を受けている。

中世は，元による文永の役（1274）・弘安の役（1281）があり，大きな被害を受けた。また倭寇の活動が沿岸部で目立つようになるが，特に壱岐で大きな勢力を持つことになったのが松浦党で，松浦党五氏による分治がおこなわれた。しかし，15世紀後半には肥前上松浦の岸岳城主波多泰（はたやすし）が壱岐に攻め込み松浦党五氏を降伏させ，波多氏による壱岐統治が始まった。その後は波多氏の内紛や波多氏と家臣である日高氏の対立が続き，平戸の松浦氏と組んだ日高氏が波多氏を破り，日高氏が松浦氏に従属したことから壱岐は明治を迎えるまで平戸藩松浦氏が領有した。

Ⅱ．調査にいたる経緯

原の辻遺跡は，明治時代に松本友雄によって発見された。その後の河川改修工事や耕地整理の際に，大量の土器や中国鏡などが発見され，遺跡の重要性が認識されるようになると，昭和26年～昭和36年には，京都大学や九州大学を中心とする東亜考古学会によって学術調査が行われた。初めて本格的な発掘が行われたこの調査では，大量の弥生土器とともに各種鉄製品や貨泉，あるいは朝鮮半島系土器や楽浪系土器などが出土し，大陸との関連性が強い遺跡として学会で注目を集めた。一方で，地元に対しての理解は浸透しておらず，高度成長期を迎えると，遺跡の位置する台地周辺も畑地から水田への転換が押し進められ，それに伴って遺跡自体かなりの損壊をうけた。

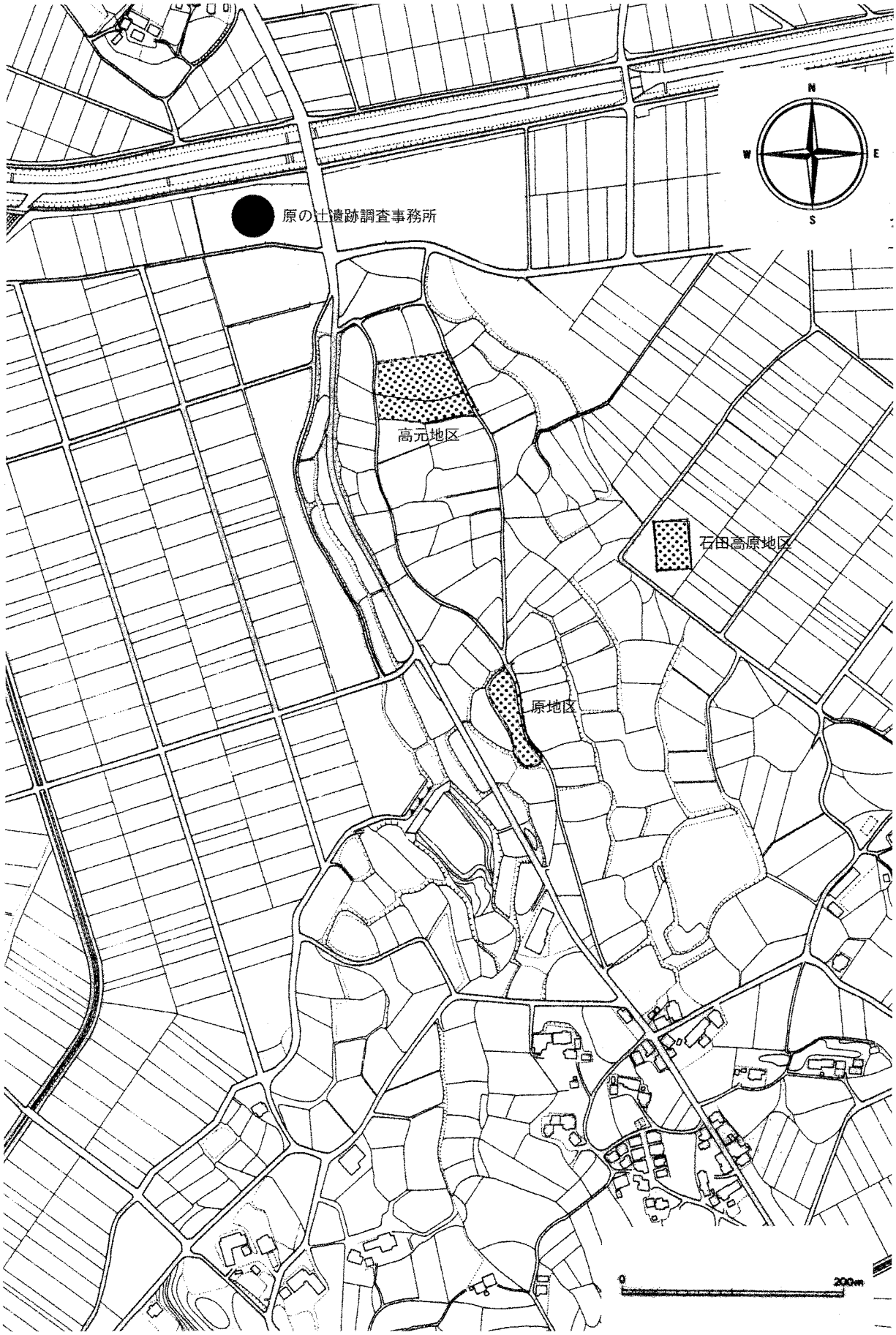
昭和49年には，石田大原地区において水田化改良工事が計画され，これに先立つ発掘調査で墓域が確認された。この墓域は，弥生時代前期末～中期を中心とする箱式石棺墓および甕棺墓から構成されており，区画溝も伴う本格的な墓域として注目された。この調査を受けて，新たな保護対策として昭和50年～52年度にかけて範囲確認調査を実施し，遺跡の広がりが南北に伸びる舌状台地だけでなく，より南側まで広がることが確実となった。

平成にはいって幡鉾川流域総合整備事業が計画されると，舌状台地周辺の低地部を中心に広大な面積の発掘調査が行われることとなった。これによって，遺跡の範囲が約100haに及ぶとともに，台地周辺の低地部に幾重にも環濠を巡らす巨大環濠集落であることが判明した。

平成７年度以降は，集落構造の把握を目的として，改めて範囲確認調査を実施している。これまでの調査により，環濠の外側に小児甕棺墓や成人用の箱式石棺墓を主体とする墓域が検出され，集落の形成から解体まで，地点を変えつつ連綿と営まれていた様相が明らかになりつつある。台地上の調査においては，多数の竪穴住居跡とともに，最高地点からは掘立柱建物跡を中心とする祭儀場跡が発見された。また，低地部の調査も継続して行われており，複雑に巡る環濠の様相が明らかになるとともに，各年度の調査で検出された環濠同士のつながりや時期的な変遷についても検討できる状況になりつつある。

本年度の調査は，祭儀場周辺と台地先端部，および台地東側低地部の３カ所に，合計1,950㎡の調査区を設定し調査を行った。(第３図)。調査区名は，調査区の字名を用いてそれぞれ原地区，高元地区，石田高原地区と呼称する。原地区では，平成７年～８年度にかけて調査が行われた祭儀場の構造を確認するために，周囲の未掘部分に調査区を設定して調査を行った。高元地区は，昨年度のトレンチ調査で確認された竪穴住居群の広がりを確認するとともに，焼土坑をはじめとする工房群の検出を目的とした。石田高原地区は，昨年度調査区の南側に調査区を設定し，東側低地部における遺構群の展開を探った。

調査は，平成15年５月16日～平成16年３月19日まで行った。



第３図　平成15年度調査研究事業調査区位置図（Ｓ＝１/5000）

Ⅲ．調　　査

1．原地区の調査

(1) 調査概要

原地区の調査は，平成７年～８年度にかけて確認された祭儀場の周辺遺構確認を目的としている。これまでの調査によれば，祭儀場北半部を中心に掘立柱建物群が26棟と，それを取り囲むように巡る柵列が確認されている。また，南半部においては，南北に並ぶ２棟の大型掘立柱建物跡が立ち，その南側には台地を東西に横切る２条の環濠が巡っている。全体として，祭儀場は周囲よりも一段高く盛り上がった最高地点の周囲を柵列で囲み，その中に掘立柱建物が建ち並ぶ構造として捉えられ，その立地環境から，集落内部の中枢として位置付けられてきた。

しかし，遺物の出土量が少なく，時期に関する情報が非常に乏しいため，祭儀場内の遺構群の変遷については不明な点が多かった。また，柵列に囲まれた空間である以上，いずれかの場所に入り口が存在するはずであり，遺跡整備を視野に入れた遺構群の検討に際して，祭儀場にいたる施設の確認が必須となった。そのため，旧調査区の周囲に12カ所の調査区を設定し調査を行った。調査区名は，北から時計と反対周りにＡ区～Ｌ区とした（第４図・第５図）。

その結果，近世以降に大規模な削平および造成が繰り返されていることが明らかとなり，周囲よりも一段高い現地形も，このような土地の改変によるところが大きいことが判明した。また，今回新たに検出されたピットの中には，造成土最下層に堆積したしまりのない暗褐色土を充填したものが認められた。さらにＤ区では，削平された後に打ち込まれたものと思われる杭が直立した状態で検出され，近世以降に土地の改変に伴って，杭や柱が伴う何らかの構築物が存在したことが確実となった。これにより，従来柵列とされてきたピット群も再検討の必要が生じることとなり，また，弥生時代の旧地形についても再考を迫られることとなった。

一方，調査区南側では，東西に伸びる環濠の南側に，半円形に巡る環濠を新たに検出した。時期的には以前検出されていた環濠とほぼ併行するものの，平面プランでは明らかに切り合っていることが予想され，時期別の詳細な展開については課題を残した。

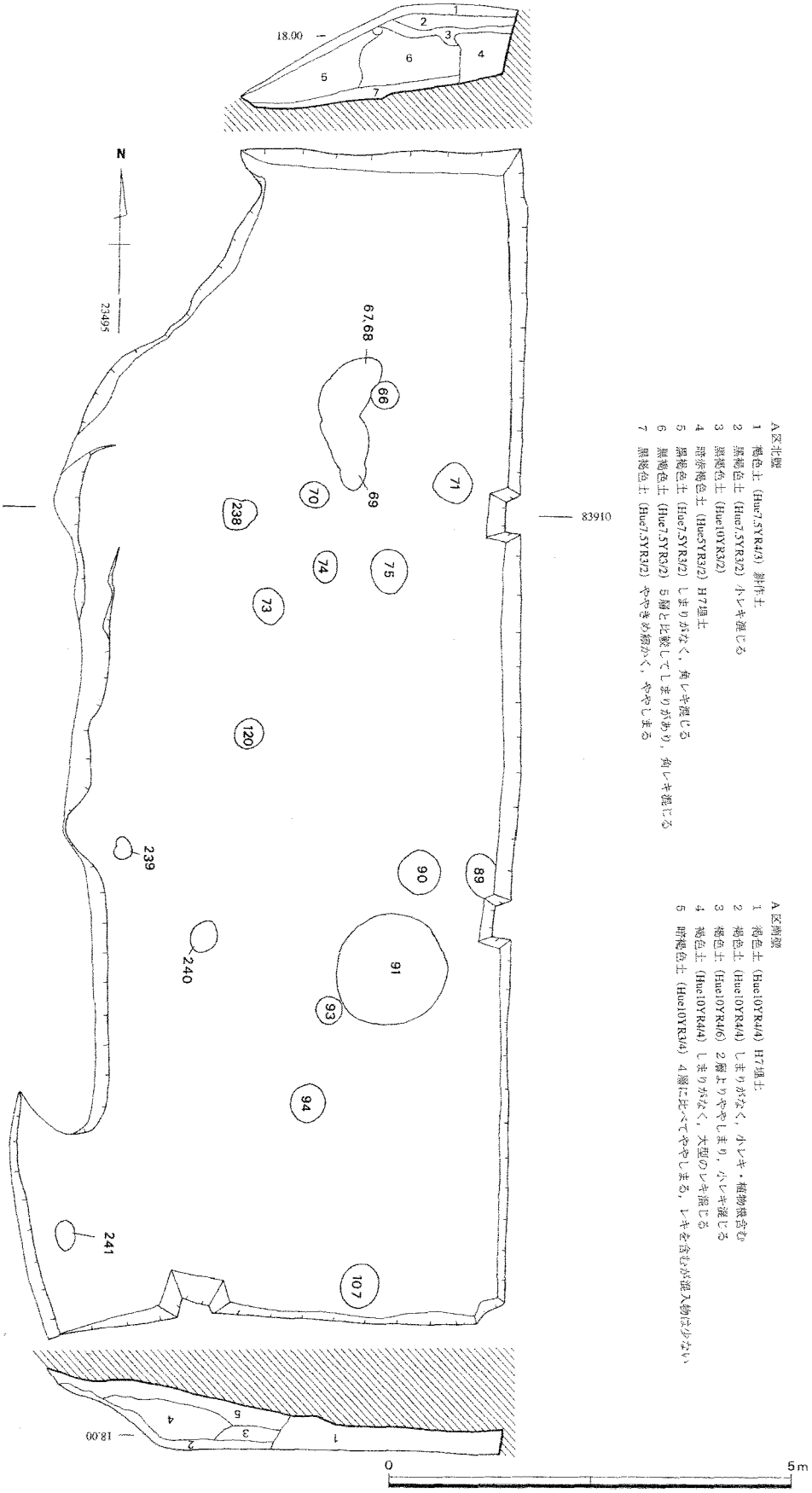
結果として，当初目的とした祭儀場周辺遺構の確認から，旧地形を含めた祭儀場そのものの再検討を促すこととなり，新たな課題を提示する調査となった。

(2) 各調査区における成果

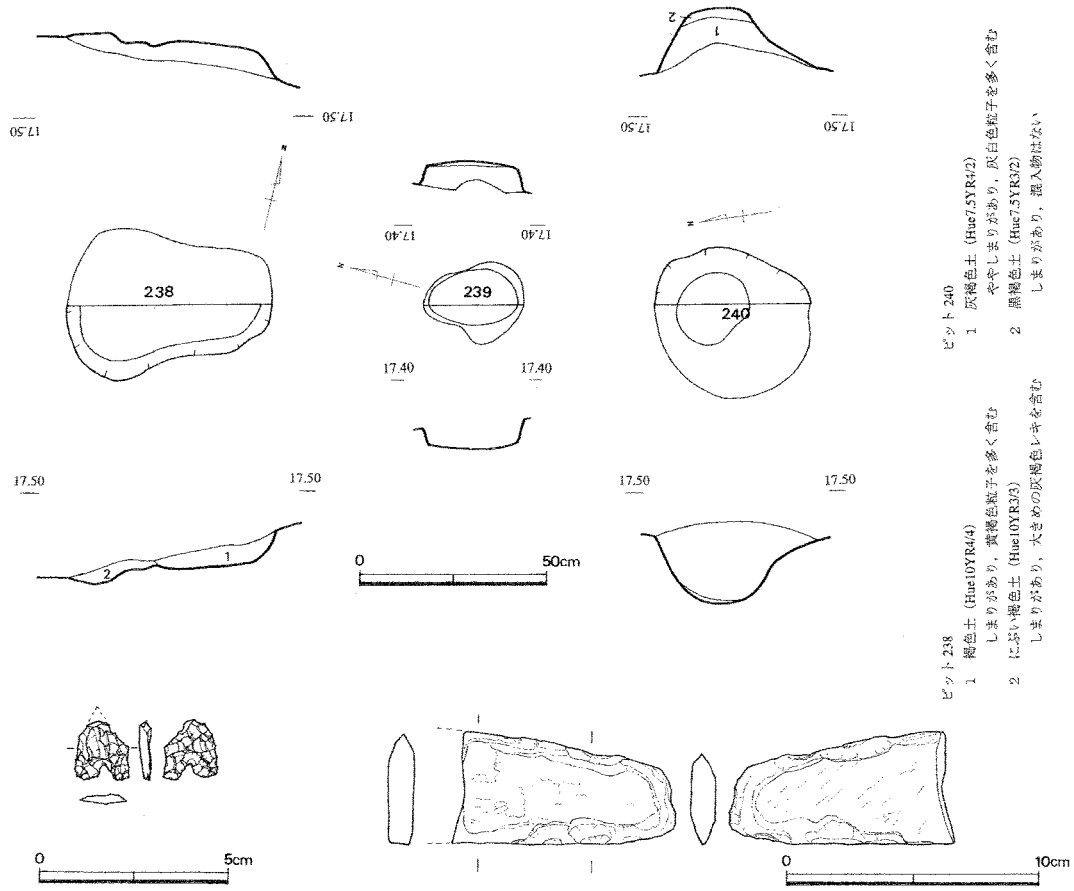
過去の調査により，祭儀場では大小合わせて237基のピットが検出されている。本年度の調査で検出したピットは合計31基で，これらについてＰ238～Ｐ268まで番号をつけた。これらのピットには，覆土の特徴から近世以降に掘削されたと考えられるものも含まれている。以下，各調査区毎に説明を加えていく。

第４図　原地区調査区位置図（Ｓ＝１/1000）

第5図　原地区遺構配置図（S＝1/200）



第6図　原A区遺構配置図（S＝1/80）



第７図　原Ａ区検出ピット実測図（Ｓ＝１/20）およびＡ区出土遺物（Ｓ＝１/２・１/３）

①Ａ区

ａ．基本土層（第６図）

遺構検出面までの土層は，全て近世以降の造成土や耕作土である。最下層では，黒褐色や暗褐色を呈すきめの細かいしまりのない土が堆積し，その上に大小の角礫を含む土層が堆積している。造成土の堆積は，南側に比べて北側で厚く，北側を中心に土を盛って，斜面を平滑にしようとしていた意図が読みとれる。

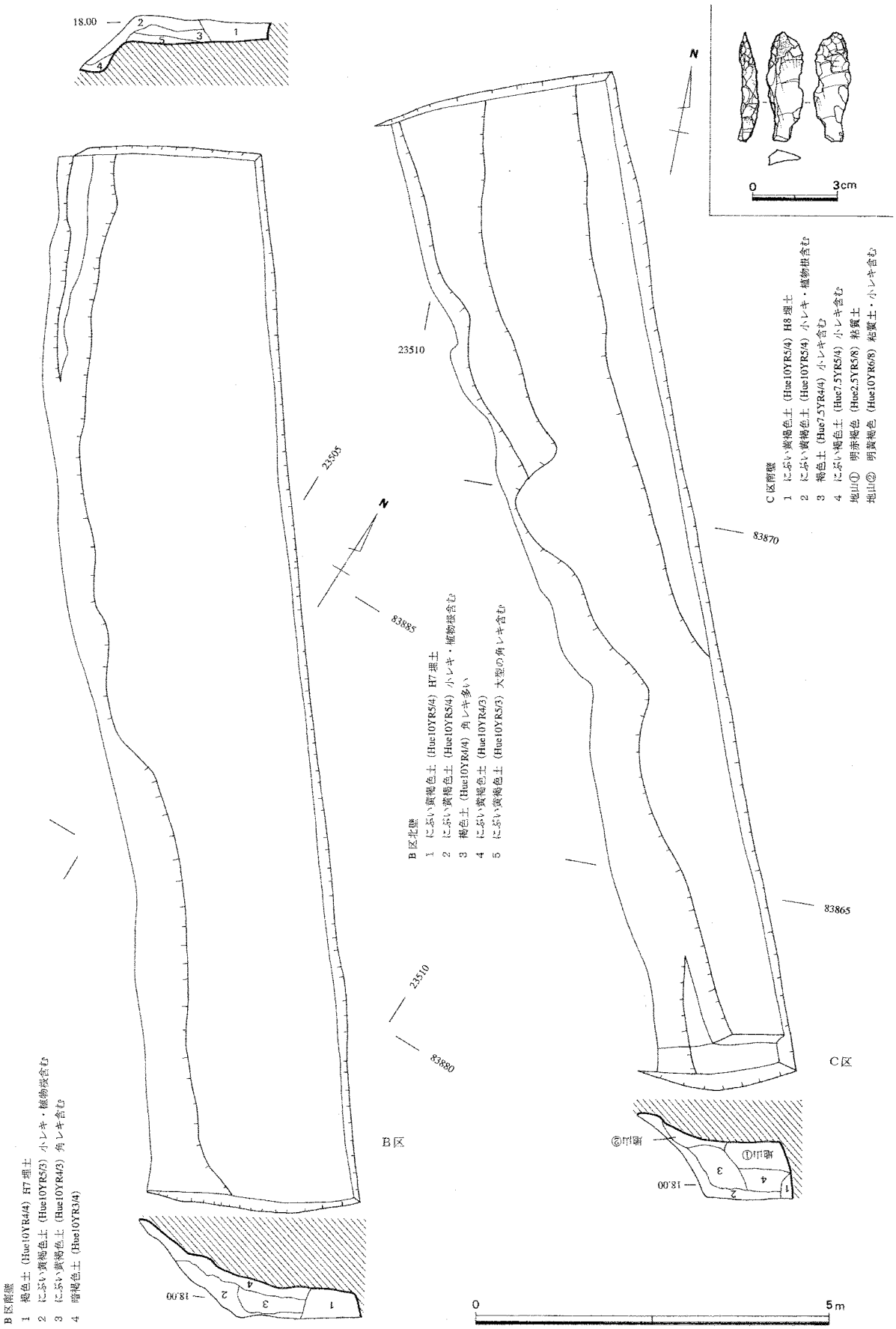
なお，遺構検出面は玄武岩岩盤を主体とするが，南北方向の溝状の削平痕が顕著であった。

ｂ．遺構（第６図・第７図）

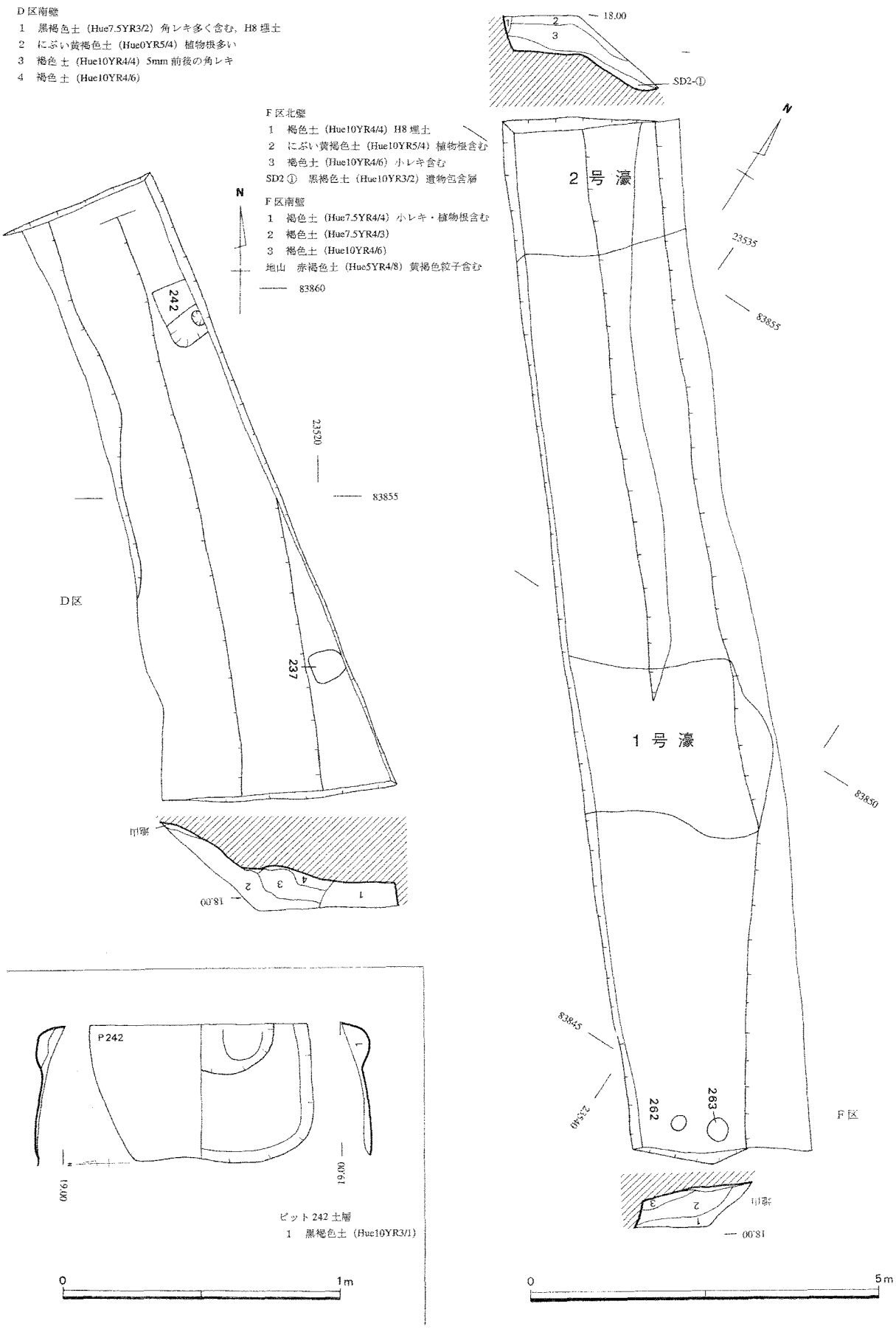
平成７年度に検出したピットを含めて19基のピットを確認した。うち，本年度新たに検出したピットは，Ｐ238～Ｐ241の４基である。Ｐ238は，平楕円形で礫混じりの褐色土の覆土で充填されている。覆土もしっかりとしまっており，砂礫が入る特徴も平成７年度検出ピットと共通している。したがって，遺物の出土は見なかったものの，このピットは弥生時代のピットと考えて差し支えないであろう。Ｐ239～Ｐ241については，覆土に締まりがなく，きめの細かい点が造成土最下層（第６図北壁の７層・南壁の５層）と共通しており，造成する際に掘削された近世以降のピットと考えられる。

ｃ．出土遺物（第７図）

造成土中から石器が２点出土している。１は黒曜石製の石鏃で，先端部を欠損するものの，平面五



第8図　原B・C区遺構配置図・土層（S＝1/80）およびC区出土遺物（S＝1/2）



第９図　原Ｄ・Ｆ区遺構配置図・土層図（Ｓ＝１/80）および検出ピット実測図（Ｓ＝１/20）

角形に整えている。調整はやや雑であるが，非常に薄手に仕上げている。2は石鎌の未成品と考えられる。かなり摩耗しているが，刃部と背面に調整剥離が認められる。刃部側には一部調整剥離を行わず節理面を残す所があり，この部分が基部になるものと考えられる。

②B区（第8図）

a．基本土層

大小の角礫を含むしまりのない土が堆積している。また，北壁でははっきりしなかったものの，南壁土層では最下層にきめが細かくしまりのない暗褐色土が薄く堆積しており，A区の状況に共通する特徴である。

b．遺構

検出されなかった。遺構検出面は，南北方向に溝状の削平痕が認められ，西側ののり面部分も激しく削平を受けていることを確認した。なお，遺構検出面は玄武岩の岩盤である。

c．遺物

出土しなかった。

③C区（第8図）

a．基本土層

遺構検出面までは全て近世以降の造成土であるが，北側のA区・B区に比べると礫の混入が少なく，混入している礫自体も小型のものが多い点が特徴である。また，遺構検出面の地山は，北半部においては玄武岩の岩盤であるが，南半部では明赤褐色粘質土，さらに南では明黄褐色粘質土へと移り変わっている。切り通しの土層観察により，明黄褐色粘質土→明赤褐色粘質土→玄武岩岩盤の順に堆積したことが明らかとなった。

b．遺構

検出されなかった。

c．遺物

造成土内からナイフ形石器が1点出土している。黒曜石製で，縁辺部を中心にかなりガジリ痕が残るものの，縦長剥片の一側縁にブランティングが観察できる。

④D区（第9図）

a．基本土層

遺構検出面までは全て近世以降の造成土である。C区と同様小型の礫を多く含み，最下層には締まりがなくきめの細かい褐色土が堆積している。

b．遺構

平成8年度に検出したP 242の西半部と，同じく平成8年度に検出したP 237を確認した。P 242は

方形の堀方で，その中に径20cmの柱穴痕を確認している。遺構検出面の地山は，礫混じりの赤褐色土である。覆土はしっかりとしまっており，弥生時代のピットと考えられる。

c．遺物

出土しなかった。

⑤E区（第10図）

a．基本土層

遺構検出面まで全て近世以降の造成土および耕作土である。礫の混入が少なく，粘質土を主体とする点でA区～D区とは異なる。なお，遺構検出面の地山は，礫混じりの赤褐色粘質土である。

b．遺構

環濠２条とピット22基を検出した。ピットのうち２基は平成８年度検出分であり，今回新たに検出したピットは20基である。

ピット群のほとんどは，径20cm程度の小型のものを主体とする（第11図）。浅いものが多く，上面を削平されているものと思われる。覆土の特徴は，いずれも色調が黒褐色や暗褐色を呈し，明褐色粒子や黄褐色粒子が散在することである。覆土自体も比較的しまりがあり，時期を限定できる遺物の出土は見なかったものの，全て弥生時代のピットと考えられる。

２条の環濠は，平成８年度調査検出の１号濠・２号濠の存在を考慮して，３号濠（ＳＤ３）・４号濠（ＳＤ４）と呼称する（第10図）。土層の切り合いから，ＳＤ４→ＳＤ３の順で構築されたことが明らかである。

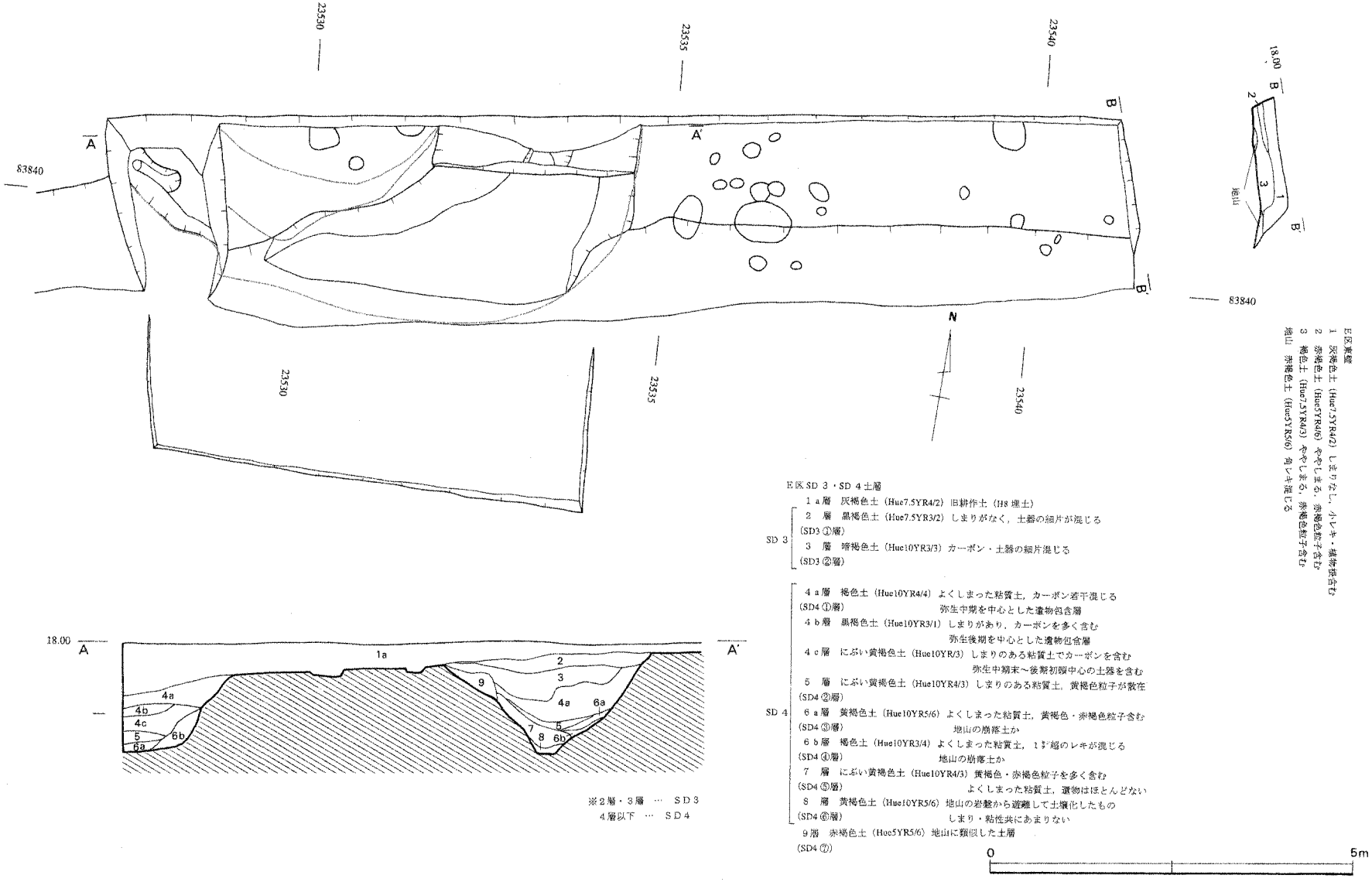
ＳＤ３は，断面逆台形の堀方を有する深さ約60cmの環濠である。調査区中央から南側へ伸びた後，西側へ「く」の字に折れて伸びることを確認した。時期を特定できる遺物は出土しなかったものの，ＳＤ４との切り合いから，古墳時代初頭のものと考えられる。

ＳＤ４は，断面Ｖ字形の堀方を有する深さ約80cmの環濠である。調査区中央からいったん南へと延びるものの，調査区内で大きく湾曲して西側に伸びる。土層の観察では（第10図），調査区中央北壁土層の西側（９層），および調査区西端北壁土層の東側（６ｂ層）に偏って，地山類似の粘質土が堆積している。このことは，環濠で囲まれた円周内に盛り土をしていて，この盛り土が環濠内に流れ込んで堆積したものと考えられる。なお，ＳＤ４の堀方に沿うように並ぶピットを３基検出している。

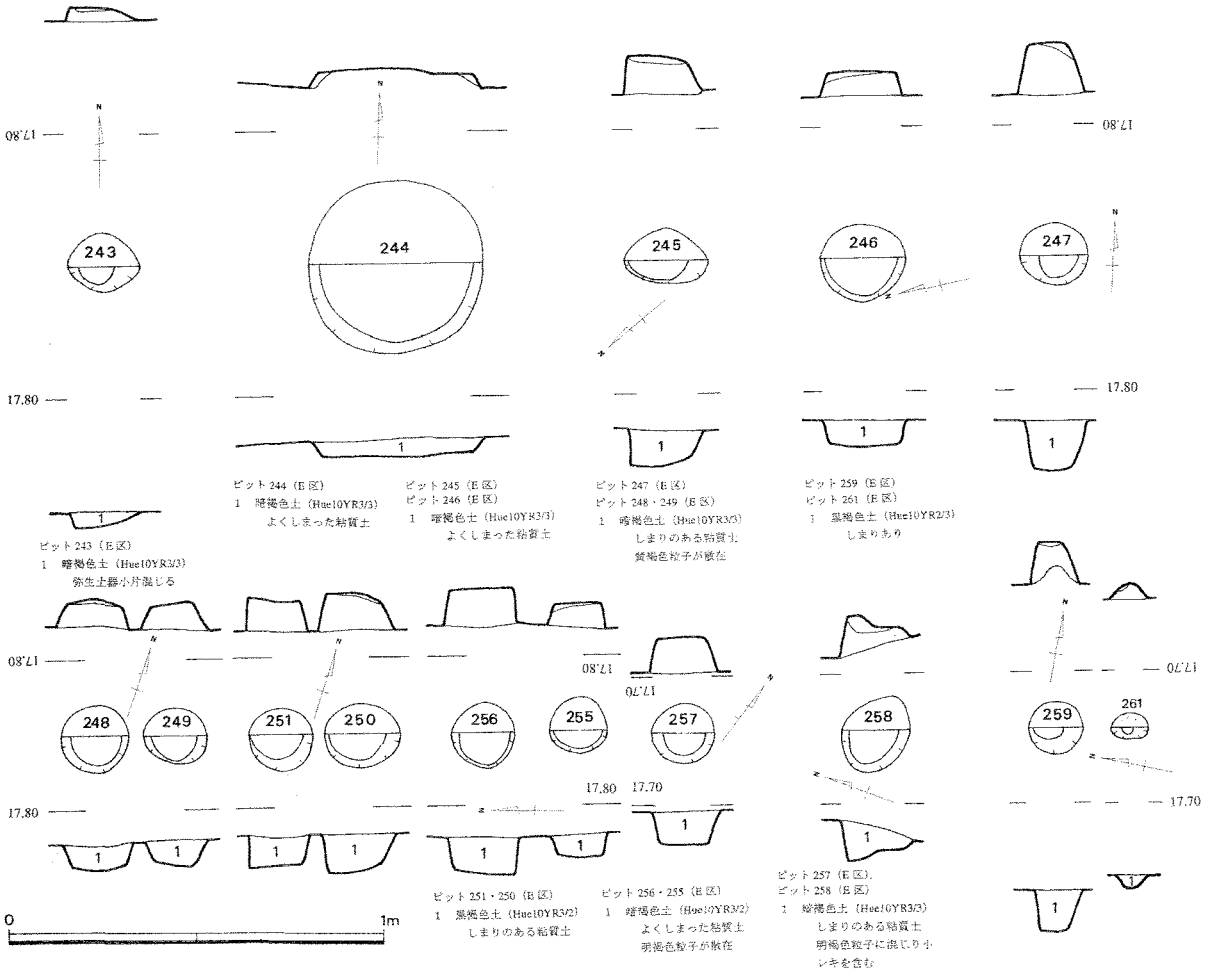
また，調査区西端のトレンチでは，ＳＤ４の床面を掘り込むピットを確認している（第13図）。調査区外まで伸びるものの平面楕円形と考えられ，長軸長75cm，深さ35cmである。ピットの西側に偏って，円形の柱穴が深く掘り込まれている。

c．遺物

ＳＤ４を中心に，大量の遺物が出土した。調査区西側トレンチでは，ＳＤ４は遺物の出土状況から上下２層に分層することができた（第13図）。弥生時代中期後半～後期初頭の土器を含む５層と，弥生時代後期後葉から終末の土器を含む４ａ・４ｂ・４ｃ層である。４ｃ層においては弥生時代中期と



第10図　原Ｅ区遺構配置図（Ｓ＝１/80）　※青線はＳＤ４，赤線はＳＤ３のライン



第11図　原E区検出ピット実測図（S＝1/20）

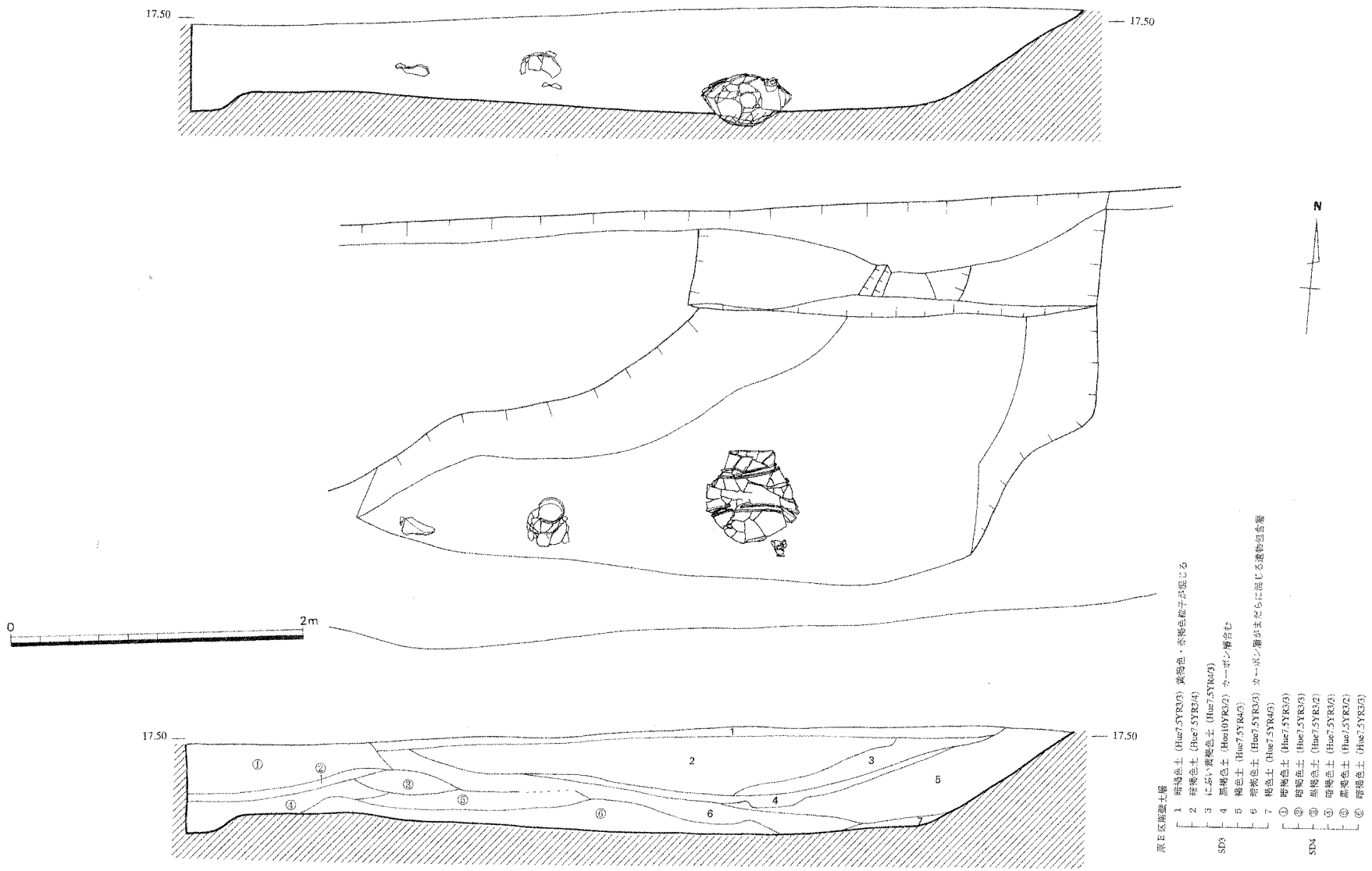
後期の土器が混在する状況がみられたが，5層はほぼ弥生時代中期後葉～後期初頭に限定でき，土層の堆積も比較的安定していた。

第14図・第15図はSD4出土遺物である。**1**～**6**は弥生時代中期の土器群である。**4**・**6**のようにやや古手の土器を含むものの，鋤先状口縁の土器が主体をしめる。4c層～5層にかけての土器群である。**7**～**14**は4a層～4c層出土の土器である。「く」の字口縁の甕や，球状の胴部から外反しながら立ち上がる口縁部を持つ壺が主体となる。**15**は大型の壺で，逆L字状の口縁部を意図的に打ち欠いている。底部は凸レンズ状の平底である。**17**～**22**は石器である。**17**は黒曜石製の石核で作業面2面が確認できる。不純物が非常に多い黒曜石で壱岐産かもしれない。打面および側面には被熱によるものとみられる自然の剥離面が確認できる。弥生時代後期後葉～終末のものである。**18**は砥石，**19**～**21**は敲石，**22**は石皿である。**19**は礫器を転用したものであるが，部分的に被熱痕が認められる。

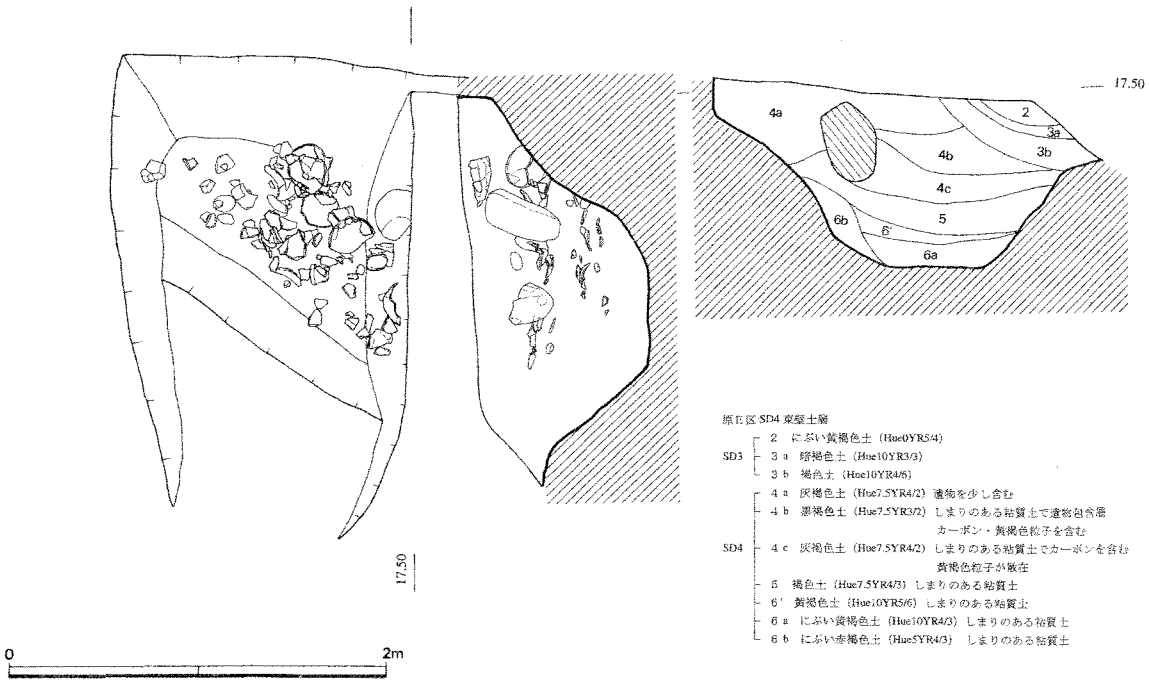
⑥F区（第9図・第16図）

a．基本土層

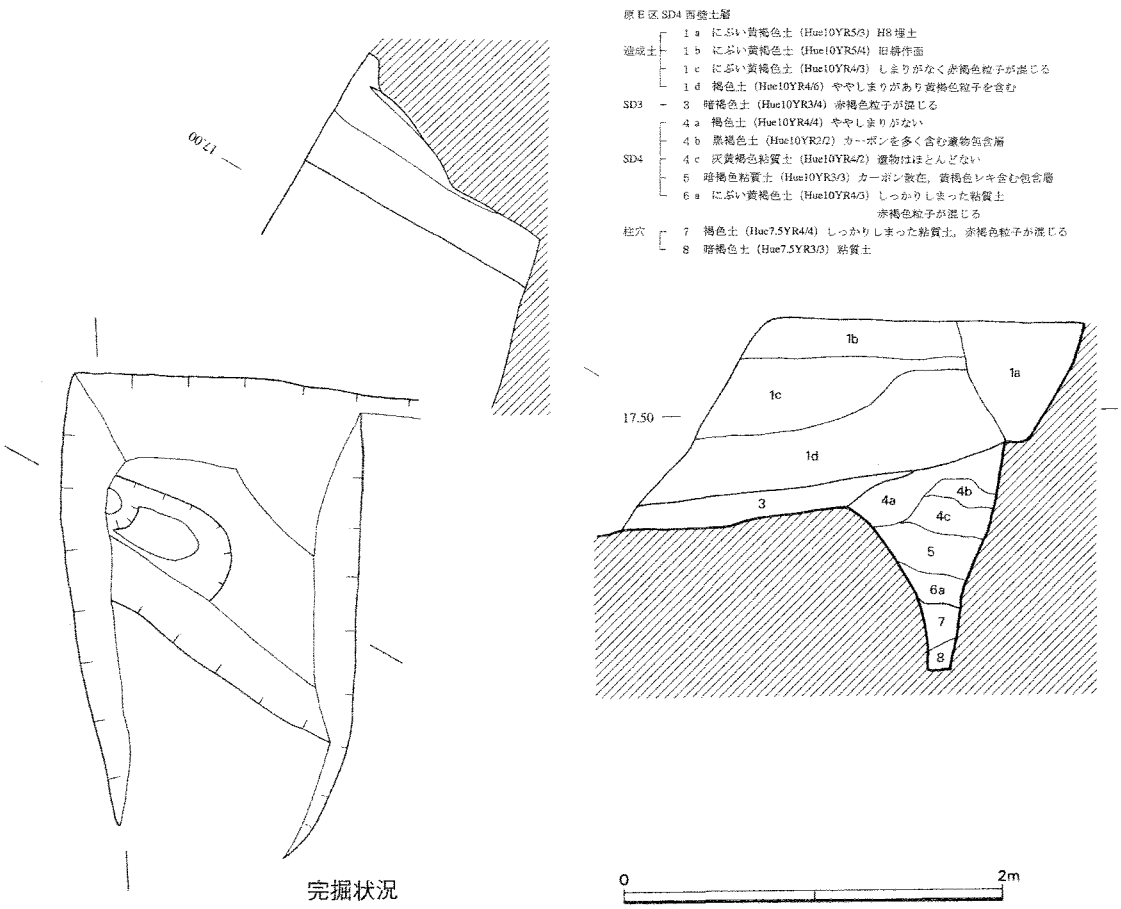
遺構検出面までは全て造成土および耕作土である。造成土は暖色系の粘質土が主体で，礫の混入も



第12図　原Ｅ区ＳＤ３・ＳＤ４遺物出土状況（Ｓ＝１/40）

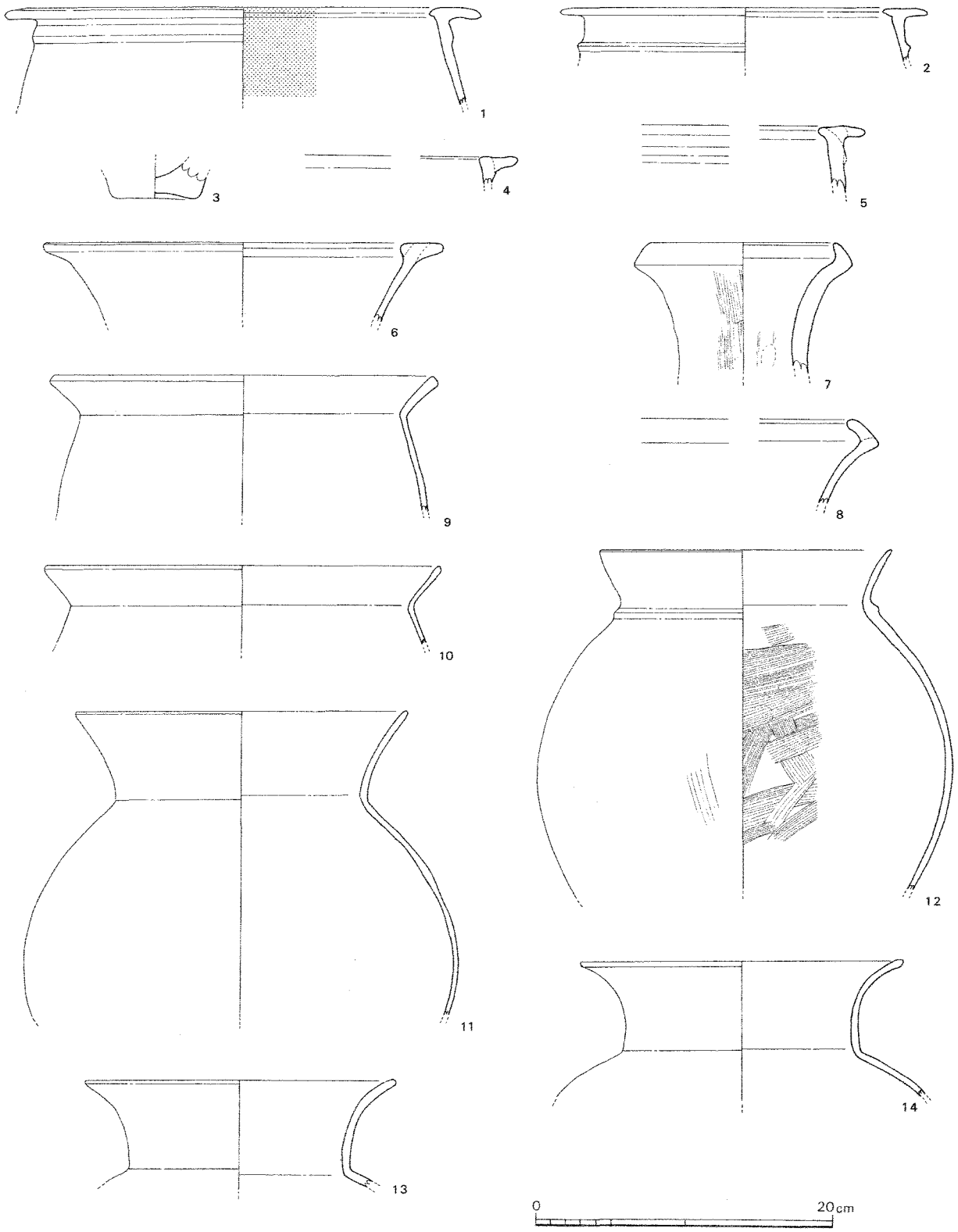


遺物出土状況

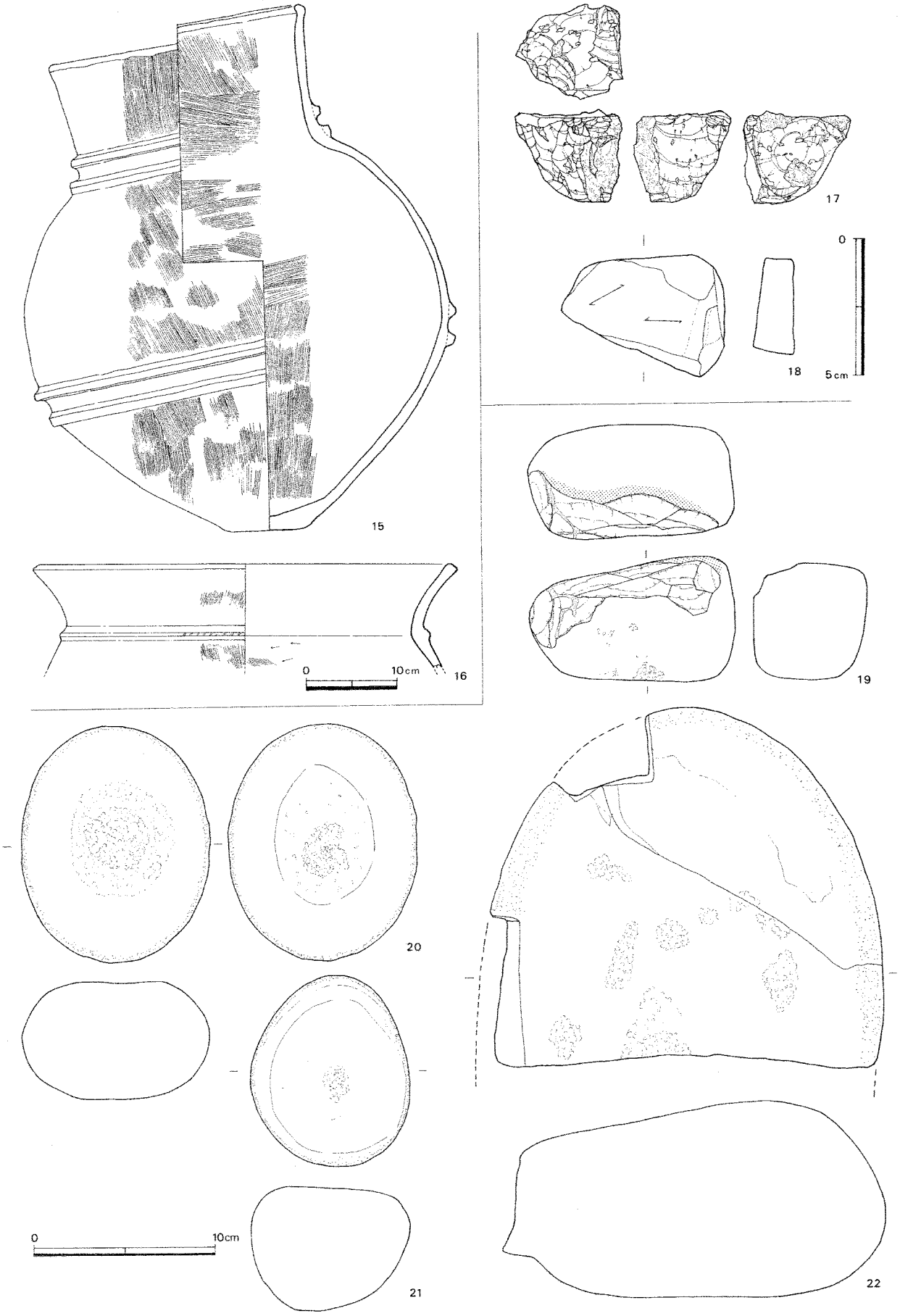


完掘状況

第13図　原Ｅ区ＳＤ４遺物出土状況（Ｓ＝１/40）



第14図　原Ｅ区ＳＤ４出土遺物①（Ｓ＝１／４）



第15図　原Ｅ区ＳＤ４出土遺物②（Ｓ＝１/２，１/３，１/６）※アミカケは被熱痕

比較的少ない。また，厚さ約60cmと北側の調査区に比べて造成土が薄いのが特徴である。地山は礫混じり赤褐色粘質土を主体とするが，中央部分では礫混じり黄褐色土がブロック状に堆積している。

b．遺構

平成８年度に検出した１号濠および２号濠の一部を確認した。また，調査区南端で２基のピットを検出している（**P 262・P 263**）。１号濠の床面は東側の切り通しで確認でき，標高は16.5mである。２号濠は切り通し部分よりもさらに深く入り込んでおり，床面の深さは確認できなかった。これらの環濠は，遺構の上面を確認したのみで埋め戻している。

P 262・P 263の覆土はいずれも締まりがなく，近世以降掘削されたピットである可能性が高い。

c．遺物

磨製石斧が２点出土している（第16図）。**1**は太型蛤刃石斧で刃部のみ残存する。刃部再生の調整剥離が認められる。体部中央には敲打痕が円形に密集しており，欠損後に敲石として転用されている。**2**は扁平片刃石斧である。これらの石器は造成土の中から出土したものであるが，本来は１号濠・２号濠いずれかの遺構に伴っていた可能性が高い。

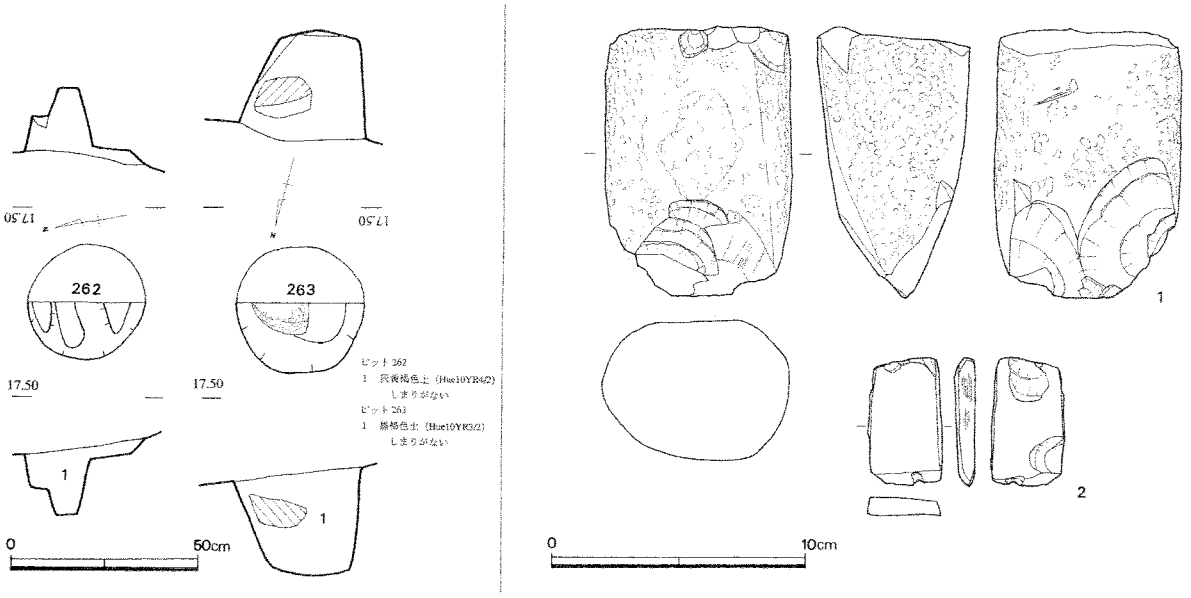
⑦G区（第17図）

a．基本土層

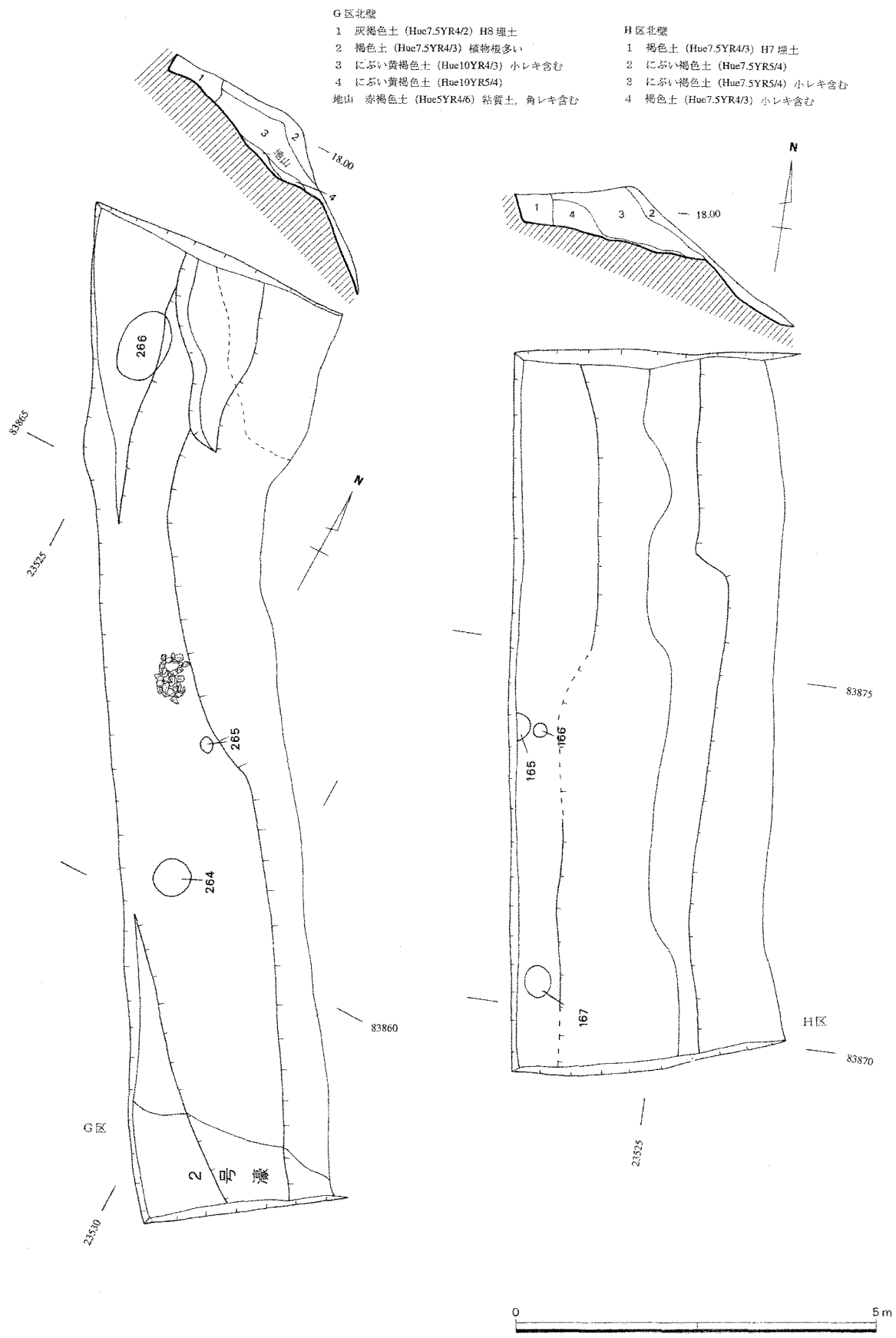
遺構検出面までは，近世以降の造成土および耕作土である。小礫を多く含むしまりのない土が主体となる。地山は赤褐色粘質土を主体とするが，北端部では玄武岩の岩盤が検出された。切り通しで切り合いを確認すると，玄武岩岩盤→赤褐色粘質土の順で堆積していることが明らかとなった。

b．遺構

調査区南端部で，平成８年度検出の２号濠の一部を検出している（第17図）。また，削平面に乗るように集石遺構が検出されたほか，３基のピット群も検出している（**P 264～P 266**）（第18図）。



第16図　原Ｆ区検出ピット実測図（Ｓ＝１/20）およびＦ区出土遺物（Ｓ＝１/３）

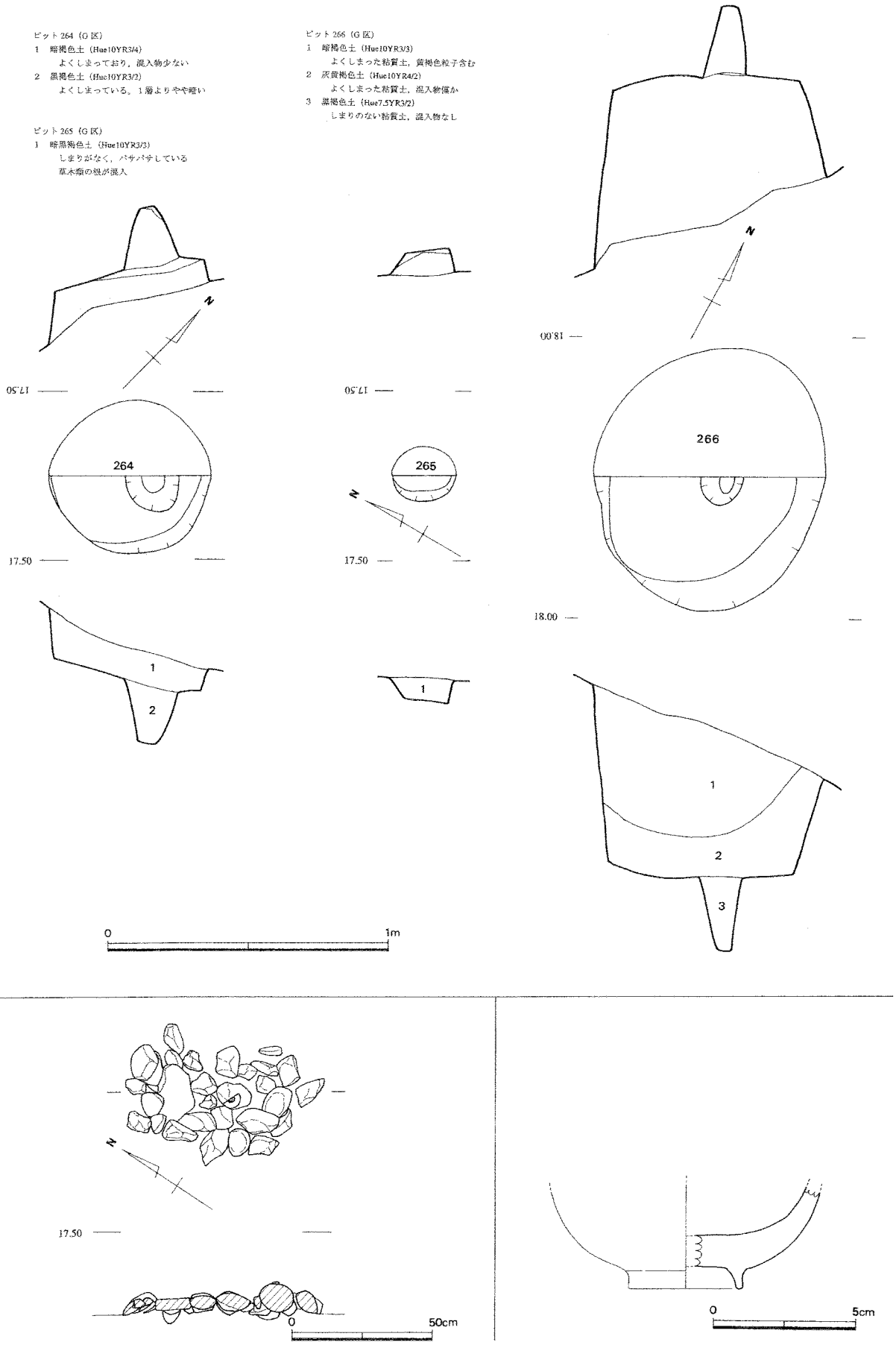


第17図　原G・H区遺構配置図・土層（S＝1/80）

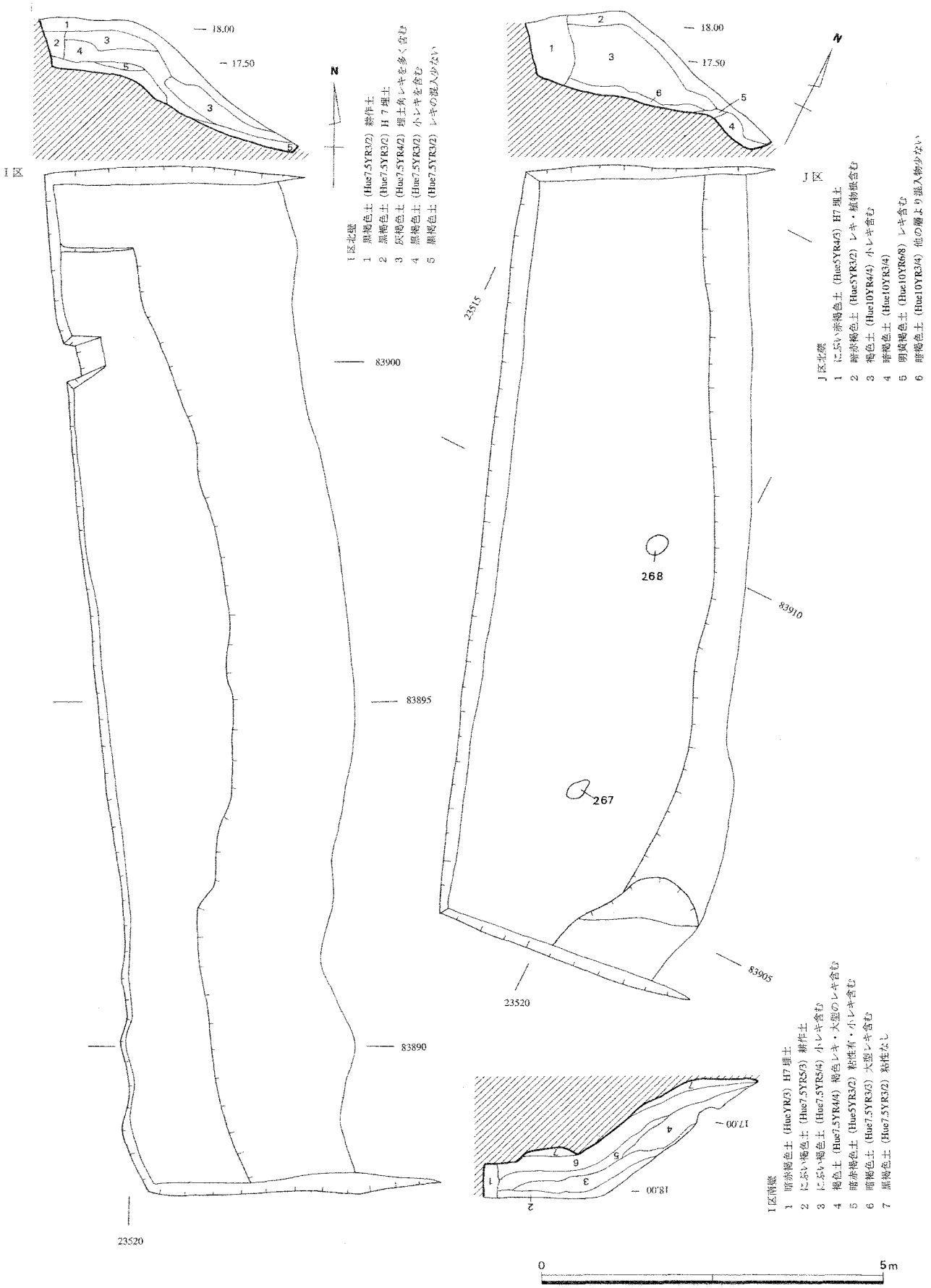
ピット264（G区）
1　暗褐色土（Hue10YR3/4）
　よくしまっており，混入物少ない
2　黒褐色土（Hue10YR3/2）
　よくしまっている。1層よりやや暗い

ピット265（G区）
1　暗黒褐色土（Hue10YR3/3）
　しまりがなく，パサパサしている
　草木灰の粒が混入

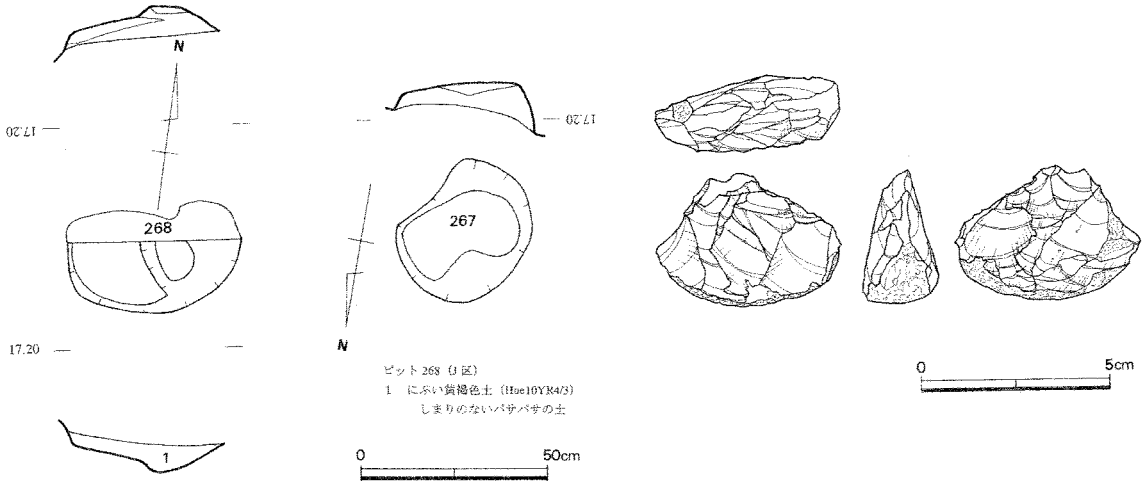
ピット266（G区）
1　暗褐色土（Hue10YR3/3）
　よくしまった粘質土，黄褐色粒子含む
2　灰黄褐色土（Hue10YR4/2）
　よくしまった粘質土，混入物僅か
3　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）
　しまりのない粘質土，混入物なし



第18図　原G区検出遺構実測図（S＝1/20）および出土遺物（S＝1/2）



第19図　原Ｉ・Ｊ区遺構配置図・土層図（Ｓ＝１/80）



第20図　原Ｊ区検出ピット実測図（Ｓ＝１/20）および原Ｊ区出土遺物（Ｓ＝１/２）

集石遺構は拳大の角礫を集積したものである。これらの礫には被熱痕や敲打痕といった使用痕は認められない。18世紀後半の碗が出土しており，性格としては，調査区の東隣を通る農道を造る際の地鎮跡と考えられる。

ピットは，**Ｐ265**はしまりのない暗黒褐色で充填されており，近世以降のものである可能性が強い。一方，**Ｐ264・Ｐ266**は良くしまった暗褐色土を覆土としており，弥生時代のピットと考えられる。これらのピットは，それぞれ径約60cm，径約90cmと非常に大型である。また，ピットの堀方の割に柱穴は非常に小さい点も共通しており，特に**Ｐ266**は時期は限定できないものの，落とし穴状遺構の可能性も考えられる。

ｃ．遺物

集石遺構内より磁器が出土している（第18図）。高台や断面の特徴から18世紀後半に位置付けられるものである。

⑧Ｈ区（第17図）

ａ．基本土層

小礫混じりでしまりのない褐色土が地山の上に堆積している。厚さは約80cmである。地山は玄武岩岩盤となる。

ｂ．遺構

平成８年度検出のピットを３基検出したのみである（**Ｐ165～Ｐ167**）。

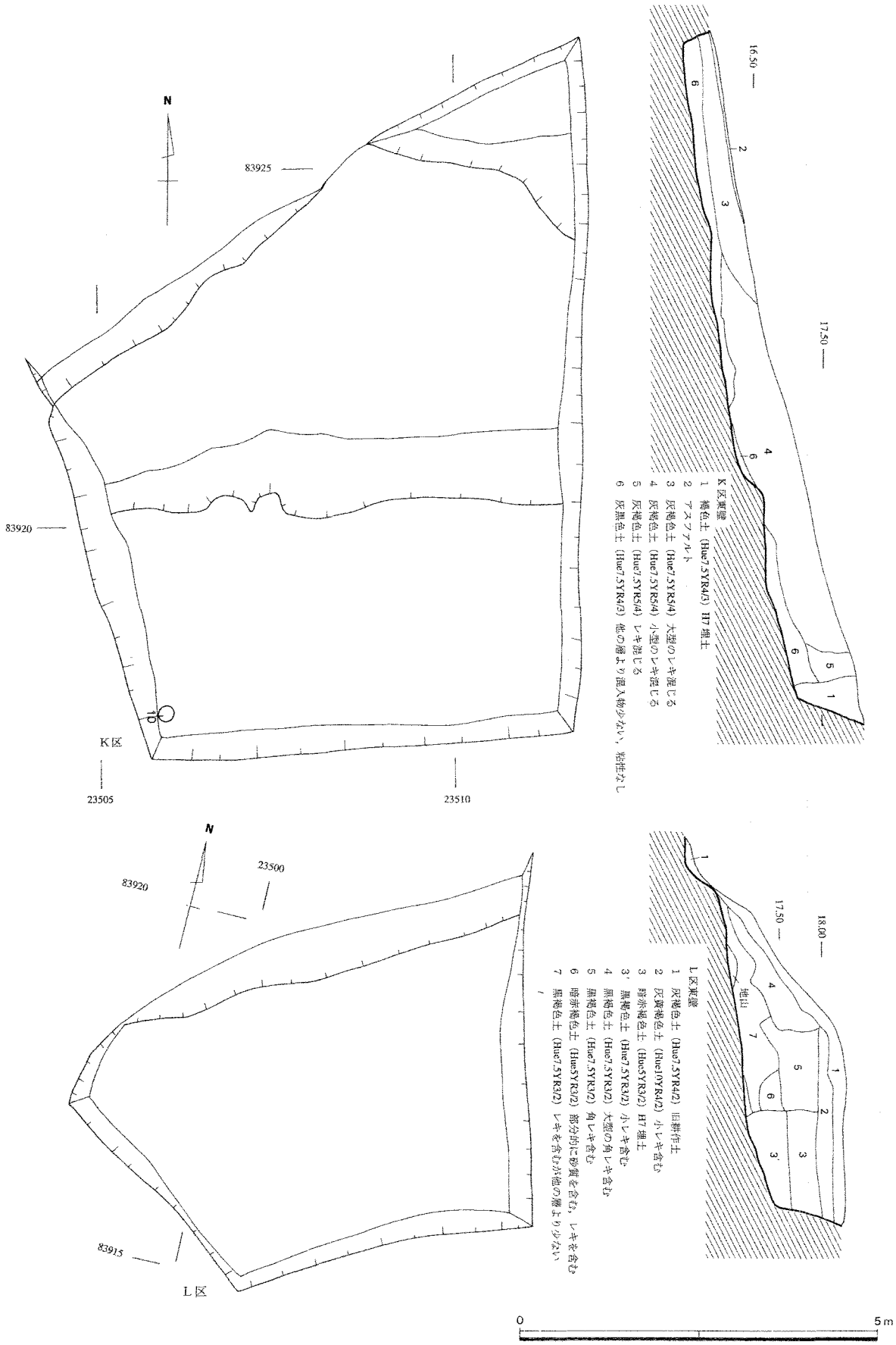
ｃ．遺物

出土していない。

⑨Ｉ区（第19図）

ａ．基本土層

大小の角礫を多く含む造成土が厚く堆積している。地山は玄武岩岩盤である。



第21図　原K・L区遺構配置図・土層図（S＝1/80）

第１表　原地区出土遺物観察表

土器

報告番号	遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法	備考
14図１	ＳＤ４	甕	橙	5Ｙ R6/8			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	裏面丹塗り
14図２	ＳＤ４	甕	にぶい黄橙	10Ｙ R7/4			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
14図３	ＳＤ４	甕	にぶい黄褐	10Ｙ R5/4	橙	5Ｙ R6/6	石英・長石	底部	表：ナデ，裏：ナデ	
14図４	ＳＤ４	甕	にぶい橙	7.5Ｙ R7/4	にぶい褐	7.5Ｙ R6/3	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
14図５	ＳＤ４	甕	橙	5Ｙ R6/6	にぶい赤褐	5Ｙ R5/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
14図６	ＳＤ４	壺	橙	7.5Ｙ R7/6			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
14図７	ＳＤ４	壺	橙	5Ｙ R6/6	橙	5Ｙ R6/6	石英・長石	口縁部	表：ハケメ，裏：ナデ	
14図８	ＳＤ４	壺	にぶい橙	7.5Ｙ R7/4	にぶい橙	7.5Ｙ R7/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
14図９	ＳＤ４	甕	灰白	2.5Ｙ8/2	浅黄橙	10Ｙ R8/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
14図10	ＳＤ４	甕	赤橙	10Ｒ6/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
14図11	ＳＤ４	壺	橙	7.5Ｙ R7/6			長石・石英・金雲母	口縁部～胴部片	表面剥落のため不明	
14図12	ＳＤ４	壺	橙	7.5Ｙ R6/6			長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	表：ハケメ，裏：ハケメ・指押さえ	
14図13	ＳＤ４	壺	にぶい橙	2.5Ｙ6/4			長石・石英・金雲母	口縁部片	表面剥落のため不明	
14図14	ＳＤ４	壺	橙	5Ｙ R6/6			長石・石英・金雲母	口縁部～頸部	表面剥落のため不明	
15図15	ＳＤ４	甕	にぶい黄橙	10Ｙ R7/4	にぶい黄橙	10Ｙ R7/4	石英・長石	完形	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ・指押さえ	
15図16	ＳＤ４	甕	橙	7.5Ｙ R6/6	浅黄橙	10Ｙ R8/3	石英・長石	頸部片	表：ハケメナデ消し，裏：ナデ	
18図１	集石	碗	オリーブ灰	5Ｇ Y6/1	オリーブ灰	5Ｇ Y6/1	精良（砂礫含まず）	半欠	—	磁器
26図１	ピット11	甕	橙	5Ｙ R6/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図２	ピット11	甕	橙	5Ｙ R6/6	橙	5Ｙ R6/8	長石・石英・金雲母	胴部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図３	ピット14	甕	浅黄橙	7.5Ｙ R8/4			長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図４	ピット14	甕	橙	7.5Ｙ R6/6	橙	5Ｙ R6/6	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図５	ピット39	甕	明褐	7.5Ｙ R5/6	明褐	7.5Ｙ R5/6	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図６	ピット39	甕	にぶい黄橙	10Ｙ R6/4	にぶい黄橙	10Ｙ R6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図７	ピット39	甕	橙	7.5Ｙ R6/6	橙	7.5Ｙ R6/6	長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図８	ピット39	甕	—	—	—	—	—	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図９	ピット39	甕	橙	7.5Ｙ R6/6	にぶい褐	7.5Ｙ R5/3	長石・石英	底部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図10	ピット41	甕	橙	5Ｙ R6/6	橙	7.5Ｙ R6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図11	ピット48	鉢	平成７年度報告済み							
26図12	ピット50	鉢	橙	5Ｙ R6/6			長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図13	ピット71	甕	橙	7.5Ｙ R6/6	橙	5Ｙ R6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図14	ピット85	高坏	平成７年度報告済み							
26図15	ピット91	甕	平成７年度報告済み							
26図16	ピット95	鼓形器台	にぶい黄橙	10Ｙ R6/4	にぶい黄橙	10Ｙ R6/4	石英・長石	胴部片	表：ナデ，裏：ケズリ	
26図17	ピット98	甕	にぶい褐	7.5Ｙ R5/4	橙	7.5Ｙ R6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図18	ピット99	甕	灰黄褐	10Ｙ R5/2			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
26図19	ピット110	甕	橙	2.5Ｙ6/6			長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	

石器

報告番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
７図１	Ａ区１層	石鏃	1.55	1.45	0.30	0.50	黒曜石
７図２	Ａ区１層	石鏃(未成品)	8.90	4.50	1.00	65.20	頁岩
８図	Ｃ区１層	ナイフ形石器	3.90	1.35	0.60	2.70	黒曜石
15図17	ＳＤ４	石核	3.40	3.95	3.45	42.10	黒曜石
15図18	ＳＤ４	砥石	6.05	4.45	1.50	54.70	砂岩
15図19	ＳＤ４	礫器	11.20	6.95	6.20	802.60	安山岩
15図20	ＳＤ４	敲石	12.95	10.30	6.50	1344.80	安山岩
15図21	ＳＤ４	磨石	10.45	8.70	6.90	873.90	安山岩
15図22	ＳＤ４	石皿	19.60	21.30	10.70	7000.00	安山岩
16図１	Ｆ区１層	太型蛤刃石斧	10.70	7.30	6.10	739.70	安山岩
16図２	Ｆ区１層	扁平片刃石斧	5.10	2.90	0.75	22.30	頁岩
20図	Ｊ区１層	石核	3.55	4.85	2.00	30.30	黒曜石製

b．遺構

調査区東半部が大きく削平されており，遺構は検出されなかった。

c．遺物

出土しなかった。

⑩**J区**（第19図）

a．基本土層

大小の礫が混じる造成土が主体である。最下層には礫の混入が少ない暗褐色土が薄く堆積している。地山は，調査区南端部に玄武岩岩盤が露頭しているものの，ほとんどは円礫混じりの黄褐色土である。

b．遺構

ピットを２基検出している（**P 267・P 268**）（第20図）。いずれも覆土に締まりがなく，近世以降に掘削されたピットである可能性が高い。

c．遺物

造成土の中から石核が１点出土している（第20図）。後期旧石器時代のものである。

⑪**K区**（第21図）

a．基本土層

大小の礫が混じる造成土が主体である。最下層には混入物の少ない灰黒色土が薄く堆積する。地山は円礫混じりの黄褐色土である。

b．遺構

平成７年度に検出した**P 10**を検出した。

c．遺物

出土していない。

⑫**L区**（第21図）

a．基本土層

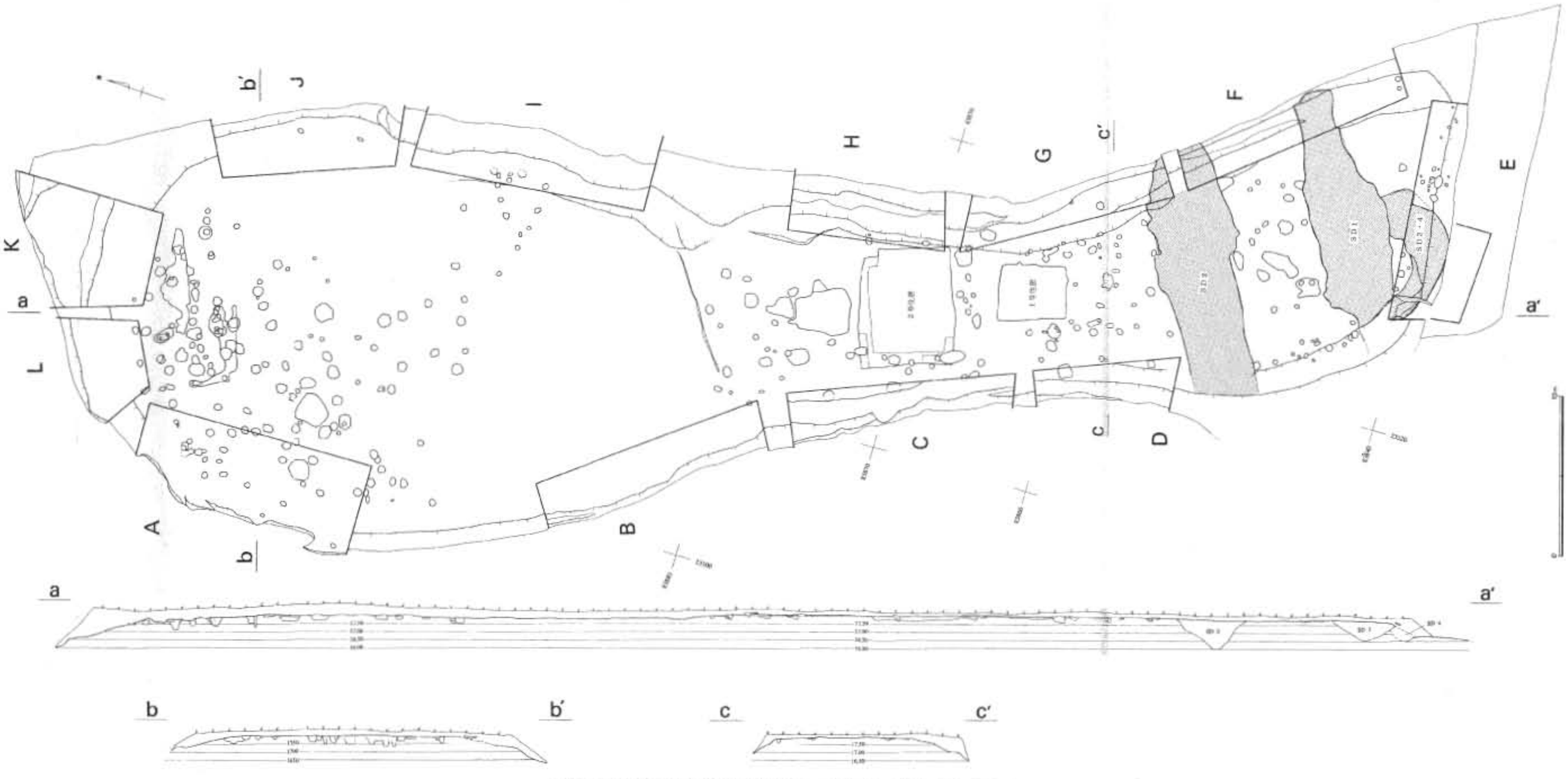
大小の角礫混じり造成土を主体とする。最下層には礫の混入量が少ない黒褐色土が堆積している。地山は北半部は円礫混じり黄褐色土であるが，南半部は玄武岩岩盤である。

b．遺構

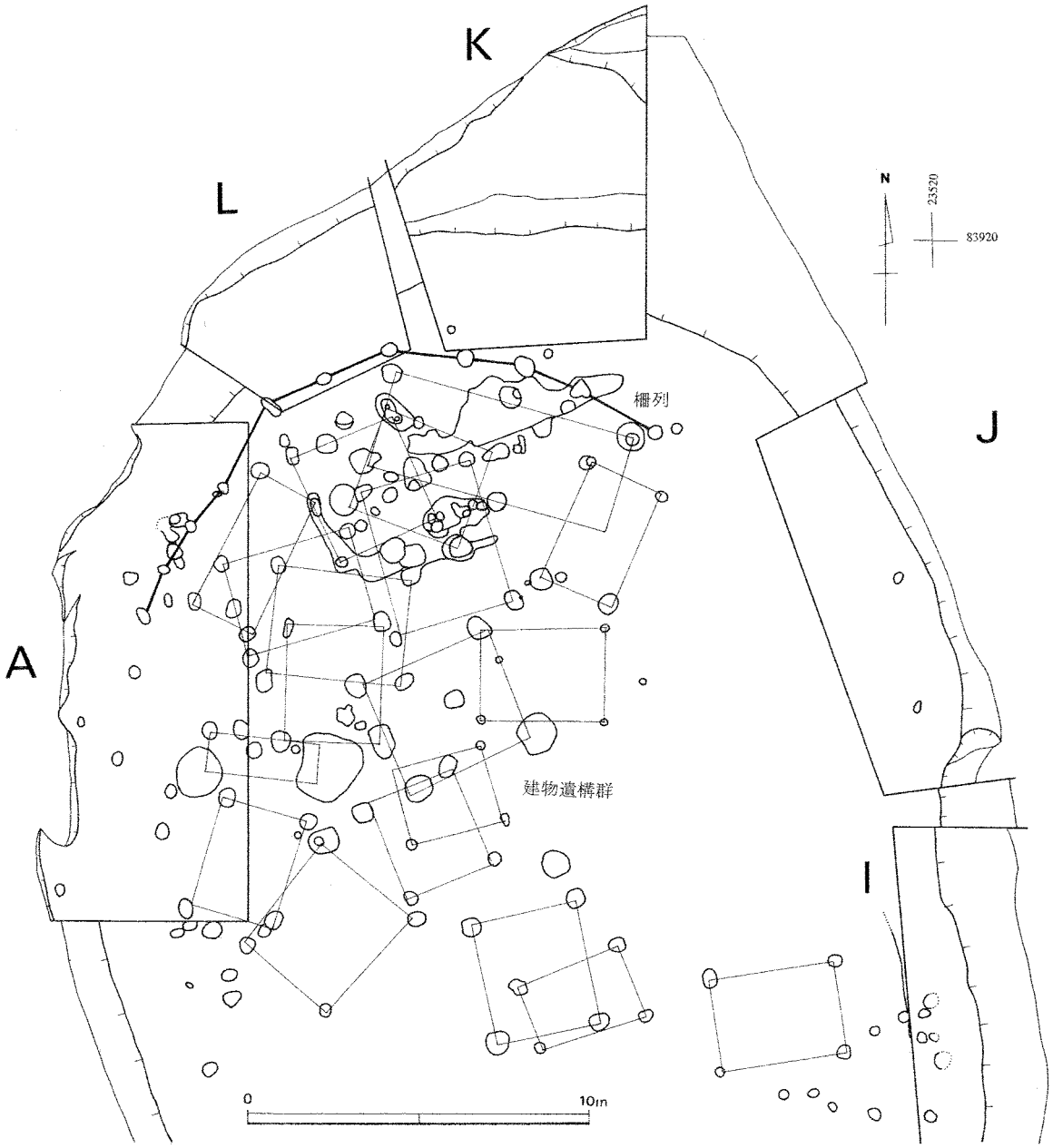
検出していない。

c．遺物

出土していない。



第22図　祭儀場周辺における遺構検出面の傾斜およびピットの深さ（S＝1/250）※数字は標高（m）



第23図　これまでの祭儀場北半部遺構群の捉え方（S＝1/200）

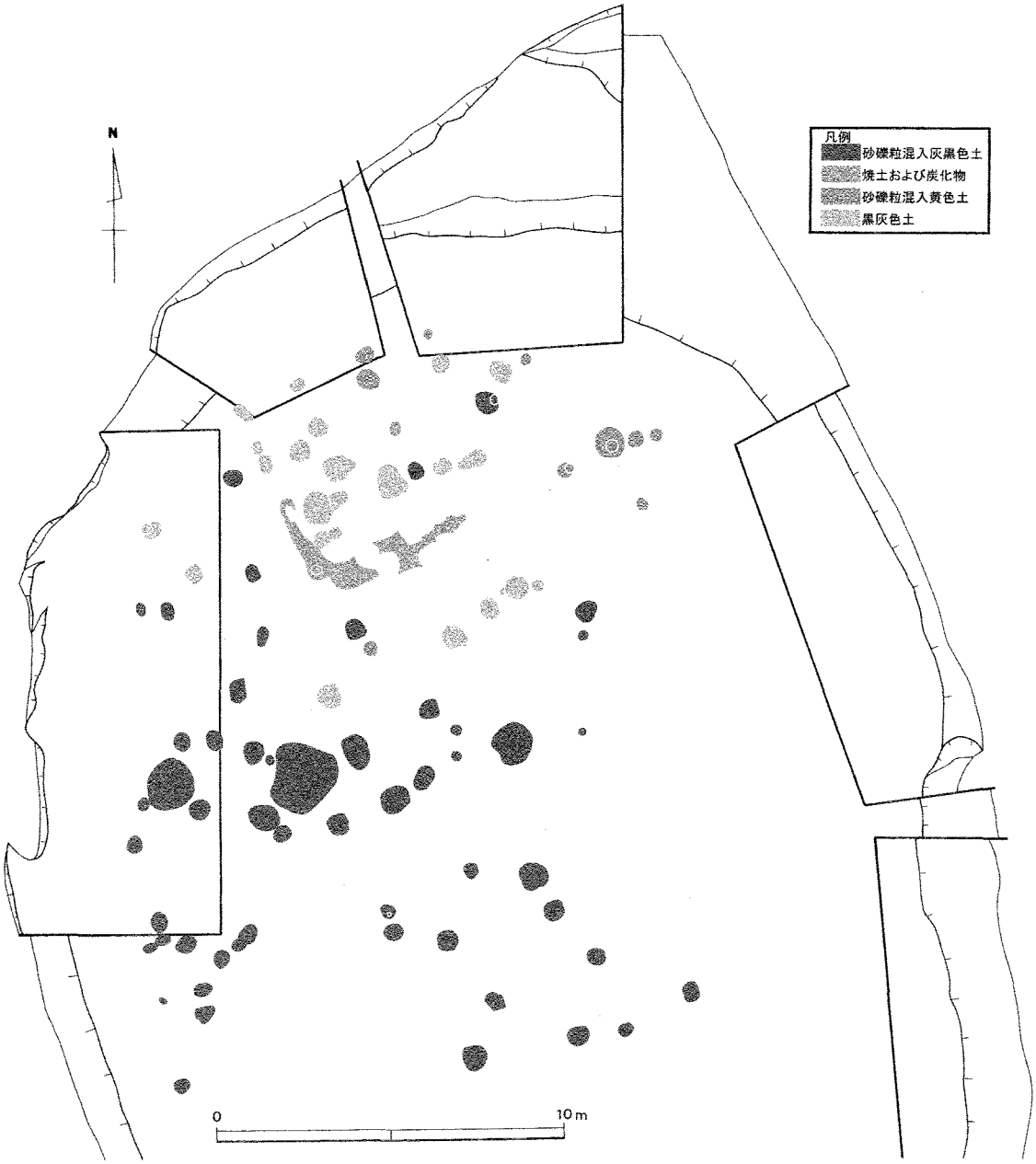
(3) 小　　結

本年度の原地区の調査は，過去の調査によって組み立てられた祭儀場の構造について再考を促すものとなった。以下，具体的な問題点について検討を加える。

①祭儀場の旧地形

概要でも述べたとおり，従来の祭儀場は，周囲よりも一段高い最高地点を柵列で囲む構造として捉えられていた。今回の調査により，周囲よりも一段高い現地形は，近世以降の大規模な造成で形成されたことが明らかとなった。ここでは弥生時代の旧地形について若干の検討を試みる。

第22図は，祭儀場における南北軸および東西軸の遺構検出面の傾斜を図化したものである。これを



第24図　祭儀場北半部におけるピットの色調（S＝1/200）

見ると，南側が若干標高が高いもののほぼフラットであり，K区から北側で急激に傾斜していることがわかる。これに周辺のピット断面を投影すると，北半部のピット群の床面が標高17.5m以下まで達するものが多い一方，南半部においては標高17.5mまで達するものは環濠を除いて皆無である。このことは，本来標高が高かった南側が大きく削平されていることを示しているであろう。おそらく，弥生時代の旧地形は，南側から北側にかけて傾斜する緩斜面に復元できそうである。

東西断面については，遺構検出面は中央部分がや高いもののほぼフラットで，東西の裾に向かうにしたがって急激に落ち込んでいる。祭儀場の東側では農道が通り，西側にはかつて水田が営まれていた。東西断面に見る急激な落ち込みは，これらが形成される際に激しい削平を受けたことを物語って

第25図　祭儀場北半部におけるピットの深さ（S＝1/200）

いるであろう。削平された時期については，東側農道沿いのG区で検出された集石遺構が参考になる。この遺構は，農道の掘削に伴って祭儀場が削平された際，削平面に地鎮のために構築された遺構と考えられる。この中からは18世紀後半の磁器が出土しており，この時期が祭儀場が本格的に削平された時期の上限に相当するものと考えられる。なお，東西軸の弥生時代における旧地形については，祭儀場を東西に横切る環濠の床面傾斜が参考になる。今回資料を提示できなかったが，これを考慮すると，南北軸と同じく祭儀場周辺を最高地点とする緩斜面に復元できそうである。

②祭儀場北半部における遺構群の再検討

ここでは柵列を中心に，祭儀場北半部における遺構群について検討する。祭儀場北半部は，従来の見解では北側を中心に柵列に囲まれた範囲に掘立柱建物群が展開するものとされていた（第23図）。しかし，各調査区の調査概要でも説明したとおり，近世以降も杭や柱の伴う何らかの構築物が存在した可能性が浮上した。ここでは，祭儀場北半部の柵列とされたピット群を中心に，今回出土したピットも含めて次の３つの視点から再検討を行う。ただし，今回出土したピットのうち，覆土の特徴から明らかに近世以降のピットと判断したものについては分析対象から除外する。

a．ピットの色調（第24図）

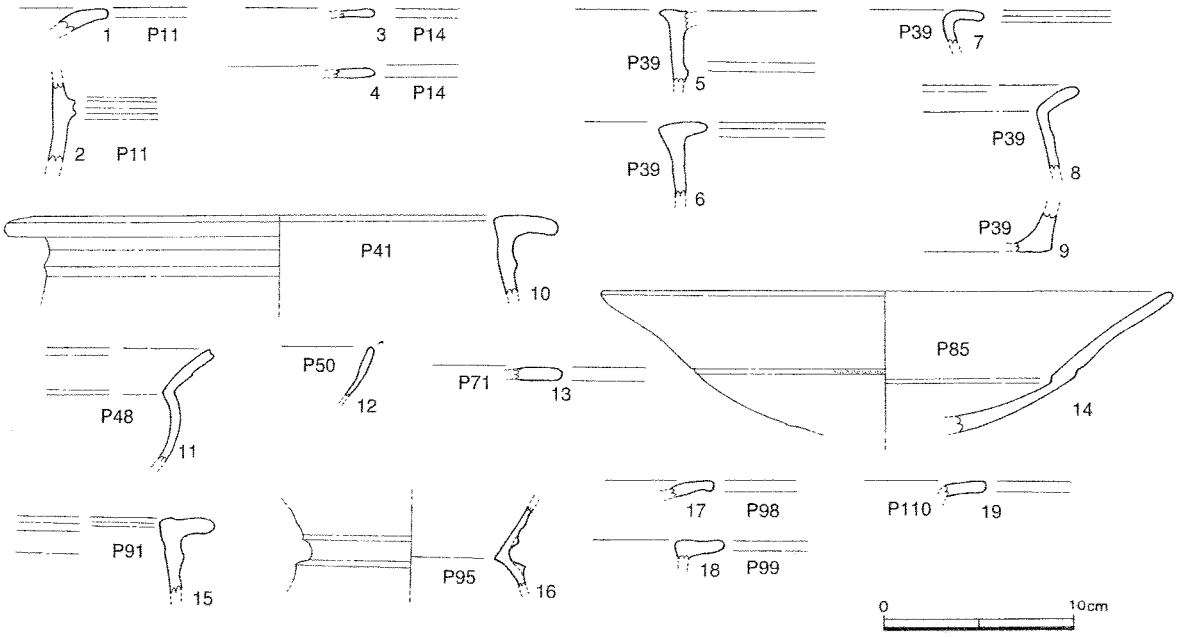
祭儀場北半部におけるピットの色調は，砂礫粒混在灰黒色土・砂礫粒混在黄色土・黒灰色土の３種に分けられる。それぞれの分布を見ると，砂礫粒混在灰黒色土が南側に偏って分布するのに対して，砂礫粒混在黄色土・黒灰色土は主に北側に分布している。従来柵列とされたピットに着目すると,3種の色調の覆土がそれぞれ認められる。

b．ピットの床面標高（第25図）

ピットの床面標高は，17.100m～18.009mまで分布する。これらを10cm毎に色分けしたのが第25図である。これを見ると，様々な深さのピットが混在していることがうかがえる。柵列とされたピット群の中でも，最低17.3m台から最高17.8m台まで分布しており，床面標高においてばらつきが認められる。

c．ピットの時期

ピットの時期については，平成６年度の調査報告書によりその一部が公表されている。しかし，その全容は必ずしも明らかでなかった。今回改めて出土遺物を再検討し，過去公表された遺物も含めて



第26図　平成７年度調査ピット内出土土器（Ｓ＝１／４）

改めて掲載する（第26図）。ピット内出土土器は，弥生時代中期と古墳時代初頭のものが主体となる。従来柵列とされていたピットでは，Ｐ11から弥生時代中期のＭ字突帯をもつ胴部片が，Ｐ50から古墳時代初頭の鉢口縁部が出土している（第26図２・12）。

以上の検討により，従来柵列とされたピット群が一連の遺構として捉えられる可能性が低いことは明らかであろう。先述した旧地形の復元でも，弥生時代には南から北へ下る緩斜面に復元できそうであり，従来の場所に柵列が回る必然性もない。祭儀場北半部を含めた原地区周辺では，壱岐市（旧芦辺町）による近年の調査でおびただしい数のピット群が検出され，掘立柱建物の復元や時期的な変遷についても検討できる段階となっている。これらのことを勘案すると，祭儀場北半部のピット群も従来柵列とされたピット群も含めて，原地区周辺の掘立柱建物群の一部を構成するものと考える方が自然であろう。掘立柱建物復元の再検討および周辺遺構群の動向を踏まえた，祭儀場北半部の性格の再検討が今後緊急の課題である。

③祭儀場南半部における遺構群の再検討

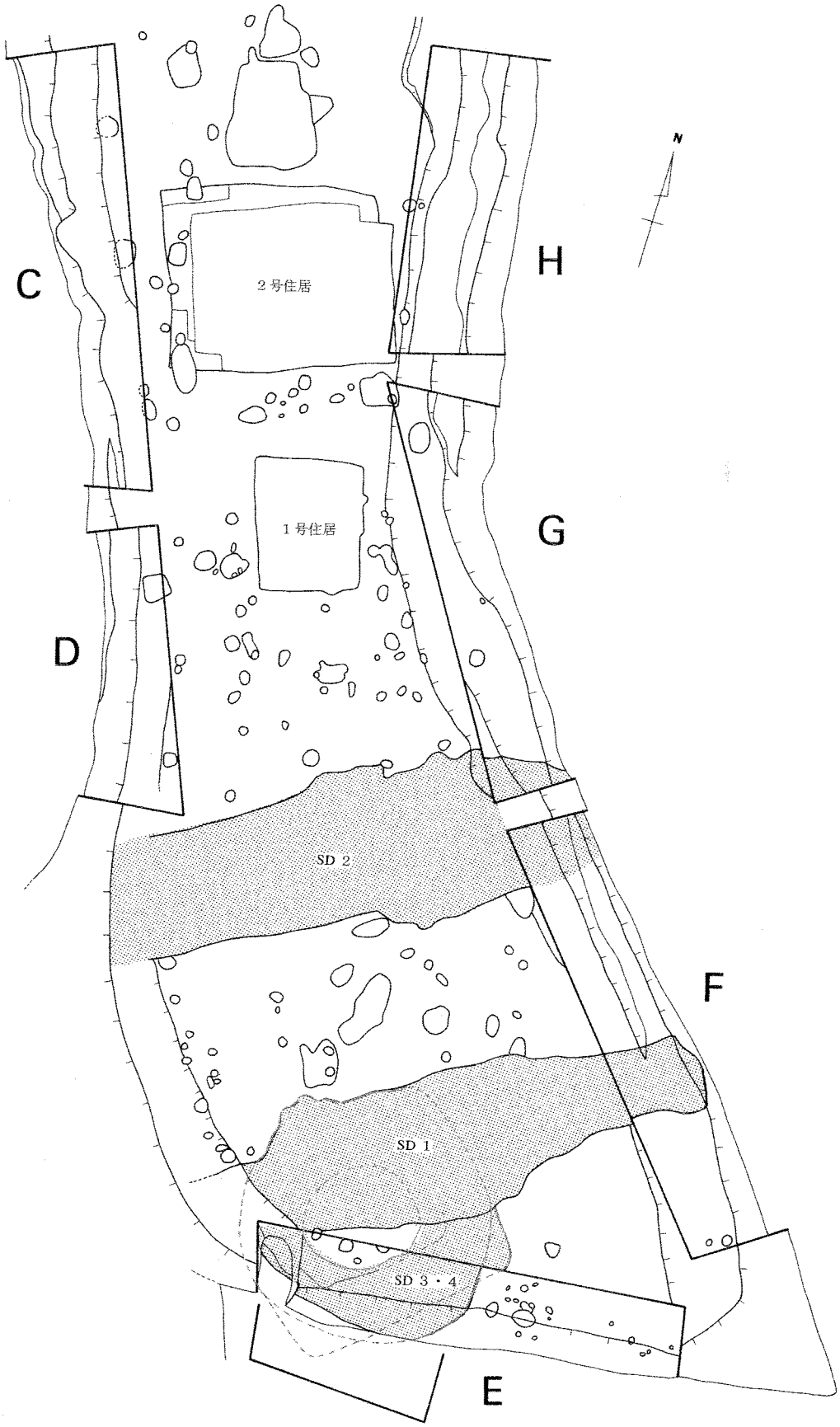
今回検出したＳＤ３・ＳＤ４は，平成８年度の調査において検出された１号濠（以下ＳＤ１と呼称）にそれぞれ方形・円形に南接することが明らかとなった。少し視野を広げてＳＤ１とＳＤ３・ＳＤ４の関係を図化したのが第27図である。これを見ると，ＳＤ１西半部の北辺がやや不規則に北側に張り出していることが見て取れる。このことは，ＳＤ３・ＳＤ４のいずれか，あるいは両者が本来は周溝状に１周しており，ＳＤ１と切り合っていることを推測させる。出土土器を比較すると，ＳＤ１とＳＤ４は両者とも弥生時代中期後半の土器と弥生時代後期後葉～終末の土器群を含んでおり，明確な前後関係は見いだせない。一方で，ＳＤ３はＳＤ４を切っていることが明らかであり，ＳＤ１を切るように１周していた可能性が考えられる。

ＳＤ３・ＳＤ４と関連すると考えられる遺構として，弥生時代中期後半以降，北部九州を中心に散見される周溝状遺構がある。円形・方形の浅い溝を１周させるもので，溝の規模も直径もしくは一辺の長さが５ｍ前後のものが多いようである。溝で囲まれた範囲内にはピットが検出される場合もあり，何らかの構造物が存在した可能性も指摘されている。今回検出した遺構は，溝の深さが極端に深いものの，円周の規模や何らかの構築物が存在した可能性がある点など共通点も多い。周溝状遺構の性格については不明な点も多いが，集落内での分布の在り方としては，特定の竪穴住居に付随するものと，住居群から離れて単独で存在するものの２者が指摘されており（片岡1994），原の辻遺跡検出例も周溝状遺構であるとすれば，後者の例に相当するであろう。

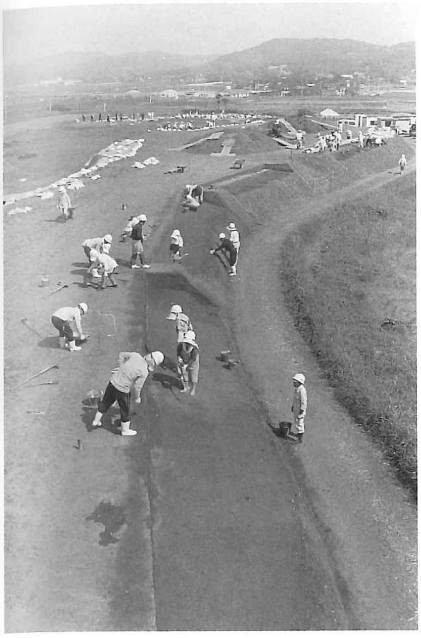
いずれにせよ，ＳＤ３・ＳＤ４が切り合うＳＤ１西半部は未調査であり，両者の切り合いや構造については今後の調査によるところが大きい。

【文献】

片岡宏二　1994「「周溝状遺構」の検討（その３）」『福岡考古』第16号，福岡考古懇話会

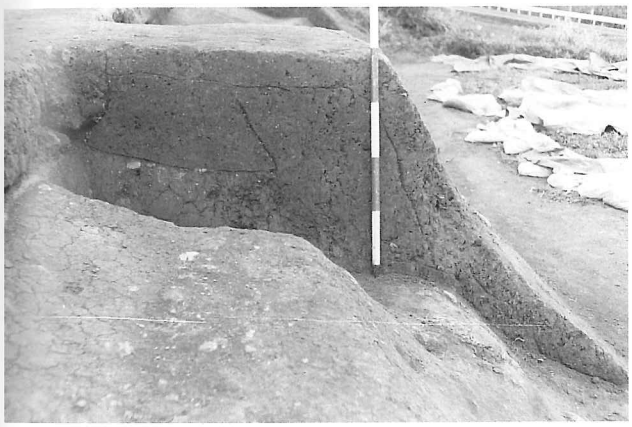


第27図　祭儀場南半部の遺構群（S＝1/200）　※赤線はＳＤ３，青線はＳＤ４



1．調査区近景（南より）

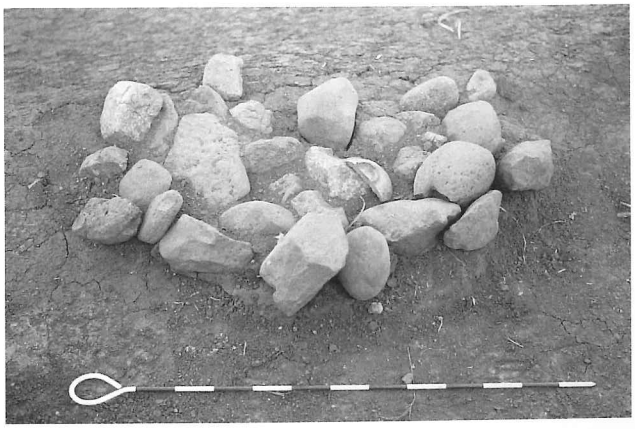
4．ピット土層断面（pit 238）



2．土層断面（C区南壁）

5．ピット土層断面（pit 241）

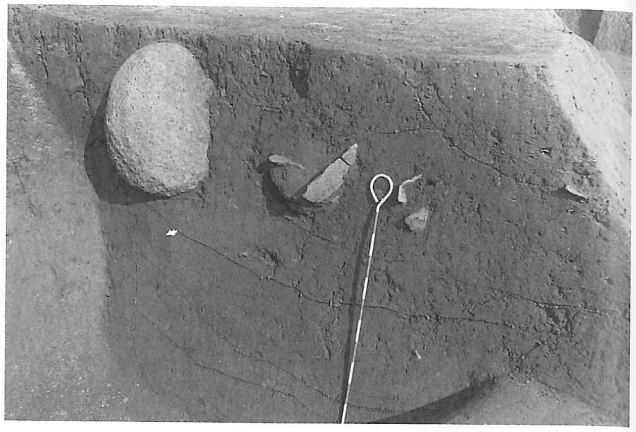
3．土層断面（G区北壁）



6．集石遺構（G区）

図版２

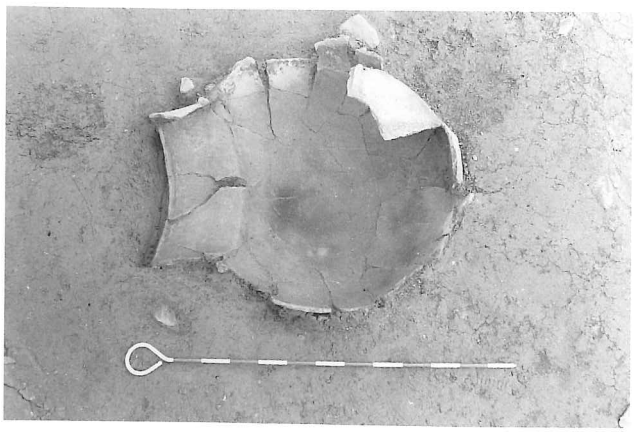
７．Ｅ区　ＳＤ４検出状況



10．Ｅ区　ＳＤ３，ＳＤ４土層（東壁）

８．Ｅ区　ＳＤ４遺物出土状況①

11．Ｄ区　杭検出状況（北西から）



９．Ｅ区　ＳＤ４遺物出土状況②

12．Ｄ区　杭近景（北西から）

2．石田高原地区の調査

(1) 調査概要

石田高原地区の調査は，台地東側低地部の遺構群の展開を把握することを目的として，25m×36mの調査区を設定し900m²の調査を行った（第28図）。表土を除去した後，周囲に幅２mの犬走りを設け，調査区の軸に合わせて十字に土層観察用ベルト設定し，調査区を４つのグリットに分けて調査を行った。グリット名は北東から時計回りにA区・B区・C区・D区とした（第29図）。調査区は台地の南東部にあたり，北側には昨年度調査区が，東側・西側は平成５年度の調査区が存在し，複数の環濠が検出されている。しかし，平成５年度の調査はトレンチ調査であったため，環濠同士のつながりや時期的な変遷など，遺構群の面的な展開を把握することが課題として残されていた。

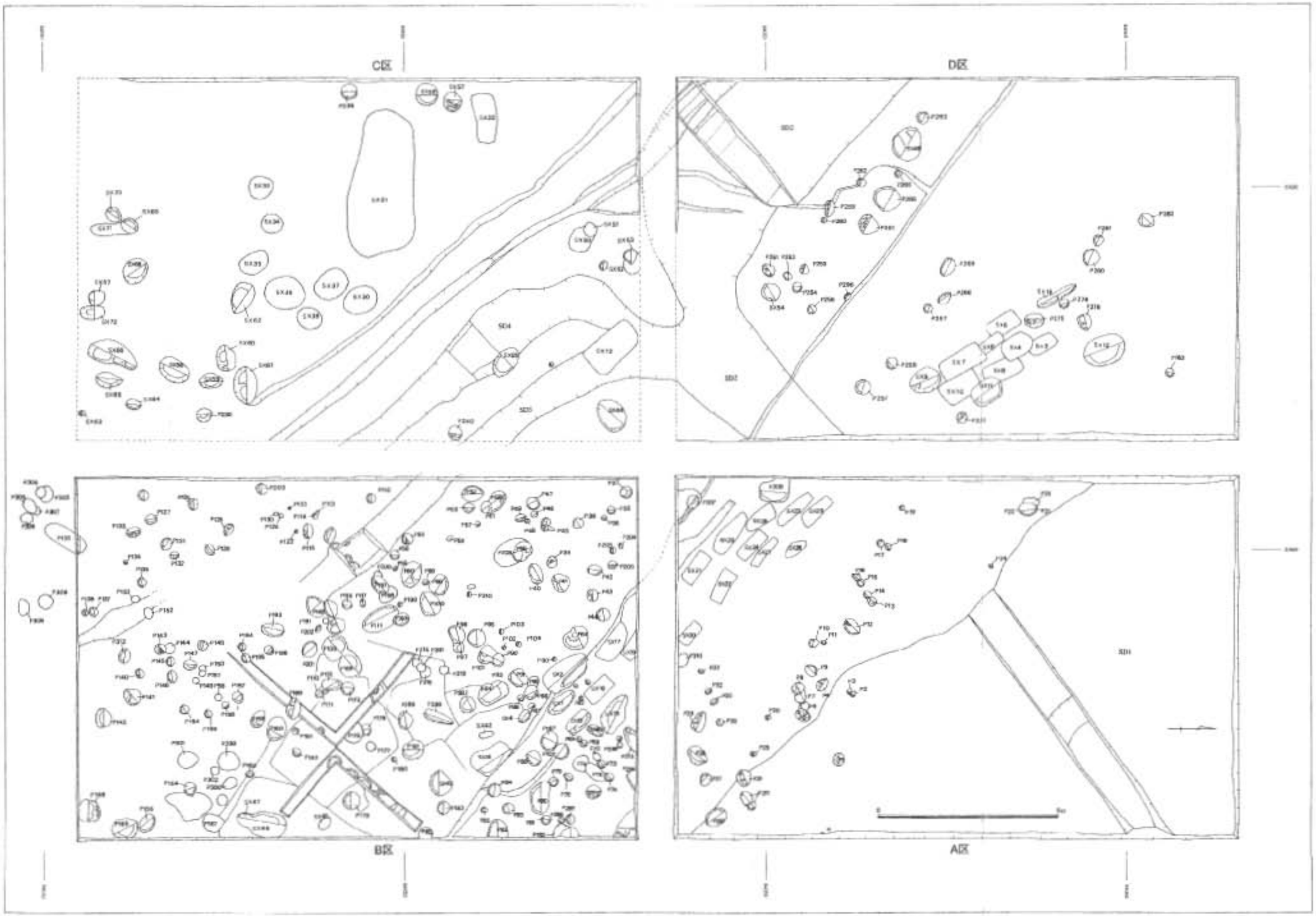
発掘調査の結果，環濠および溝状遺構（ＳＤ）が６条，竪穴住居状遺構（ＳＣＸ）６基，不明遺構（ＳＸ）72基のほか，弥生時代中期を中心とする多数のピット群を検出した（第29図）。原の辻遺跡では，過去の調査において低地部でこれだけのピット群が検出された例がなく，ピットの深さや覆土の色調などを頼りに建物の復元を試みた。結果として，掘立柱建物３棟が復元できた。一方で，竪穴住居に類似した隅丸方形の浅い掘り込みを確認し，弥生時代中期において調査区の低地部一帯に居住域が展開していた可能性が出てきた。このほか，1.5m×0.5m程度の方形の土坑が列状に並ぶ不明遺構群が検出されている。ほとんどが断面U字状の素掘りのものであるが，一部に角礫を充填したような状態で検出されたものもあった。ごく一部を調査したのみではあるが，これらの遺構群は中世の墓群である可能性が考えられた。

このように，石田高原地区の調査では，舌状台地の裾に近い南東側低地部において，弥生時代中期を中心に居住域として利用されていた可能性を指摘することができた。また，過去の調査で検出された環濠と今回検出の環濠のつながりが確認され，弥生時代における遺構群の展開についてもある程度把握できた。そのほか，中世にも墓域として利用していた可能性があることがわかり，このエリアが弥生時代から中世にかけて様々な目的に利用されていたことが明らかとなった。

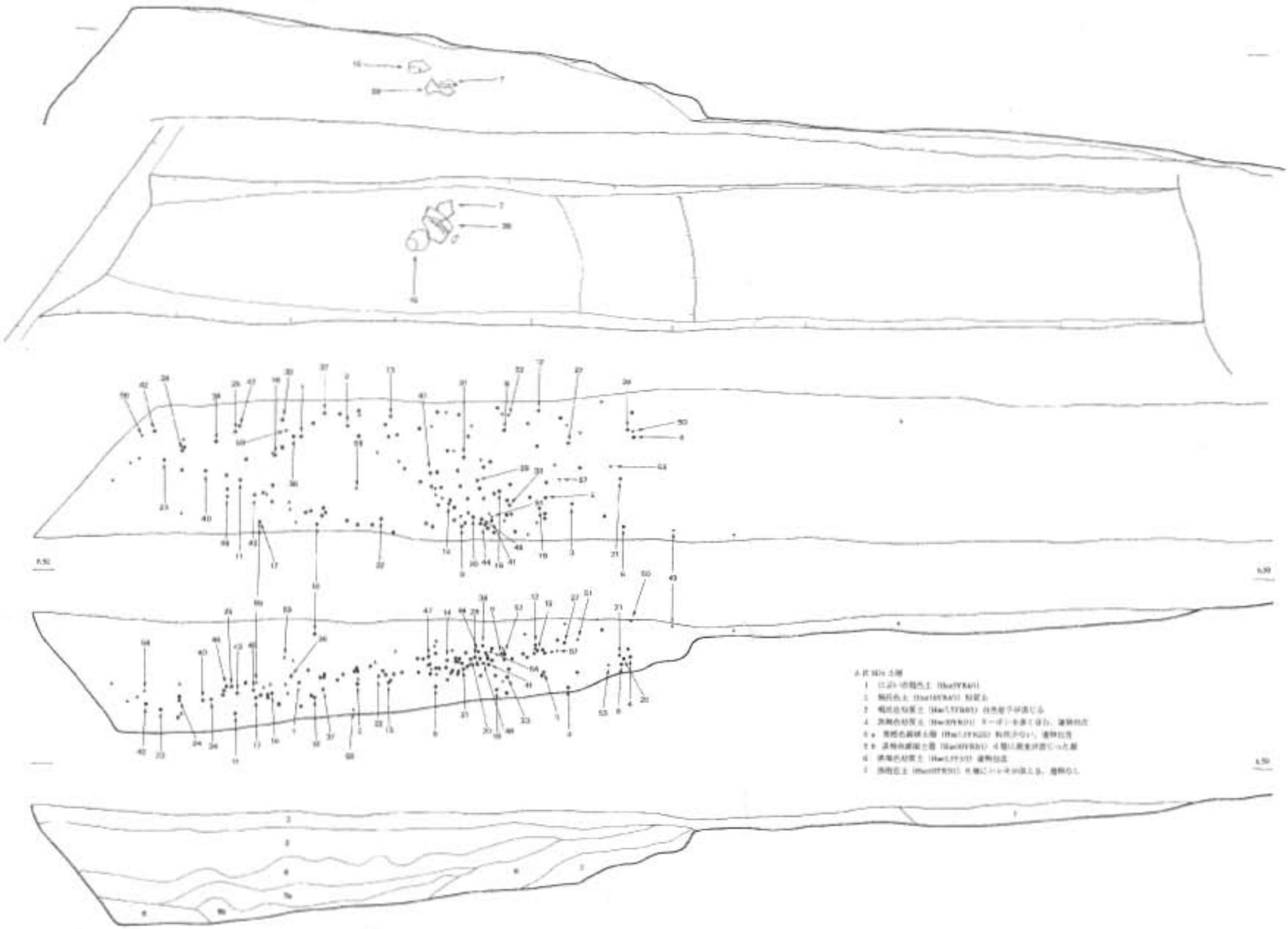
(2) 基本土層

調査区周辺の標高は，調査区前は約7.5mほどであったが，重機による掘り下げの結果，平均で厚さ約1.5mにわたって近年の造成を受けていることが明らかとなった。造成土は人頭大の大型の礫を主体とするものである。その下には灰黄褐色の粘質土があり，同じく造成土と考えられる。これらの造成土は，後に説明するＳＤ１付近で湧水が著しいことから，防水のための盛り土と考えられる。この下には，調査区北東部を中心に灰オリーブ色を主体とする粘質土が堆積している。この部分では重機によると見られる削平の痕跡が認められており，堆積土も異臭を放っていたことから，付近のため池を造成する際に廃土を廃棄した部分と考えられる。この土層の下が遺構検出面で，標高6.00m～5.00mである。西側から東側へ下るように傾斜している。本年度調査区の北側約100m地点で昨年調査を行ったが，そのときの遺構検出面の標高と比較すると，本年度調査箇所の方が約１mほど高い。後で

第28図　石田高原地区調査区位置図（S＝1/1000）



第29図　石田高原地区遺構配置図（S＝1/100）



第30図　ＳＤ１遺物出土状況（Ｓ＝１/30）　※数字は第31図～第34図の遺物番号に対応

触れるが，弥生時代の旧地形としては，北側の低湿地部分と南側の谷に挟まれ，台地裾から東側に張り出す微高地として復元でき，周囲の低湿地と比較して相対的に水はけの良い場所であったと考えられる。

(3) 遺構と遺物

①環濠および溝状遺構（ＳＤ）

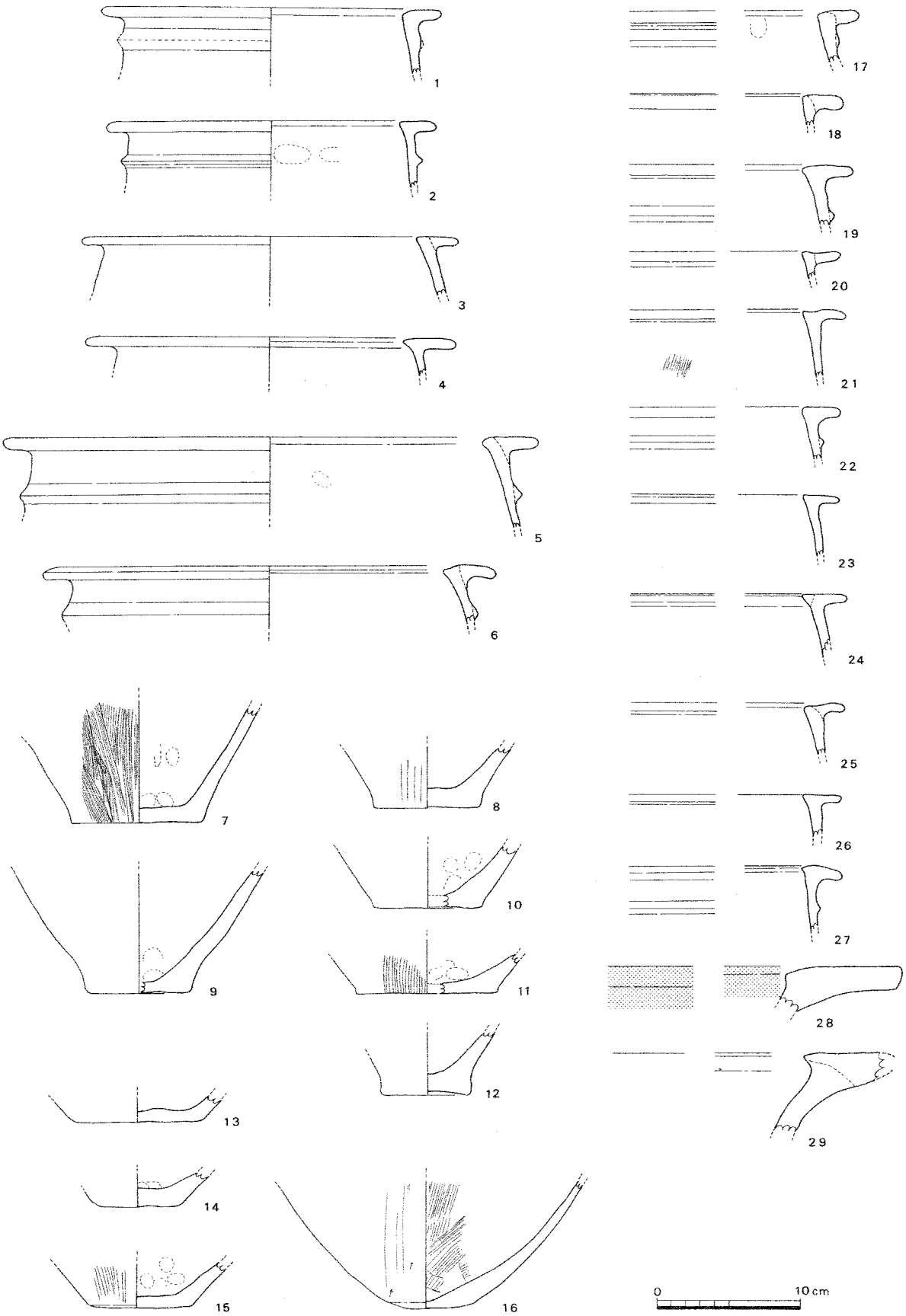
ａ．ＳＤ１

調査区北東隅で検出した環濠で，検出時点で幅約4.5m，深さ約0.8mである。このうち，環濠の短軸方向に直行するように幅１mのトレンチを設定し，掘り下げを行った。その結果，土器をはじめとする大量の遺物が出土したが，比較的小片が多かったため，ドットマップを作成して取り上げた（第30図）。

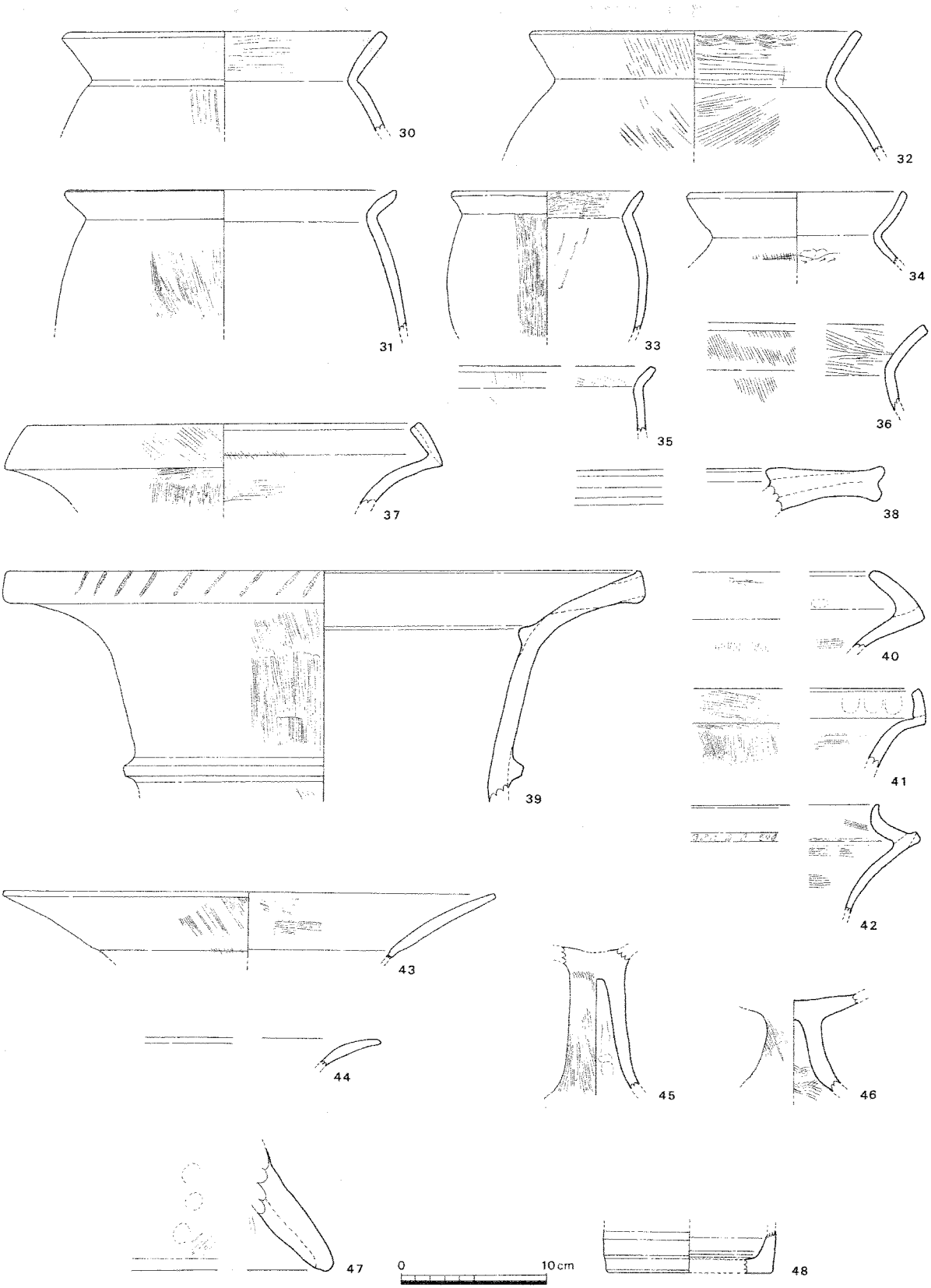
土層は大きく７層に分かれる。黒褐色粘質土を基本とするが，５層では腐植土層も確認されている。遺物の出土状況をみると，ほぼ全ての土層から遺物が出土しているが，時期別に詳細にみると，６層・７層は弥生時代中期中葉～後葉にかけての土器を主体とし，３層～５層は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の土器が主体となる。したがって，ＳＤ１は弥生時代中期中葉～後葉に最初に掘削され，いったん埋没した後，弥生時代後期後葉に再度掘削され，古墳時代初頭まで存続したものと考えられる。３層～５層からは弥生時代中期の土器が少なからず出土しているが，これらは再掘削後に水が流れた際，弥生時代中期の覆土が削られて混入したものと考えられる。再掘削後に水の流れがあったことは，再掘削後の最下層に相当する５ａ・５ｂ層がいずれも腐植土層であることからも明らかである。

第31図～第34図はＳＤ１出土遺物である。**1**～**14**，**17**～**29**は口縁部上面が平坦なＬ字形の口縁部を持つ甕・壺・高坏である。ほとんどが口縁部内面への突出があまり認められず，須玖式土器の中でも比較的古相の土器群である。**7**～**16**は底部である。平底もしくは若干上げ底になるものが多く，弥生時代中期のものが主体である。**16**は据わりの悪い凸レンズ状の平底で，胴部外面には縦方向のケズリが認められる。弥生時代後期後葉～終末の土器である。**30**～**33**・**35**・**36**は「く」の字形口縁の甕の口縁部である。内外面ともに刷毛目調整が施される。**34**は布留系の甕口縁部である。口縁部がゆるやかに内湾するが，口縁端部のつまみ上げは明瞭でない。胴部外面は刷毛目，内面は横方向のケズリが認められる。**37**～**42**は壺の口縁部である。**39**は頸部から口縁部にかけて大きく外反し，口縁部内面に突帯を有する。口唇部には二枚貝の腹縁による刻みが並ぶ。**42**は二重口縁で，内傾する口縁部は端部に向かうにつれて直立気味に立ち上がる。頸部と口縁部の屈曲部には，ヘラ状工具による刻みが認められる。**43**～**46**は高坏である。**43**は坏部で口縁部と胴部の境に明瞭な段を有する。**47**は器台の脚部と考えられる。砂粒が多く混じる厚手の胎土で内面には指押さえの痕跡を明瞭に残す。**48**は楽浪系土器の角坏底部である。内外面に轆轤による回転なで調整の痕跡が残る。

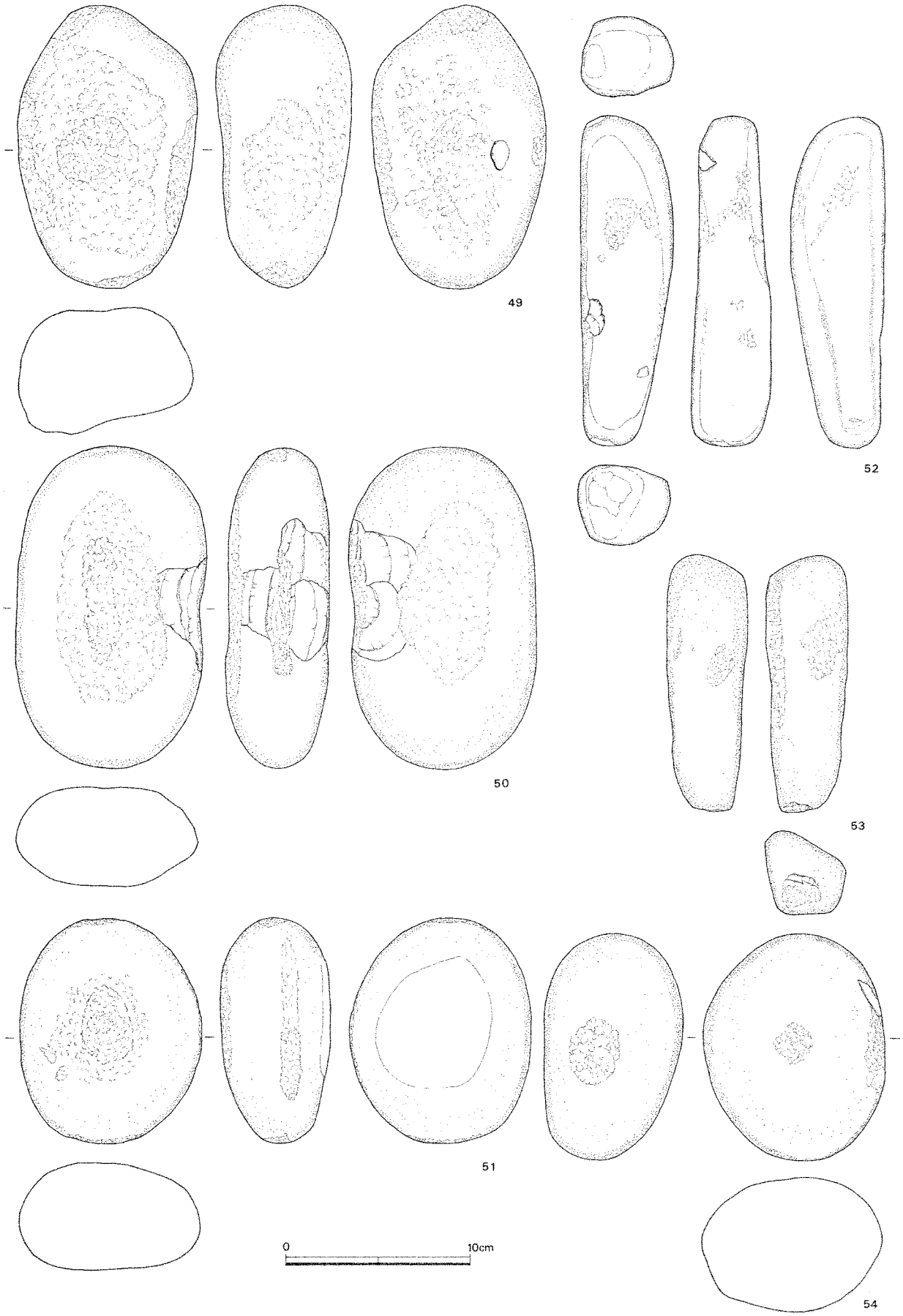
第33図・第34図はＳＤ１出土石器である。**49**～**56**は敲石類である。扁平な円礫を利用するものが多いが，**52**・**53**のように棒状のものも存在する。円礫を利用したものは，表裏平坦面から側面にかけて



第31図　石田高原Ａ区ＳＤ１出土土器①（Ｓ＝１／４）



第32図　石田高原Ａ区ＳＤ１出土土器②（Ｓ＝１／３）



第33図　石田高原Ａ区ＳＤ１出土石器①（Ｓ＝１／３）

第34図　石田高原Ａ区ＳＤ１出土石器②（Ｓ＝１／３）※アミカケは煤付着

使用痕を持つものが多く，棒状のものは先端部を中心に使用痕が残る。**50**・**55**は側面を粗く打ち欠いた礫器を敲石に転用したものである。**57**は石製支脚である。硬質の凝灰岩を素材とし，一部欠損するものの表面を縦方向に削ってドーム状に整形している。側面から体部中央にかけて煤が付着している。**58**は砥石を転用した敲石で，広い平坦面は敲打痕で覆われているものの，側面には研磨痕が筋状に残っている。**59**は石皿の破片である。図の上方が石皿の周縁部で下方が機能部に相当する。両面とも機能部がすり減って周縁部に比べて厚みを減じている。使用痕は肉眼では明瞭でない。

b．ＳＤ２（第29図）

調査区の西壁中央部から東に延びる環濠で，蛇行しながら中央十字ベルト付近で消える。検出時の最大幅約4.5m，深さ約30cmで断面Ｕ字形となる。東側を中心に削平が著しく，現状では十字ベルト付近で消滅するものの，本来はより東へと延びてＳＤ１と接続していた可能性もある。１m幅のトレンチで床面を確認したところ，床面には円礫および角礫が敷き詰められ，その中に土器の小片が混じっていた。土器自体も摩滅が著しく，接合できるものも皆無である点が通常の環濠出土土器と異なっており，中世以降の新しい遺構である可能性も考えられたが，鉄分がまだらに混じる覆土の特徴が弥生時代中期のピットに類似していること，また中世の墓坑と考えられるＳＸ72に切られていることから，出土土器（第39図**9**）も勘案して一応弥生時代中期中葉の遺構として捉えておく。

c．ＳＤ３（第29図）

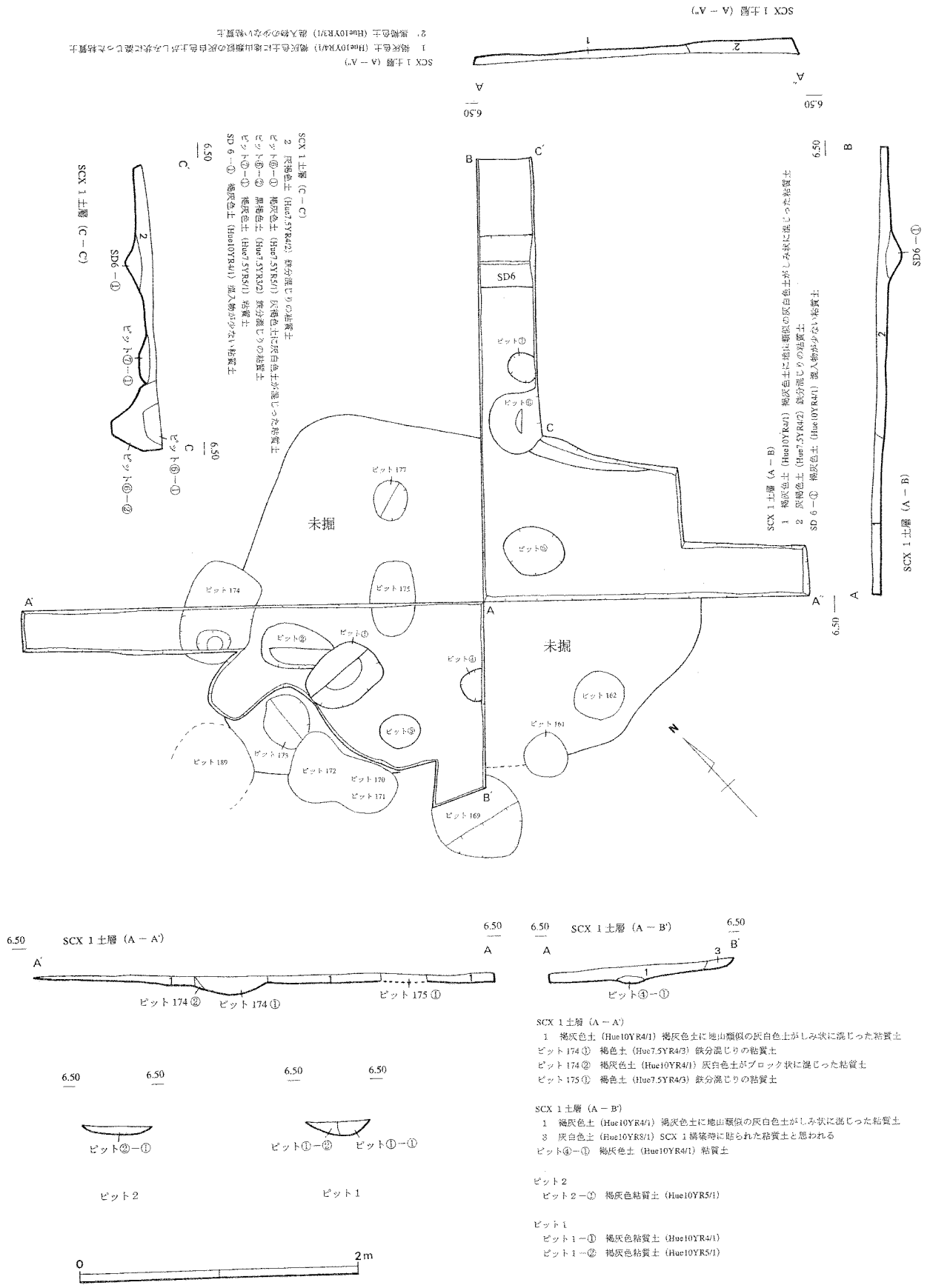
ＳＤ２から派生して南東へと延びる環濠である。検出時で最大幅約1.3m，深さ0.15mである。Ｂ区中央付近で消滅しているが，かなり削平を受けていると考えられることから，本来はより南東方向に伸びていたものと推測される。時期の明確な遺物は出土していないが，鉄分混じりの覆土の特徴や弥生時代中期後葉のピットに切られていることから，弥生時代中期中葉の環濠と判断した。

d．ＳＤ４（第29図）

ＳＤ３と同様，ＳＤ２から派生してＳＤ３と併走しながら南東方向に伸びる環濠である。最大幅約1.2m，深さ約0.05mと非常に浅い。削平が著しく中央の十字ベルト付近でいったん消滅するものの，調査区南端部付近で再び検出している。遺物の出土はないが，覆土の特徴からＳＤ２と同時期を考えられ，弥生時代中期中葉の環濠と判断した。

e．ＳＤ５（第29図）

Ｃ区の北西隅から南西に伸びる溝である。幅約0.3m，深さ0.1mで直線的に伸びる。遺物は出土しなかった。Ｄ区南西隅でＳＤ２を切っていることを確認しており，弥生時代中期中葉以降であることは間違いない。同じく南西方向に伸びるＳＤ３・ＳＤ４と異なり，ＳＤ５は幅が狭く直線的である点でやや異質である。周辺には中世と考えられる墓域が展開しており，この墓域に伴う区画溝である可能性を指摘しておく。



第35図　1号竪穴住居状遺構（ＳＣＸ１）実測図（Ｓ＝1/40）

第36図　竪穴住居状遺構周辺出土土器（S＝1／4）

f．SD6（第35図）

C区SCX2床面から検出した。幅約0.4m，深さ約0.1mで断面V字状となる。幅0.4mのトレンチから検出したため詳細は不明であるが，北西－南東方向に伸びるものと推測される。幅が狭く非常に浅いことから，SCX2に伴う施設である可能性も考えられる。

②竪穴住居状遺構（SCX）（第37図）

B区東半部を中心に隅丸方形の遺構を検出した。主柱穴とみられるピットも検出されたものの非常に浅く，竪穴住居と特定できなかったため竪穴住居状遺構（SCX）と仮称した。竪穴住居状遺構は6基検出しているが，掘り下げを行ったのは1号竪穴住居状遺構（SCX1）のみである。

a．SCX1（第35図）

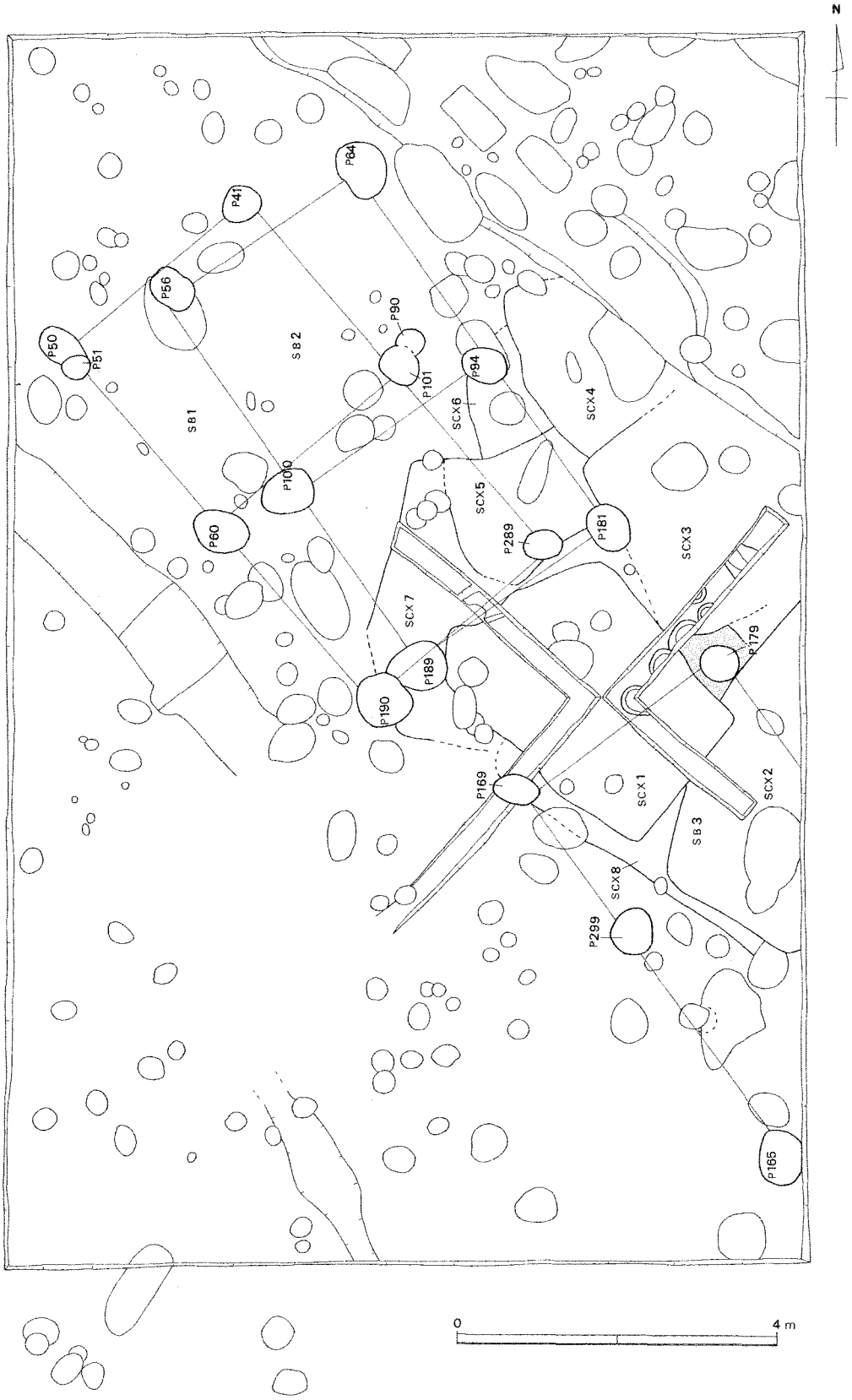
長軸長3.3m，短軸長2.4mの隅丸長方形で，短軸長は東側が短く西側が長い。調査はSCX1の軸に沿って四等分にし，北東部と南西部の掘り下げを行った。床面からは竪穴住居状遺構に伴うものと考えられるピットが5基検出されたが，非常に浅いため主柱穴とは断定できない。

なお，北東部の床面からSCX1と切り合う遺構を確認している。SCX1の北東壁面は地山類似の灰白色土であるが，SCX1と切り合う遺構はこの灰白色土の下にも入り込むことから，この灰白色粘質土はSCX1の構築に伴って意図的に貼り付けた粘土であると考えられる。

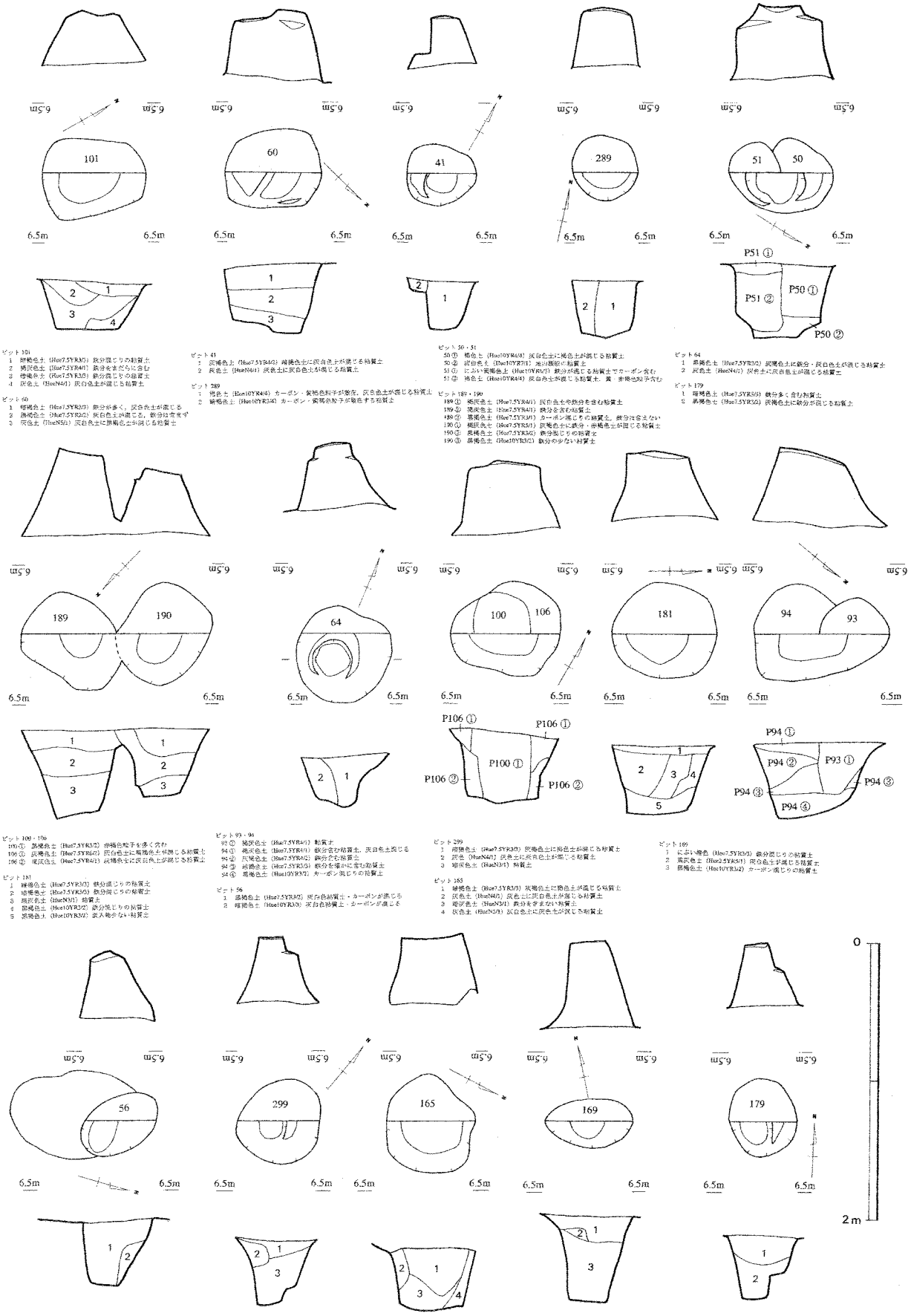
SCX周辺では，少量ではあるが検出面を中心に弥生土器が出土している（第36図）。いずれも甕の口縁部であるが，断面逆L字形で上面がやや内傾するものが多い。このことから，竪穴住居状遺構は弥生時代中期前半の遺構群と考えられる。

③掘立柱建物（SB）（第37図）

石田高原地区では，先述の通り多数のピット群が検出されている。特にB区では高い密度で分布しており，掘立柱建物が相当数建てられていたものと推測されるが，具体的な建物の復元は不十分である。ここでは，ピットの規模と配列から明らかに建物を構成するものとみられる3棟について説明を加える。



第37図　石田高原Ｂ区　ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３検出状況（Ｓ＝１/80）



第38図　ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３ピット実測図（Ｓ＝１/40）

a．ＳＢ１（第37図）

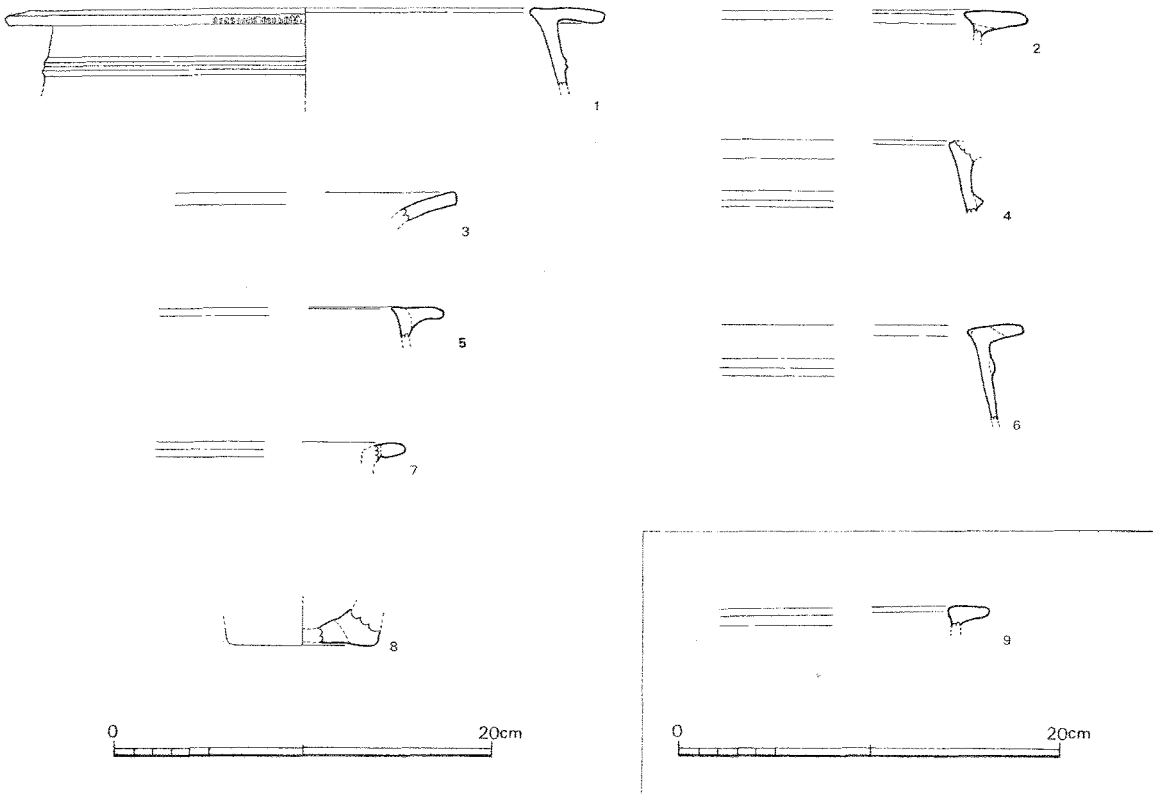
１間×２間の掘立柱建物である。柱穴同士の距離は，桁行と梁間でほぼ等しく約３ｍである。桁行きの全長は5.85ｍとなる。柱穴はピット番号でＰ190・Ｐ60・Ｐ50・Ｐ41・Ｐ101・Ｐ289で構成される（第38図）。検出時のピット径は最大75cm～最小47cmとばらつきがあるものの，ピットの床面標高はほぼ揃っている。また，Ｐ50やＰ101にみられるように，掘り直しの痕跡も確認されており，少なくとも１度の立て替えがなされたものと考えられる。時期は弥生時代中期中葉～後葉のＳＢ２を切っていることから，中期後半もしくはやや下る時期と考えられる。

b．ＳＢ２（第37図）

１間×２間の掘立柱建物である。柱穴間の距離は梁間と桁行でほぼ等しく，梁間は2.9ｍ，桁行は2.7ｍ～2.9ｍとなる。桁行の全長は5.5ｍとなる。柱穴はピット番号でＰ189・Ｐ100・Ｐ56・Ｐ64・Ｐ94・Ｐ181で構成される（第38図）。ピット径は60cm～75cmと比較的まとまっており，床面標高もほぼ揃っている。また，Ｐ56やＰ94にみられるように掘り直しの痕跡が確認でき，少なくとも１度建て替えがなされたものと推測される。時期はＰ189から須玖Ｉ式とみられる甕口縁部片が出土しており（第39図４），ＳＢ２もこの時期の建物と考えられる。

c．ＳＢ３（第37図）

１間×３間の掘立柱建物と考えられる。現状で梁間３ｍ・桁行5.5ｍであるが，調査区外まで伸びる可能性もある。桁行のピット群は柱穴間の距離にばらつきがあり，広いところで2.2ｍ，狭いとこ



第39図　ピットおよび周辺遺構出土土器（Ｓ＝１／４）

ろで1.5mとなる。ＳＢ３の柱穴はピット番号でP165・P299・P169・P179で構成される（第38図）。さらに，中世の遺構に切られて未検出であったが，P165とP299の間に１基柱穴が存在するものと考えられる。柱穴の規模は，径55cm～70cmと比較的まとまっており，床面の標高もほぼ揃っている。P165からは平底の底部片が出土している。胴部にかけてくびれながら立ち上がるもので，弥生時代中期中葉～後葉と考えられる。ＳＢ２とほぼ主軸をそろえることから，両者は同時期に存在した可能性も考えられる。

・ピット内出土土器（第39図）

ピット内からは，小片ではあるが弥生時代中期を中心とした土器片が出土している。そのうち図化し得たのは次の９点である。

1は直径32cmに復元できる甕口縁部で，口縁部断面は逆Ｌ字形となる。口縁部上面はやや外傾し，口縁部内面はやや突出する。口縁端部にはヘラ状工具による刻みが密に施されている。口縁部下には比較的シャープなM字突帯がつく。P52からの出土である。2は口縁部片で，断面逆Ｌ字形の甕口縁部と考えられる。口縁部内面が突出している。P185からの出土である。3は「く」の字口縁の甕口縁部であろう。P164から出土した。4は口縁部を欠損するものの，鋤先口縁の甕の破片と考えられる。口縁部直下にシャープな突帯が１条巡る。P189からの出土である。5は鋤先状口縁の一部である。口縁部上面は平坦で口縁部内面はほとんど突出しない。P42から出土した。6は鋤先状口縁で口縁部上面はやや内傾している。口縁部直下に丸みを帯びた背の低い突帯が１条巡る。P７からの出土である。7も鋤先状口縁の口縁部端と考えられる。P181からの出土である。8は底部片である。若干上げ底気味の平底となる。P47から出土した。

9はＳＤ２から出土したものであるが，ここに掲載した。断面逆Ｌ字形になる口縁部片で，口縁部上面は平坦である。表面が非常に摩滅している。

以上，ピット内出土土器はいずれも弥生時代中期を中心とするものである。中でも，須玖Ⅱ式段階の土器が主体となる。図化し得なかったものの，これらのピット以外にも弥生土器の出土をみたが，それらの時期についてはピット属性表を参照されたい（第３表）。

第２表　石田高原地区出土遺物観察表

土器

報告番号	遺構名	種類	色調(表)		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法	備考
31図１	ＳＤ１	甕	灰	5Y5/1			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ハケメナデ消し	
31図２	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y7/2			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：指押さえ・ナデ	
31図３	ＳＤ１	甕	赤褐	10Y5/3	橙	2.5Y R6/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図４	ＳＤ１	甕	橙	7.5Y R6/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図５	ＳＤ１	甕	明黄褐	10Y R7/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図６	ＳＤ１	甕	灰	5Y5/1			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図７	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y7/2			長石・石英・金雲母	底部	表：ハケメナデ消し，裏：指押さえ・ナデ	
31図８	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y6/2	灰白	5Y7/2	石英・長石	底部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図９	ＳＤ１	甕	にぶい黄橙	10Y R7/2	黄灰	2.5Y4/1	石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：指押さえ，ナデ	
31図10	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	底部片	表：ナデ，裏：指押さえ，ナデ	
31図11	ＳＤ１	甕	にぶい黄	2.5Y6/3			長石・石英・金雲母	底部片	表：ハケメナデ消し，裏：ナデ	
31図12	ＳＤ１	甕	赤橙	10R6/6	にぶい赤褐	5Y R5/4	石英・長石	底部	表：ナデ，裏：ナデ	
31図13	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	底部	表：ナデ，裏：指押さえ	
31図14	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y6/2	黒褐	2.5Y3/1	石英・長石	底部	表：ナデ，裏：指押さえ，ナデ	
31図15	ＳＤ１	甕	明褐	7.5Y R5/6			長石・石英・金雲母	底部	表：ハケメナデ消し，裏：指押さえ・ナデ	
31図16	ＳＤ１	甕	にぶい黄橙	10Y R6/3	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英・金雲母	底部	表：ケズリ，裏：ハケメ	
31図17	ＳＤ１	甕	浅黄	2.5Y7/3			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ハケメナデ消し	
31図18	ＳＤ１	甕	黒褐	10Y R3/1	にぶい黄橙	10Y R6/3	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図19	ＳＤ１	甕	にぶい褐	7.5Y R5/4	にぶい橙	7.5Y R7/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図20	ＳＤ１	甕	にぶい褐	7.5Y R5/4	にぶい黄橙	10Y R6/3	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図21	ＳＤ１	甕	灰黄褐	10Y R5/2	灰黄褐	10Y R4/2	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ハケメナデ消し	
31図22	ＳＤ１	甕	黄灰	2.5Y5/1	灰	5Y6/1	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図23	ＳＤ１	甕	灰	5Y5/1	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	口縁部片	表：ハケメナデ消し，裏：ナデ	
31図24	ＳＤ１	甕	にぶい黄橙	10Y R6/3	黄褐	2.5Y5/3	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図25	ＳＤ１	甕	灰黄褐	10Y R5/2	灰黄褐	10Y R4/2	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメナデ消し，裏：ナデ	
31図26	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図27	ＳＤ１	甕	にぶい橙	7.5Y R6/4	黄灰	2.5Y6/1	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
31図28	ＳＤ１	壺	明赤褐	5Y R5/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	表裏面丹塗り
31図29	ＳＤ１	壺	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
32図30	ＳＤ１	甕	にぶい黄褐	10Y R5/3	にぶい黄橙	10Y R6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	表：ハケメナデ消し，裏：ナデ	
32図31	ＳＤ１	甕	黒	5Y2/1			長石・石英・金雲母・黒雲母	口縁部～胴部	表：ハケメナデ消し，裏：ナデ	
32図32	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	表：ハケメナデ消し，裏：ハケメナデ消し	
32図33	ＳＤ１	鉢	暗灰黄	2.5Y5/2	灰黄	2.5Y6/2	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	表：ハケメ，裏：ハケメ・ヘラナデ	
32図34	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y7/2			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ヘラケズリ	
32図35	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母			
32図36	ＳＤ１	甕	灰	5Y4/1			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ハケメ，裏：ハケメナデ消し	
32図37	ＳＤ１	壺	にぶい黄褐	10Y R5/4	にぶい褐	7.5Y R5/4	石英・長石・金雲母	口縁部	表：ハケメ，裏：ハケメナデ消し	
32図38	ＳＤ１	甕	灰黄	2.5Y7/2	明赤褐	5Y R5/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	表面丹塗り
32図39	ＳＤ１	壺	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	口縁部～頸部	表：ハケメナデ消し，裏：ハケメナデ消し	
32図40	ＳＤ１	壺	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	口縁部片	表：ハケメナデ消し，裏：ハケメナデ消し	
32図41	ＳＤ１	壺	にぶい黄橙	10Y R7/2	にぶい黄橙	10Y R7/2	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ，裏：ハケメナデ消し・指押さえ	
32図42	ＳＤ１	壺	にぶい黄橙	10Y R7/3			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメナデ消し，裏：ハケメナデ消し	
32図43	ＳＤ１	高坏	にぶい黄橙	10Y R6/3			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメナデ消し，裏：ハケメナデ消し	
32図44	ＳＤ１	高坏	にぶい橙	7.5Y R6/4	にぶい橙	7.5Y R6/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
32図45	ＳＤ１	高坏	にぶい橙	7.5Y R7/3			長石・金雲母	脚部	表：ハケメナデ消し，裏：ナデ	
32図46	ＳＤ１	高坏	灰黄	2.5Y6/2			長石・金雲母	坏底部～脚部	表：ハケメナデ消し，裏：ハケメナデ消し	
32図47	ＳＤ１	器台	にぶい黄褐色 赤褐	10Y R5/3 5Y R4/6	赤褐 褐灰	5Y R4/6 5Y R4/1	長石・石英・金雲母	脚部片	表：指押さえ，裏：指押さえ	
32図48	ＳＤ１	筒坏	灰白	7.5Y7/1			精良（砂礫含まず）	角杯	表裏とも回転ナデ調整	楽浪系
36図１	ＳＣＸ２	甕	橙	5Y R6/6	橙	5Y R6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
36図２	ＳＣＸ６	甕	灰黄褐	10Y R4/2	にぶい黄橙	10Y R6/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
36図３	ＳＣＸ６	甕	にぶい黄橙	10Y R6/3	にぶい橙	7.5Y R7/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
36図４	ＳＣＸ２	甕	にぶい黄橙	10Y R7/4	橙	7.5Y R6/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
39図１	ピット52	甕	にぶい黄橙	10Y R6/4			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：剥落のため不明	
39図２	ピット185	甕	橙	5Y R6/6	橙	5Y R6/6	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
39図３	ピット164	甕	橙	5Y R6/6	にぶい橙	7.5Y R7/3	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
39図４	ピット189	甕	橙	5Y R6/6	橙	7.5Y R6/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
39図５	ピット142	甕	明赤褐	5Y R5/6	にぶい橙	7.5Y R6/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
39図６	ピット７	甕	にぶい黄橙	10Y R5/4			石英・長石・赤色粒子	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
39図７	ピット181	甕	にぶい橙	7.5Y R6/4	にぶい橙	7.5Y R6/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
39図８	ピット47	甕	明赤褐	2.5Y R5/6	にぶい橙	5Y R6/4	石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ	
39図９	ＳＤ２Ｉ	甕	橙	2.5Y R6/6	橙	2.5Y R6/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	

石器

報告番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
33図49	ＳＤ１	敲石	15.40	9.60	6.95	1490.40	安山岩
33図50	ＳＤ１	敲石	17.50	10.30	5.60	1660.00	安山岩
33図51	ＳＤ１	敲石	12.30	9.85	6.00	1119.90	安山岩
33図52	ＳＤ１	敲石	18.00	5.10	4.40	614.20	安山岩
33図53	ＳＤ１	敲石	14.05	4.40	4.60	438.30	安山岩
33図54	ＳＤ１	敲石	12.30	7.50	7.40	1287.50	安山岩
34図55	ＳＤ１	礫器	11.70	12.40	4.50	846.90	安山岩
34図56	ＳＤ１	敲石	9.65	7.60	4.10	449.20	安山岩
34図57	ＳＤ１	支脚	12.15	11.10	8.70	1897.90	流紋岩
34図58	ＳＤ１	砥石	11.20	7.90	4.10	741.80	砂岩
34図59	ＳＤ１	石皿	27.50	16.20	6.30	4280.00	安山岩

第3表　石田高原地区検出ピット属性表

ピット番号	色調	色調分類	調査区	床面標高	時期
1	暗緑灰色(Hue5G4/1)	灰褐色系	A区	5.628	
2	明青灰色(10BG7/1)	灰褐色系	A区	5.785	
3	明青灰色(10BG7/1)	灰褐色系	A区	5.787	
4	褐灰色(Hue7.5YR5/1)	明褐色系	A区	5.73	
5	褐灰色(Hue7.5YR6/1)	明褐色系	A区	5.697	
6	明褐灰色(Hue5YR7/1)	明褐色系	A区	5.92	
7	明褐灰色(Hue5YR7/1)	明褐色系	A区	5.655	中期中葉
8	明褐灰色(Hue5YR7/1)	明褐色系	A区	5.836	
9	灰白色(Hue7.5YR8/1)	灰褐色系	A区	5.73	中期後葉
10	褐灰色(Hue5YR6/2)	明褐色系	A区	5.882	中期
11	褐灰色(Hue5YR6/2)	明褐色系	A区	5.923	
12	灰白色(HueN7/1)	灰褐色系	A区	5.807	
13	灰褐色(Hue7.5YR6/2)	明褐色系	A区	5.793	
14	灰褐色(Hue7.5YR6/2)	明褐色系	A区	5.91	
15	灰褐色(Hue7.5YR6/2)	明褐色系	A区	5.905	
16	灰褐色(Hue7.5YR6/2)	明褐色系	A区	5.909	
17	灰色(HueN6/)	灰褐色系	A区	5.932	
18	灰褐色(Hue7.5YR6/2)	明褐色系	A区	5.912	
19	灰白色(HueN8/)	灰褐色系	A区	5.897	
20	暗緑灰色(Hue10GY3/1)	黒褐色系	A区	5.937	
21	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	A区	5.82	
22	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	A区	—	
23	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	A区	—	
25	青灰色(Hue5B G6/1)	黒褐色系	A区	5.892	
26	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	A区	5.97	
27	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	A区	5.768	
28	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	A区	5.765	後期初頭
29	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	A区	5.919	
30	灰色(HueN6/)	灰褐色系	A区	6.027	
31	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	A区	5.714	
32	灰色(HueN6/)	灰褐色系	A区	6.036	
33	白灰色(HueN8/)	灰褐色系	A区	6.052	
34	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	6.107	
35	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	6.202	
36	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	6.151	
37	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	—	
38	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.108	
39	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.071	
40	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.101	
41	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.847	
42	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	6.005	中期中葉
43	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	6.015	
44	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	6.03	
45	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.181	
46	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.201	
47	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.035	中期
48	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.181	
49	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.198	
50	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.923	
51	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.008	
52	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.108	中期中葉
53	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.268	
54	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	7.5	
55	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.286	
56	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.727	
57	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.326	
58	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.287	
59	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.278	
60	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.012	
61	にぶい黄橙色(Hue10YR7/3)	明褐色系	B区	5.98	
62	にぶい黄橙色(Hue10YR7/3)	明褐色系	B区	5.93	
63	にぶい黄橙色(Hue10YR7/3)	明褐色系	B区	5.994	
64	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	5.746	
68	青灰色(Hue5B G6/1)	灰褐色系	B区	6.03	
69	青灰色(Hue5B G6/1)	灰褐色系	B区	6.02	
70	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	B区	5.979	
72	青灰色(Hue5B G6/1)	灰褐色系	B区	—	
73	青灰色(Hue5B G6/1)	灰褐色系	B区	6.024	
74	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	B区	—	
75	青灰色(Hue5B G6/1)	灰褐色系	B区	—	
76	暗灰黄色(Hue2.5Y4/2)	明褐色系	B区	6	
77	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	B区	5.99	
78	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.005	
79	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.922	
80	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.96	
81	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	B区	5.938	
82	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.979	
83	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.955	
84	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	6	
85	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.973	
86	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.955	
87	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.177	
88	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.15	
89	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	B区	—	
90	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	B区	6.097	
91	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.038	
92	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.979	
93	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.677	
94	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.677	
95	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.147	
96	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.171	中期
97	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.044	
98	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.142	
99	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.319	
100	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.02	
101	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.883	
102	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.142	
103	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.142	
104	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.089	
107	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.247	
109	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
111	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.225	
112	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.53	
113	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.323	
114	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.295	
116	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.065	
117	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.3	
118	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	7.5	
119	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	7.5	
123	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.347	
124	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
125	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.28	
126	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.285	
127	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.28	
128	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.245	
129	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.255	
130	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.155	
131	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.155	
132	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.201	
133	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.199	
134	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.301	
135	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.255	
136	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.229	
137	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.112	
138	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.23	
140	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.254	
141	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.93	
142	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	6.045	
143	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.102	
144	暗青灰色(Hue10B G4/1)	明褐色系	B区	—	
145	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.273	
146	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.248	
147	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.223	
148	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.982	
149	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
150	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
151	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
152	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
153	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
154	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.23	
155	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.954	
156	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
157	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.878	
158	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.267	
159	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.119	
160	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.967	
161	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	6.243	
162	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	6.2	
163	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	6.154	
164	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.896	
165	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.679	中期
166	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	7.5	
167	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
168	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.986	
169	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.7	
170	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.235	
171	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.168	
172	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.105	
173	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.239	
174	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	7.5	
175	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
176	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
177	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
179	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.917	
180	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.097	
181	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.697	中期中葉
182	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	—	
183	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	B区	6.031	
187	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.04	
189	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.665	中期中葉
190	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.817	
191	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
192	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.156	
193	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.194	
194	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.217	
195	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.253	
197	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.249	
198	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	6.298	
200	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
201	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	6.173	
202	青灰色(Hue5B G5/1)	明褐色系	B区	6.282	
203	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	6.3	中期中葉
204	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	6.16	
205	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	6.142	
206	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	明褐色系	B区	6.093	
207	赤灰色(Hue2.5YR6/1)	明褐色系	B区	7.5	
211	暗青灰色(Hue5B G3/1)	黒褐色系	B区	7.5	
213	暗灰黄色(Hue2.5Y4/2)	明褐色系	B区	5.95	
214	青灰色(Hue5B G6/1)	灰褐色系	B区	6.006	
215	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
216	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
217	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	7.5	
218	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
230	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	D区	6.331	
235	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	D区	6.212	
240	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	D区	6.21	
242	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	D区	6.258	
251	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.204	
252	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.246	
253	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.199	
254	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.211	
256	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.22	
257	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	5.951	
258	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.047	
259	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.239	
260	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.248	
261	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	—	
262	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.388	
263	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	5.806	
265	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.165	
266	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.299	
267	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.057	
268	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.039	
269	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.04	
271	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	5.876	
275	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	5.751	
276	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.013	
278	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	5.969	
280	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	5.985	
281	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	6.011	
282	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	5.748	
283	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	C区	5.799	
285	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	7.5	
286	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	5.912	
287	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.002	
288	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.087	
289	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.809	
291	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
296	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	C区	6.17	
299	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	5.912	
301	青灰色(Hue5B G5/1)	黒褐色系	B区	—	
302	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
303	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
304	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
305	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
306	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
307	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	—	
308	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	—	
309	暗青灰色(Hue10B G4/1)	黒褐色系	B区	—	
310	赤灰色(Hue2.5YR6/1)	明褐色系	A区	6.195	
312	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	明褐色系	B区	6.217	

土坑番号	色調	色調分類	調査区	レベル高
SX-1	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	5.885
SX-2	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	5.92
SX-3	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	—
SX-4	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	—
SX-5	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	—
SX-6	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	—
SX-7	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	—
SX-8	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	—
SX-9	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	5.94
SX-10	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	—
SX-11	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	—
SX-12	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	5.841
SX-13	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	5.867
SX-14	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	5.936
SX-15	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	5.907
SX-16	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	5.893
SX-17	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	—
SX-18	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	—
SX-19	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	—
SX-20	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-21	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-22	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-23	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-24	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-25	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-26	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-27	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-28	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-29	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	—
SX-30	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-31	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-32	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-33	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-34	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-35	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-36	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-37	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-38	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-39	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	A区	5.959
SX-40	にぶい黄橙(Hue0YR7/3)	黄橙色系	B区	5.972
SX-41	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	6.141
SX-42	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	—
SX-43	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	6.076
SX-45	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	6.014
SX-46	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	5.835
SX-47	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	B区	6.107
SX-48	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	6.166
SX-49	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	C区	5.897
SX-50	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	C区	—
SX-51	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	C区	—
SX-52	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	C区	6.161
SX-53	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	C区	6.224
SX-54	淡橙色(Hue5YR8/3)	黄橙色系	D区	5.989
SX-55	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.025
SX-56	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.185
SX-57	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.236
SX-58	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.197
SX-59	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.257
SX-60	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.132
SX-61	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.048
SX-62	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.014
SX-63	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.259
SX-64	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.24
SX-65	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.201
SX-66	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.077
SX-67	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.2
SX-68	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.151
SX-69	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.248
SX-70	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.052
SX-71	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	—
SX-72	橙色(Hue2.5YR7/6)	黄橙色系	C区	6.105

(4) 小　　結

このように，石田高原地区の調査は，当初予想していた環濠の検出にとどまらず掘立柱建物群や竪穴住居状遺構など多彩な遺構の検出をみた。ここでは環濠を中心に過去調査された周辺調査区における遺構とのつながりや旧地形について検討した後，本年度調査区内における遺構群の変遷についてまとめたい。

①遺構群のつながりと旧地形（第40図）

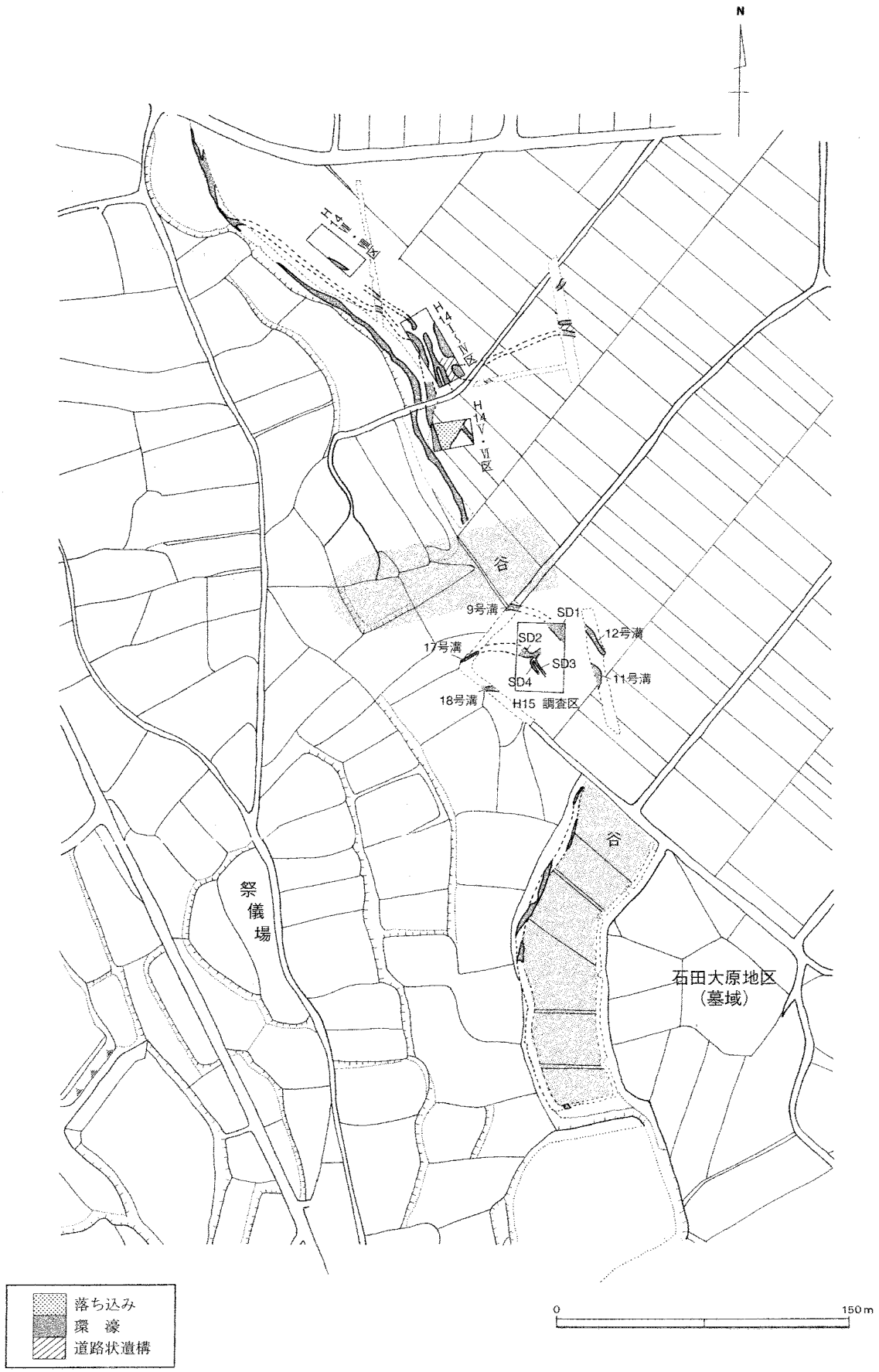
本年度調査区の周辺では，平成５年度と平成14年度に調査が行われ，多数の環濠が検出されている。これらの遺構群と本年度調査区の位置関係を示したのが第40図である。本年度検出の環濠と絡んでくる遺構は，平成５年度Ⅲ区・Ⅵ区検出の９号溝・17号溝・18号溝・12号溝・11号溝である。まず本年度検出したＳＤ１は，断面逆台形で下層に腐植土が介在すること，出土土器が弥生時代中期～古墳時代初頭まで幅を持つといった特徴から，平成５年度検出の９号溝・11号溝につながるものと考えられる。ＳＤ２については，平成５年度検出の17号溝・18号溝に関する詳しい記載がないため詳細な比較はできないものの，位置関係から推測すると，平成５年度検出の17号溝とつながるものと推測される。

調査区周辺の旧地形については，平成14年度Ⅴ・Ⅵ調査区との比較が参考になる。平成14年度Ⅴ・Ⅵ区では，環濠や水溜状遺構などが検出されたが，遺構検出面の標高は3.5m～５mである。これに対して，本年度調査区の遺構検出面の標高は５m～６mであり，本年度調査区の方が約１mほど高い。両調査区は直線距離にして約100mほど離れているが，相対的に北側が低地部であったことを示唆するものである。

南側に目を転じると，平成５年度Ⅳ区周辺は，弥生時代前期後半～後期の墓域である石田大原地区と集落の乗る台地との狭間に位置している。この南側には貯水池がありⅣ区に挟まれた部分は現在は水田となっているが，地形の観察では，明らかにこの部分に過去において谷筋が通っていたことが明らかである。平成５年度Ⅳ区の環濠はこの谷筋に沿って掘削されており，台地への水の進入を防いでいたものと考えられる。

同様に，環濠の方向という視点で本年度調査区以北の遺構群を見ると，平成14年度調査区以北は台地に沿って南北方向に環濠が伸びるのに対して，本年度調査区周辺では東西方向に伸びている。南側の環濠が谷筋に沿って掘削されていることを考慮すれば，南北方向から東西方向に環濠の向きが変換する地域に，東西方向に走る谷が存在した可能性が考えられる。本年度調査区周辺で検出された環濠も，この谷筋に沿って掘削され，掘立柱建物を主体とするエリアに水が進入するのを防いでいたものと推測される。

このように，本年度調査区の旧地形は台地から張り出す微高地であり，南北２つの谷に挟まれていたものと考えられる。このエリアに弥生時代中期を中心とする掘立柱建物群を主体とする遺構群が展開し，谷からの水の進入を防ぐために環濠が掘削されたものと理解できる。



第40図　石田高原地区の周辺地形と遺構群のつながり（S＝1/3000）

②本年度調査区における遺構群の変遷（第41図～第43図）

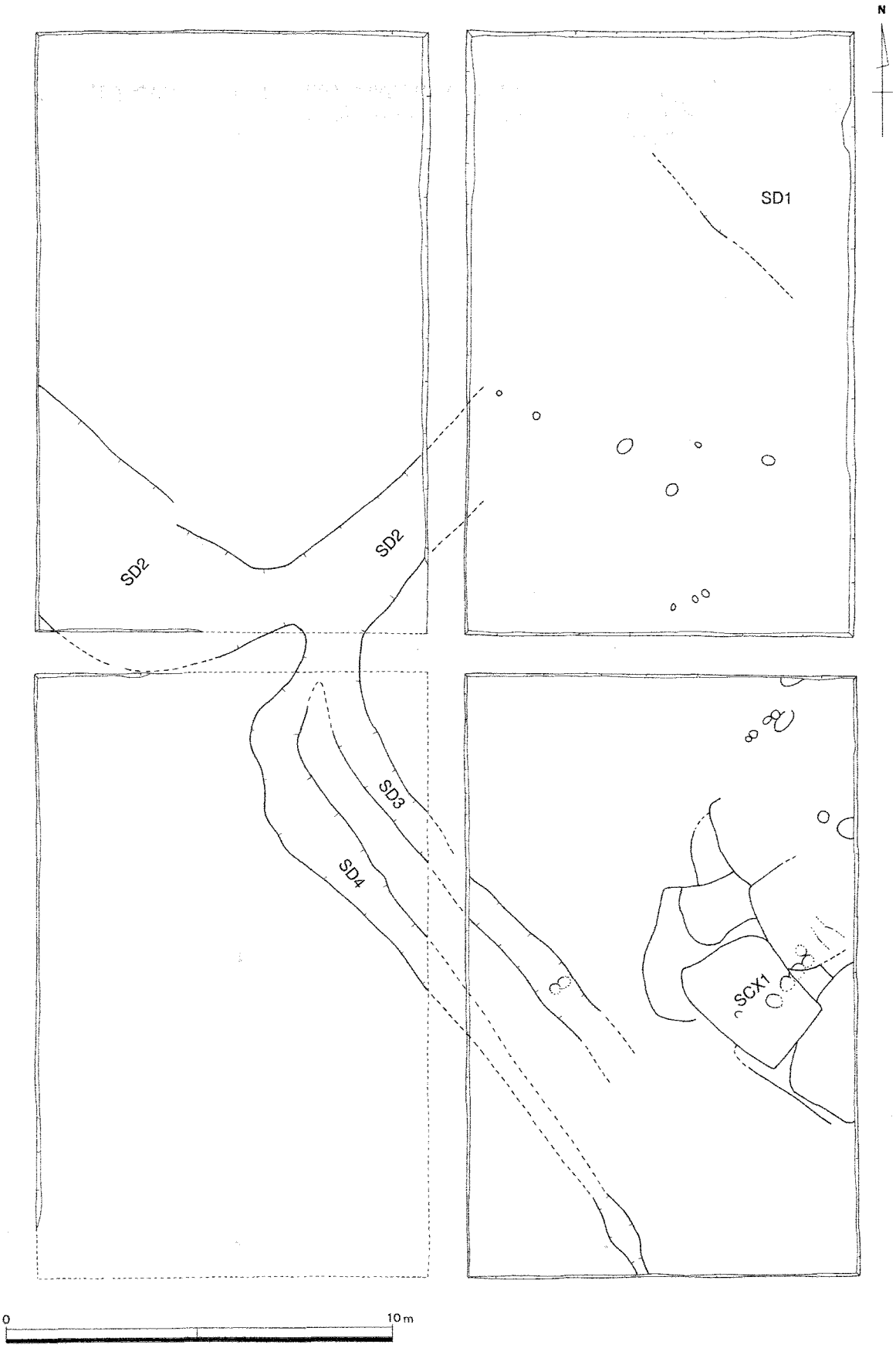
本年度検出された遺構群は，弥生時代中期中葉から古墳時代初頭および中世と幅広い時間軸で展開している。ここでは，弥生時代中期中葉・弥生時代中期後葉・弥生時代後期以降の３期に分けて遺構の変遷を概観し，まとめに代えたい。

その前に，本調査区で多数検出されたピット群について触れておく。今回検出したピットは，覆土の色調から灰褐色系・明褐色系・黒褐色系の３種に分類できる。灰褐色系のピットは，ＳＣＸ１掘り下げ時の床面で検出されており，ＳＣＸ１と同時期もしくは若干古いピット群と考えられる。これに対して，明褐色系・黒褐色系ピットはＳＣＸ１の覆土を切るように掘削されており，竪穴住居状遺構群よりも新しいピット群である。出土土器を比較するとＳＣＸおよび明褐色系・黒褐色系ピット群ともに須玖Ⅰ式を主体とするものの，明褐色系・黒褐色系ピット群の中には須玖Ⅱ式まで下るものも散見されることから，ここでは灰褐色系ピット群を弥生時代中期中葉，明褐色系・黒褐色系ピット群を弥生時代中期後葉として捉えておきたい。

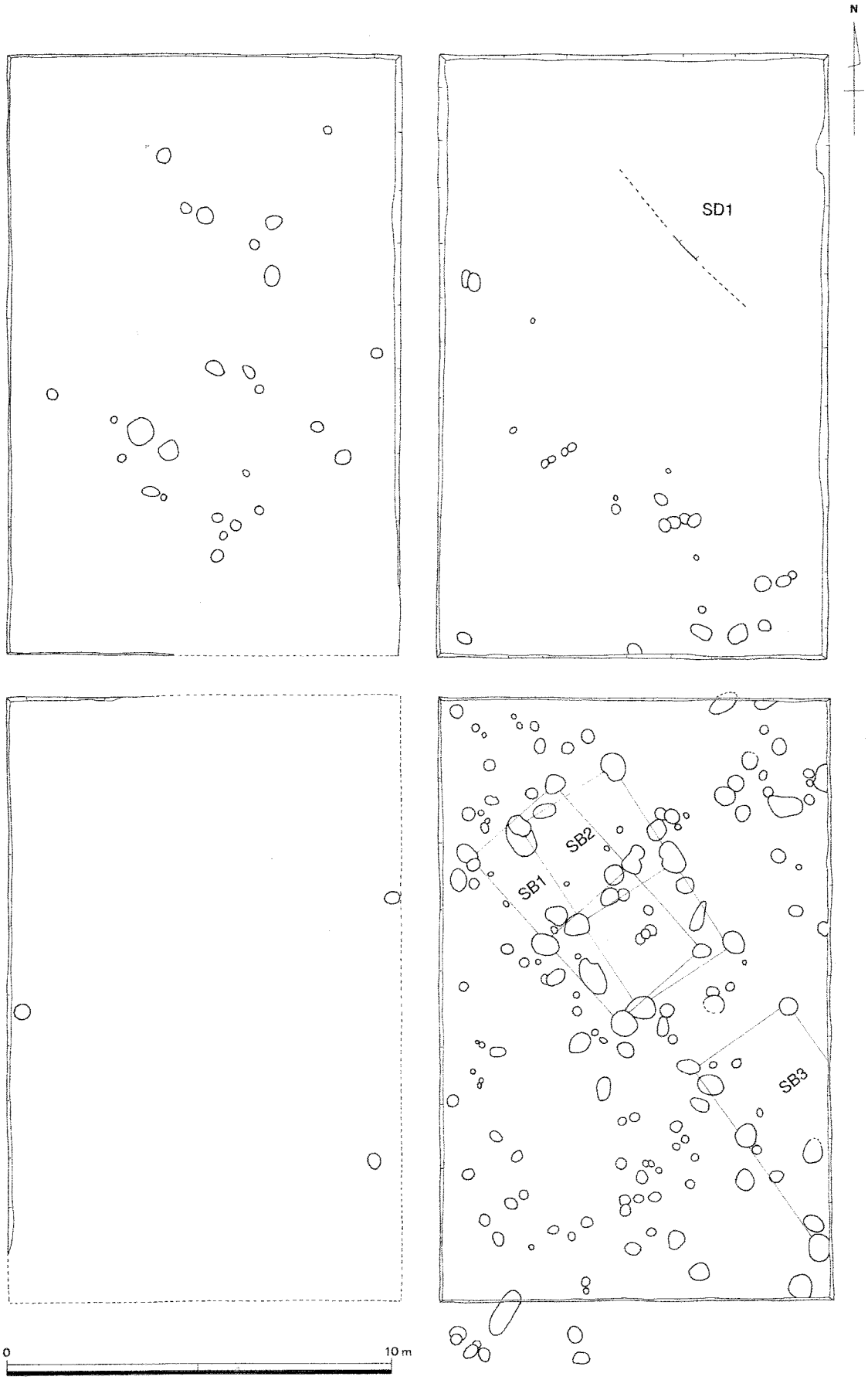
弥生時代中期中葉は，調査区南東部を中心に竪穴住居状遺構（ＳＣＸ）が構築されるとともに，ＳＣＸの北側に灰褐色系ピット群が散在する（第41図）。環濠はＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ３・ＳＤ４が掘削される。ＳＤ３・ＳＤ４からは時期の明確な遺物の出土はみなかったものの，明褐色系ピット群に切られていることからこの時期と判断した。これらの環濠の特徴は，ＳＣＸおよび灰褐色系ピット群を囲むように方形に巡っていることである。調査時点ではＳＣＸの性格を明確にできなかったが，方形に巡る環濠を排水目的と考えた場合，ＳＣＸを住居として利用していた可能性も否定できない。原の辻遺跡では低地部での竪穴住居の検出例は皆無であり，ＳＣＸの性格については今後類例の増加を待って再検討すべき課題である。

弥生時代中期後葉は，調査区南東隅にＳＤ１が存続するもののＳＤ２・ＳＤ３・ＳＤ４が埋没し，調査区南東部を中心に明褐色系および黒褐色系のピット群が展開する（第42図）。現段階ではＳＢ１～ＳＢ３の３棟を確認したのみであるが，実際にはより多くの掘立柱建物群が展開していたものと考えられる。ＳＢ１～ＳＢ３はそれぞれ立て替えに伴って若干時期差はあるものの，主軸は北西－南東方向で共通している。ＳＤ１の方向もこれと一致している点は，この時期の遺構群の計画性を考える上で興味深い。

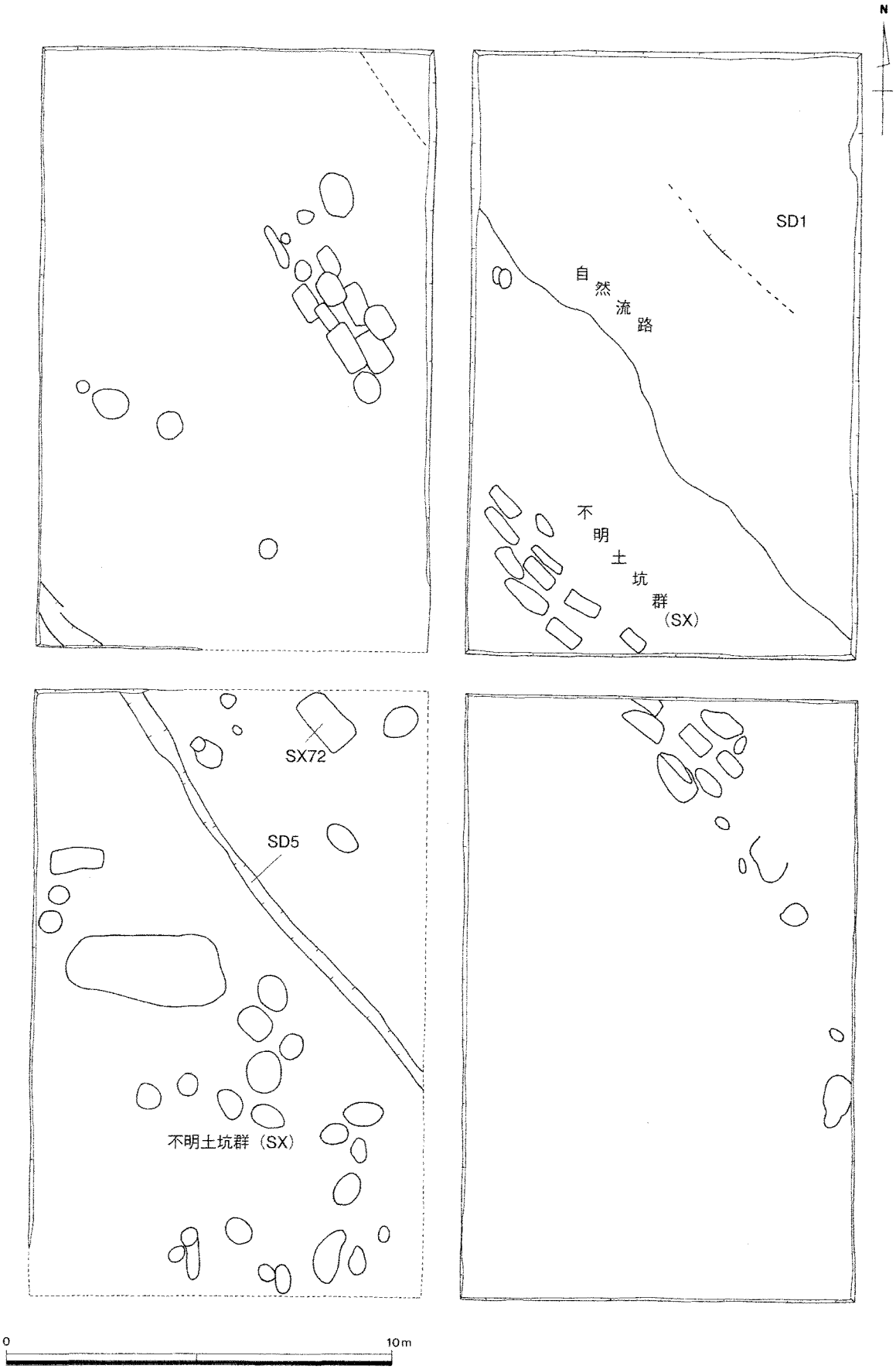
弥生時代後期以降には，後期後葉にＳＤ１が再掘削され，古墳時代初頭まで存続する（第43図）。その後，ＳＤ１は埋没するものの，やや幅を広げて自然流路として機能している。この流路に沿うように，長方形の堀方を持つ不明土坑群が展開する（ＳＸ）。Ｃ区には北西－南東方向にＳＤ５が掘削され，このＳＤ５を境に北東部の長方形土坑群と南西部の楕円形土坑群が分布を異にして展開している。これらの土坑群は平面形態は異なるものの，覆土が黄橙系となる点で共通しており，ほぼ同じ時期の遺構群として把握できる。部分的な調査となったが，断面Ｕ字状の素掘りである点も共通するようである。このうち，ＳＸ72のように礫を充填しているものも認められた点は重要である。ＳＸ72は規模などが中世の集石墓に類似しており，集石の伴わない他の土坑群も列状に配列する点を考慮すると，同時期の墓域であると考えたい。今回の調査は未調査箇所も多く中世の遺物自体も出土していないが，原の辻遺跡の近郊には中世の城跡（覩城跡）もあり，今後両者の関連性を追求する必要があろう。



第41図　石田高原地区の遺構群（弥生時代中期中葉）（S＝1/150）



第42図　石田高原地区の遺構群（弥生時代中期後葉）（S＝1/150）



第43図　石田高原地区の遺構群（弥生時代後期以降）（S＝1/150）

図　　版

1．調査区近景
（北西より）

2．ＳＤ１検出状況
（南東より）

3．ＳＤ１遺物出土状況
（東より）

図版４

４．ＳＤ１土層断面
（北西より）

５．竪穴状遺構および
ピット群検出状況
（東より）

６．ＳＢ１検出状況
（東より）

3．高元地区の調査

(1) 調査概要

高元地区は，台地北側の先端部付近における遺構群の確認を目的として調査を実施した。調査区周辺は平成14年度に範囲確認調査が行われ，竪穴住居10棟以上，土坑６基などを検出している。中でも弥生時代中期中葉の２基の焼土坑（以下，02ＳＫ２・02ＳＫ３と呼称）は生産遺構の可能性を伺わせるものとして注目されたが，調査範囲が限られていたために十分に性格を検討できなかった。今回の調査では，これら焼土坑の性格を把握することを重視して，周辺に20m×20mの調査区を設定した。また，この南側にも昨年度調査区を挟むように５m×10mの調査区を２カ所設定した。これらの調査区は，昨年と同様北側を高元Ⅰ区，南側を高元Ⅱ区と呼称する（第44図）。調査面積は合計500㎡である。

調査の結果，竪穴住居19棟，土坑32基のほか，多数のピット群を検出した。02ＳＫ２・02ＳＫ３周辺では焼土や焼土塊・炭化物などを充填した浅い土坑を検出し，焼土坑のセット関係を把握できた。また，近接した地点からは床面から壁面にかけて炭化物が張り付いた長方形のＳＫ３を検出し，焼土塊の出土から土器焼成遺構の可能性も考えられた。遺構群の変遷としては，昨年度指摘したとおり，弥生時代中期を中心に展開する土坑群および工房群と古墳時代初頭の竪穴住居群という大きな流れを追認したが，新たに弥生時代中期の竪穴住居群を確認するとともに，工房群の性格についても金属器生産の可能性だけでなく土器生産を行っていた可能性も浮上することとなった。

(2) 遺構と遺物

高元地区では竪穴住居や土坑など多数の遺構群を検出した。ここでは高元Ⅰ区・高元Ⅱ区に分けて個別の遺構について説明を加えていく。

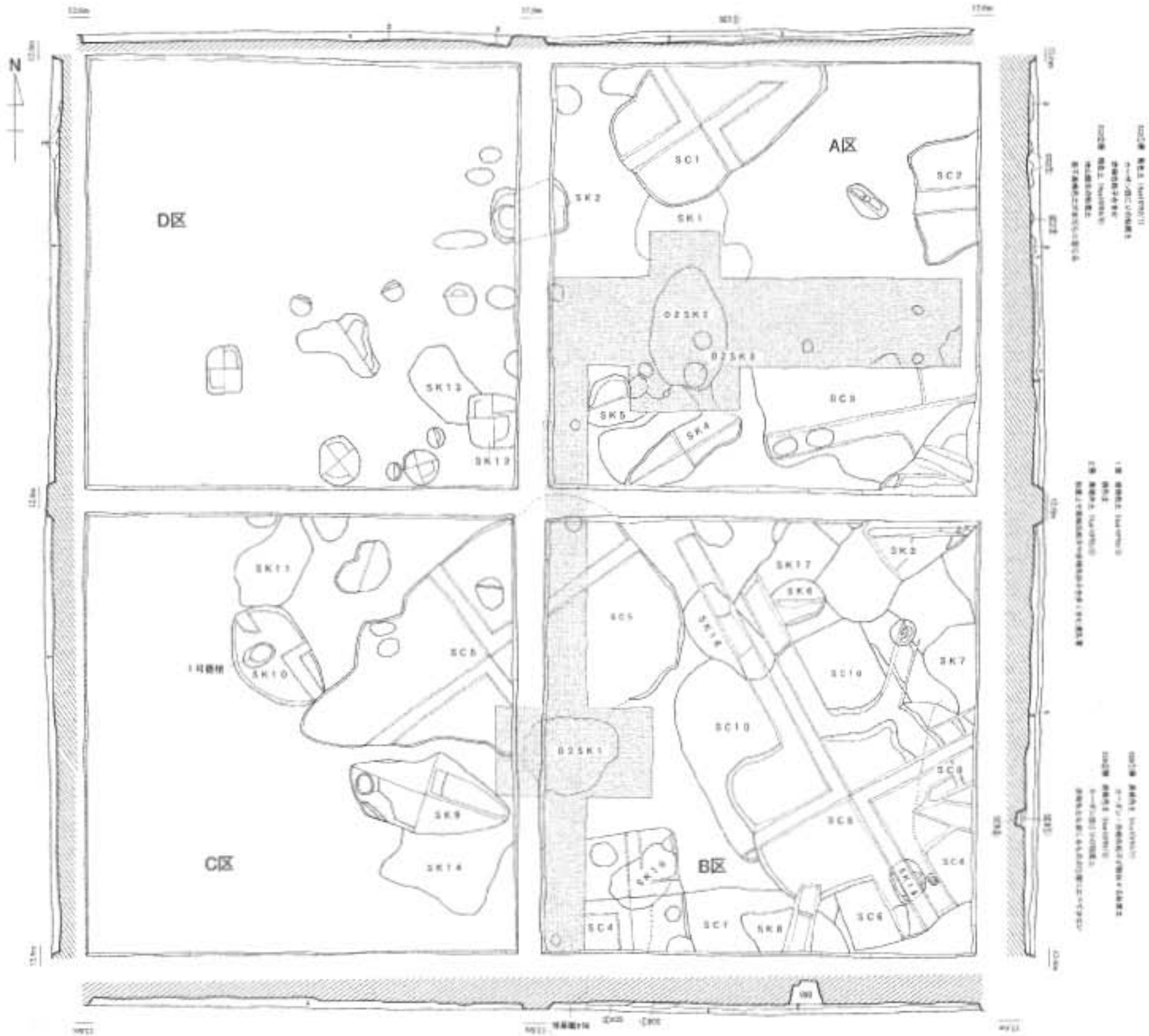
●高元Ⅰ区

高元Ⅰ区では，調査区中央に土層観察用ベルトを十字に設定し，４つのグリットに分けて調査を行った（第45図）。グリット名は，北東部から時計回りにそれぞれＩＡ区・ＩＢ区・ＩＣ区・ＩＤ区とした。

ａ．基本土層（第45図）

高元Ⅰ区は以前畑地として利用されており，遺構検出面まで耕作土が約20cm堆積している。また，遺構検出面には耕作時の削平痕とみられる幅10cm程度の溝が東西方向に多数検出された。遺構検出面の標高はＣ区とＤ区を画すベルト付近を最高地点とし，北・南・東側にむけてゆるやかに傾斜しているため，北壁・南壁・東壁では西壁に比べて耕作土がやや厚く堆積している。また，相対的に調査区東半部は削平の影響が少なく，Ａ区・Ｂ区で遺構の残りが良かった。

第44図　高元地区調査区位置図（S＝1/1000）



第45図　高元Ⅰ区遺構配置図・土層図（S＝1/100）　※薄いアミカケは平成14年度調査区

b．遺構と遺物

①竪穴住居（ＳＣ）

・ＳＣ１（第46図）

Ａ区北端部で検出した隅丸長方形の住居址で，一部は調査区外に伸びる。長軸長2.5m，短軸長1.5mである。長軸に沿って古墳時代初頭の溝（ＳＤ１）に切られている。主柱穴は１基確認したものの他はおそらくＳＤ１に切られているものと思われ，本来は４本主柱であったもの推測される。覆土からは須玖Ｉ式土器が出土しており，この時期の住居址と考えられる。

・ＳＣ２（第47図）

Ａ区東壁沿いで確認した。隅丸長方形の住居址と考えられるが，東側半分は調査区外に伸びる。ピットは４基確認したがそのうちの２基が主柱穴と考えられ，本来は４本主柱と考えられる。時期の特定できる遺物は出土していないが，ＳＣ１と構造が類似していることから弥生時代中期のものと考えられる。

・ＳＣ３（第45図）

Ａ区南東部で確認した。平成14年度調査区に切られているものの，方形の竪穴住居と思われる。トレンチ調査のみで構造は不明である。覆土は10cm未満と非常に浅く削平が著しい。時期を特定できる遺物は出土しなかったものの，住居址の平面形から古墳時代初頭の住居址と考えられる。

・ＳＣ４（第45図）

Ｂ区南西隅で検出した方形の住居址である。調査区外に伸びており全体の規模は不明であるが，検出時で一辺が2.8mである。覆土は10cm未満と非常に浅く削平が著しい。時期の限定できる遺物は出土しなかったが，平面形から古墳時代初頭の住居址と考えられる。

・ＳＣ５（第48図）

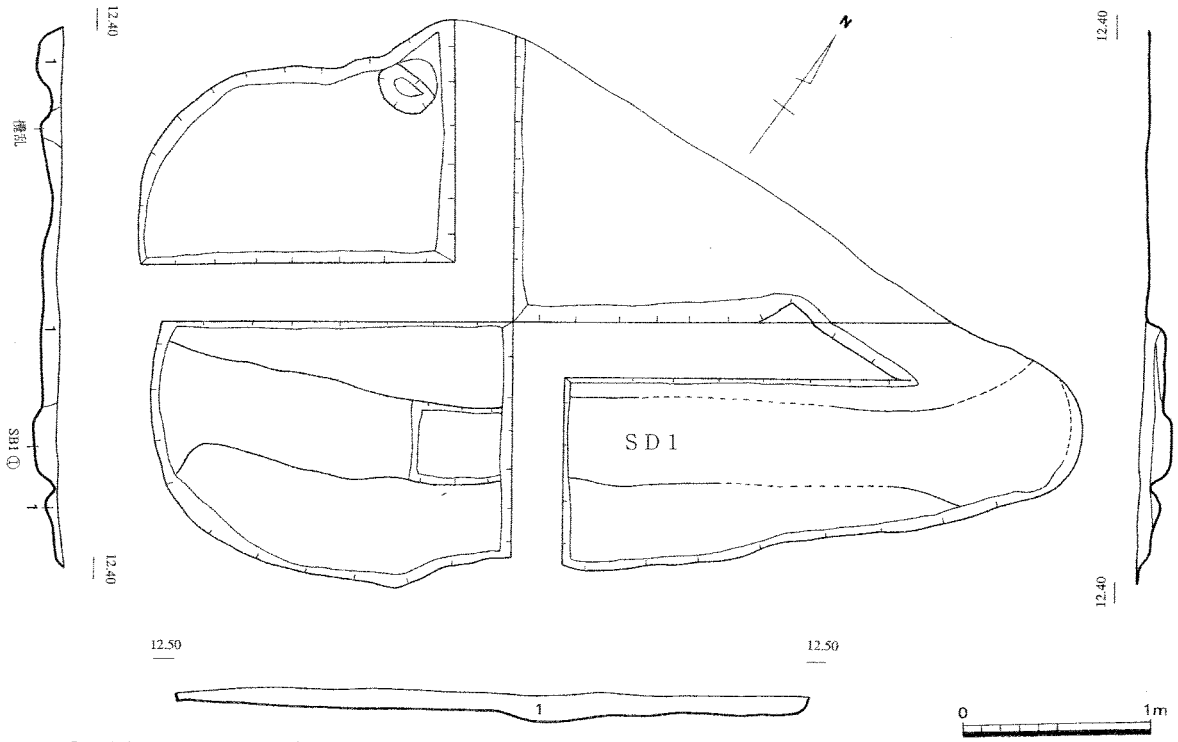
土層観察ベルトを挟んでＢ区～Ｃ区にかけて検出した竪穴住居である。西半分はやや先細り気味の平面形となっているが，本来は隅丸長方形で北西部が削平により消失したものと考えられる。長軸長4.2m，短軸長2.5mである。主柱と考えられるピットは東半部で２基検出しており，本来は４本主柱と考えられる。住居址床面中央には地床炉があり，炉を充填する炭化物層からは細かく砕けた焼骨が多く出土している。遺物は底部片が３点出土している（第49図）。平底もしくはやや上げ底気味で，弥生時代中期後半の特徴を持つものである。

・ＳＣ６（第45図）

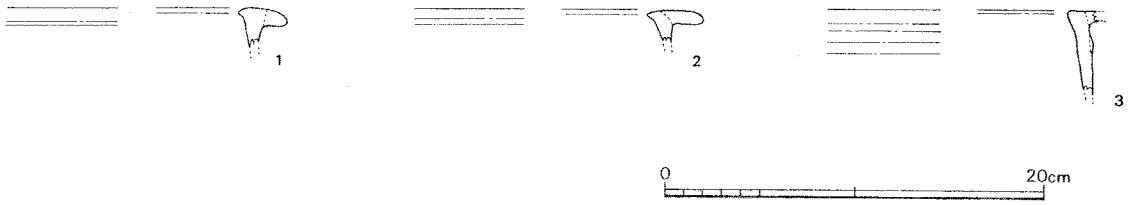
Ｂ区南東隅で検出した方形の住居址である。ＳＣ８に切られており全体像は不明である。時期の明確な遺物は出土していないが，ＳＢ８およびＳＫ18との切り合いから古墳時代初頭の住居址と考えられる。

・ＳＣ７（第45図）

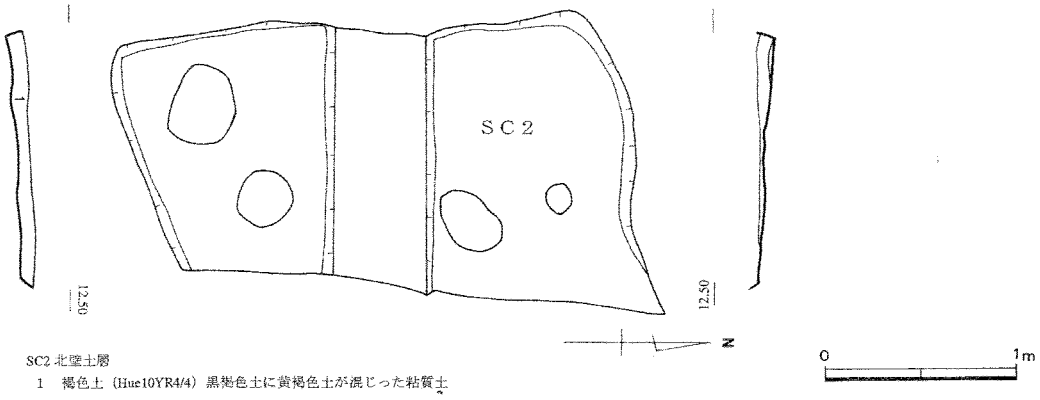
Ｂ区東壁沿いで検出した住居址である。ご一部しか検出していないが，方形もしくは長方形の住居址と考えられる。弥生時代中期後半のＳＫ８に切られており，この時期以前の住居址と考えられる。



SB 1① 黒褐色土（Hue7.5YR3/1）カーボン混じりの粘質土
1 灰黄褐色土（Hue10YR4/2）混入物の少ない粘質土

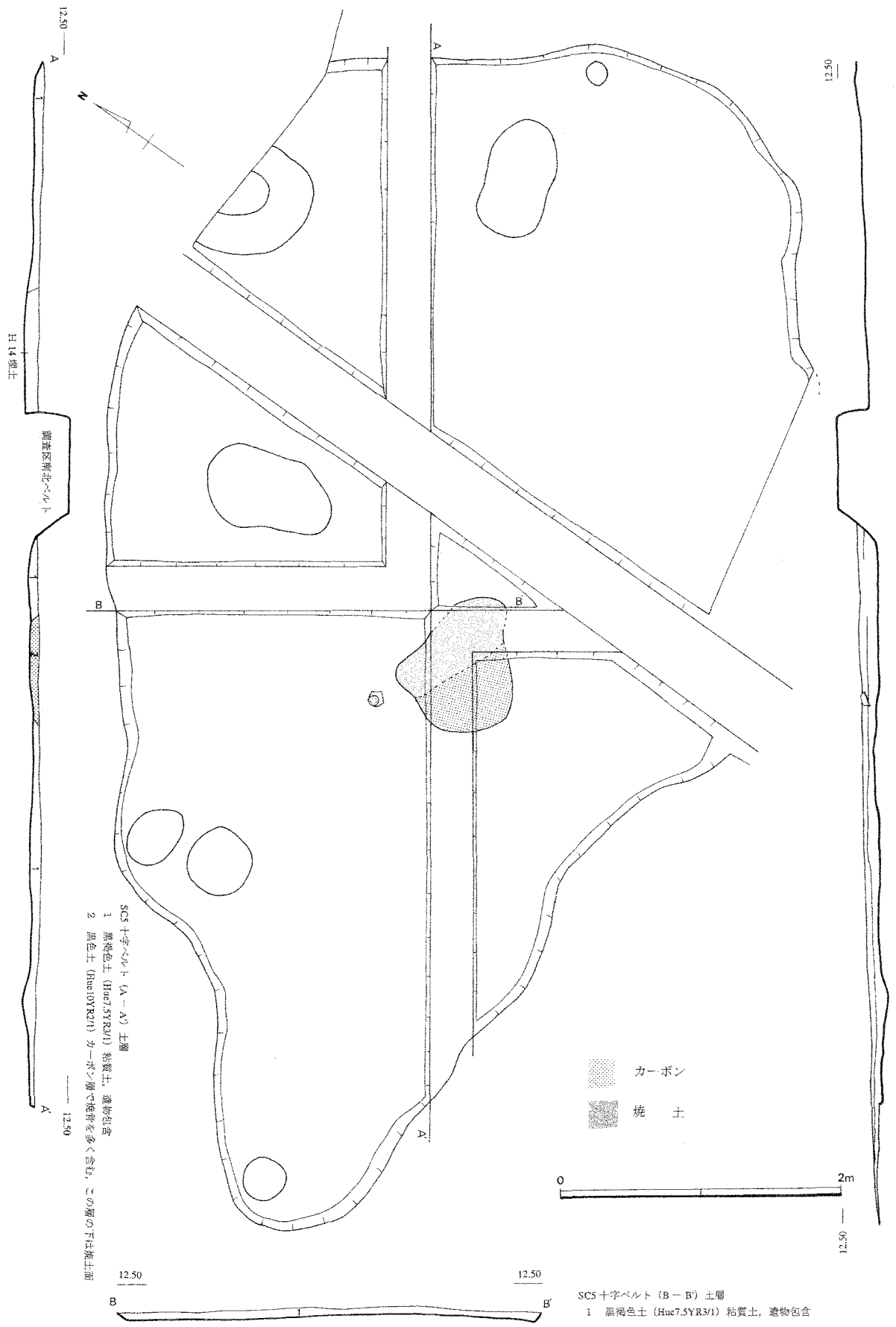


第46図　ＳＣ１実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）

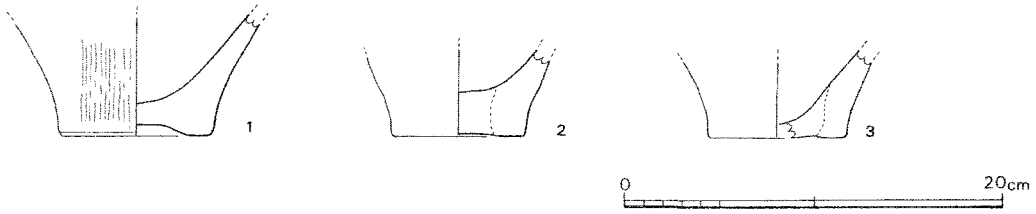


SC2 北壁土層
1 褐色土（Hue10YR4/4）黒褐色土に黄褐色土が混じった粘質土

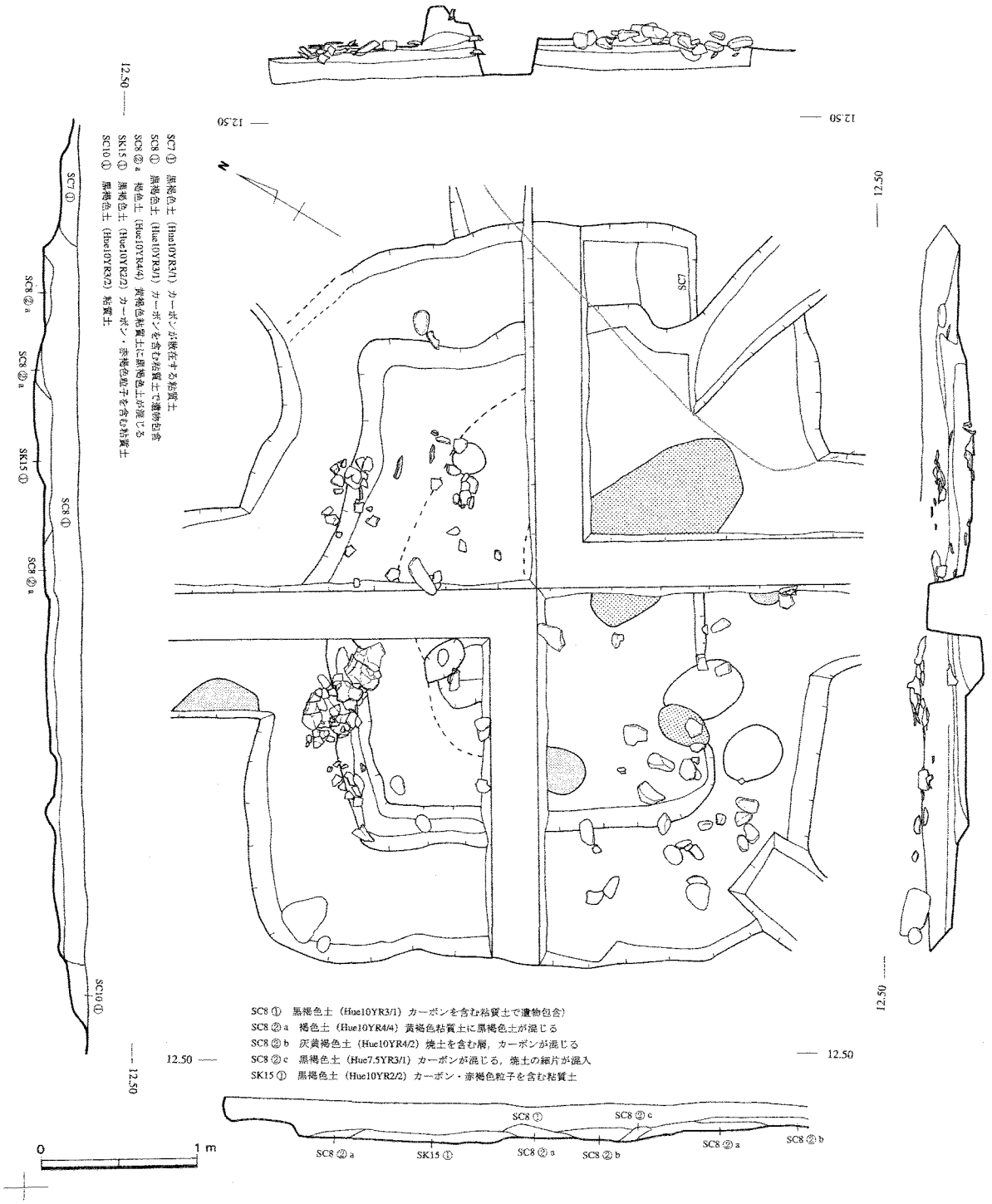
第47図　ＳＣ２実測図（Ｓ＝１/40）



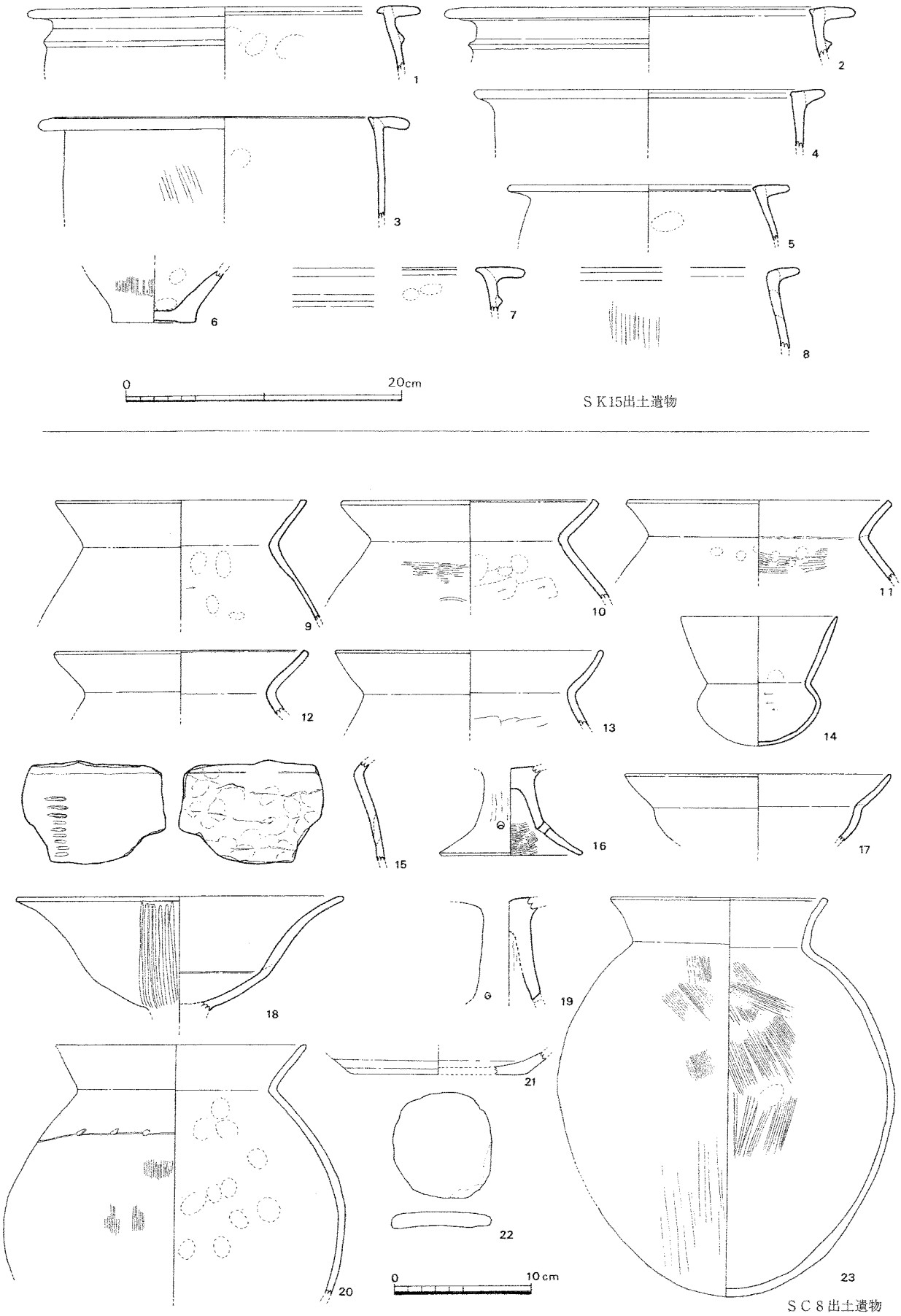
第48図　ＳＣ５実測図（Ｓ＝１/40）



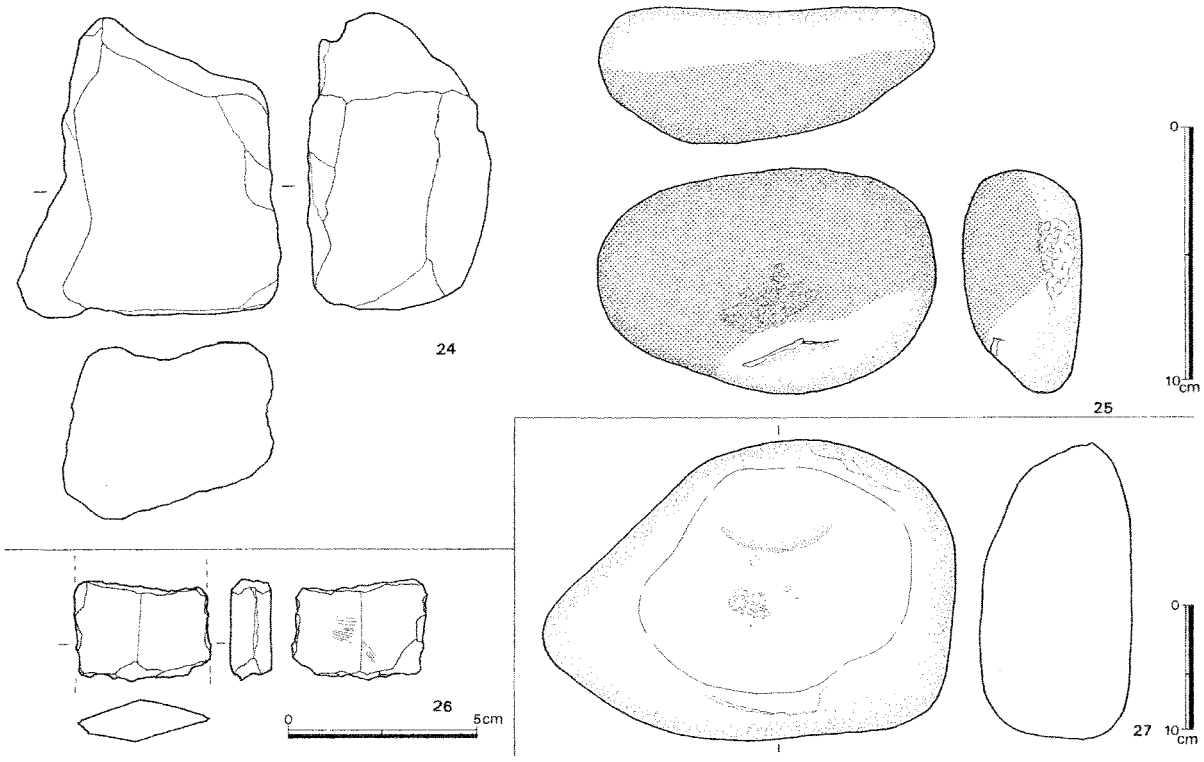
第49図　ＳＣ５出土遺物（Ｓ＝１／４）



第50図　ＳＣ８・ＳＫ15実測図（Ｓ＝１/40）　※赤線はＳＣ７・中央の点線はＳＫ15



第51図　ＳＣ８・ＳＫ15出土遺物①（Ｓ＝１／４）



第52図　ＳＣ８出土遺物②（Ｓ＝１/２，１/３，１/４）

・ＳＣ８（第50図）

Ｂ区南東寄りで検出した長方形の竪穴住居である。長辺4.8m，短片3.7mで壁際には幅約50cmのベッド状遺構が一周している。南半部を中心に炭化物がまとまって出土しており，この付近に炉跡があるものと考えられる。住居址床面よりピットを複数検出しているが，おそらく２本主柱の住居と考えられる。また，住居址床面中央部分で弥生時代中期の土坑（ＳＫ15）を検出した。ほとんどがＳＣ８に削平されており明確な堀方は確認できなかったが，土器の分布から長軸長2.4mの楕円形土坑と推測される。ＳＣ８およびＳＫ15からは多くの遺物が出土した（第51図・第52図）。ＳＫ15出土土器は鋤先状口縁を有する土器が主体で，１～３のように口縁部が内面に突出するものも含まれている。６の底部は器壁が薄く若干上げ底気味である。口縁直下の突帯は非常にシャープである（１・２・７）。弥生時代中期中葉～後葉の土器群である。９～23はＳＣ８出土土器である。口縁部が直立もしくは内傾し，内面にケズリを持つ布留系の甕を主体とし（９・10・12・13・20），口縁部が外反し内面にハケ目を残す在地系の土器もみられる（11・23）。15は甕の頸部～胴部片で，外面には短沈線が縦に並び内面には粘土紐をつぶした指頭圧痕が明瞭に残る。21は楽浪系土器で鉢の底部付近と考えられる。22は土製円盤である。24は石製支脚である。軟質の流紋岩製で頭部を欠損する。粗雑な加工痕を残すものの素材の形状を生かして使用している。25は敲石である。平坦面および端部に敲打痕をもち，平坦面を中心に煤が付着する。26は磨製石剣の破片である。流紋岩製で入念に研磨し断面菱形に整えている。この石剣はＳＣ８の覆土上層から出土しており，周辺の弥生時代中期の遺構から混入した可能性がある。27は石皿である。扁平な礫の平坦面に磨面を持ち，若干敲打痕も残る。

②土坑（ＳＫ）

・ＳＫ１（第45図）

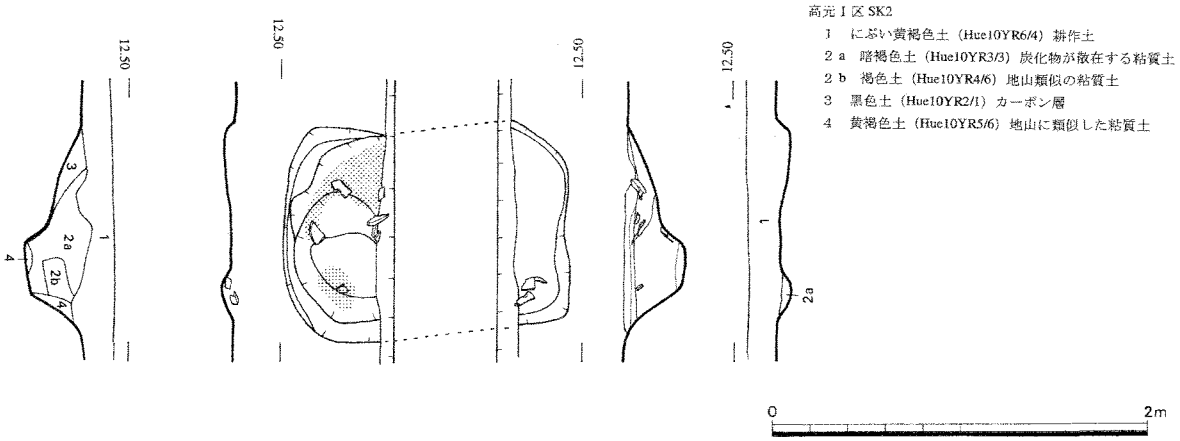
Ａ区中央付近から検出した土坑で，長軸長2.5m，短軸長２ｍである。やや東側に張り出しており，複数の土坑が切り合っている可能性もある。掘り下げは行わず遺構の存在を確認したのみである。

・ＳＫ２（第53図）

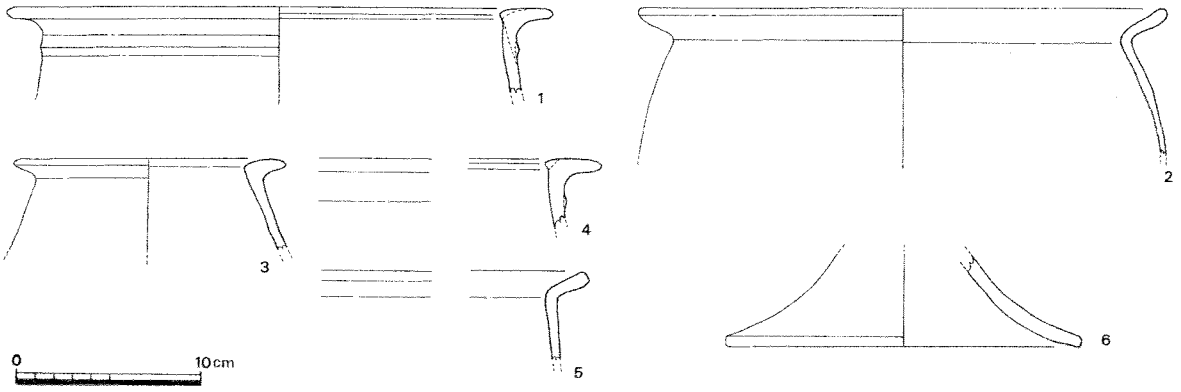
土層観察用の十字ベルトを挟んでＡ区～Ｄ区にかけて検出した。長軸長1.5m，短軸長1.15mの長方形土坑で，断面は逆台形を呈し，深さは0.3mである。上層を中心にカーボンが集中しており，このカーボン層以上でほとんどの土器が出土している。出土土器は鋤先状口縁の甕が主体であるが，２・５のように「く」の字口縁の甕も出土している。弥生時代中期末～後期初頭の土坑である。

・ＳＫ３（第54図）

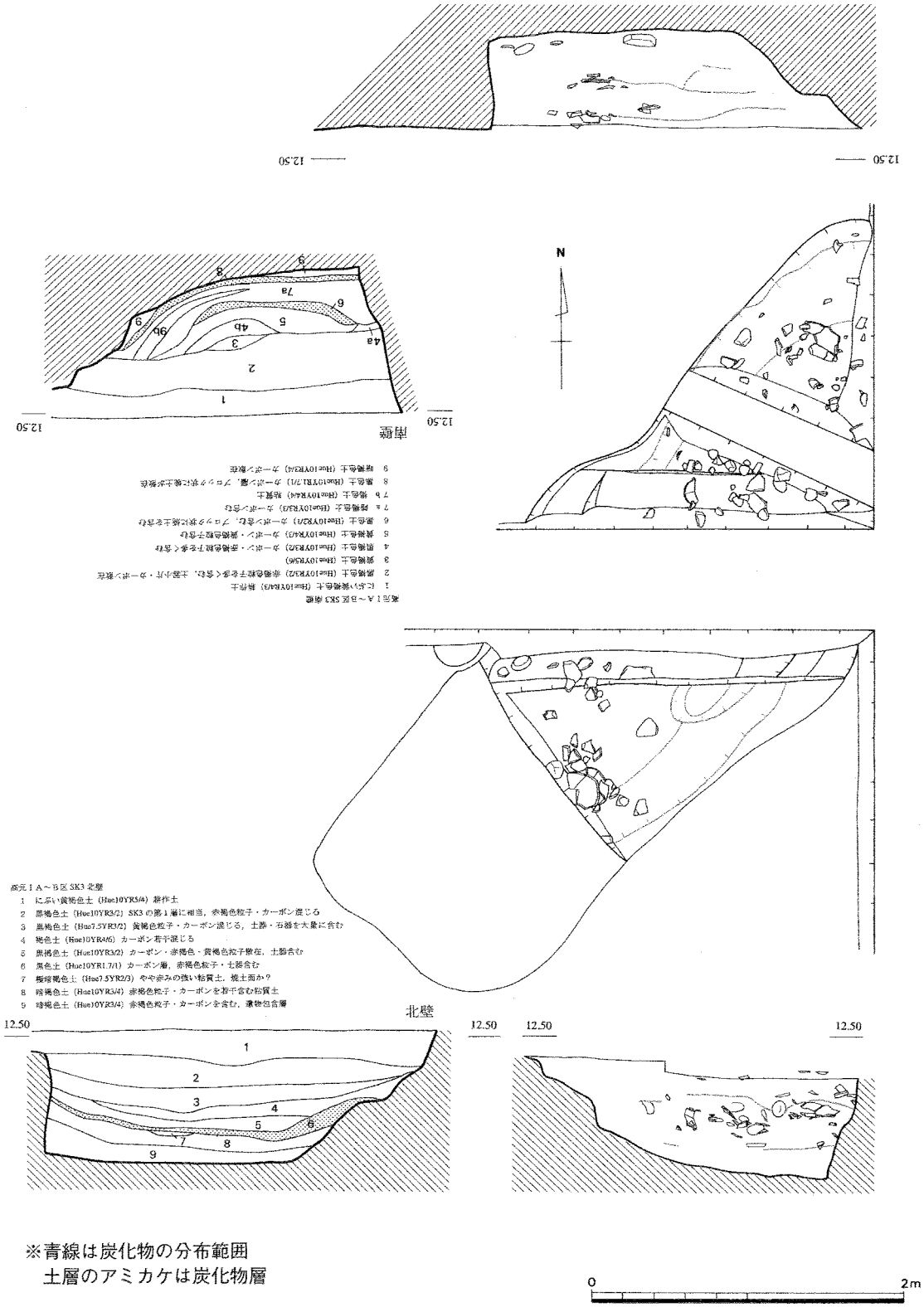
Ａ区～Ｂ区の東壁沿いで検出した長方形の土坑である。長軸長5.5m，短軸長2.25mで検出面からの深さは0.65mである。断面逆台形であるが，土層の中位から下位にかけて厚さ５cm程度のカーボン層を面的に検出した（以下，「カーボン面」と呼称）。このカーボン面は床面だけでなく壁面にもまんべんなく分布しており，壁面の堆積も床面とほぼ同じ厚みを持つ。カーボン面の標高は，南から北に



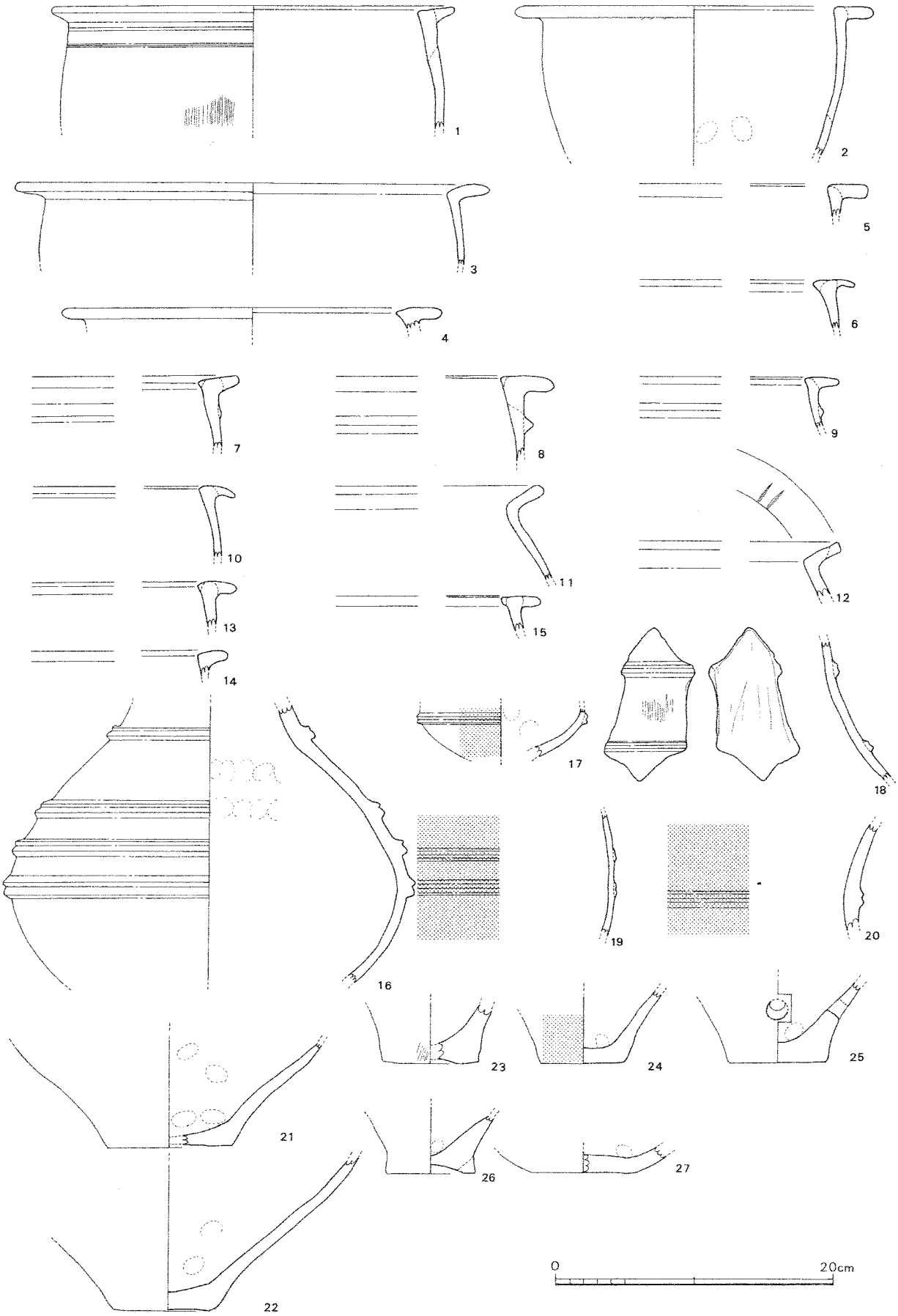
※アミカケは炭化物



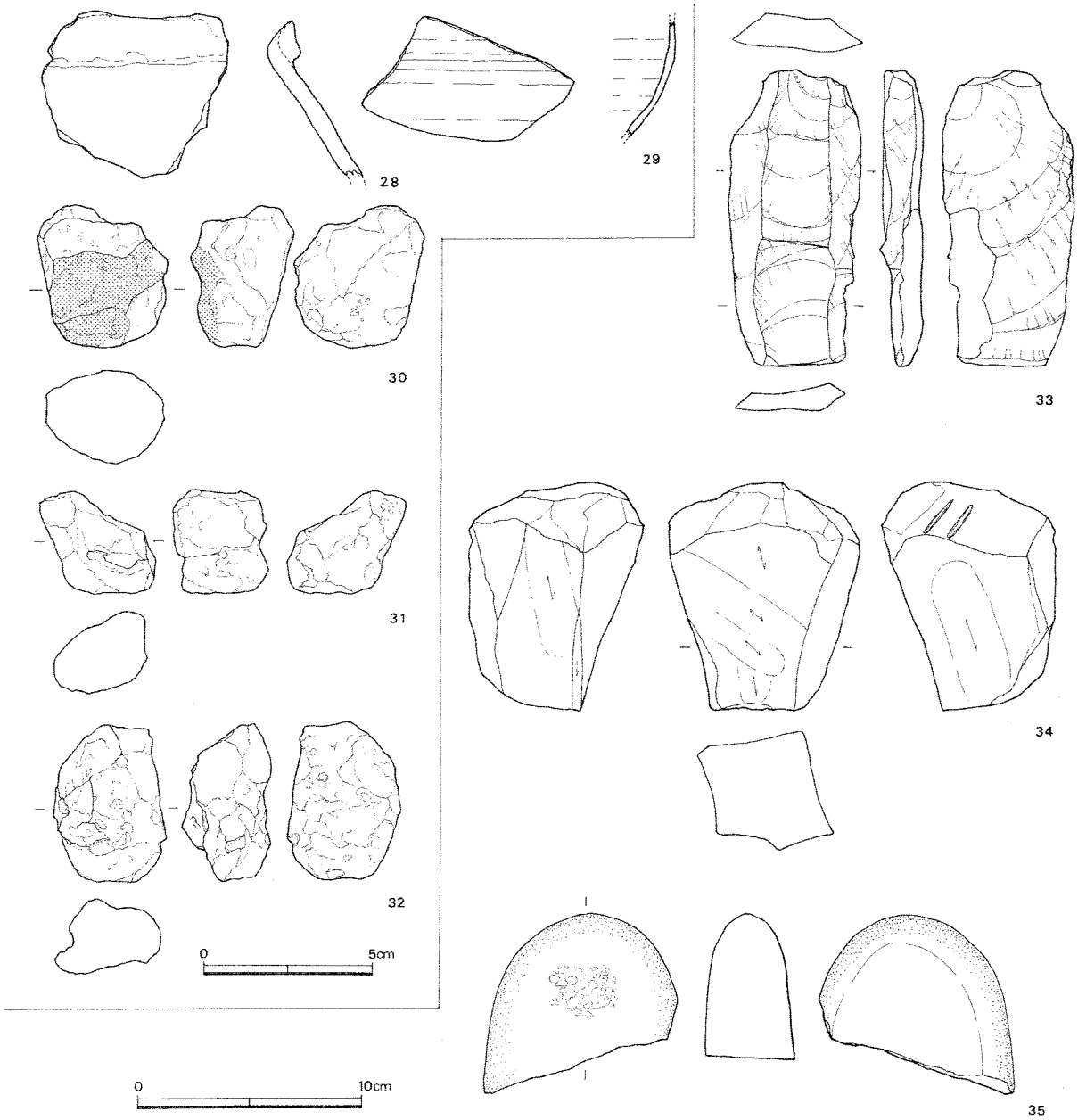
第53図　ＳＫ２実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）



第54図　ＳＫ３実測図（Ｓ＝１/40）

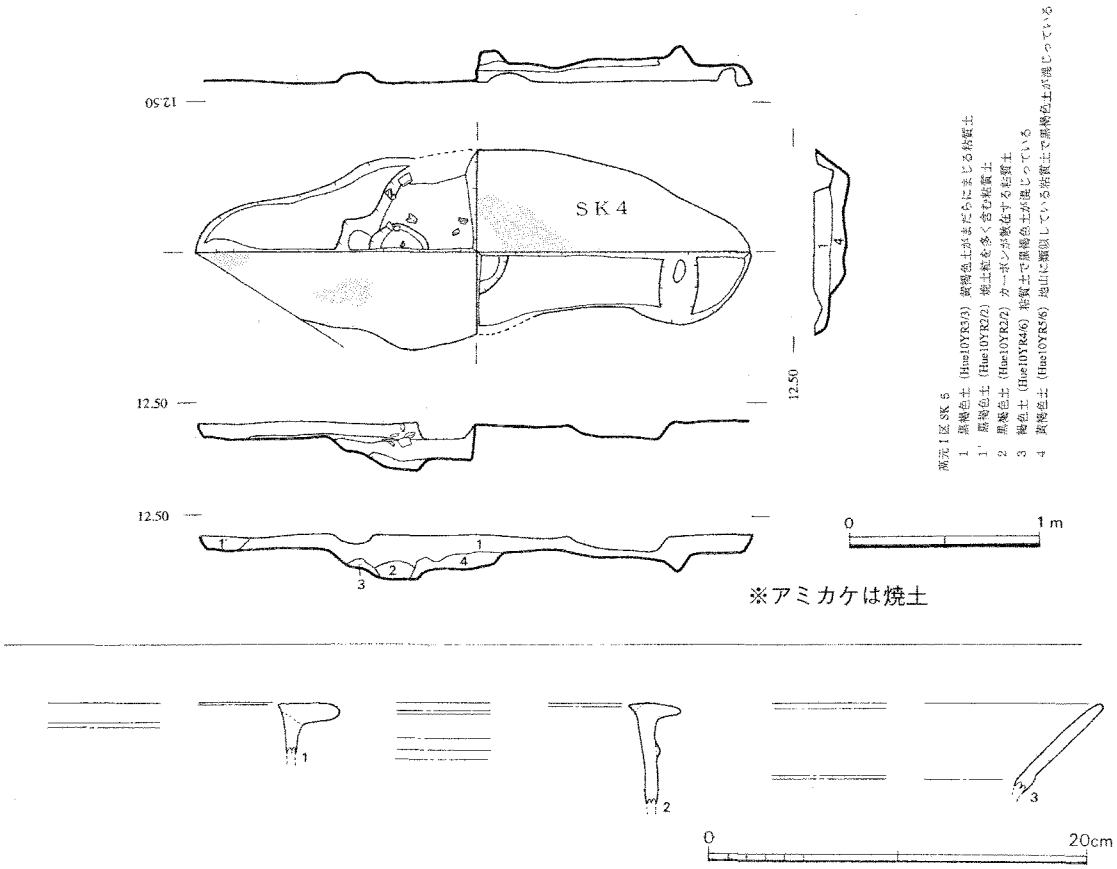


第55図　ＳＫ３出土遺物①（Ｓ＝１／４）

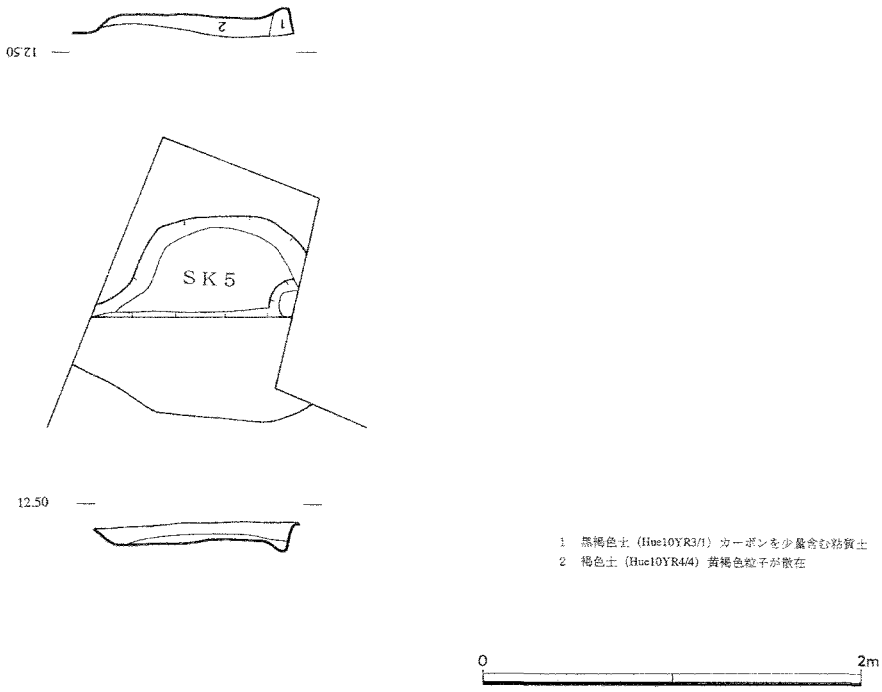


第56図　ＳＫ３出土遺物②（Ｓ＝１/２，１/３）

向けて緩やかに傾斜しているが，部分的にトレンチを入れて確認した土坑床面の標高は，南北ともにほぼ同レベルである。なお，中央ベルト北壁では，同様のカーボン層が上層でも確認でき，面的には確認できなかったものの，検出したカーボン面の上層にも同様のカーボン面が形成されていたのであろう。カーボン面のカーボンを詳細に観察すると，材が焼けて黒化したものが少なからず認められる。また，カーボン面には焼土粒が部分的に混じっており，中央ベルト南壁のカーボン面直下（７層）には焼土が帯状に堆積していた。これらのことを総合すると，この土坑内で複数回木材を燃焼させていた可能性が考えられる。第55図・第56図はＳＫ３出土遺物である。土器は鋤先状口縁の甕形土器を主体とするが，**11**・**12**のような「く」の字口縁の土器も含む。**16**は頸部から胴部にかけて４条のＭ字突帯が巡る壺である。**25**は甕の底部であるが，胴部に焼成後の穿孔が認められる。第56図**28**は無文土器



第57図　ＳＫ４実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）



第58図　ＳＫ５実測図（Ｓ＝１/40）

の口縁部である。口縁部に楕円形の粘土紐を貼り付け，胴部にかけてゆるやかに張り出している。色調は明褐色で，弥生土器の発色に近い。29は楽浪系土器の胴部片である。轆轤による回転なで調整で非常に薄く仕上げている。ＳＫ３検出面からの出土であり，他の土器と比べて高いレベルから出土していることから，ＳＫ３を切るＳＣ３の遺物である可能性が高い。30～32は焼土塊である。いずれも粘土の小塊を手づくねしたもので，胎土には石英・長石を含み弥生土器の胎土に類似している。30は短軸方向に浅い窪みがあり，その周囲に煤がついて黒く変色している。31は粘土を折り曲げてつぶした際の接合痕が観察できる。33～35は石器である。33は玄武岩製の縦長剥片で作業面には上下からの剥離が認められる。後期旧石器時代のものとみられるが，ＳＫ３検出面から出土しており，混入の可能性が高い。34は砥石，35は敲石である。ＳＫ３は弥生時代中期後葉～後期初頭の土坑である。

・ＳＫ４（第57図）

Ａ区南西部で検出した楕円形の土坑である。長軸長2.9m，短軸長１mで深さは0.1m弱と非常に浅い。土坑の西半部はさらに深く掘削されており，一番深いところで0.25mである。周囲にはカーボン層が広がっているが，ＳＫ４はその中でも焼土ブロックや焼土の砕片が堆積した部分である。特に網掛けをした部分は，焼けた粘土がブロック状に堆積していた。出土土器は鋤先状口縁の甕を主体とする。３は古墳時代初頭の高坏口縁部であるが，耕作時の混入と考えられる。弥生時代中期中葉（須玖Ｉ式）の土坑である。

・ＳＫ５（第58図）

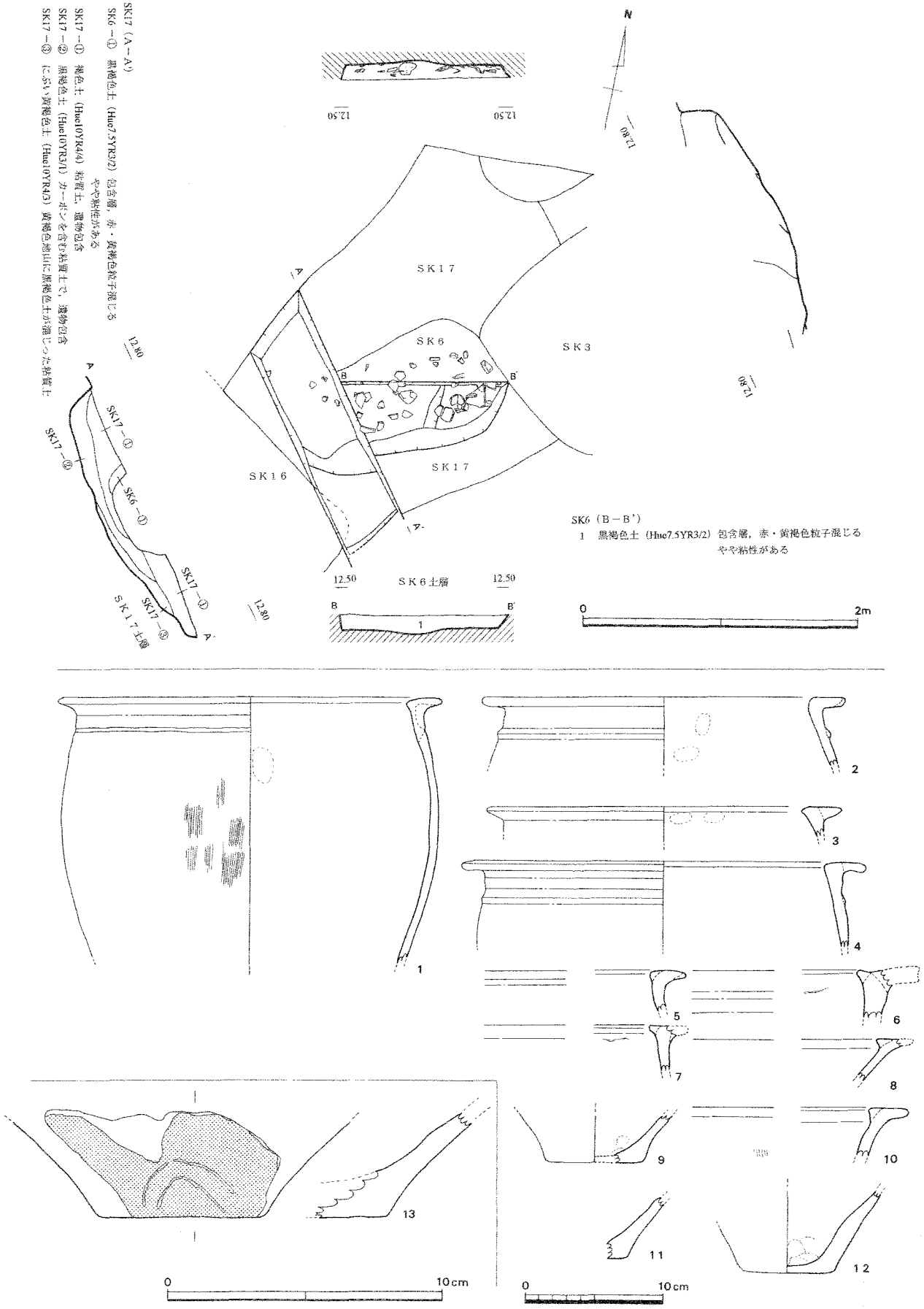
ＳＫ４の北側に隣接する地点で検出した楕円形の土坑である。平成14年度の調査区に切られているため全容は明らかでないが，長軸長１m以上，短軸長1.05mで深さは0.1mの浅い土坑である。覆土にはカーボンがまだらに混じっている。東隅ではこの土坑を切るピットを検出している。時期を判断できる遺物は出土しなかったが，検出状況からＳＫ４とセットをなすものと思われ，弥生時代中期中葉の土坑と判断した。

・ＳＫ６（第59図）

Ｂ区北側で検出した楕円形土坑である。ＳＫ17を切りＳＫ３に切られている。長軸長1.3m，短軸長0.9mで深さは0.15mである。南半部を半掘したのみであるが，土坑の床面は東から西に向けて緩やかに傾斜している。出土遺物は鋤先状口縁を有する甕形土器が主体である。５～７のように口縁部が内面に突出するものもみられる。８・10は高坏である。13は線刻絵画土器で，底部付近にヘラ描きでドーム状の曲線が２条重なるように描かれている。外面は丹塗りが施される。これらの土器から，ＳＫ６は弥生時代中期中葉～後葉の土坑と考えられる。

・ＳＫ７（第45図）

Ｂ区東壁沿いで検出した楕円形土坑である。東半は調査区外であるが，現状で長軸長２m，短軸長1.3mである。検出時点で出土遺物はなかったが，周辺の遺構の在り方から弥生時代中期の土坑と考えられる。



第59図　ＳＫ６・ＳＫ17実測図（Ｓ＝１/４）およびＳＫ６出土遺物（Ｓ＝１/２，１/４）

・ＳＫ８（第60図）

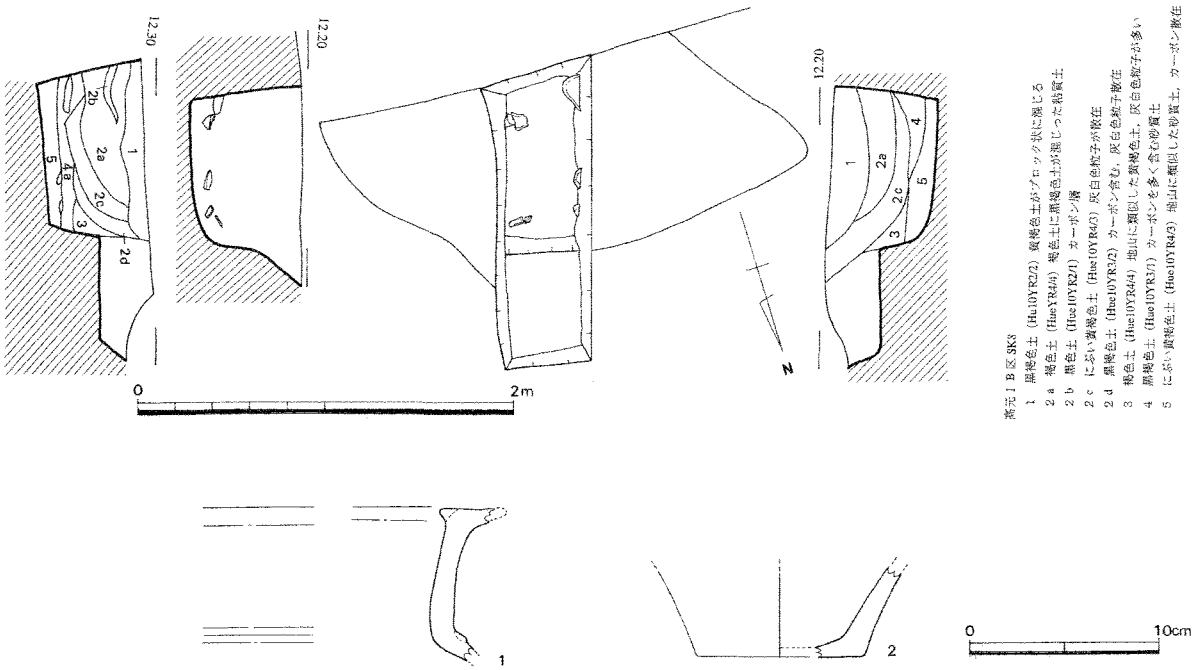
Ｂ区南端部で検出した土坑である。長方形土坑と考えられるが，南半部は調査区外に伸びている。検出時の規模は長軸長1.7m，短軸長１m，深さ0.55mである。トレンチによる掘り下げのみであり，出土遺物も少ないが，弥生時代中期中葉～後葉の土坑と考えられる。

・ＳＫ９（第61図）

Ｃ区東寄りで検出した楕円形土坑である。長軸長1.8m，短軸長0.85m，深さ0.25mである。土坑の西半部は，東半部と比べて部分的に深く掘られており，西端部ではＳＫ９を切るようにピットが掘削されている。床面付近には焼土およびカーボン層が面的に広がっていた。第62図・第63図はＳＫ９出土遺物である。土器は鋤先状口縁の甕形土器を主体とし，時期的に弥生時代中期後葉の土器群が多いものの，**24**・**25**のようにやや古手の土器も認められる。**10**～**13**は遠賀川以東系のいわゆる「はね上げ口縁」甕形土器である。**21**・**22**のようなミニチュア土器も出土している。**29**は弥生時代中期土器を転用した土製円盤である。石器は敲石が主体となる。**32**は扁平な円礫の周縁部に敲打痕を残す。**31**は砥石である。**33**は流紋岩の岩塊に穿孔を施したものである。半分に欠損し表面の剥落も著しい。

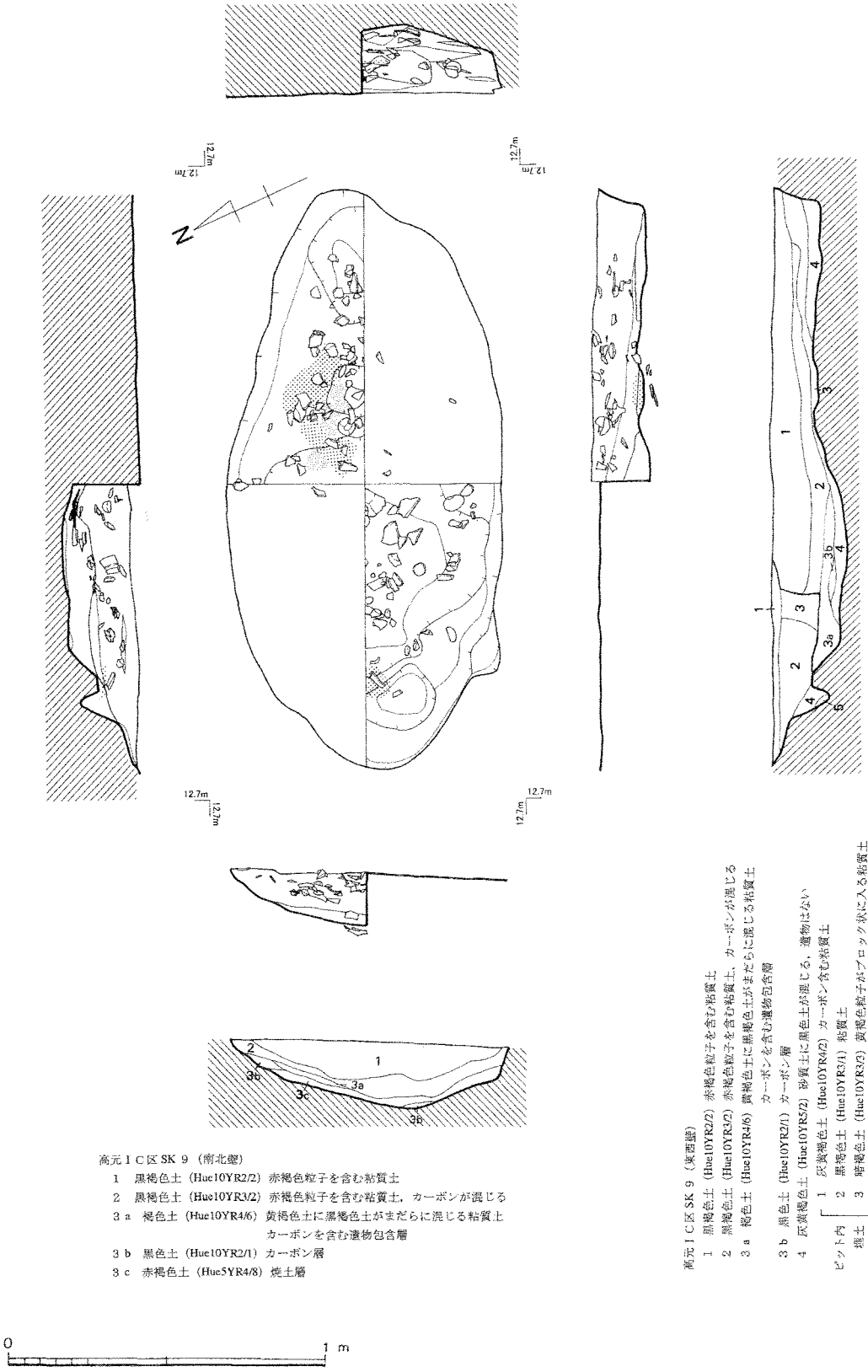
・ＳＫ10（第65図）

Ｃ区西寄りで検出した楕円形土坑である。長軸長2.6m，短軸長1.7m，深さ0.15mである。土坑北半部を中心にカーボンの堆積が認められた。中央部は弥生時代後期中葉の小児甕棺墓（１号甕棺）に切られている。出土遺物は土器２点を図示した。**1**ははね上げ口縁の甕形土器で，口縁端部に粘土紐を貼り付けて凸部を作り出している。**2**は**1**とは別個体の底部である。このほかにも石皿１点が出土している。これらの土器から，ＳＫ10は弥生時代中期末～後期初頭の土坑と考えられる。

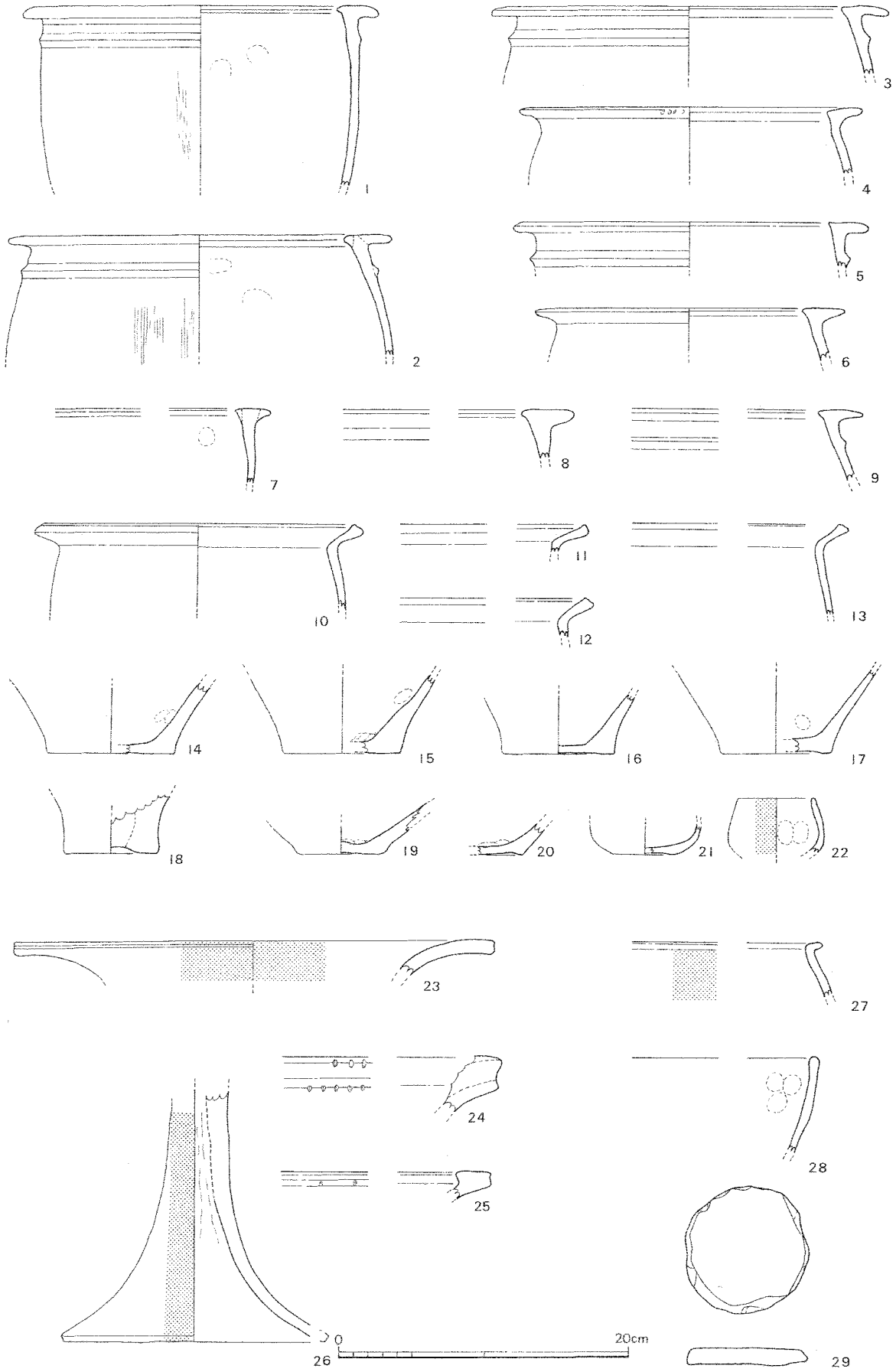


第元１Ｂ区SK8
1　黒褐色土（Hue10YR2/2）質褐色土がブロック状に混じる
2ａ　褐色土（Hue7R4/4）褐色土に黒褐色土が混じった粘質土
2ｂ　黒色土（Hue10YR2/1）カーボン層
2ｃ　にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）灰白色粒子が散在
2ｄ　黒褐色土（Hue10YR3/2）カーボン含む，灰白色粒子散在
3　褐色土（Hue10YR4/4）地山に類似した黄褐色土，灰白色粒子が多い
4　黒褐色土（Hue10YR3/1）カーボンを多く含む砂質土
5　にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）地山に類似した砂質土，カーボン散在

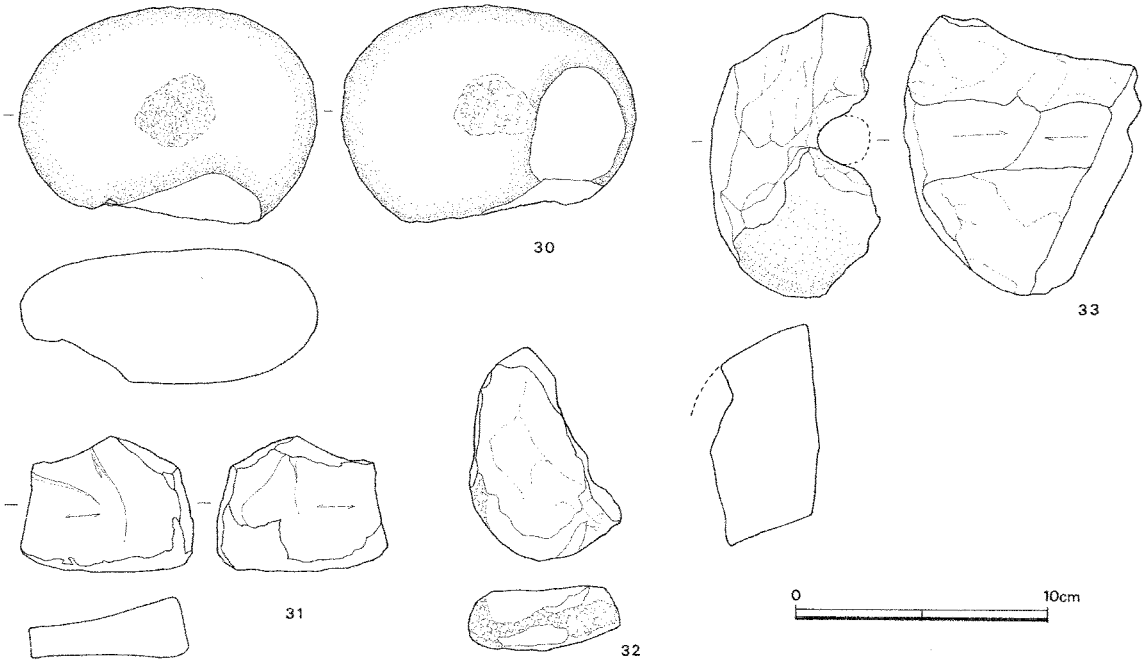
第60図　ＳＫ８実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）



第61図　ＳＫ９実測図（Ｓ＝１/20）　※細かいアミカケは焼土，荒いアミカケは炭化物



第62図　ＳＫ９出土遺物①（Ｓ＝１／４）



第63図　ＳＫ９出土遺物②（Ｓ＝１/３）

・ＳＫ11（第45図）

ＳＫ10の北に隣接するややいびつな長方形土坑である。中央ベルトに切られるものの，現状で長軸長2.1m，短軸長1.4mである。遺構の存在を確認したのみで具体的な調査は行っていないが，検出時に出土した土器から弥生時代中期後半の土坑と考えている。

・ＳＫ12（第45図）

Ｄ区南東隅で検出した方形土坑である。一辺が1.1mで深さ0.5mである。出土土器から弥生時代中期後半の土坑と考えられる。

・ＳＫ13（第45図）

ＳＫ12の北西部に隣接する長方形土坑である。検出時の規模は長軸長1.8m，短軸長1.1mである。遺構の存在を確認したのみで掘り下げは行わなかった。時期はＳＫ12との切り合いから弥生時代中期後葉以前である。

・ＳＫ14

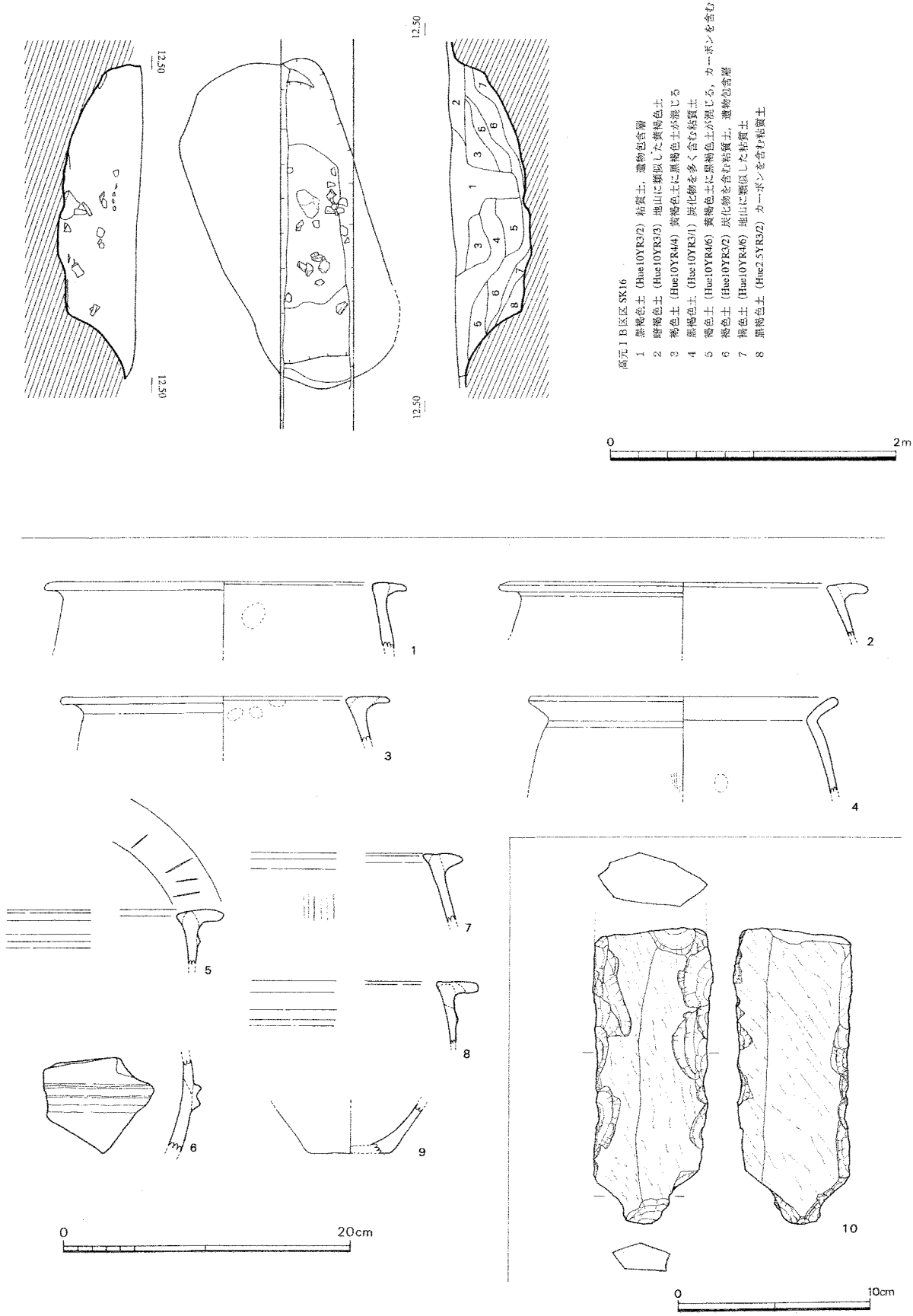
欠番

・ＳＫ15（第50図）

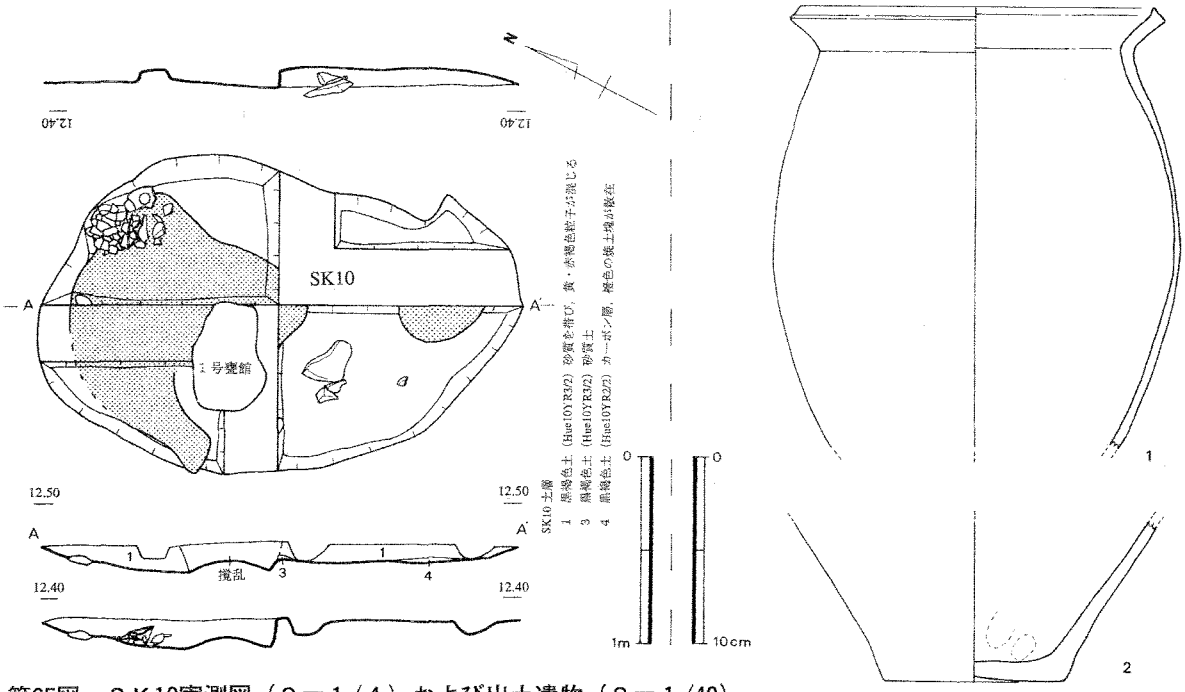
ＳＣ８と一括して記載済み。

・ＳＫ16（第64図）

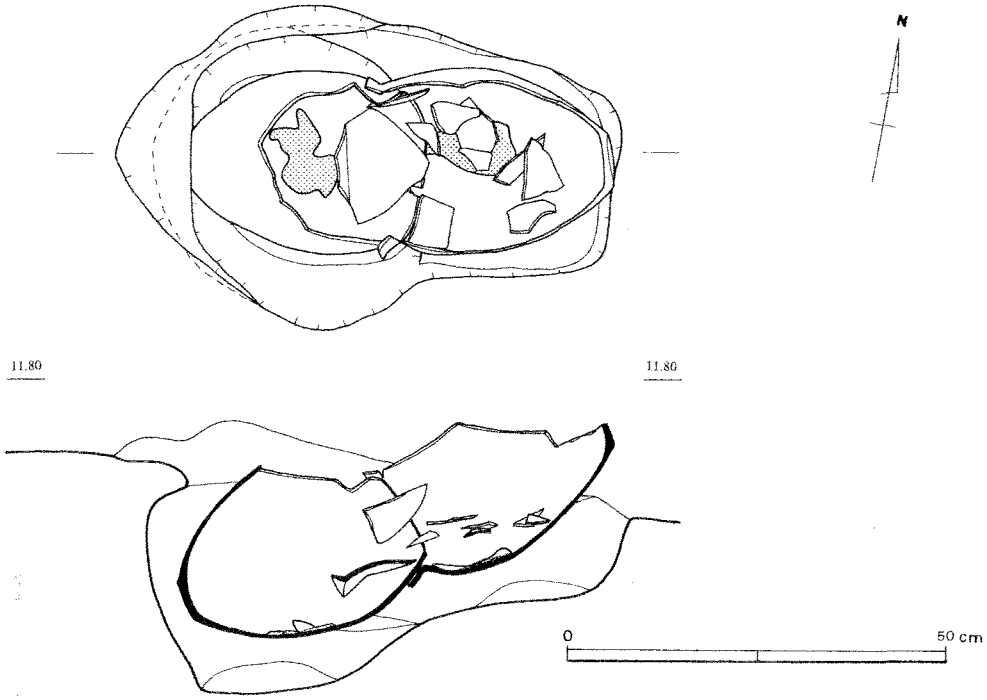
Ｂ区北寄りで検出した長方形土坑である。長軸長2.3m，短軸長1.1m，深さ0.55mである。ＳＣ10およびＳＫ17を切っているが，ＳＣ５に切られている。断面逆台形であるが，土層の観察では土坑埋没後に中央部にピットが掘削されている。覆土はカーボンおよび地山類似の黄褐色粘質土が互層で堆



第64図　ＳＫ16実測図（Ｓ＝１／４）および出土遺物（Ｓ＝１／４，１／３）



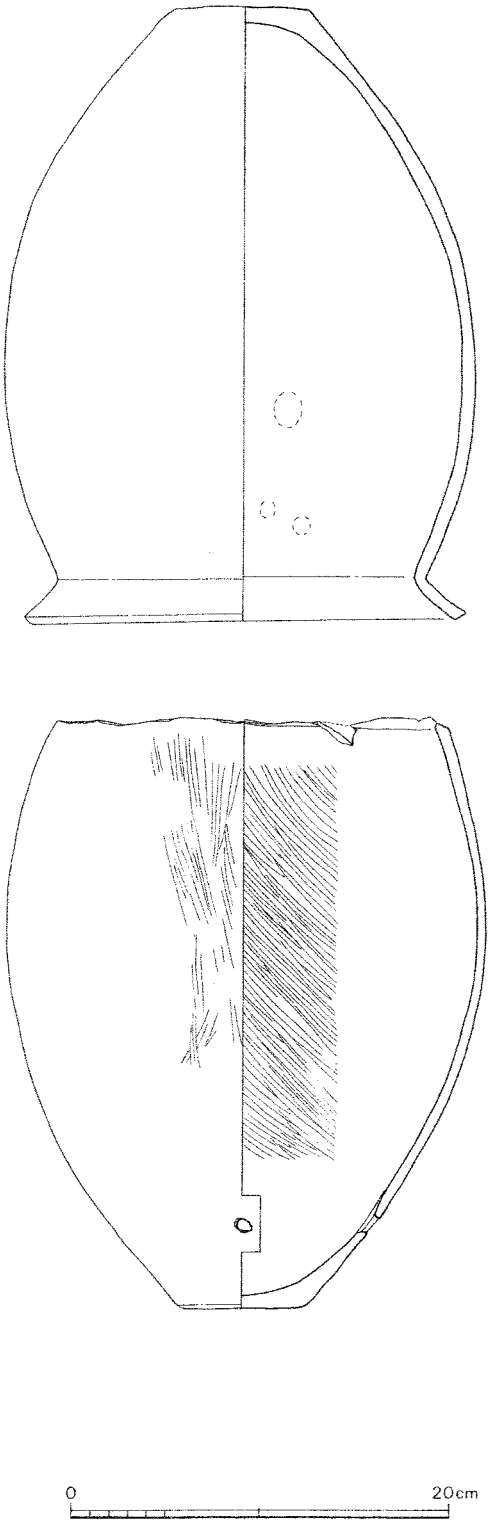
第65図　ＳＫ10実測図（Ｓ＝１／４）および出土遺物（Ｓ＝１/40）　※アミカケは炭化物



第66図　１号甕棺検出状況（Ｓ＝１/10）　※アミカケは赤色顔料

積している。出土土器は鋤先状口縁の甕形土器を主体とするが，４のように「く」の字口縁の甕形土器も出土している。10は磨製石剣の未成品と考えられる。安山岩製で素材礫の稜線が鎬になるように置き，両側縁を中心に入念な調整剥離を施す。基部は粗く打ち欠いて抉りを作り出している。

出土土器から弥生時代中期中葉～後葉の土坑と考えられる。



第67図　１号甕棺実測図（Ｓ＝１／４）

・ＳＫ17（第59図）

Ｂ区北よりで検出した土坑である。ＳＫ３・ＳＫ６・ＳＫ16・ＳＣ10に切られており，本来の形状は不明であるが，北側の堀方が直線的であることから，方形もしくは長方形の土坑と考えている。現存する規模は長軸長2.4m，深さ0.3mである。出土遺物は土器の小片が出土したのみであるが，周辺遺構との切り合い関係から弥生時代中期中葉の土坑と考えている。

・ＳＫ18（第45図）

Ｂ区南東部で検出した楕円形土坑である。長軸長0.9m，短軸長0.7m，深さ0.2mである。ＳＣ８が上面を削平しており，本来はより深かったものと考えられる。出土土器は弥生時代中期後葉を主体としており，この時期の土坑と考えられる。

・ＳＫ19（第45図）

Ｂ区南西隅で検出した楕円形土坑である。検出時の規模は長軸長1.6m，短軸長1.1mである。掘り下げは行っておらず深さや時期は不明であるが，土坑の形状から弥生時代中期の土坑と考えられる。

③甕棺墓

・１号甕棺墓（第66図，第67図）

Ｃ区北寄りで検出した合わせ口甕棺である。下甕の口縁部を打ち欠いて上甕で覆っている。副葬品は認められなかったが，上甕および下甕の床面に赤色顔料が付着していた。第67図は甕棺実測図である。器高30cm程度の中型甕で，やや不安定な平底から胴部上位がやや張り，いったんくびれて「く」の字形口縁がつく。下甕は口縁部を打ち欠いているが，上甕と同様「く」の字形口縁がついていたものと思われる。胴部下位に焼成後の穿孔が認められる。これらの特徴から，弥生時代後期中葉の小児甕棺と考えられる。

●高元Ⅱ区

高元Ⅱ区は，昨年度調査区の東西両側に５×10mの調査区を設定して調査を行った。調査区名は西から高元ⅡＡ区，昨年度調査区を高元ⅡＢ区，東側を高元ⅡＣ区と称した（第68図）。本年度の高元Ⅱ区の調査面積は20㎡である。

a．基本土層（第69図・第70図）

高元Ⅱ区は，１層の耕作土および鉄分の沈着した２層まで約20cm堆積し，北半部には２次堆積土である３層が堆積してる。ⅡＡ区では２層・３層を掘り下げた時点で大量の土器が出土するとともに南半部を中心にブロック貝層が数カ所で確認された。遺構群の切り合いを確認できたのは，４層を30cm掘り下げた段階であったが，後述するように，本来は４層上面が遺構検出面であった可能性が高い。ⅡＣ区は１層～３層の堆積はⅡＡ区と同様であるが，弥生時代中期～古墳時代初頭の包含層である３ｂ層が約50cm堆積し，この包含層を除去して遺構の切り合いが確認できた。ⅡＡ区とⅡＣ区で遺構検出面の標高を比較すると，約30cmほどⅡＣ区の方が低い。これは，ⅡＡ区に比べてⅡＣ区の方が削平の影響を多く受けたと理解することも可能であるが，両調査区検出の竪穴住居址の床面標高を比較すると，遺構検出面の標高と同様約60cmほどⅡＣ区の方が低く，弥生時代の旧地形自体が西から東へと傾斜していた可能性が高い。ⅡＣ区に堆積している３ｂ層の遺物包含層は，傾斜面を平滑化する際に西側の土砂を削平して東側に土盛りした結果形成されたものと推測される。ⅡＡ区の遺構群は弥生時代中期の住居址および土坑群が主体となるのに対して，ⅡＣ区では古墳時代初頭の住居址群が主体となる。ⅡＣ区の遺構検出面より上位に堆積した３ｂ層では弥生時代中期の土器が大量に出土しており，先の推測を裏付けるものである。

b．遺構と遺物

①包含層出土遺物

基本土層の項で述べたとおり，高元Ⅱ区では遺構検出面より上位で大量の遺物の出土をみた。ここではⅡＡ区４層，ⅡＣ区３ｂ層に分けてそれぞれの出土遺物を紹介する。

・ⅡＡ区４層（第71図～第74図）

第71図はⅡＡ区４層遺物出土状況である。４層掘り下げ後に確認した遺構検出状況と合成すると，4層出土遺物のほとんどが，住居址もしくは土坑の分布範囲と重なることがみてとれる。したがって，4層は本来土坑もしくは住居址の覆土であり，出土遺物もいずれかの遺構に伴うものであった可能性が高い。

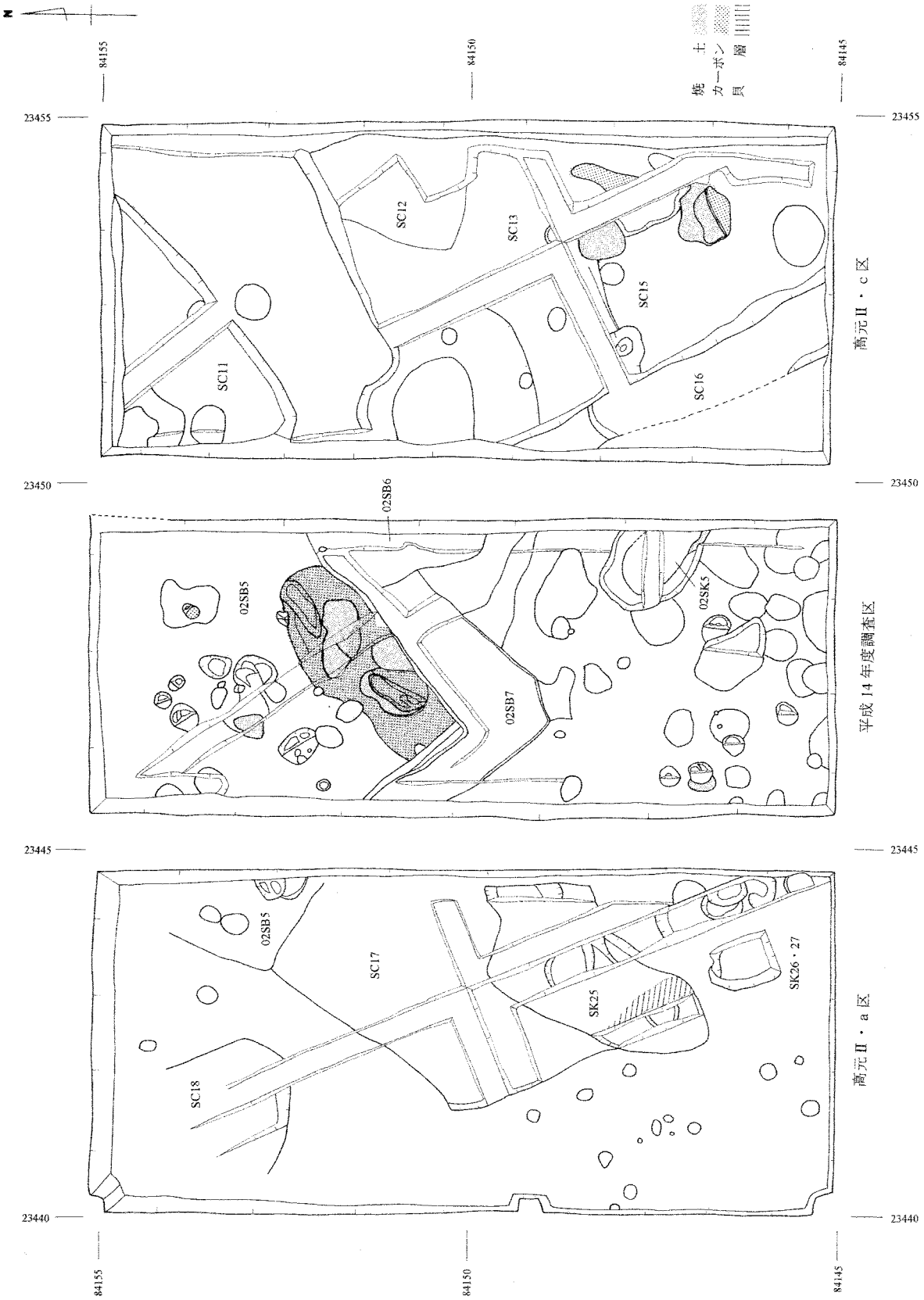
第72図は出土土器である。弥生時代中期後葉から後期初頭の土器を主体とする。**3**・**5**・**6**はＳＫ25，**4**・**8**はＳＫ26，**7**・**9**・**10**・**11**はＳＣ17にそれぞれ伴う土器と考えられる。これらの土器は，後述する遺構内出土土器の時期と矛盾はない。第73図は出土石器である。**12**はマイクロコアで耕作時の混入と考えられる。**14**・**18**はＳＣ17，**17**はＳＫ25に伴うものと考えられる。**16**は九州型石錘である

が，ブロック貝層周辺から出土しておりＳＫ25に本来伴っていた可能性が高い。15は敲石で平坦面には敲打痕および磨面が，側面には鼠歯状の敲打痕が認められる。17も敲石である。扁平な円礫の平坦面に敲打痕が集中しているが，両側面にも敲打による窪みが２カ所ずつ認められる。18は石皿である。周辺から中央部にかけてゆるやかにくぼんでおり，長軸断面および短軸断面ともに湾曲している。第74図は骨角器および鉄製品である。19は袋状鉄斧である。袋部を一部欠損するものの，全体の形状は把握できる。体部中位に最大厚を有し，袋部にかけて徐々に厚みを減じる。袋部は断面円形に折り曲げている。刃部は片刃に研ぎ出す。ブロック貝層周辺から出土しており，本来はＳＫ25もしくはＳＣ17に伴う可能性が高い。20はヤス状刺突具でＳＫ25に伴う遺物である。四肢骨を素材とし先端部を鋭利に研ぎ出している。最大厚は先端部付近にあり，やや蝮頭状に膨らんでいる。21は鯨骨製アワビオコシである。ＳＫ25のブロック貝層周辺から４つに折れた状態で出土した。基部から刃部にかけてやや撥型に開く平面形で，基部片側には矩形の突起がつく。側面観はゆるやかに湾曲している。表面は非常に緻密で硬質であるが，裏面には多孔質な素材面をとどめている。なお，基部の折れ面にはタガネ状工具による傷が認められ，この部分は廃棄する際に意図的に折り取ったものと考えられる。

・ⅡＣ区３ｂ層（第75図～第77図）

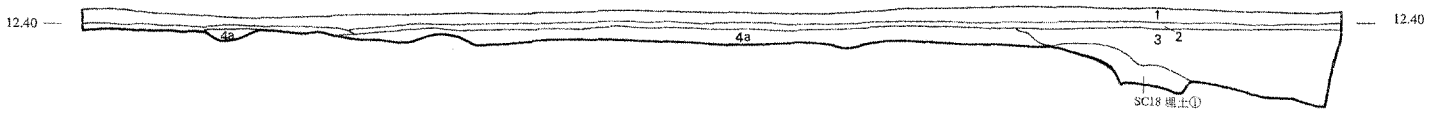
第75図は高元ⅡＣ区３ｂ層遺物出土状況である。調査区南西隅に片寄る傾向にあるものの，調査区南半部を中心に満遍なく出土している。出土層位は３ｂ層を中心に遺構検出面の上面にかけて分布している。出土遺物は弥生時代中期の土器を中心に，韓半島系土器や青銅製品などが多く出土している（第76図～第77図）。１・２は弥生時代中期後葉～後期初頭の土器で，調査区南西隅の３ｂ層から出土した。３・４は古墳時代初頭の土器で同じく調査区南西隅の３ｂ層から出土している。５～13は韓半島系土器である。５～７は楽浪系土器で５・６は壺口縁部と考えられる。７は鉢底部である。８～13は叩き目のついた胴部片である。９～11には横位の沈線が認められる。14～27はガラス製小玉および管玉である。17・25はコバルトブルー，14～16・18～24・27がエメラルドグリーンである。26は碧玉製の管玉である。28～31は小型の石器類である。28はマイクロコアで２面の作業面が確認できる。29・30は石鏃である。29は安山岩製で，基部下面を研磨している。30は黒曜石製である。31は棒状石錘である。欠損が著しいが紡錘形に近い形態と推測される。長軸両端部を斜めに研磨して２孔をあけている。32～36は銅鏃である。基本的に翼と基部の間が関で明瞭に区別されるタイプで，翼には樋も認められる。翼と基部の長さは，基部の方が長いもの（32・35），翼の方が長いもの（33），長さが等しいもの（34）がある。37・38は青銅鏡である。37は内区～外区にかけての鏡片で鏡式は不明。38は内行花文鏡の内区で連弧文や銘文の一部も確認できる。39は袋状鉄斧と考えられる。袋部から刃部にかけてすぼまる形態で袋部の片側は開いている。40～45は大型の石器である。40～41は敲石で41には部分的に煤が付着している。44は石製支脚である。上半部を欠損するものの正面観は直角三角形をしていたものと推測される。底部から垂直に立ち上がる側面には煤が付着している。45は石皿である。

これらの出土遺物はほとんどが二次堆積と考えられるが，44・45はそれぞれＳＣ16・ＳＣ15に伴う可能性も考えられる。



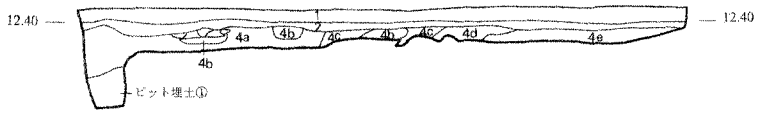
第68図　高元Ⅱ区遺構配置図（S＝1/80）

西壁



高元ⅡＡ区 西壁
1　にぶい黄褐色土（Hue10YR5/4）耕作土
2　にぶい赤褐色土（Hue10YR4/4）水田床土，鉄分多い
3　にぶい黄褐色土（Hue10YR5/4）角レキ多く含む
4ａ　黒褐色土（Hue10YR3/2）包含層，角レキを含む
SC18 埋土①　黒褐色土（Hue10YR3/2）しまりのある粘質土

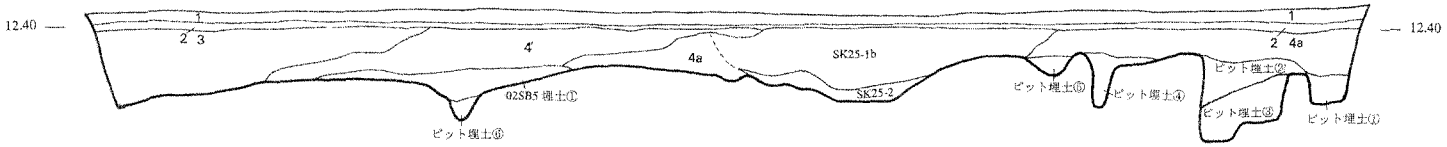
南壁



高元ⅡＡ区 南壁
1　にぶい黄褐色土（Hue10YR5/4）耕作土
2　にぶい赤褐色土（Hue10YR4/4）水田床土，鉄分多い
4ａ　黒褐色土（Hue10YR3/2）包含層，角レキを含む
4ｂ　暗褐色土（Hue10YR3/3）中央部以外は密度は低いものの貝殻が混じる
4ｃ　黒褐色土（Hue10YR3/2）黄褐色粒子を含む粘質土
4ｄ　暗褐色土（Hue10YR3/3）黄褐色粒子を含む粘質土
4ｅ　暗褐色土（Hue10YR3/4）黄褐色・赤褐色レキを多く含む粘質土
ピット埋土①　明黄褐色土（Hue10YR6/6）黒褐色土がまだらにまじった粘質土

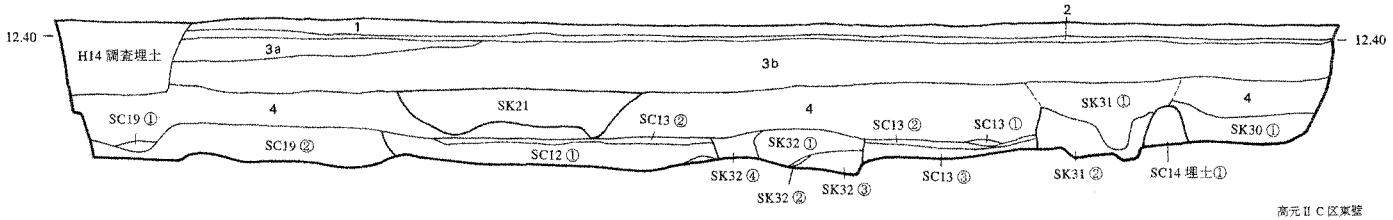
高元ⅡＡ区 東壁
1　にぶい黄褐色土（Hue10YR5/4）耕作土
2　にぶい赤褐色土（Hue10YR4/4）水田床土，鉄分多い
3　にぶい黄褐色土（Hue10YR5/4）角レキ多く含む
4'　黒褐色土（Hue10YR3/1）古墳初頭の遺物を含む包含層
4ａ　黒褐色土（Hue10YR3/2）包含層，角レキを含む
ピット埋土①　明黄褐色土（Hue10YR6/6）黒褐色土がまだらにまじった粘質土
ピット埋土②　明黄褐色土（Hue10YR6/6）小レキを多く含む粘質土
ピット埋土③　黄褐色土（Hue10YR5/6）粘質土
ピット埋土④　黒褐色土（Hue10YR3/1）黄褐色粒子を含む粘質土
ピット埋土⑤　黒褐色土（Hue10YR2/2）カーボン・黄褐色粒子を含む粘質土
ピット埋土⑥　黒褐色土（Hue10YR3/2）カーボンを含む粘質土
02SB5 ①層　灰黄褐色土（Hue10YR4/2）黄褐色粒子を多く含む粘質土
※ SK25 1ｂ，２層については個別の図面参照

東壁



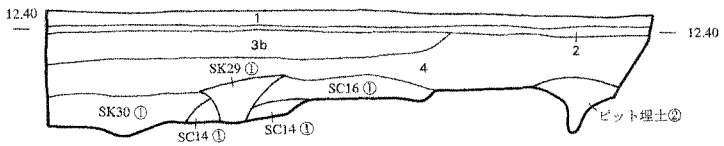
第69図　高元ⅡＡ区土層図（Ｓ＝１/60）

東壁



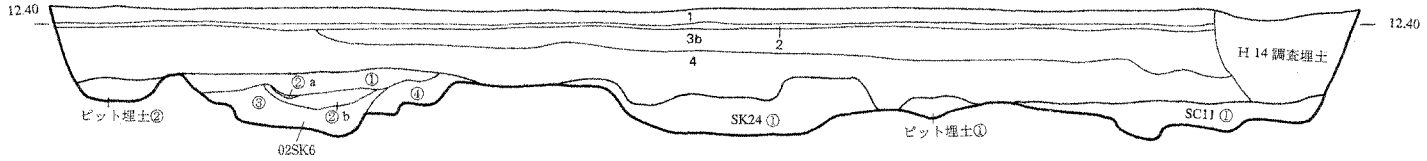
高元ⅡC区東壁
1　にぶい黄褐色土（Hue10YR5/4）耕作土
2　にぶい赤褐色土（Hue10YR4/4）水田床土
3 a　褐灰色土（Hue10YR4/1）土器の小片を多く含む層
3 b　黒褐色土（Hue10YR3/1）
4　黒褐色土（Hue10YR3/1）
SC19 ①　橙色（Hue5YR6/6）焼土層
SC19 ②　にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）黄褐色・赤褐色粒子を含みカーボンが散在
SK21 ①　黒褐色土（Hue10YR3/2）赤褐色粒子やカーボンを含む
SC12 ①　灰黄褐色土（Hue10YR4/2）赤褐色粒子・カーボンを含む粘質土
SK32 ①　暗褐色土（Hue10YR3/3）カーボンを含む粘質土
SK32 ②　赤褐色土（Hue5YR4/8）焼土面
SK32 ③　にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）カーボンが混じった粘質土
SK32 ④　にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）カーボン・赤褐色粒子を含む粘質土
SC13 ①　橙色（Hue7.5YR6/6）焼土面
SC13 ②　黒褐色土（Hue10YR3/1）カーボンが含まれる
SC13 ③　褐色土（Hue10YR4/4）黒褐色土に黄褐色土がまだらに混じる
SK31 ①　黒褐色土（Hue10YR3/2）カーボンを含む粘質土
SK31 ②　黒褐色土（Hue10YR3/1）黒褐色土に黄褐色粘質土がまだらに混じる
SK30 ①　黒褐色土（Hue10YR3/2）カーボンを多く含む粘質土
SC14 ①　暗褐色土（Hue10YR3/3）黒褐色土に黄褐色土がまだらに混じる
④　灰黄褐色土（Hue10YR4/2）黒褐色土に黄褐色土が混じる粘質土

南壁



高元ⅡC区南壁
1　にぶい黄褐色土（Hue10YR5/4）耕作土
2　にぶい赤褐色土（Hue10YR4/4）水田床土
3 b　黒褐色土（Hue10YR3/1）
4　黒褐色土（Hue10YR3/1）
SK30 ①　黒褐色土（Hue10YR3/2）カーボンを多く含む粘質土
SC14 ①　暗褐色土（Hue10YR3/3）黒褐色土に黄褐色土がまだらに混じる
SK29 ①　黒褐色土（Hue10YR3/2）カーボンを多く含む粘質土
SC16 ①　黒褐色土（Hue10YR3/2）カーボンが多く，赤褐色粒子を含む粘質土
SC16 ②　赤褐色土（Hue5YR4/8）焼土面
ピット埋土②　明黄褐色土（Hue10YR6/6）小レキを含む粘質土

西壁

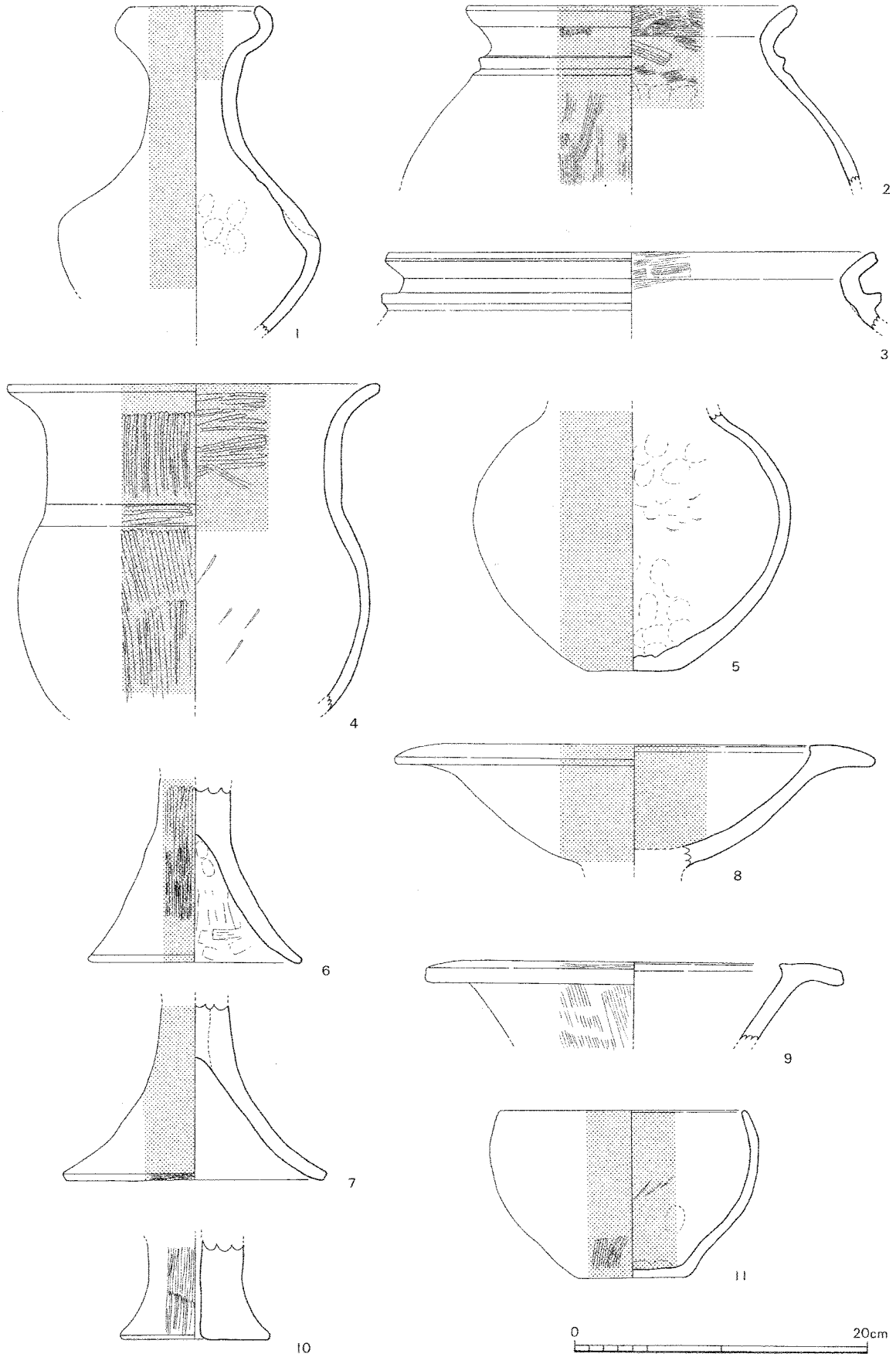


高元Ⅱ西壁
1　にぶい黄褐色土（Rue10YR5/4）耕作土
2　にぶい赤褐色土（Hue10YR4/4）水田床土
3b　黒褐色土（Hue10YR3/1）
4　黒褐色土（Hue10YR3/1）
ピット埋土②　明黄褐色土（Hue10YR6/6）小レキを含む粘質土
02SK6 ①　黒褐色土（Hue10YR3/2）赤褐色粒子が混じる
②a　褐色土（Hue7.5YR4/6）焼土塊が集中している
②b　褐色土（Hue7.5YR4/6）黒褐色土に黄褐色土を混じる粘質土、カーボン含む
③　黒色土（Hue10YR2/1）赤褐色粒子とカーボンを含む
④　灰黄褐色土（Hue10YR4/2）黒褐色土に黄褐色土がまだらに混じる、カーボン含む
SK24①　黒褐色土（Hue10YR3/2）カーボン・赤褐色粒子を多く含む
ピット埋土①　明黄褐色土（Hue10YR6/6）黒褐色土がまだらに混じった粘質土
SC11①　灰褐色土（Hue7.5YR4/2）粒質土で明赤褐色粒子が散在

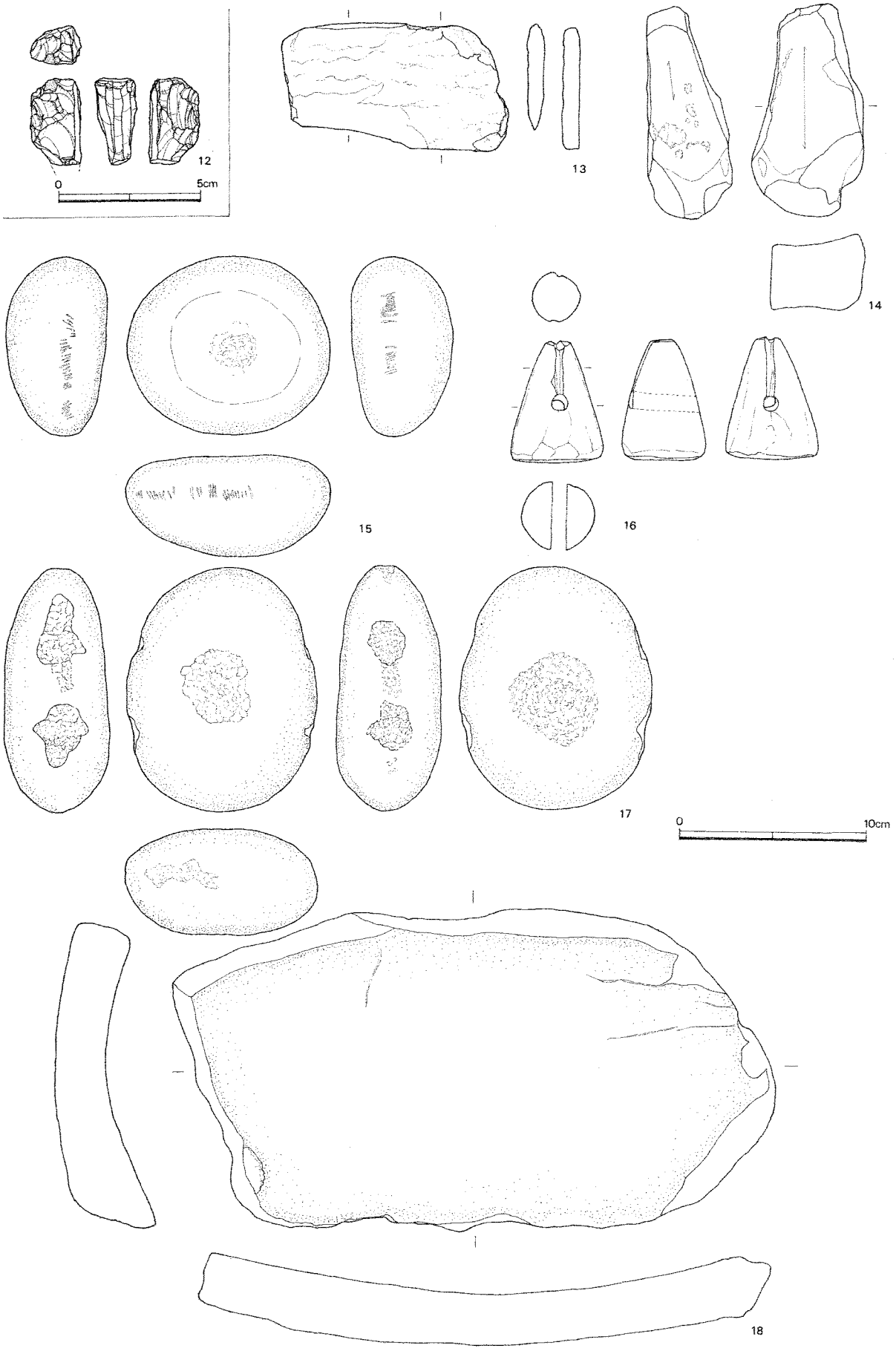
0　2m

第70図　高元ⅡC区土層図（S＝1/60）

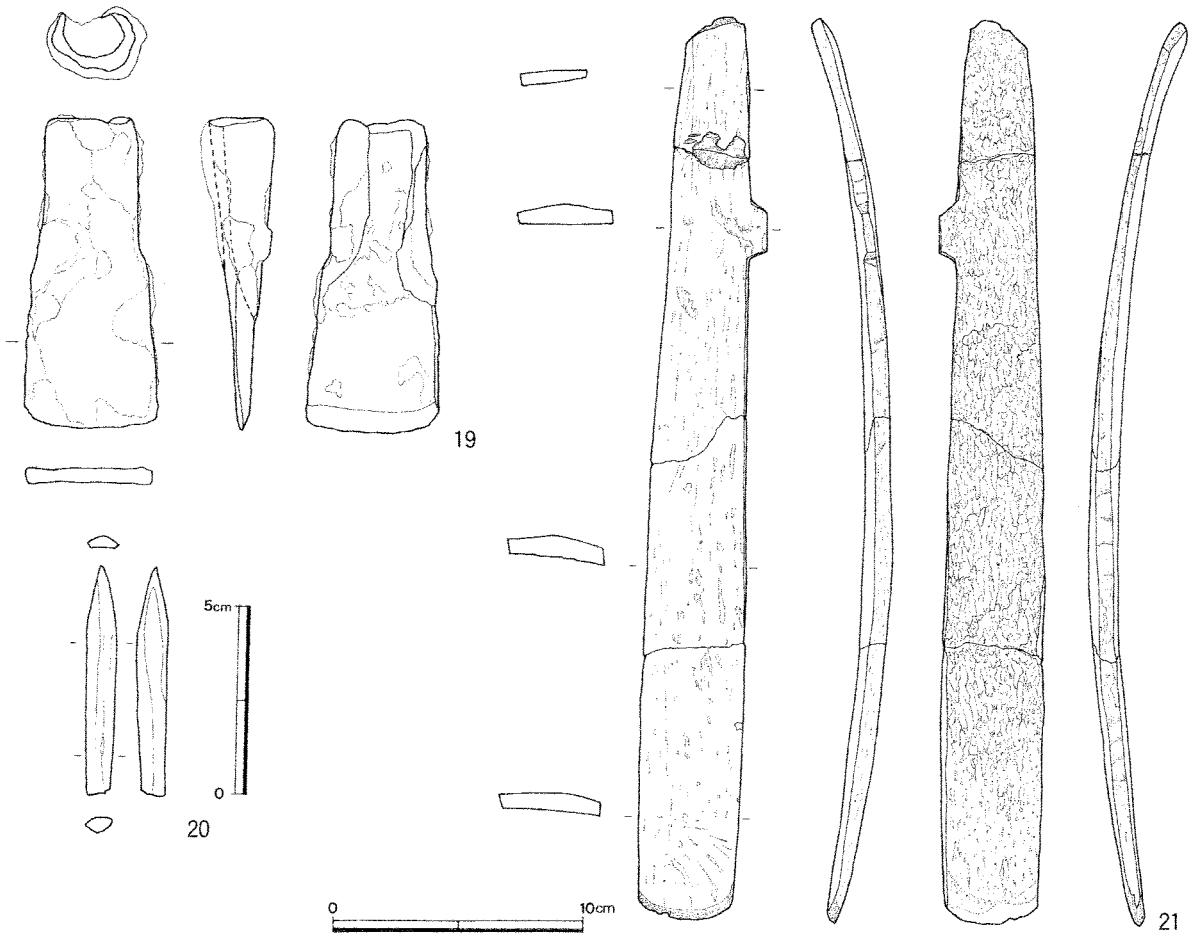
第71図　高元ⅡA区4層遺物出土状況（S＝1/40）　※番号は第72図～第74図の遺物番号に一致



第72図　高元ⅡA区4層出土遺物①（S＝1／4）



第73図　高元ⅡA区4層出土遺物②（S＝1/2，1/3）



第74図　高元ⅡＡ区４層出土遺物③（Ｓ＝１/２，１/３）

②竪穴住居址（ＳＣ）

・ＳＣ11（第78図）

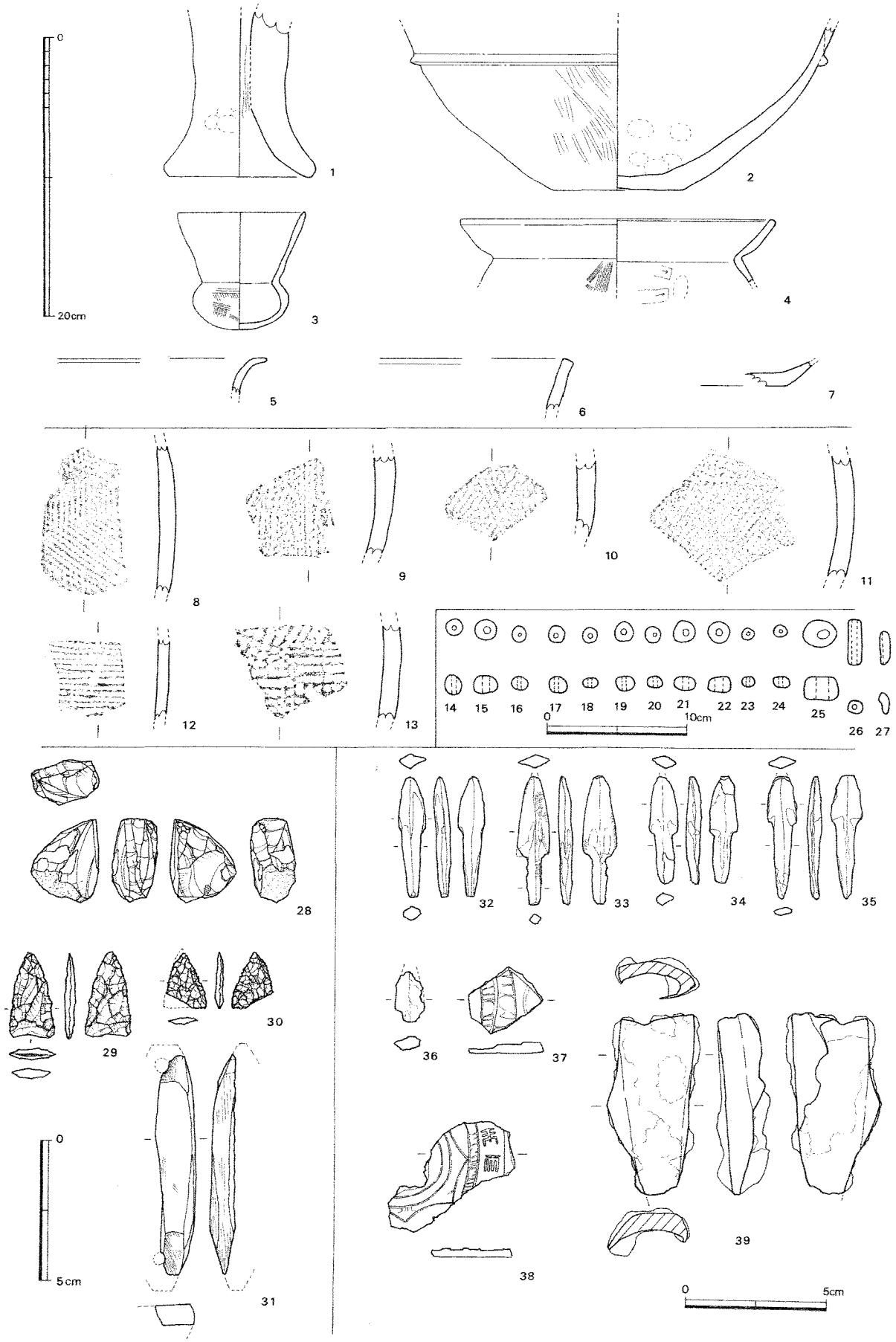
高元ⅡＣ区北壁沿いで検出した住居址で方形もしくは長方形のプランと考えられる。確認面で一辺４ｍである。床面からは，主柱穴と考えられるピット１基と溝状遺構を検出している。遺物は山陰系二重口縁壺の完形品（１）と敲石（２）が出土しており，古墳時代初頭の住居址と考えられる。

また，南側に隣接して円形の土坑（ＳＫ23）を検出した。径60cm，深さ10cmのすり鉢状の土坑で，焼土とカーボンが互層で堆積していた。焼土は小片が二次的に堆積したもので，土坑内で焼成したものではない。出土遺物はなかったが，位置関係からＳＣ11に伴う焼土坑と考えられる。

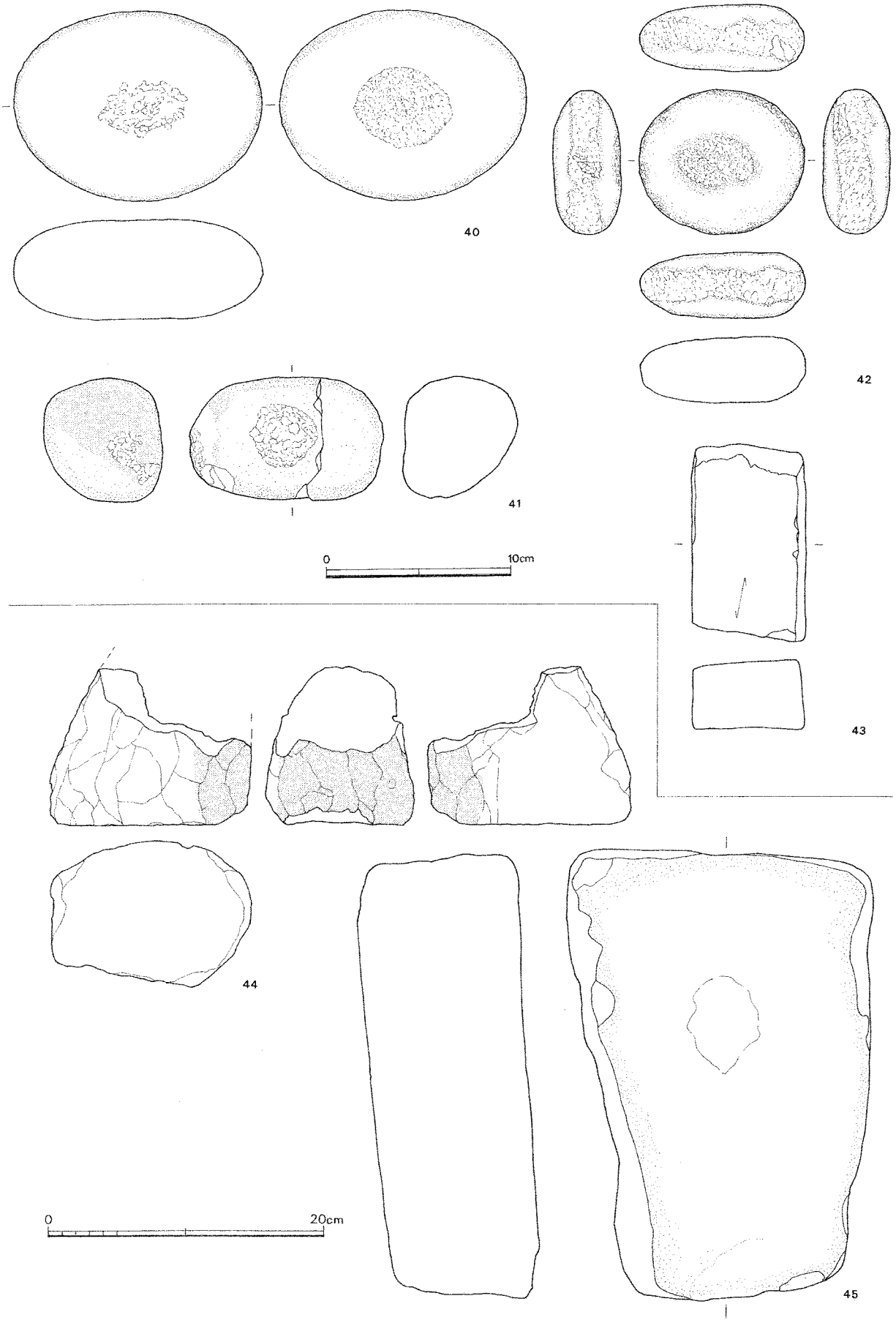
・ＳＣ12（第79図）

ⅡＣ区東壁沿いで確認した方形の住居址である。大部分が調査区外に伸びているため全体の規模は不明である。出土遺物は布留系の甕（第81図２）のほか，内外面ともにハケ目を残す「く」の字口縁の甕（第81図１）や高坏（第81図３）が出土している。高坏はやや古相を示すものの，古墳時代初頭の住居址と考えられる。このほか，鉄製鋤先（第82図６）や銅鏃（第82図４）が出土している。鉄製鋤先は短冊形の鉄板の両端を折り曲げて袋部としたもので，袋部の側面には鍛打による面取りが確認

第75図　高元ⅡＣ区３ｂ層遺物出土状況（Ｓ＝１/40）



第76図　高元ⅡC区3b層出土遺物①（S＝1/4，1/2，1/1）



第77図　高元ⅡC区3b層出土遺物②（S＝1/4，1/2，1/1）

できる。

・**ＳＣ13**（第79図）

ⅡＣ区南側で検出した方形もしくは長方形の住居址である。東半部は調査区外に伸びるものの，長軸長は４ｍである。住居址の南側にはカーボンが帯状に伸びる部分があり，この部分が炉跡になるものと考えられる。時期の明確な遺物の出土はなかったものの，ＳＣ14を切ってＳＣ12に切られていることから，弥生時代後期終末から古墳時代初頭の住居址と考えられる。

・**ＳＣ14**（第79図）

ⅡＣ区南側で検出した方形もしくは長方形の住居址である。ＳＣ13およびＳＣ15に切られ，検出したのは北側の一辺のみである。掘り下げは行っていないが，より西側に住居址は伸びているものと考えられる。土層観察用の十字ベルト付近に焼土およびカーボンが集中する箇所が認められ，地床炉と考えられる。出土遺物は弥生時代中期中葉～後葉の土器を主体とし（第81図**4**～**10**），扁平片刃石斧（第82図**1**）や石皿（第82図**2**）のほか，鯨骨を加工した未成品（第82図**3**）も出土している。

・**ＳＣ15**（第80図）

ⅡＣ区中央から南側で検出した長方形の住居址である。部分的に調査区外に伸びるものの，現状で長軸長5.8m，短軸長4.7mである。ＳＫ24およびＳＣ12・ＳＣ13・ＳＣ14を浅く切るように構築されている。十字ベルト付近では直径70cmにわたって焼土の固結した箇所が認められ，炉跡と考えられる。出土遺物は高坏（第81図14）と鉄剣の切先付近と考えられる鉄製品（第82図５）が出土している。古墳時代初頭の住居址である。

・**ＳＣ16**（第80図）

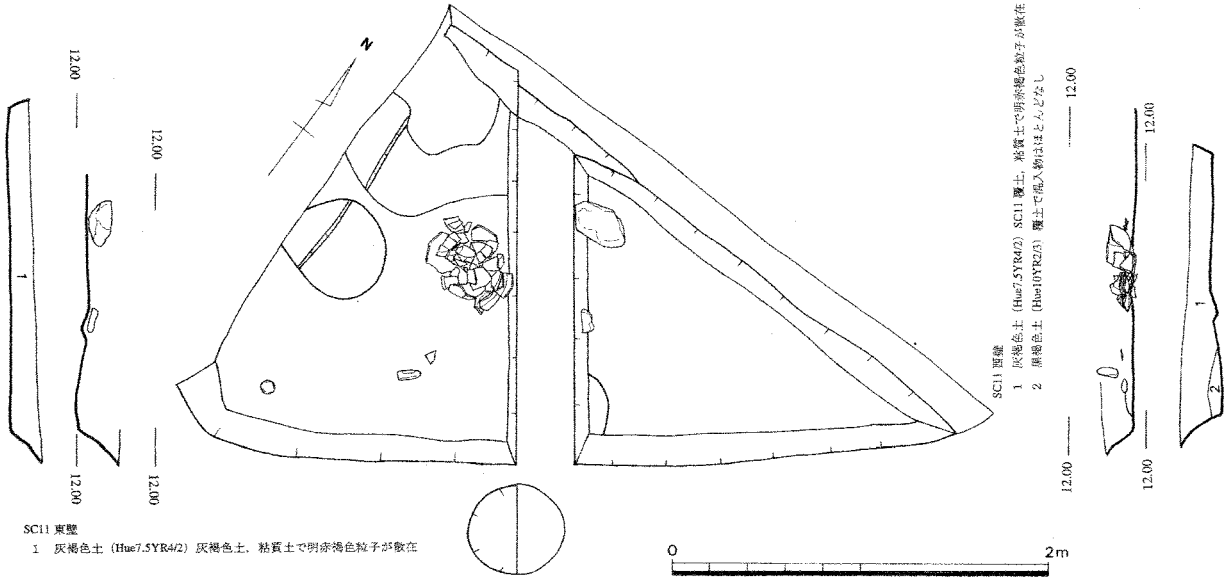
ⅡＣ区南西部で検出した方形もしくは長方形の住居址である。ＳＣ15を浅く切るように構築されている。現存で一辺が3.2mである。出土遺物はないものの，ＳＣ15との切り合いから古墳時代初頭の住居址と考えられる。

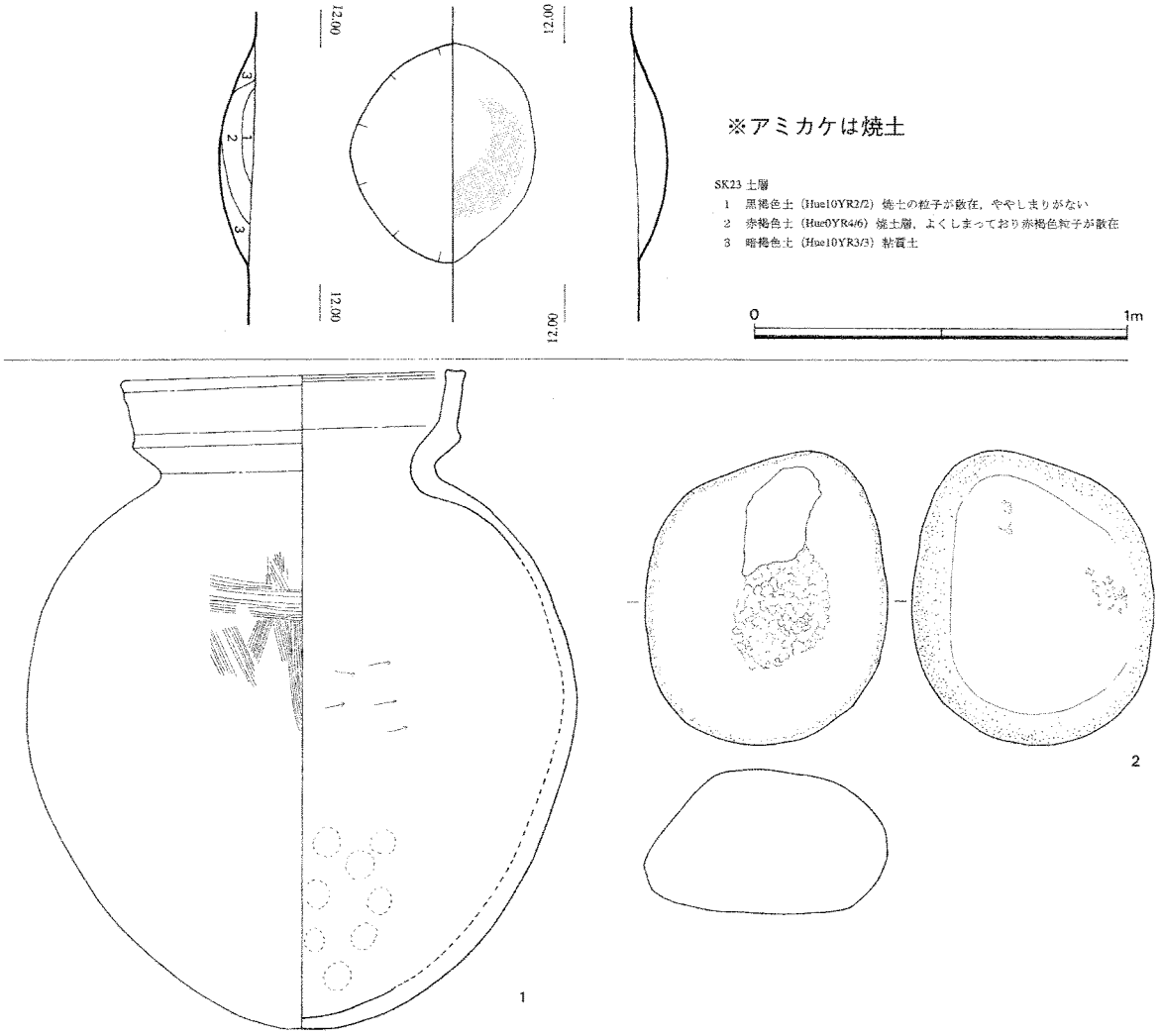
・**ＳＣ17**（第83図）

ⅡＡ区中央で検出した住居址である。02ＳＢ５およびＳＫ25に切られているため全体の形状は不明であるが，楕円形もしくは不正長方形になるものと考えられる。削平が著しく覆土は10cmしか残っていなかった。出土遺物は，弥生時代中期中葉を中心とした土器（**1**～**9**）のほか，鉄鑿も１点出土している（**10**）。この鉄鑿は，断面方形の棒状素材の一端を片刃状に研ぎ出したものである。頭部に潰れ痕が認められないことから，鹿角製の柄に装着して使用していたものと考えられる。

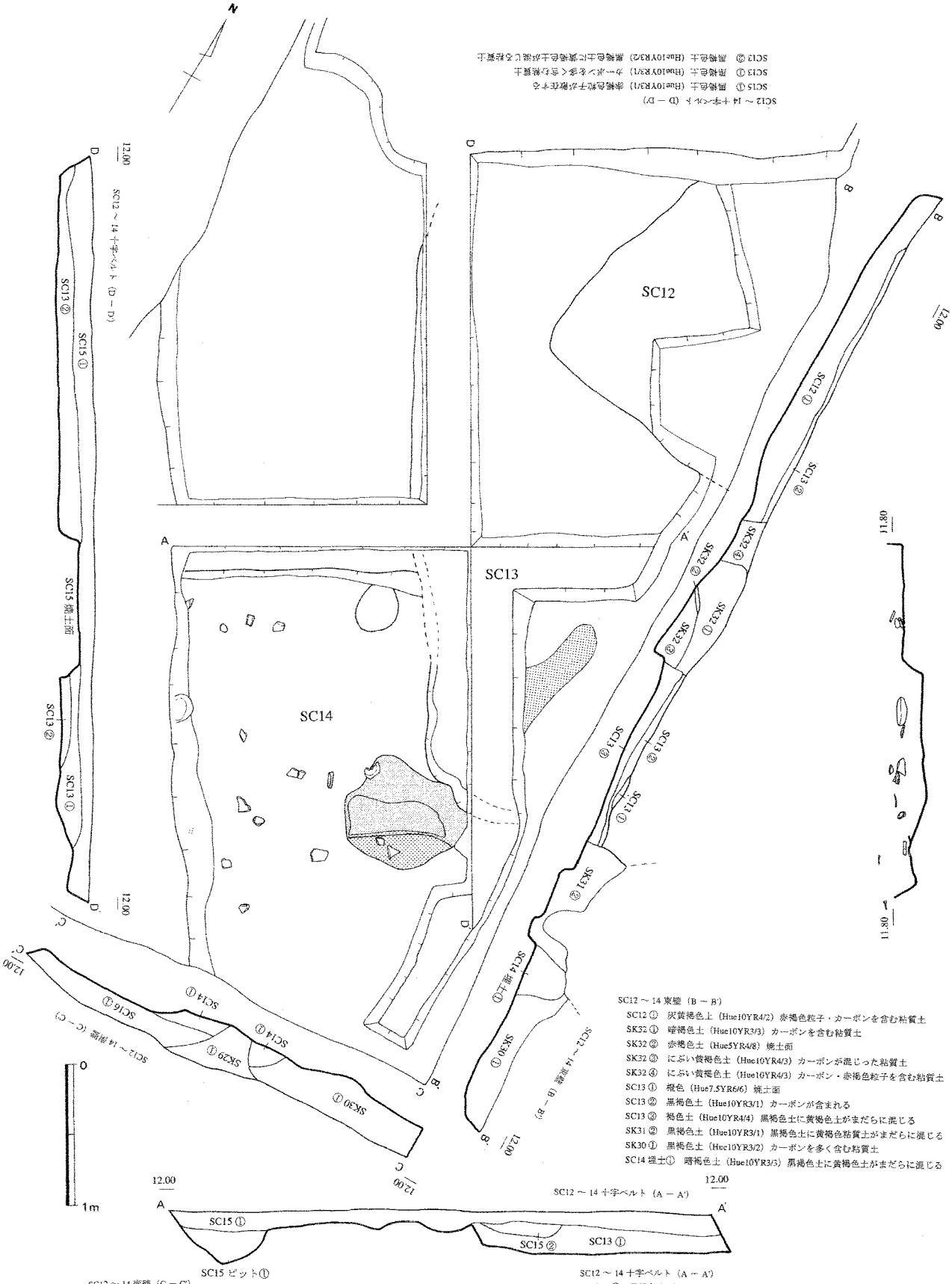
・**ＳＣ18**（第84図）

ⅡＡ区北西部で検出した住居址である。削平により北半部を欠いており，全体の形状を把握できないものの，楕円形もしくは円形の住居址と考えられる。出土遺物は，弥生時代中期後葉の土器が主体となることから，この時期の住居址と考えられる。

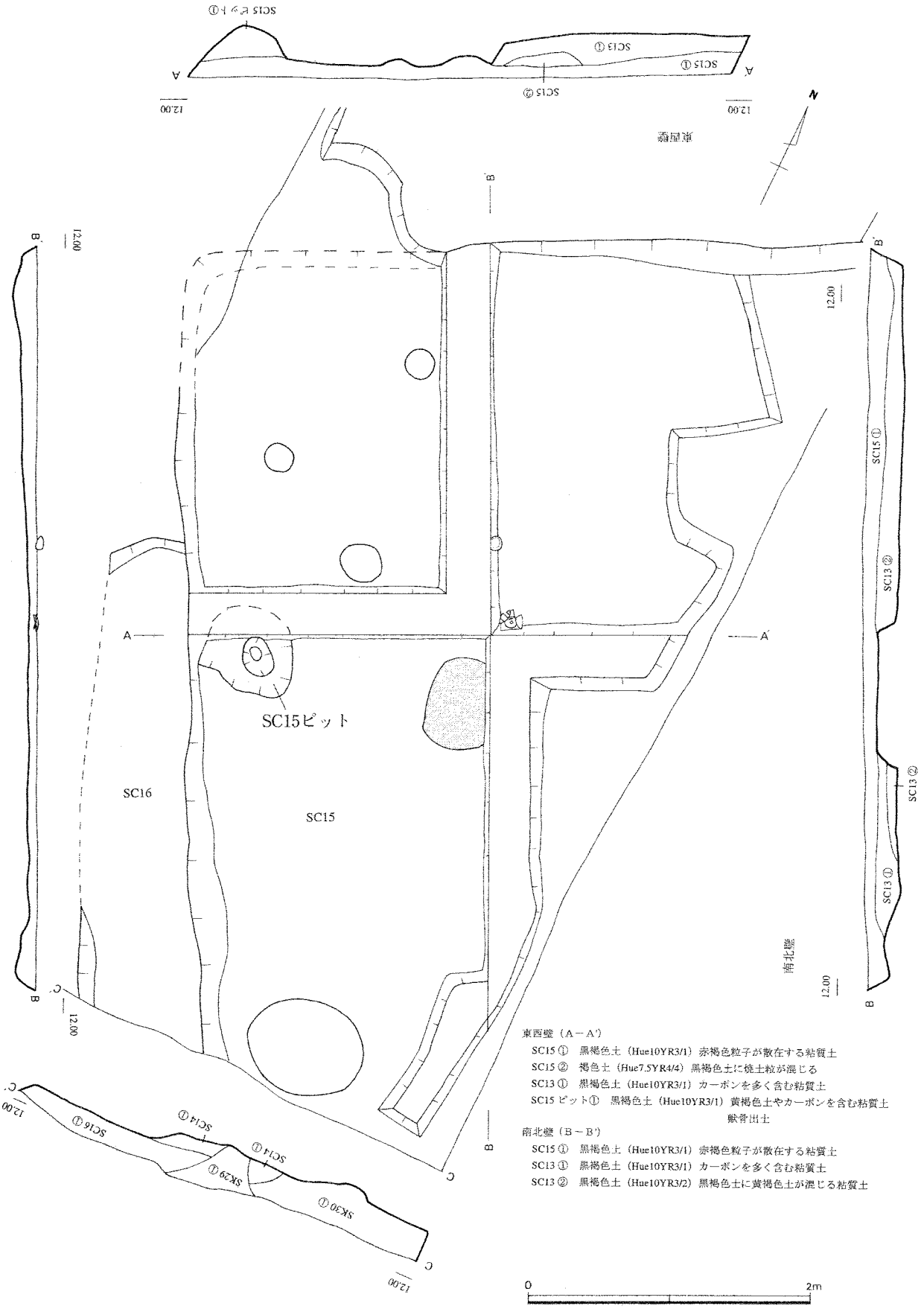




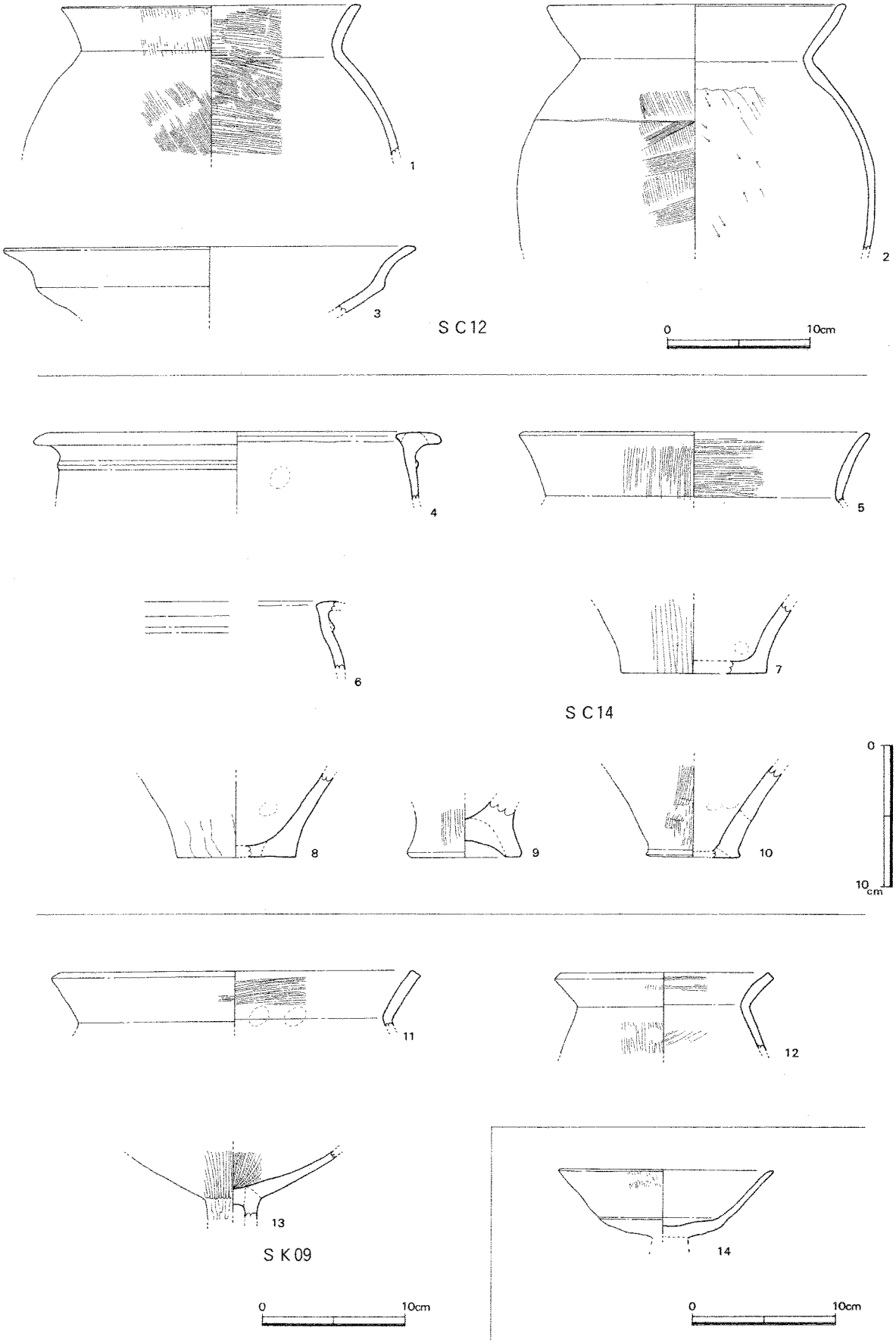
第78図　ＳＣ11・ＳＫ25実測図（Ｓ＝１/40，１/20）およびＳＣ11出土遺物（Ｓ＝１/４，１/３）



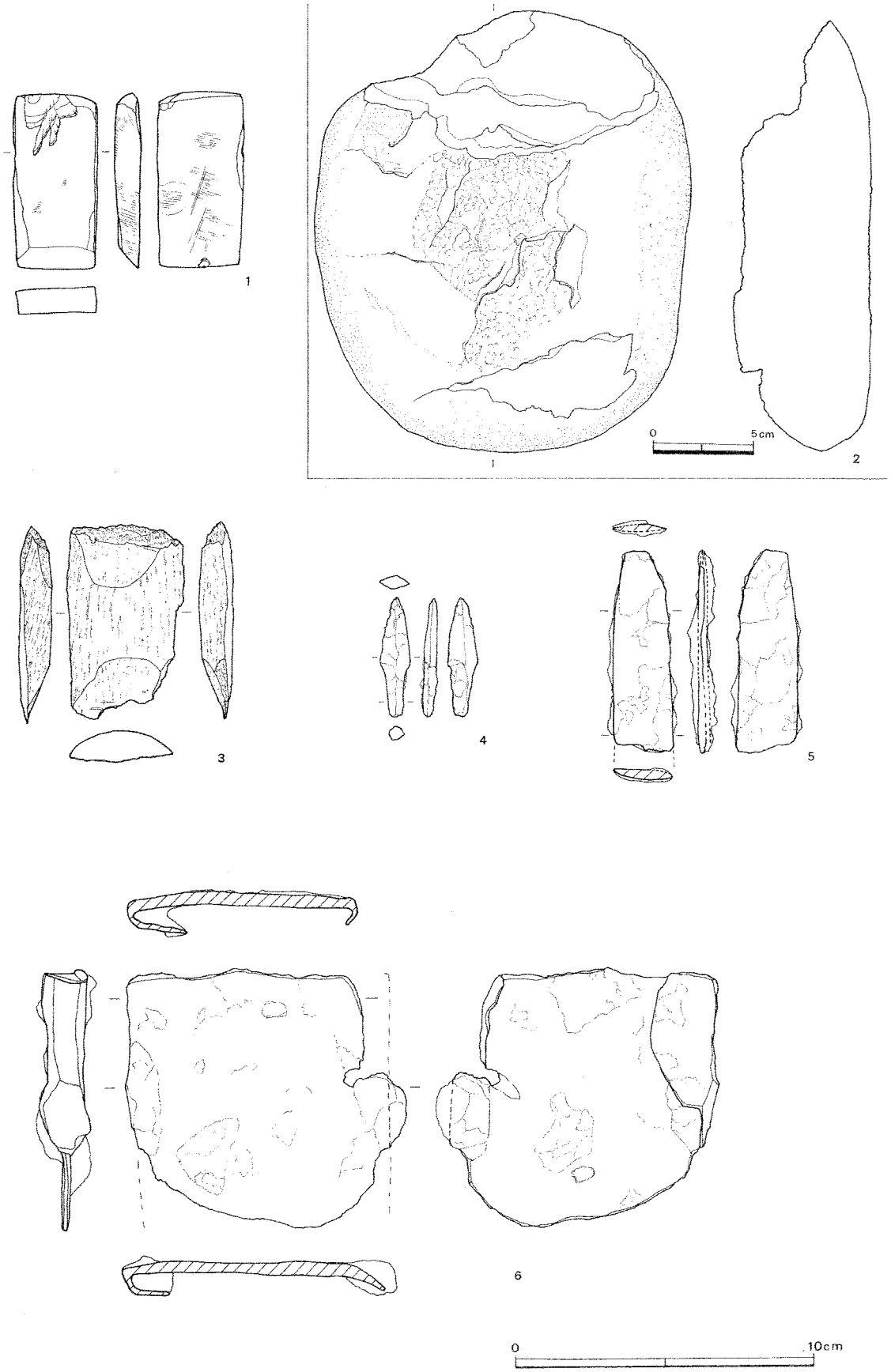
第79図　ＳＣ12～ＳＣ14実測図（Ｓ＝１/40）　※細かいアミカケは焼土，荒いアミカケは炭化物



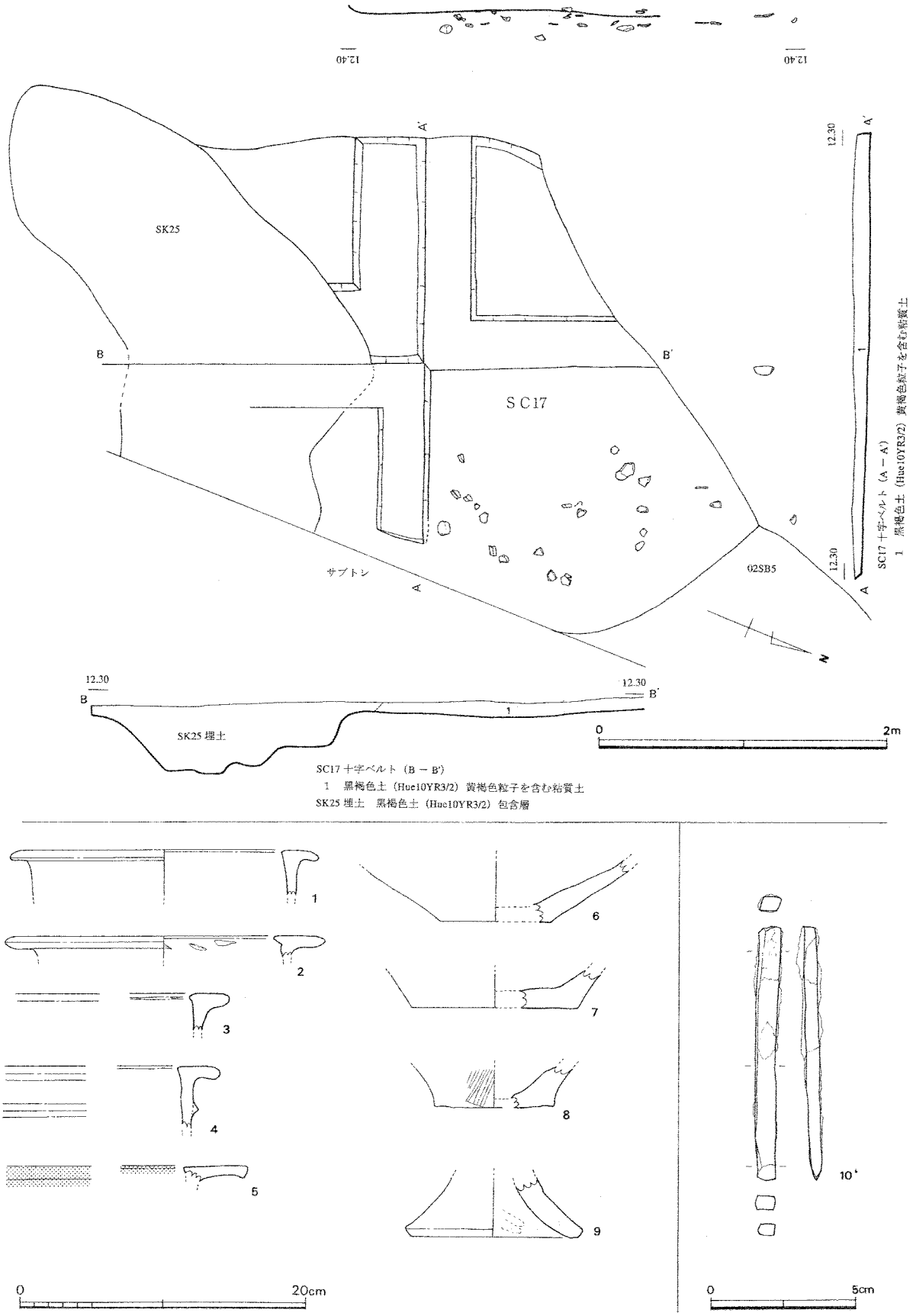
第80図　ＳＣ15・ＳＣ16実測図（Ｓ＝１/40）　※細かいアミカケは焼土



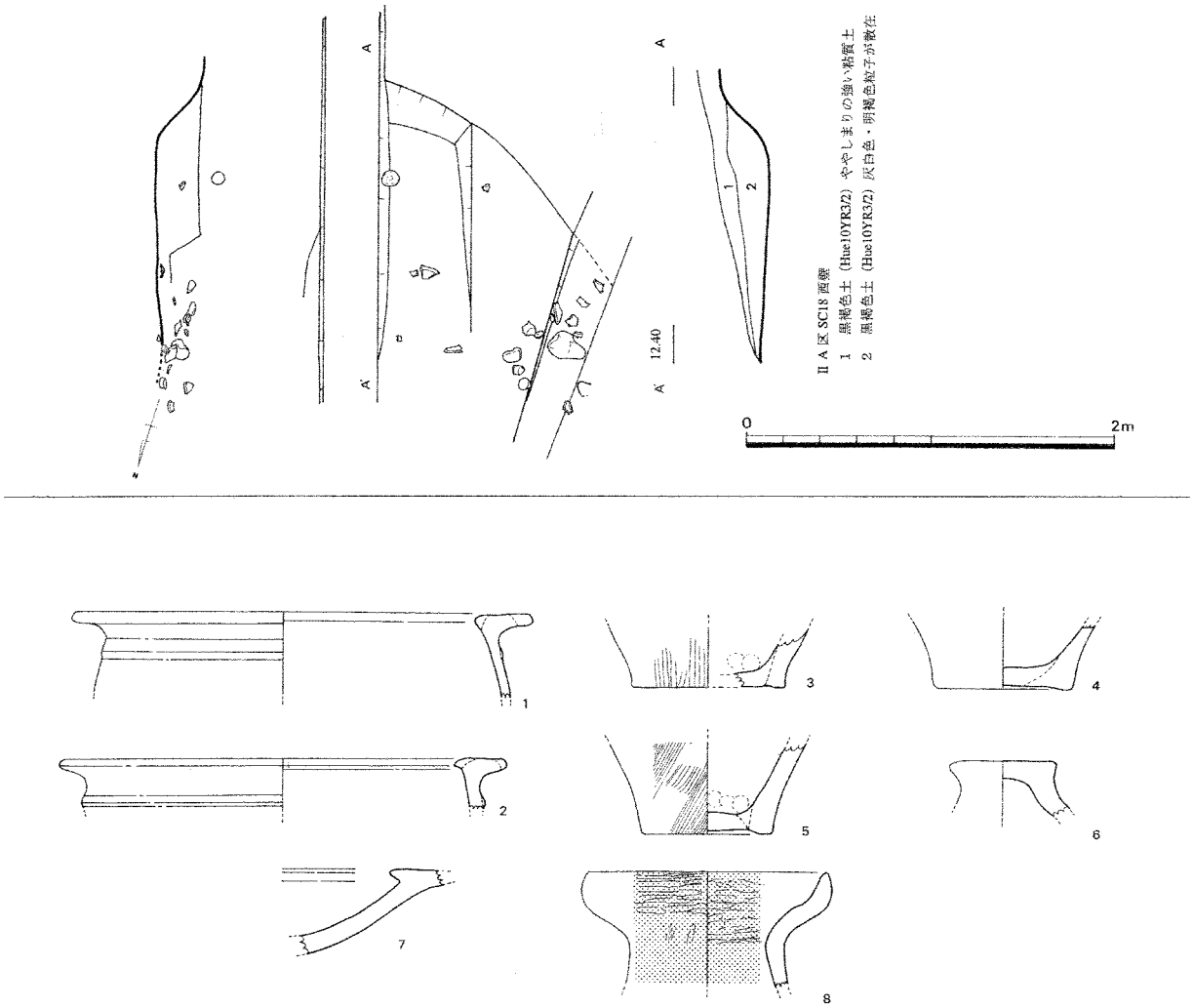
第81図　ＳＣ12～ＳＣ16出土遺物①（Ｓ＝１／４）



第82図　ＳＣ12～ＳＣ16出土遺物②（Ｓ＝１/２，１/３）



第83図　ＳＣ17実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４，１/２）

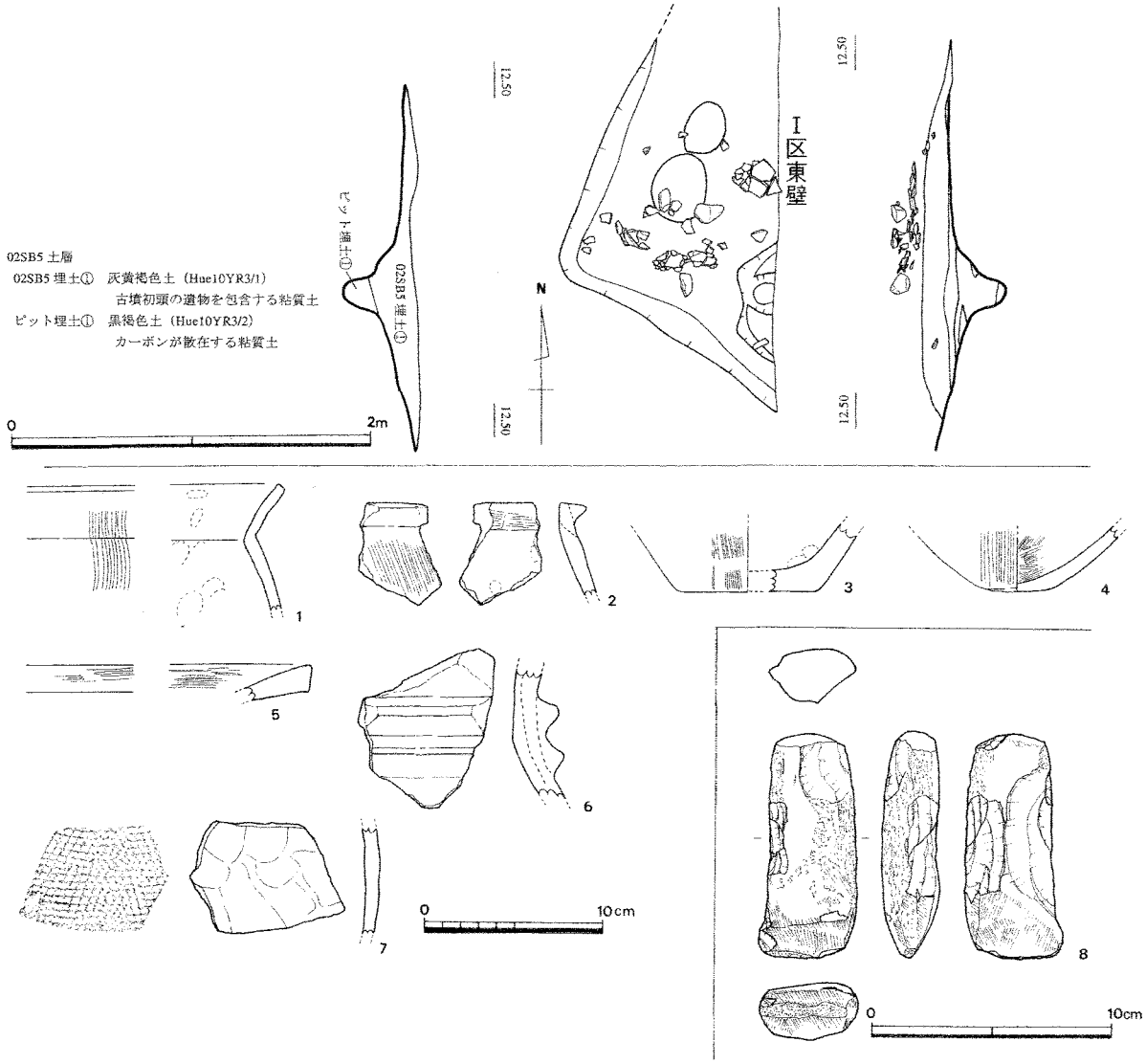


第84図　ＳＣ18実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）

・02ＳＢ５（第85図）

平成14年度調査時に検出した５号住居址（ＳＢ５）の延長部分に相当する。本年度検出したのは方形住居址の隅の部分に相当する。出土遺物は，古墳時代初頭の土器を中心に構成されるが，住居址覆土よりも上位でまとまって出土している。竪穴住居址が廃絶してやや時間をおいた後，これらの土器が廃棄されたものと考えられるが，ここでは出土土器とそれほど時期差はなかったものと考え，古墳時代初頭の住居址と捉えている。

なお，住居址床面よりピットを検出しているが。このピット内からは蛇紋岩製の石斧が出土し（**8**），住居址出土土器の中にも弥生時代中期前葉までさかのぼる可能性のある土器が含まれていることから（**2**），このピットは弥生時代中期前半のもので，上半を02ＳＢ５に削平されたものと考えられる。



第85図　02ＳＢ５実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/３，１/４）

③土坑（ＳＫ）

・ＳＫ21（第86図）

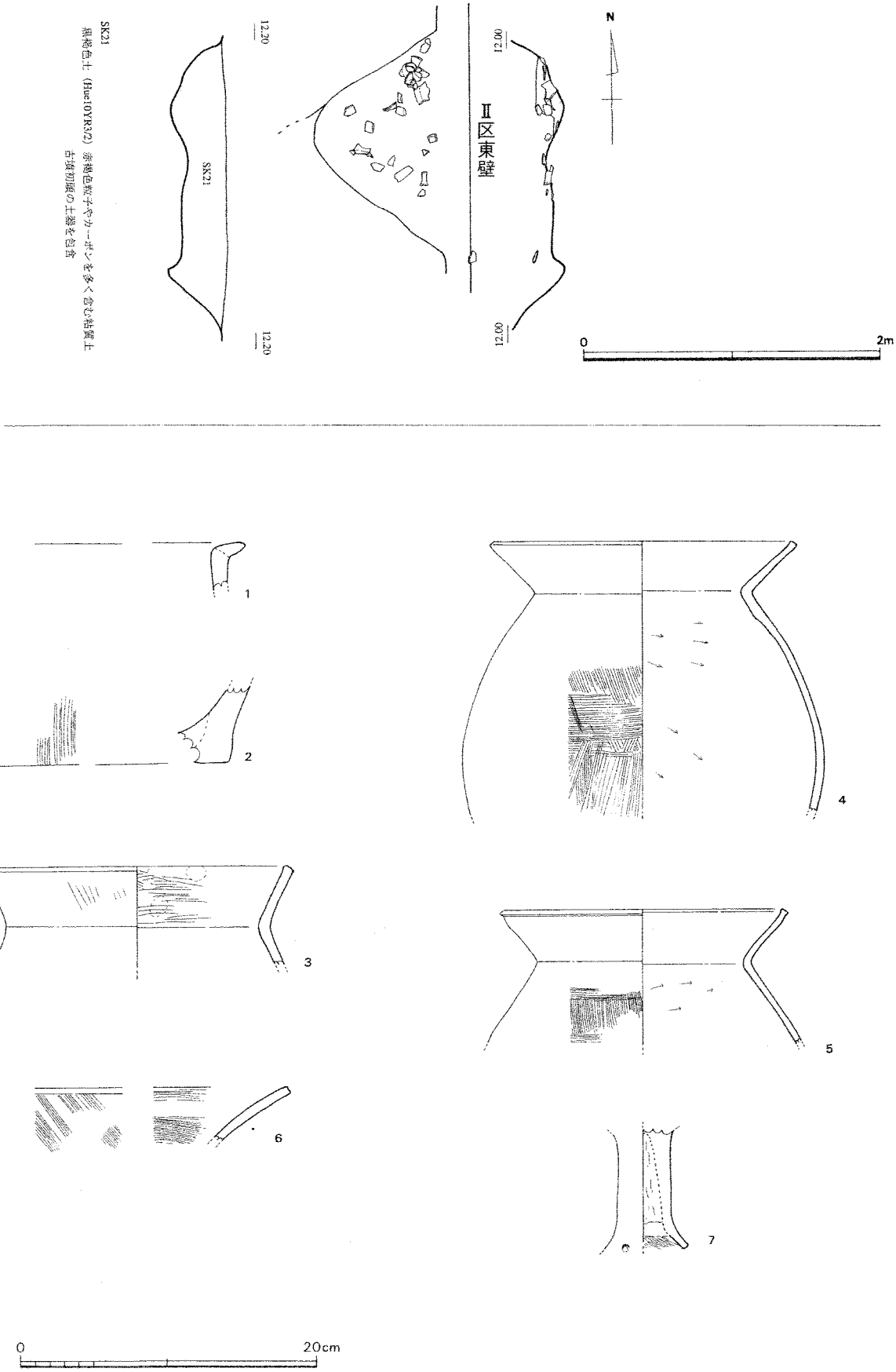
ⅡＣ区東壁沿いで検出した方形の土坑で，ＳＣ12を切るように構築されている。東半部は調査区外まで伸びるものの，一辺が1.2m程度になるものと考えられる。出土遺物は布留系の甕（**4**・**5**）のほか，在地系の「く」の字形口縁の甕（**3**）や高坏（**6**・**7**）も出土している。弥生時代中期とみられる土器片もあるが（**1**・**2**）混入したものとみられ，ＳＣ12との切り合いからも古墳時代初頭の土坑と考えられる。

・ＳＫ22

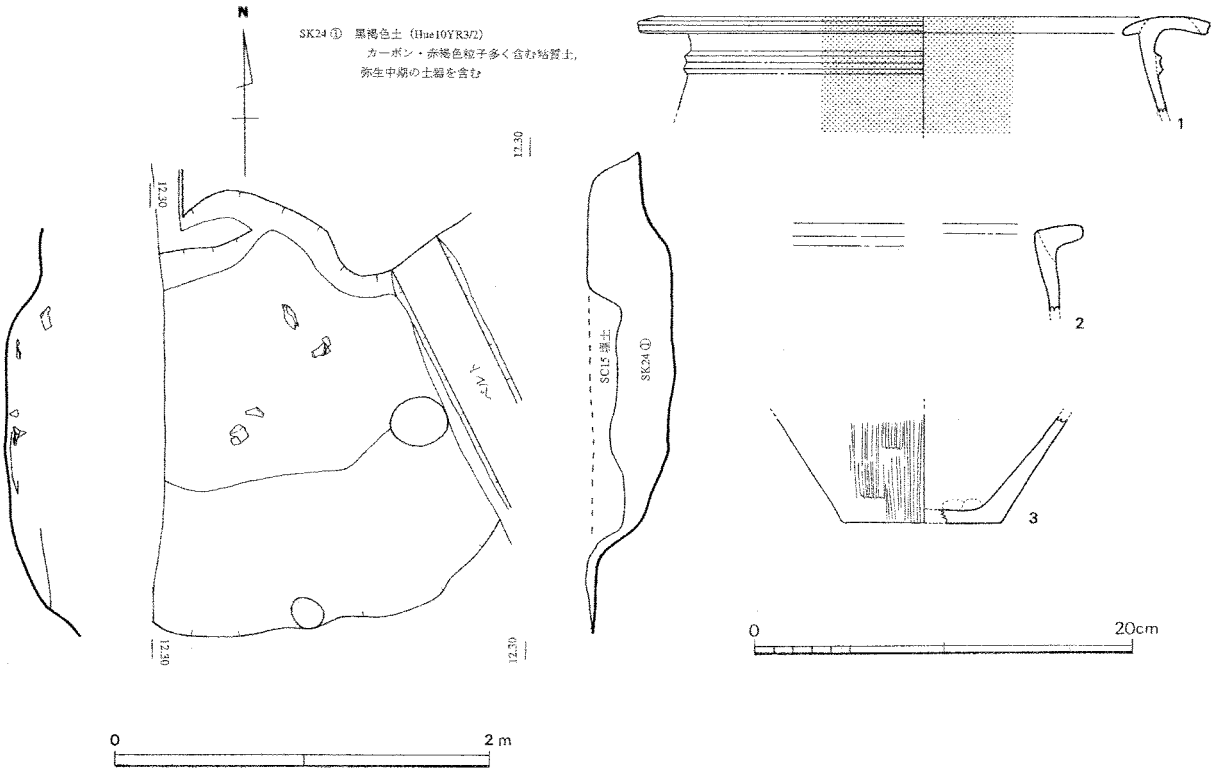
欠番

・ＳＫ23（第78図）

ＳＣ11で記載済み



第86図　ＳＫ21実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）



第87図　ＳＫ24実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）

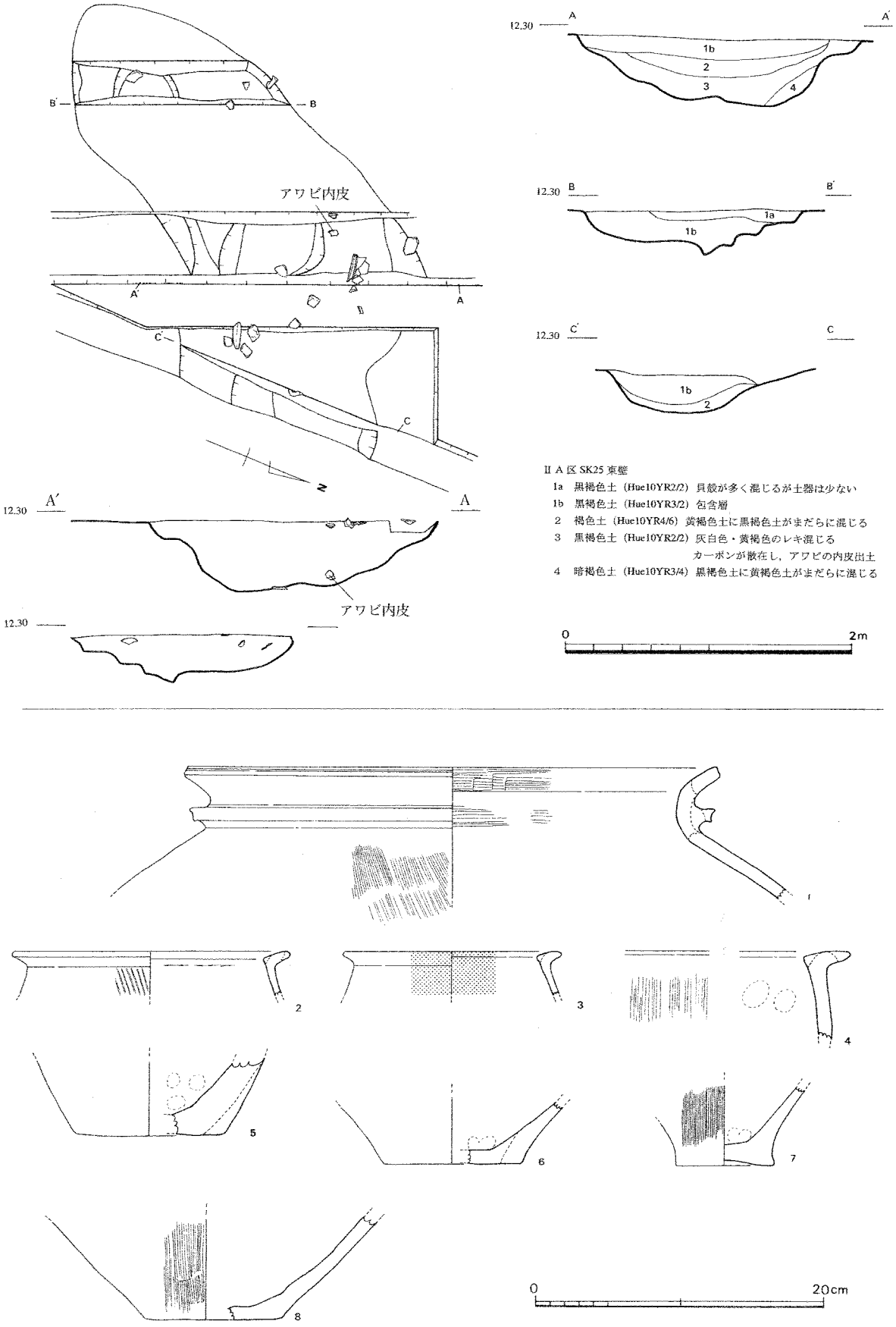
・ＳＫ24（第87図）

ⅡＣ区西壁沿いで検出した円形の土坑である。上面をＳＣ15に切られ，東側の一部はＳＣ13に切られている。西半部も調査区外に伸びるものの，直径2.4m程度の規模になるものと推測される。出土遺物は，中期中葉までさかのぼる鋤先状口縁の甕（２）もみられるものの，弥生時代中期後半の丹塗り土器（１）や同じく中期後半の甕底部（３）といった須玖Ⅱ式を主体とするものであり，この時期の土坑と考えられる。

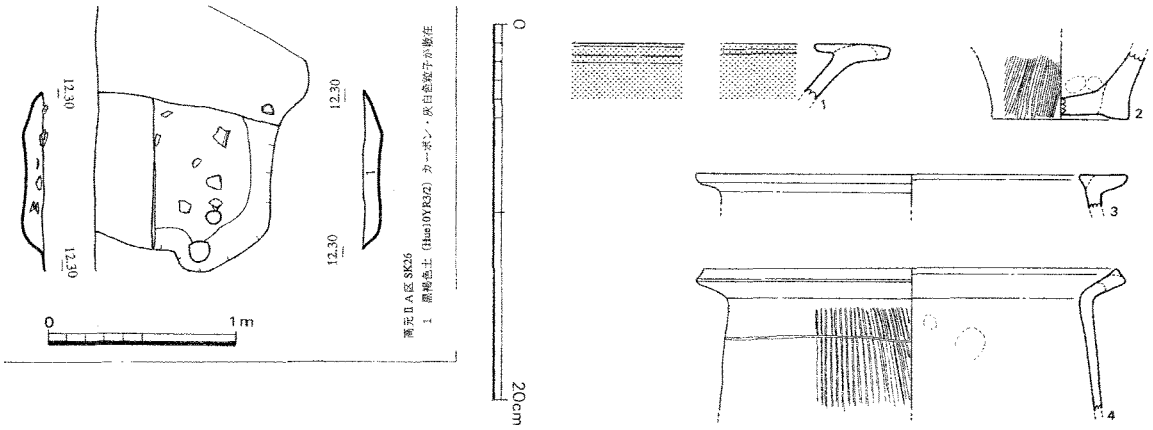
・ＳＫ25（第88図）

ⅡＡ区中央東寄りで検出した楕円形土坑である。長軸方向にやや湾曲するものの，長軸長3.3m，幅1.4mである。調査は短軸方向に３本のトレンチを設定して掘り下げた。土坑の西半部では上層に貝層がブロック状に堆積していた。長軸長１mの楕円形で厚さは10cm程度である。カキを主体とする貝層で，水洗選別したところクロダイなどの魚骨が若干認められた。土坑内の覆土は，カーボン混じりの黒褐色土と，地山類似の黄褐色土がまだらに混じった褐色土が交互に堆積している状況を確認した。出土土器のほとんどは上層（１ｂ層）に集中しており，下層からはほとんど土器は出土していない。ただし，中央トレンチの最下層からはアワビ貝の内皮とみられる光沢のある遺物が出土している。先述のアワビオコシもこの土坑の検出面から出土しており，両者の関係は興味深い。

出土遺物は，鋤先状口縁であるが口縁部上面や傾斜し，「く」の字形口縁に近いものが主体となる（２・３・４）。また，張りのある胴部から口縁部が短く外反し，口縁部直下に方形の突帯が１条巡る大型の壺（１）も出土している。これらの遺物から，ＳＫ25は弥生時代中期末～後期初頭の土坑と



第88図　ＳＫ25実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）



第89図　ＳＫ26実測図（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）

考えられる。

・ＳＫ26（第89図）

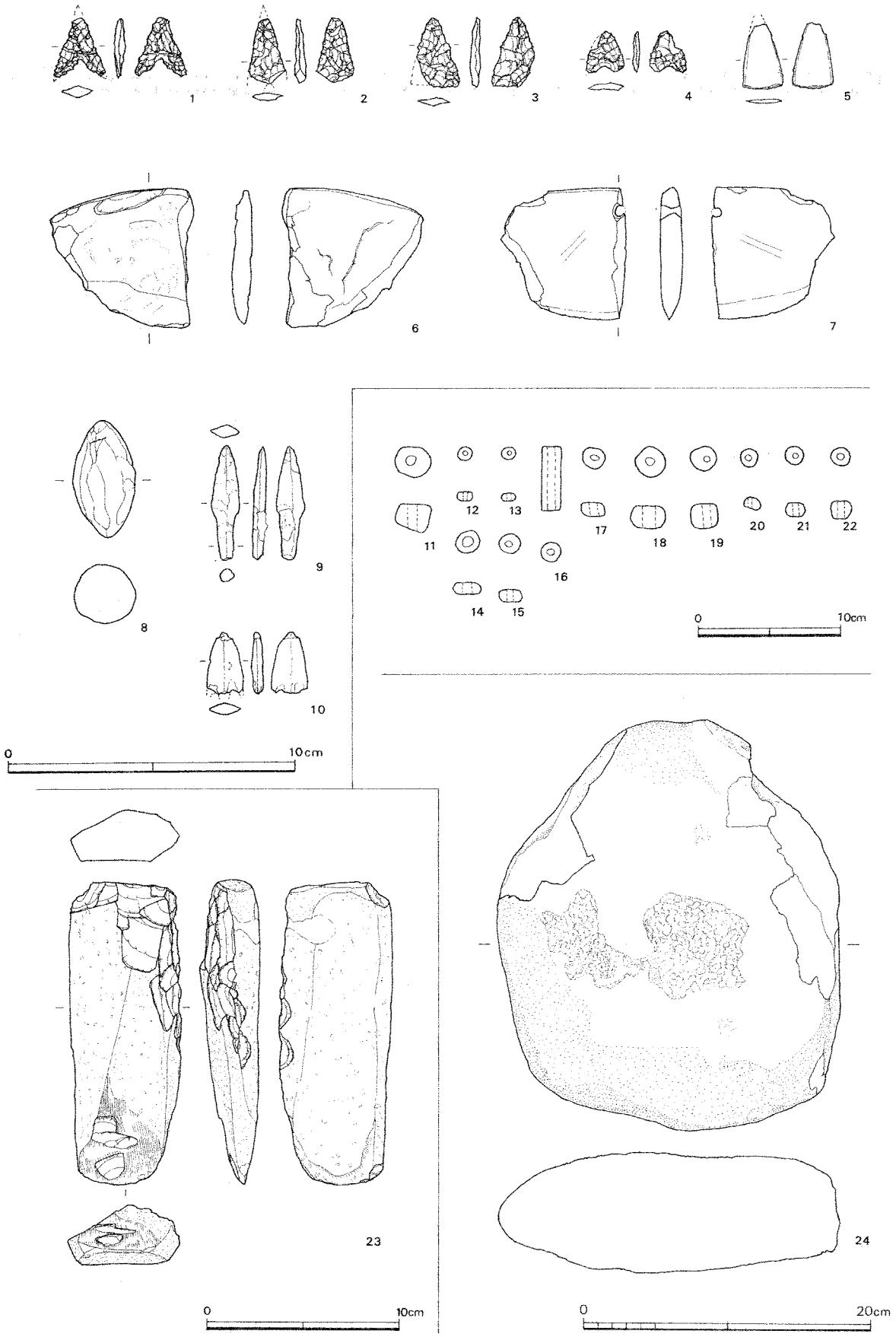
ⅡＡ区南東隅で検出した方形の土坑である。調査区外に伸びるため全体の規模は不明であるが，現状で一辺が1.3mとなる。覆土は10cm弱と非常に浅く，削平の影響が著しい。土坑床面からは直径10cm程度の小ピットを２基確認している。出土遺物は丹塗りの高坏（**1**）のほか，鋤先状口縁の甕（**3**）や遠賀川以東系のはね上げ口縁の甕（**4**）も出土している。これらの遺物から，ＳＫ26は弥生時代中期後半の土坑と考えられる。

・その他の土坑（第70図）

ⅡＣ区の西壁において，土層のみで確認できた土坑を３基確認している（ＳＫ29～32）。層位的には古墳時代初頭の竪穴住居址（ＳＣ12・ＳＣ13）を切っており，時期の明確な遺物の出土はみなかったものの，古墳時代初頭もしくは若干下る時期の土坑と考えられる。

④その他の出土遺物（第90図）

1～**4**は打製石鏃である。いずれも良質の黒曜石製である。凹基鏃（**1**・**2**・**4**）と平基鏃（**3**）の２者がある。**5**は磨製石鏃で，蛇紋岩もしくは緑色片岩製と考えられる。研磨により非常に薄く仕上げている。**6**・**7**は石包丁である。**7**はあずき色の凝灰岩製で，北九州市域からの搬入品と考えられる。全面に入念な研磨を施し，穿孔は錐状の工具で両面からあけられている。**8**は投弾である。粘土をラグビーボール状に整形して焼成したもので，長軸方向に指なでの痕跡を残している。**9**は銅鏃である。鋭利な先端部からややくびれて基部に至っており，基部と翼部を分ける関ははっきりしない。翼部に比べて基部の方が厚みがあり重厚である。ＳＣ12からの出土である。**10**も銅鏃である。基部を欠損するが，短い樋が認められ関の部分は小さく抉りがある。高元ⅡＣ区の東壁土層で確認したＳＫ31からの出土である。**11**～**22**はガラス小玉および管玉である。色調はコバルトブルー（**11**・**12**・**14**・**18**・**20**・**22**）とエメラルドグリーン（**13**・**15**・**17**・**18**・**21**）がある。**11**～**13**はＳＣ８，**14**はＳＣ５，**15**はＳＫ14からそれぞれ出土した。**16**は碧玉製の管玉である。**23**は石斧である。安山岩の扁平な礫の小



第90図　その他の遺物（S＝1/2，1/3，1/4）

第４表　高元地区出土遺物観察表①

	報告番号	遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法		備考
土器	46図 1	SC 1	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・赤褐粒	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	46図 2	SC 1	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	46図 3	SC 1	甕	橙	5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	49図 1	SC 5	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石・赤色粒子	底部	表：ナデ，裏：ナデ		
	49図 2	SC 5	甕	にぶい赤褐	5YR5/4	橙	5YR6/6	長石・石英	底部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	49図 3	SC 5	甕	橙	2.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英	底部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	51図 1	SK15	甕	明赤褐	5YR5/6			長石・石英・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：指押さえ・ナデ		
	51図 2	SK15	甕	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい褐	7.5YR6/3	石英・長石	口縁部	表：ナデ，裏：指押さえ・ナデ		
	51図 3	SK15	甕	橙	5YR6/6	浅黄橙	10YR8/4	石英・長石	口縁部	表：ハケメ・ナデ，裏：指押さえ・ナデ		
	51図 4	SK15	甕	褐灰	10YR4/1	灰	5Y5/1	石英・長石・金雲母	口縁部	表：ハケメ・ナデ，裏：指押さえ・ナデ		
	51図 5	SK15	甕	にぶい黄	2.5Y6/3			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：指押さえ・ナデ		
	51図 6	SC 8	甕	橙	2.5YR6/8			長石・石英・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：指押さえ・ナデ		
	51図 7	SC 8	甕	橙	5YR6/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：指押さえ・ナデ		
	51図 8	SK15	甕	橙	5YR6/6			長石・石英	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ		
	51図 9	SC 8	甕	浅黄	2.5Y7/3			長石・石英・金雲母・黒雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ケズリ・ナデ・指押さえ		
	51図10	SC 8	甕	橙	7.5YR7/6	灰	5Y6/1	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ケズリ・指押さえ		
	51図11	SC 8	甕	浅黄	2.5Y7/3			長石・石英・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	51図12	SC 8	甕	褐灰	10YR4/1			長石・石英・金雲母・黒雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ケズリ・ナデ		
	51図13	SC 8	甕	明赤褐	5YR5/6			長石・石英・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ケズリ・ナデ		
	51図14	SC 8	小型丸底壺	灰黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR5/2	石英・長石・金雲母	半欠	表：ナデ，裏：ケズリ・ナデ		
				にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3					
	51図15	SC 8	甕	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	石英・長石	胴部片	表：ナデ，裏：指押さえ・ナデ		
						橙	7.5YR6/6					
	51図16	SC 8	高坏	橙	7.5YR7/6			長石・金雲母・黒雲母	脚部	表：ナデ，裏：ハケメ・ナデ		
	51図17	SC 8	鉢	にぶい橙	7.5YR6/4			長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	51図18	SC 8	高坏	にぶい橙	7.5YR7/4			長石・石英・金雲母	口縁部	表：ヘラミガキ・ナデ，裏：ナデ		
	51図19	SC 8	高坏	にぶい黄橙	10YR7/4	橙	5YR7/6	金雲母・石英・長石	脚部	表：ナデ，裏：ナデ		
	51図20	SC 8	甕	にぶい黄橙	10YR7/4	褐灰	10YR4/1	石英・長石	口縁部～胴部	表：ナデ，裏：ヘラケズリ・指押さえ		
	51図21	SC 8	鉢	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	精良（顕微鏡まず）	底部片	表裏とも回転ナデ調整		須恵系
	51図22	SC 8	円錐状土製品	にぶい橙	7.5YR6/4	褐灰	7.5YR4/1	石英・長石	胴部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	51図23	SC 8	甕	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR5/3	石英・長石	胴部矢羽	表：ハケメ・ナデ・ケズリ，裏：ハケメ・指押さえ		
	53図 1	SK 2	甕	にぶい黄橙	10YR7/3	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：指押さえ・ナデ		内面丹塗り
	53図 2	SK 2	壺	浅黄	2.5Y8/3	浅黄	2.5Y8/3	石英・長石	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	53図 3	SK 2	甕	橙	5YR6/8	明褐	7.5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		口縁部丹塗り
	53図 4	SK 2	甕	橙	7.5YR7/6	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		内外面丹塗り
	53図 5	SK 2	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	5YR7/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	53図 6	SK 2	高坏	浅黄橙	7.5YR8/6	浅黄橙	10YR8/4	石英・長石・金雲母	脚部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図 1	SK 3	甕	にぶい褐	7.5YR5/4			長石・金雲母	口縁部	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ		
	55図 2	SK 3	甕	橙	5YR6/6			長石・石英・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	55図 3	SK 3	甕	橙	2.5YR6/8			長石・石英・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図 4	SK 3	甕	褐灰	2.5YU5/1			長石・石英・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図 5	SK 3	甕	浅黄橙	7.5YR8/4			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図 6	SK 3	甕	灰褐	7.5YR5/2			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図 7	SK 3	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図 8	SK 3	甕	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい黄橙	7.5YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図 9	SK 3	甕	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図10	SK 3	甕	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	55図11	SK 3	壺	灰黄	2.5Y7/2			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図12	SK 3	甕	灰黄褐	10YR5/2	黒褐	2.5Y3/1	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		口縁部上面に沼沈線あり
	55図13	SK 3	甕	灰黄褐	10YR4/2	灰黄褐	10YR4/2	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図14	SK 3	壺	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図15	SK 3	甕	にぶい黄橙	10YR5/4	橙	7.5YR6/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図16	SK 3	壺	橙	7.5YR6/6			石英・長石・金雲母	脚部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	55図17	SK 3	高坏	明赤褐	5YR5/8	浅黄橙	7.5YR5/4	長石・金雲母	脚部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		表面丹塗り
	55図18	SK 3	壺	赤褐	2.5YR4/8	橙	5YR6/6	石英・長石	脚部	表：ナデ，裏：ナデ		表面丹塗り
	55図19	SK 3	壺	橙	7.5YR7/6			石英・長石・金雲母	胴部片	表：ナデ，裏：ナデ		表面丹塗り
	55図20	SK 3	壺	赤褐	2.5YR4/6			石英・長石・金雲母	胴部片	表：ナデ，裏：ナデ		表面丹塗り
	55図21	SK 3	壺	橙	5YR6/6			石英・長石・金雲母	底部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	55図22	SK 3	壺	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	底部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	55図23	SK 3	甕	にぶい褐	7.5YR7/4	黄灰	2.5Y5/1	石英・長石・金雲母	底部	表：ナデ，裏：ナデ		
	55図24	SK 3	壺	橙	5YR7/8	にぶい黄橙	10YR5/3	石英・長石・金雲母	底部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		表面丹塗り
	55図25	SK 3	甕	橙	5YR6/6			長石・石英	底部	表：ナデ，裏：指押さえ・ナデ		乳あり
	55図26	SK 3	甕	橙	7.5YR6/6			石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	55図27	SK 3	壺	緑褐	10GY2/1	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	56図28	SK 3	壺？	橙	7.5YR6/6	明赤褐	5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ・指押さえ，裏：ナデ		擬無文土器
	56図29	SK 3	鉢	灰白	5Y7/1			石英・灰褐色粒子	胴部片	表裏とも回転ナデ調整		須恵系
	56図30	SK 3	塊成粘土塊	橙	5YR6/6			石英・長石・金雲母		手ずくね		部分的に葉位着
	56図31	SK 3	塊成粘土塊	橙	5YR6/6			石英・長石・金雲母・赤色粒子		手ずくね		
	56図32	SK 3	塊成粘土塊	明赤褐	5YR5/6			石英・長石・金雲母・赤色粒子		手ずくね		
	57図 1	SK 4	甕	橙	7.5YR7/6	灰褐	2.5YR7/2	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	57図 2	SK 4	甕	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	石英・長石・赤色粒子	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	57図 3	SK 4	高坏	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図 1	SK 6	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図 2	SK 6	壺	浅黄	2.5Y7/3			石英・長石・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図 3	SK 6	甕	橙	2.5YR6/8			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図 4	SK 6	壺	にぶい黄橙	10YR7/4			石英・長石・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図 5	SK 6	甕	橙	2.5YR7/8	橙	2.5YR7/8	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図 6	SK 6	甕	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図 7	SK 6	壺	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図 8	SK 6	高坏	明赤褐	5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		裏裏面丹塗り
	59図 9	SK 6	壺	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい橙	7.5YR7/3	石英・長石	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	59図10	SK 6	高坏	にぶい橙	7.5YR7/4	浅黄橙	7.5YR8/4	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図11	SK 6	壺	にぶい黄橙	10YR7/4			石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	59図12	SK 6	甕	橙	2.5YR6/6			石英・長石・金雲母	底部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	59図13	SK 6	甕	橙	7.5YR7/6	にぶい黄橙	10YR7/4	石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ		表面に線刻あり
	60図 1	SK 8	壺	橙	5YR6/8	橙	5YR6/8	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	60図 2	SK 8	甕	にぶい橙	5YR6/4	灰褐	7.5YR5/2	石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	62図 1	SK 9	甕	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石	口縁部	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	62図 2	SK 9	甕	橙	7.5YR6/6	橙	5YR7/8	石英・長石	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図 3	SK 9	甕	橙	7.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図 4	SK 9	甕	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図 5	SK 9	甕	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図 6	SK 9	甕	明赤褐	5YR5/8	明赤褐	5YR4/8	石英・長石・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図 7	SK 9	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図 8	SK 9	甕	にぶい黄橙	10YR6/4	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図 9	SK 9	壺	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図10	SK 9	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図11	SK 9	壺	にぶい褐	7.5YR5/4	黒褐	7.5YR3/1	長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図12	SK 9	甕	橙	7.5YR6/6			石英・長石	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図13	SK 9	壺	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図14	SK 9	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	62図15	SK 9	壺	橙	7.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	62図16	SK 9	甕	明赤褐	5YR5/6	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石	底部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図17	SK 9	甕	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	62図18	SK 9	壺	灰黄褐	10YR4/2			石英・長石	底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：不明		
	62図19	SK 9	壺	明赤褐	5YR5/6	明褐	7.5YR5/6	石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	62図20	SK 9	壺	明赤褐	5YR5/6	橙	5YR6/8	石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	62図21	SK 9	ミニチュア土器	にぶい黄橙	10YR7/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図22	SK 9	ミニチュア土器	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	5YR7/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		外面丹塗り
	62図23	SK 9	壺	橙	5YR6/8	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		表裏面丹塗り
	62図24	SK 9	甕	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図25	SK 9	壺	にぶい橙	7.5YR7/4	浅黄橙	10YR8/3	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	62図26	SK 9	高坏	赤褐	2.5YR4/8	橙	5YR6/6	石英・長石	脚部	表：ナデ，裏：ナデ		表面丹塗り
	62図27	SK 9	鉢	明赤褐	2.5YR5/8	橙	2.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		表面丹塗り
	62図28	SK 9	鉢	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	62図29	SK 9	土製円盤	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい黄橙	10YR7/4	石英・長石	胴部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	64図 1	SK16	甕	灰黄褐	10YR5/2			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	64図 2	SK16	甕	橙	5YR6/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ		
	64図 3	SK16	甕	にぶい黄橙	10YR6/4			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	64図 4	SK16	壺	明赤褐	5YR5/8	浅黄橙	10YR8/3	石英・長石	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ		
	64図 5	SK16	壺	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		口縁部上面に沼沈線あり
	64図 6	SK16	壺	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石・金雲母	胴部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	64図 7	SK16	壺	橙	2.5YR6/8	橙	2.5YR6/8	石英・長石	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ		
	64図 8	SK16	壺	橙	2.5YR6/8			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	64図 9	SK16	壺	橙	2.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ		
	65図 1	SK10	甕	明赤褐	5YR5/8	明赤褐	5YR5/8	石英・長石	口縁部～胴部	表：ナデ，裏：ナデ		
	65図 2	SK10	甕	黄橙	7.5YR8/8	橙	7.5YR7/6	石英・長石	底部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
	67図	1号墓棺（上）	壺	にぶい黄橙	10YR6/4			長石・石英	完形	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		
		1号墓棺（下）	壺	にぶい橙	7.5YR6/4			石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部打ち欠き	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・指押さえ		穿孔あり
	72図 1	Ⅱ A 区 4 層	底部穿孔土器	赤	10YR5/6			石英・長石	底部矢羽	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		表裏面丹塗り
	72図 2	Ⅱ A 区 4 層	壺	明赤褐	2.5YR5/8			長石・金雲母	口縁部	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ・指押さえ		表裏面丹塗り
	72図 3	Ⅱ A 区 1 層	壺	橙	2.5YR6/8	橙	2.5YR6/6	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ハケメ		
	72図 4	Ⅱ A 区 4 層	壺	にぶい橙	2.5YR6/4			石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	表：ヘラミガキ，裏：ヘラミガキ・ナデ		表裏面丹塗り
	72図 5	Ⅱ A 区 4 層	壺	明赤褐	2.5YR5/6	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	胴部～底部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ		表面丹塗り
	72図 6	Ⅱ A 区 4 層	高坏	橙	2.5YR6/6			長石・石英・金雲母	脚部	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ		表面丹塗り
	72図 7	Ⅱ A 区 4 層	高坏	橙	2.5YR6/6	にぶい橙	5YR7/4	石英・長石・金雲母	脚部	表：ナデ，裏：ナデ		表面丹塗り
	72図 8	Ⅱ A 区 4 層	高坏	にぶい橙	2.5YR6/4			石英・長石	半欠	表：ハケメ・ナデ消し，裏：ナデ		表裏面丹塗り

第５表　高元地区出土遺物観察表②

土器

報告番号	遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法	備考
72図9	Ⅱ A 区 4 層	高坏	にぶい橙	7.5YR7/4			石英・長石・金雲母・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ	
72図10	Ⅱ A 区 4 層	器台	浅黄	2.5Y7/3			石英・長石・金雲母	脚部	表：ハケメ，裏：ナデ	
72図11	Ⅱ A 区 4 層	鉢	橙	2.5YR6/6			長石・石英	口縁部欠損	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ	表裏面丹塗り
76図1	Ⅱ C 区 3 b 層	器台	にぶい橙	7.5YR7/4			石英・長石・金雲母	脚部	表：ナデ，裏：ナデ	
76図2	Ⅱ C 区 3 b 層	壺	灰白	7.5YR8/1			石英・長石・金雲母	胴部～底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
76図3	Ⅱ C 区 3 b 層	小型丸底壺	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/3	石英・長石・金雲母	口縁部欠損	表：ハケメ・ナデ，裏：ケズリ・ナデ	
76図4	Ⅱ C 区 3 b 層	甕	にぶい褐	7.5YR5/3			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ケズリ・ナデ	
76図5	Ⅱ C 区 3 b 層	壺	灰	7.5Y6/1			長石・金雲母	口縁部片	底部とも回転ナデ調整	須恵器
76図6	Ⅱ C 区 3 b 層	壺	灰	5Y4/1			石英・長石	口縁部片	表裏とも回転ナデ調整	楽浪系
76図7	Ⅱ C 区 3 b 層	鉢	灰	5Y7/1			長石・金雲母	底部片	表裏とも回転ナデ調整	楽浪系
78図1	SC11	壺	にぶい橙	7.5YR6/4			石英・長石・金雲母・黒雲母	完形	表：ハケメ・ナデ，裏：ケズリ・ナデ	
81図1	SC12	甕	浅黄	2.5Y7/3			長石・石英・金雲母	口縁部	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・指押さえ	
81図2	SC12	甕	赤橙	10R6/8	橙	2.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部一胴部	表：ハケメ・ナデ，裏：ケズリ・ナデ	
81図3	SC12	高坏	黄灰	2.5Y7/2			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
81図4	SC14	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
81図5	SC14	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR7/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ，裏：ハケメ	
81図6	SC14	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	7.5YR7/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
81図7	SC14	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石・金雲母	底部片	表：ハケメ，裏：ナデ・指押さえ	
81図8	SC14	甕	橙	7.5YR7/6	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石	底部片	表：ナデ・ヘラナデ，裏：ナデ	
81図9	SC14	甕	にぶい黄橙	10YR6/4	褐灰	10YR4/1	石英・長石・金雲母・角閃石	底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
81図10	SC14	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	底部片	表：ハケメ，裏：ナデ・指押さえ	
81図11	SK29	甕	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ハケメ・ナデ・指押さえ	
81図12	SK29	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母・角閃石	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ	
81図13	SK29	高坏	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	坏底部～脚部片	表：ヘラミガキ，裏：ハケメ・ヘラミガキ	
81図14	SC15	高坏	橙	7.5YR7/6			長石・石英	坏部	表：ナデ，裏：ナデ	
83図1	SC17	甕	橙	5YR7/6	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
83図2	SC17	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	灰褐	7.5YR5/2	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	裏面割みあり
83図3	SC17	甕	にぶい褐	7.5YR5/4	橙	5YR6/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
83図4	SC17	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
83図5	SC17	甕	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	表裏面丹塗り
83図6	SC17	壺	にぶい黄橙	10YR7/3	橙	7.5YR7/6	長石・石英	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
83図7	SC17	甕	橙	7.5YR7/6	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：指押さえ	
83図8	SC17	甕	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	石英・長石	底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
83図9	SC17	器台	橙	7.5YR7/6	橙	5YR6/6	長石・石英	脚部片	表：ナデ・指押さえ，裏：指押さえ	
84図1	SC18	甕	橙	7.5YR7/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
84図2	SC18	甕	橙	7.5YR7/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
84図3	SC18	甕	橙	5YR6/6			長石・石英・金雲母	底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
84図4	SC18	甕	橙	2.5YR6/6			石英・長石・金雲母	底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
84図5	SC18	甕	橙	2.5YR6/6			石英・長石・金雲母	底部片	表：ハケメナデ消し，裏：ナデ・指押さえ	
84図6	SC18	壺	橙	7.5YR7/6			長石・石英・金雲母	つまみ部	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
84図7	SC18	高坏	橙	5YR6/6			長石・石英・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
84図8	SC18	鉢状口縁壺	赤褐	2.5YR4/8	赤褐	2.5YR4/8	石英・長石・金雲母	口縁部	表：ヘラミガキ，裏：ヘラミガキ・ナデ	
85図1	02SB 5	甕	明赤褐	5YR5/6	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
85図2	02SB 5	甕	灰黄褐	2.5Y6/2	灰黄褐	10YR5/2	石英・長石	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ	
85図3	02SB 5	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石	底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
85図4	02SB 5	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR5/3	石英・長石・金雲母	底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ・指押さえ	
85図5	02SB 5	壺	にぶい黄橙	10YR7/4	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ	
85図6	02SB 5	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石	胴部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
85図7	02SB 5	壺？	灰白	5Y8/1	灰白	5Y7/1	石英・長石	胴部片	表：格子目叩き，裏：指押さえ（当て具痕？）	
86図1	SK21	甕	明赤褐	5YR5/6	橙	7.5YR6/6	石英・長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
86図2	SK21	甕	橙	5YR6/8			石英・長石・金雲母	底部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ	
86図3	SK21	甕	にぶい黄橙	10YR7/4			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ・指押さえ	
86図4	SK21	甕	橙	5YR6/6			石英・長石・金雲母・黒雲母	口縁部～胴部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ケズリ・ナデ・指押さえ	
86図5	SK21	甕	灰黄褐	10YR5/2			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ケズリ・ナデ	
86図6	SK21	高坏	にぶい黄橙	10YR7/4			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ	
86図7	SK21	高坏	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	脚部	表：ヘラミガキ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ	
87図1	SK24	甕	明赤褐	2.5YR5/6			石英・長石・金雲母	口縁部	表：ナデ，裏：ナデ	内外面丹塗り
87図2	SK24	甕	にぶい黄橙	10YR6/4			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
87図3	SK24	甕	橙	5YR7/6			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ，裏：ナデ・指押さえ	
88図1	SK25	壺	橙	5YR6/6			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ハケメ・ナデ	
88図2	SK25	甕	橙	7.5YR7/6	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ	
88図3	SK25	甕	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ	内外面丹塗り
88図4	SK25	甕	黄灰	2.5Y4/1			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
88図5	SK25	甕	にぶい橙	5YR6/4			石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
88図6	SK25	甕	にぶい橙	7.5YR7/3			石英・長石・金雲母	底部片	表：ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
88図7	SK25	甕	橙	5YR6/8			石英・長石・金雲母	底部	表：ハケメ，裏：ナデ・指押さえ	
88図8	SK25	壺	灰黄	2.5Y7/2	橙	5YR7/6	石英・長石	底部片	表：ハケメ，裏：ナデ	
89図1	SK26	高坏	赤橙	10YR6/6			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	内外面丹塗り
89図2	SK26	甕	にぶい橙	7.5YR7/4			石英・長石・金雲母	底部片	表：ハケメ，裏：ナデ	
89図3	SK26	甕	褐灰	7.5YR4/1			石英・長石・金雲母	口縁部片	表：ナデ，裏：ナデ	
89図4	SK26	甕	にぶい橙	7.5YR5/4			石英・長石・金雲母	口縁部	表：ハケメ・ナデ，裏：ナデ・指押さえ	
90図8	Ⅱ C 区 2 層	投弾	にぶい橙	7.5YR6/4			長石・石英		指押さえ・ナデ	

石器

報告番号	遺構名	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材
52図24	SC 8	支脚	11.75	10.4	6.95	847.5	流紋岩
52図25	SC 8	敲石	13.35	8.9	4.8	904.8	安山岩
52図26	SC 8	磨製石斧	2.3	3.6	1.1	16.5	蛇紋岩
52図27	SC 8	石皿	33	25.2	12.1	16000	安山岩
56図33	SK 3	磨製剣片	8.8	3.95	1.3	46.9	玄武岩
56図34	SK 3	砥石	10.15	8.45	7.7	702	砂岩
56図35	SK 3	敲石	8	8.7	3.9	329.3	安山岩
63図30	SK 9	敲石	11.7	8.7	5.4	808.4	安山岩
63図31	SK 9	砥石	5.4	6.8	2.4	92.9	砂岩
63図32	SK 9	敲石	8.4	6	2.6	142.3	玄武岩
63図33	SK 9	石錘？	11.25	6.7	9.4	511.2	流紋岩
64図10	SK16	磨製石斧(未成品)	15.4	6.2	2.8	339	安山岩
73図12	Ⅱ A 区 4 層	細石核	3.1	1.8	1.45	8.2	黒曜石
73図13	Ⅱ A 区 4 層	石鏃	12.1	6.8	0.9	130.4	頁岩
73図14	Ⅱ A 区 4 層	敲石	11.45	6	4.5	337	砂岩
73図15	Ⅱ A 区 4 層	敲石	10.8	9.55	5.4	859.9	安山岩
73図16	Ⅱ A 区 4 層	石錘	6.5	4.95	4.45	173.8	滑石
73図17	Ⅱ A 区 4 層	敲石	13.1	10.2	5.6	1124.6	安山岩
73図18	Ⅱ A 区 4 層	石皿	32	17.2	5.1	3600	安山岩
76図28	Ⅱ C 区 3 b 層	細石核	3	2.4	1.6	11.3	黒曜石
76図29	Ⅱ C 区 3 b 層	石鏃	3.05	1.6	0.4	1.8	安山岩
76図30	Ⅱ C 区 3 b 層	石鏃	2	1.5	0.25	0.7	黒曜石
76図31	Ⅱ C 区 3 b 層	石錘	7.85	1.45	0.85	12.3	頁岩
77図40	Ⅱ C 区 3 b 層	敲石	13.4	10.3	5.4	1250.3	安山岩
77図41	Ⅱ C 区 3 b 層	敲石	8.9	7.8	3.6	391.6	安山岩
77図42	Ⅱ C 区 3 b 層	敲石	10.55	6.7	6.3	702.7	安山岩
77図43	Ⅱ C 区 3 b 層	砥石	10.7	6.1	3.8	482.5	砂岩
77図44	Ⅱ C 区 3 b 層	支脚	11.4	14.6	10.8	865.7	多孔質流紋岩
77図45	Ⅱ C 区 3 b 層	石皿	32.7	22.1	13.1	17300	安山岩
78図1	SC11	敲石	11.8	9.6	6.8	1054.5	安山岩
82図1	SC14	磨製石斧	5.95	2.9	0.9	31.7	頁岩
82図2	SC14	石皿	22.1	19	6.9	4580	安山岩
85図8	02SB 5	磨製石斧	9.4	4.1	2.4	128.5	蛇紋岩
90図1	Ⅰ B 区表採	石鏃	2.1	1.8	0.4	0.8	黒曜石
90図2	Ⅰ A 区 3 層	石鏃	2.3	1.4	0.4	0.9	黒曜石
90図3	Ⅰ B 区表採	石鏃	2.45	1.55	0.35	1.1	黒曜石
90図4	Ⅰ C 区 2 層	石鏃	1.5	1.3	0.25	0.4	黒曜石
90図5	Ⅱ A 区 4 層	磨製石鏃	2.3	1.4	0.1	0.8	緑色片岩
90図6	Ⅱ C 区 3 層	石包丁	4.8	5	0.7	23.5	頁岩
90図7	Ⅰ B 区表採	石包丁	4.6	4.3	0.8	20	輝緑凝灰岩
90図23	SC 7	磨製石斧	15.85	5.85	3.2	384.5	安山岩
90図24	SC10	石皿	28.7	23.9	8.5	8440	安山岩

骨角器

報告番号	遺構名	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	素材
74図20	Ⅱ A 区 4 層	刺突具	6.1	0.8	0.45	2.3	四肢骨
74図21	Ⅱ A 区 4 層	アワビオコシ	35.95	4	1.2	135.6	鯨骨
82図3	SC14	骨角器未成品	6.6	3.9	1.15	16.7	鯨骨

金属器

報告番号	遺構名	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	素材
74図19	Ⅱ A 区 4 層	袋状鉄斧	8.30	3.55	1.90	68.20	鉄
76図32	Ⅱ C 区 3 b 層	銅鏃	4.20	0.90	0.60	4.30	青銅
76図33	Ⅱ C 区 3 b 層	銅鏃	4.60	1.15	0.80	4.10	青銅
76図34	Ⅱ C 区 3 b 層	銅鏃	3.85	1.00	0.55	3.10	青銅
76図35	Ⅱ C 区 3 b 層	銅鏃	4.40	1.10	0.50	4.20	青銅
76図36	Ⅱ C 区 3 b 層	銅鏃	1.80	1.05	0.50	1.90	青銅
76図37	Ⅱ C 区 3 b 層	青銅鏡	2.40	2.70	0.40	6.90	青銅
76図38	Ⅱ C 区 3 b 層	青銅鏡	3.95	4.40	0.30	13.40	青銅
76図39	Ⅱ C 区 3 b 層	袋状鉄斧	6.50	3.35	1.85	38.60	鉄
82図4	SC12	銅鏃	4.05	1.00	0.60	2.60	青銅
82図5	SC15	鉄刺？	6.85	2.40	0.30	14.30	鉄
82図6	SC12	銅鏃	8.75	9.40	0.40	126.30	鉄
83図10	SC17	銅鏃	8.85	0.95	0.80	16.00	鉄
90図9		82	図	4	に	図	に
90図10	SK31	銅鏃	2.15	1.25	0.40	2.50	青銅

口を研磨して片刃状の刃部をつけている。基部から側面にかけて調整剥離が認められるものの，ほぼ全面に礫面を残している。ＳＣ７検出面からの出土である。**24**は石皿である。扁平な大型礫の平坦面中央に，あばた状の敲打痕が面的に広がっている。ＳＣ10の検出面からの出土である。

(3) 小　　結

本年度の調査は，昨年度に引き続き台地北側先端部における遺構群の確認を目的とするものであった。特に，昨年度検出した高元Ｉ区の焼土坑（02ＳＫ２・02ＳＫ３）の性格を把握することを重視して，この遺構の周囲に高元Ｉ区の調査区を設定した。ここでは，焼土坑関連の遺構群について検討した後，高元地区における遺構群の変遷についてまとめる。

①焼土坑周辺遺構と性格

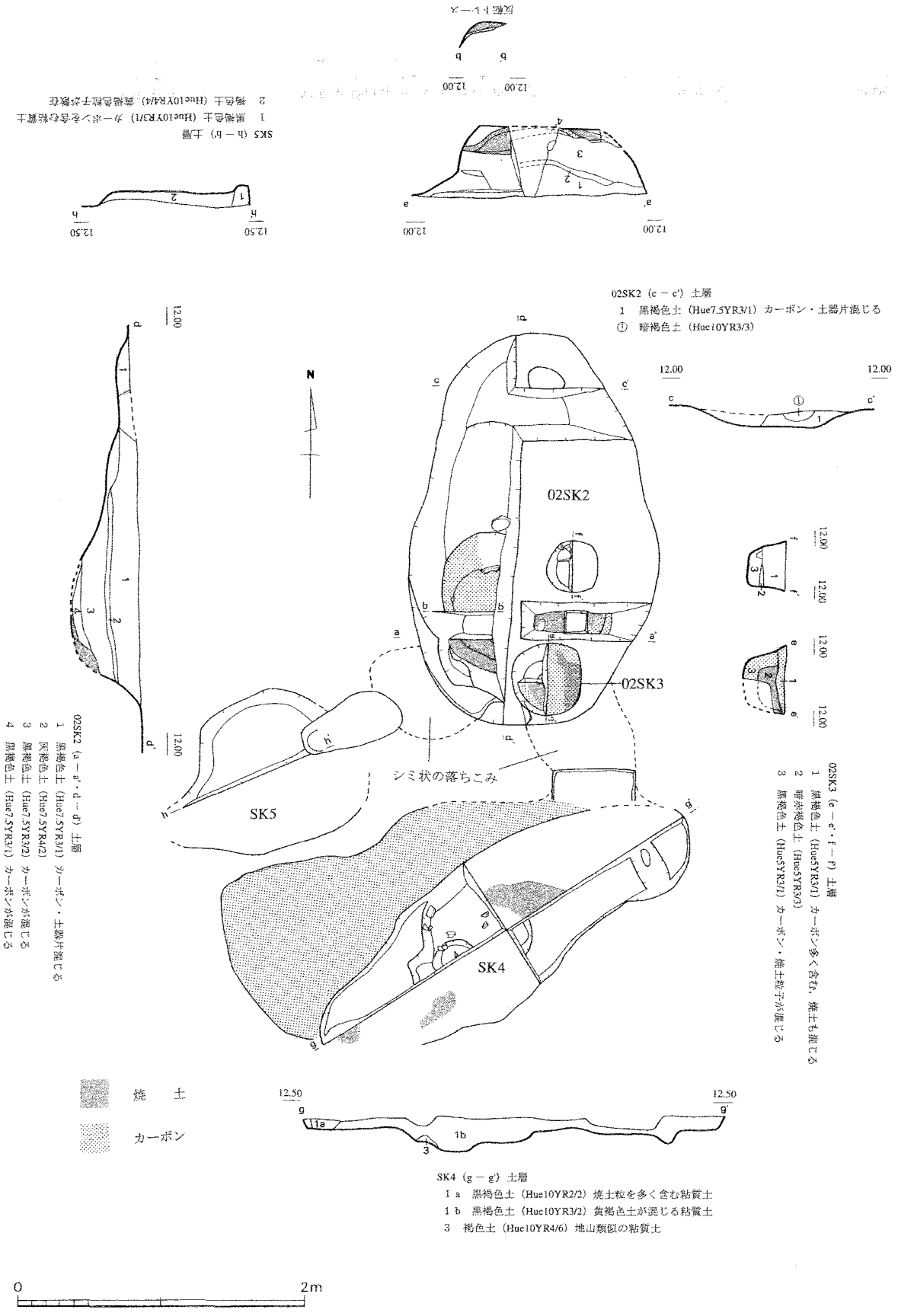
本年度検出した遺構で，02ＳＫ２・02ＳＫ３と関連するとみられる遺構はＳＫ４・ＳＫ５である。02ＳＫ２・02ＳＫ３とＳＫ４・ＳＫ５を合成したのが第91図である。ＳＫ４・ＳＫ３周辺にはカーボンが広く分布していたが，ＳＫ４には焼土が多く堆積し，ＳＫ５にはカーボンが集中して堆積していた。出土土器はいずれも須玖Ｉ式を主体としており，02ＳＫ２の共通する。ＳＫ４・ＳＫ５ともに楕円形の浅い土坑で，特にＳＫ４は中央部分が周囲よりも深く掘削されている。ＳＫ４には細かく粉砕された焼土のほか，粘土が焼けて固結した焼土塊が集中して堆積している部分も認められた。これらの焼土は土坑内で焼成して固結したものではなく，二次的に堆積したものである。02ＳＫ２では土坑内の焼成で形成された焼土面を検出しており，このことから，02ＳＫ２で何らかの焼成作業を行い，その廃土を南側のＳＫ４・ＳＫ５に廃棄していたものと考えられる。

ＳＫ３・ＳＫ４の覆土について水洗選別や磁気反応の有無を検討したが，金属器関連の遺物や反応は確認できなかった。ＳＫ４で出土した焼土塊は，肉眼の観察ではスサなどの混入物はなく，石英・長石といった弥生土器の胎土にみられる混入物も認められなかった。今年度新たに検出した高元Ｉ区のＳＫ３では，長方形土坑の床面から壁面にかけてカーボンが堆積し，覆土中から石英・長石混じりの焼土塊が出土していることから，土器焼成遺構の可能性を指摘した（第54図）。ＳＫ４出土の焼土塊はＳＫ３出土の焼土塊とは明らかに異なっており，また土坑自体の構造も異なることから，同様の性格の遺構として捉えることは困難である。結論として，高元Ｉ区焼土坑の性格は不明といわざるを得ないが，焼土の分析から土坑の焼成温度を推測するといった方法で，焼土坑の性格の一端を明らかにできればと考えている。

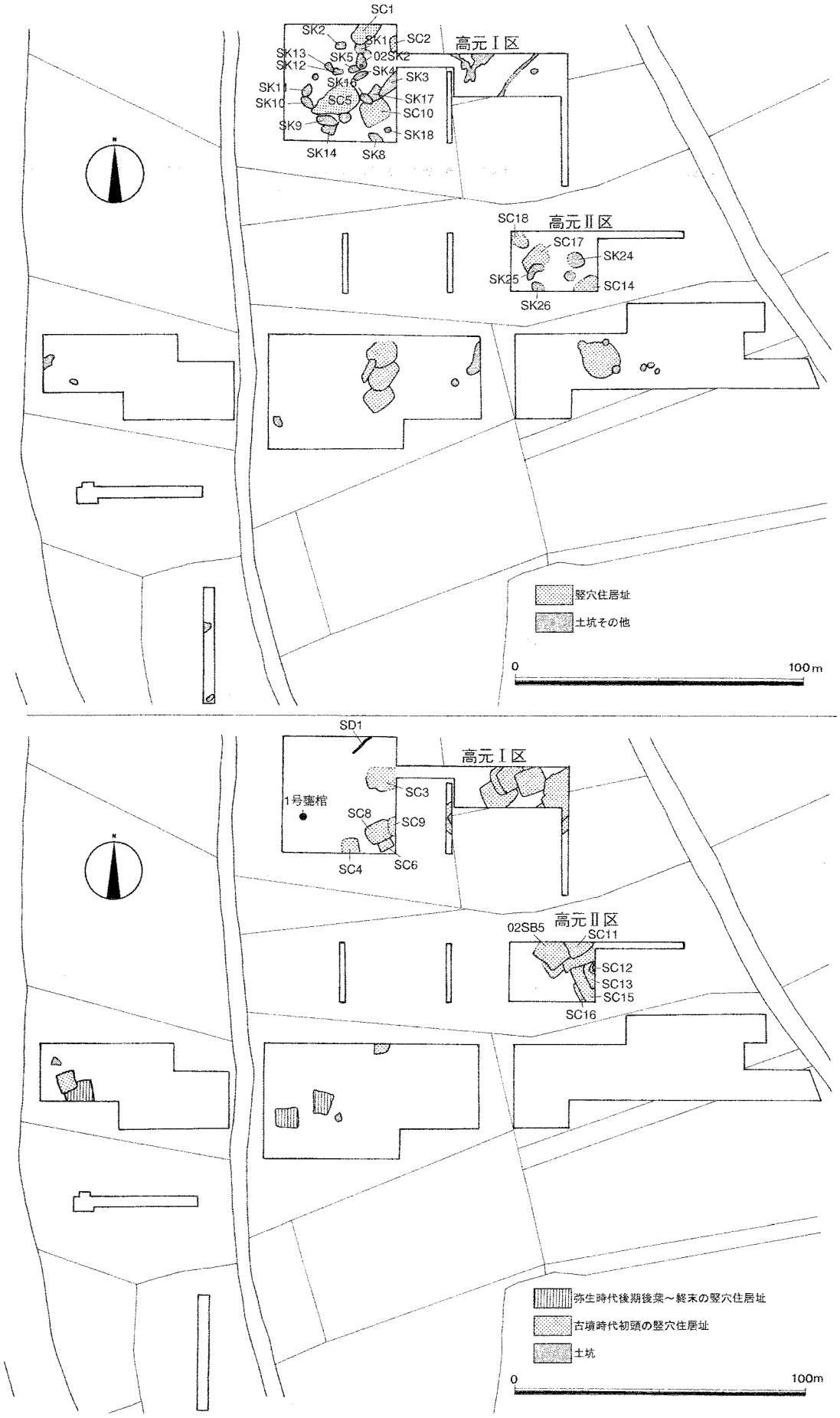
②高元地区周辺における遺構群の変遷

高元地区における遺構群の変遷については，昨年度の報告書中においてすでに検討を加えている（中尾2003）。ここでは，本年度調査区の成果を踏まえて再検討してみたい。

高元地区の遺構群は，時期的に弥生時代中期と古墳時代初頭を中心に展開している（第92図）。弥生時代中期の遺構は，高元Ｉ区を中心に土坑群が展開し，楕円形や隅丸方形の竪穴住居が伴う。時期的には，弥生時代前期末～中期初頭の土坑もあるが，主体となるのは弥生時代中期中葉～後葉の時期



第91図　02ＳＫ２・02ＳＫ３とＳＫ４・ＳＫ５との関係（Ｓ＝１/40）



第92図　高元地区における遺構群の変遷（S＝1/2000）

である。土坑の性格としては，中型の土器や丹塗り土器を含む廃棄土坑が主体となるものの，02ＳＫ３・02ＳＫ３・ＳＫ３のような焼土坑や土器焼成遺構と考えられるＳＫ３などの遺構群が存在し，高元地区周辺は居住エリアに付随する形で工房エリアも存在した可能性がある。

弥生時代後期には遺構群は急激に減少し，高元Ｉ区において本年度検出した小児甕棺（１号甕棺）１基と，南側で確認した方形の竪穴住居址３棟が展開するのみである。時期的には，１号甕棺は弥生時代後期中葉であるが，竪穴住居址は後期終末～古墳時代初頭の住居址であり，竪穴住居址は古墳時代初頭に展開する竪穴住居址群との関連で捉えられるものである。したがって，弥生時代後期においては高元地区の遺構は非常に貧弱で散発的ということになる。弥生時代後期中葉以降，台地周辺の低地部では多重の環濠が再掘削されるが，竪穴住居群は祭儀場周辺に散在するのみであり，低地部における大規模な遺構群の展開と比較して，台地上におけるこの時期の遺構群の展開は現状では極めて貧弱である。未調査区にこの時期の居住エリアが存在する可能性もあるが，注目したいのは原地区周辺で多数検出されているピット群である。これらのピット群が弥生時代後期ものもという確証はないが，この時期の竪穴住居址が減少することを考えると，居住スタイルが竪穴住居から掘立柱建物へと変化した可能性も考えられるであろう。原地区のピット群については現在詳細に検討中であるが，多様な建物が展開していたことが徐々に明らかになりつつある。これらの中に，弥生時代後期の住居跡が含まれているものと考えられる。

古墳時代初頭には，高元地区の全域で竪穴住居群が展開する。特に高元Ｉ区・Ⅱ区では，方形もしくは長方形の竪穴住居址が複雑に切り合った状態で検出しており，この時期頻繁に竪穴住居を構築していたことをうかがわせる。住居址の切り合いから，全体として西から東へと建て替えられていたようである。また，高元Ⅱ区の東側では，壁面のみでの確認であるが，これらの竪穴住居址を切るように土坑群を確認している。

以上のように，高元地区の遺構群は，昨年度指摘したとおり，弥生時代中期における土坑群から古墳時代初頭における竪穴住居址群という大まかな変遷を追認することができた。今後は高元地区だけでなく，原地区を含めた台地上遺構群の再整理が重要な検討課題となる。

【参考文献】

中尾篤志編2003『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

１．ＳＣ８遺物出土状況（南東から）

２．ＳＣ５完掘状況（北から）

３．ＳＫ３完掘状況（東から）

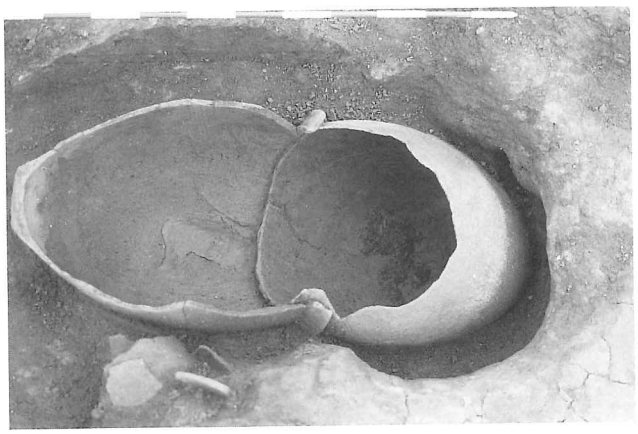
４．ＳＫ３遺物出土状況（東から）

５．ＳＫ３土層断面（南壁）

６．ＳＫ４遺物出土状況（北東から）

図版 6

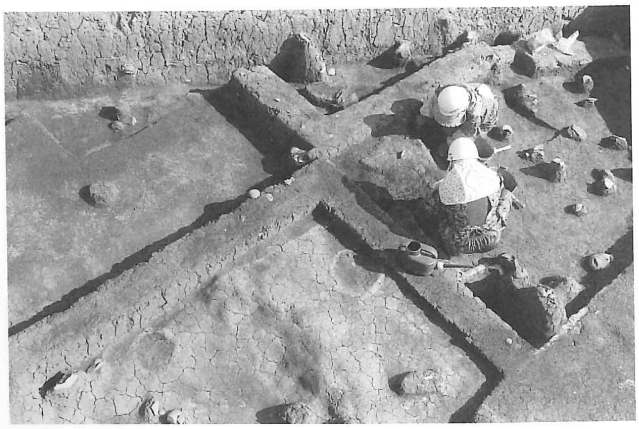
7．ＳＫ10遺物出土状況（東から）



8．１号甕棺検出状況（北から）

9．ⅡＡ区４層アワビオコシ出土状況（東から）

10．ⅡＡ区４層石錘出土状況（西から）



11．ⅡＣ区調査風景（西から）

12．ＳＣ11遺物出土状況（北西から）

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡調査研究事業報告書
巻次	
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第28集
編著者名	中尾篤志・小玉友裕
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	㊡811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL0920(45)4080
発行年月日	西暦2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡 (はるつじ)	長崎県壱岐市 (ながさきけんいきし) 芦辺町・石田町 (あしべちょう いしだちょう)	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	20030517 ～ 20040319	1,950m²	原の辻遺跡調査研究事業（国庫補助事業）

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	濠・溝・土坑 竪穴住居址 掘立柱建物 ピット	弥生土器 磨石・敲石 アワビオコシ 銅鏃・鍛造鉄斧	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第28集

原の辻遺跡

2004. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂